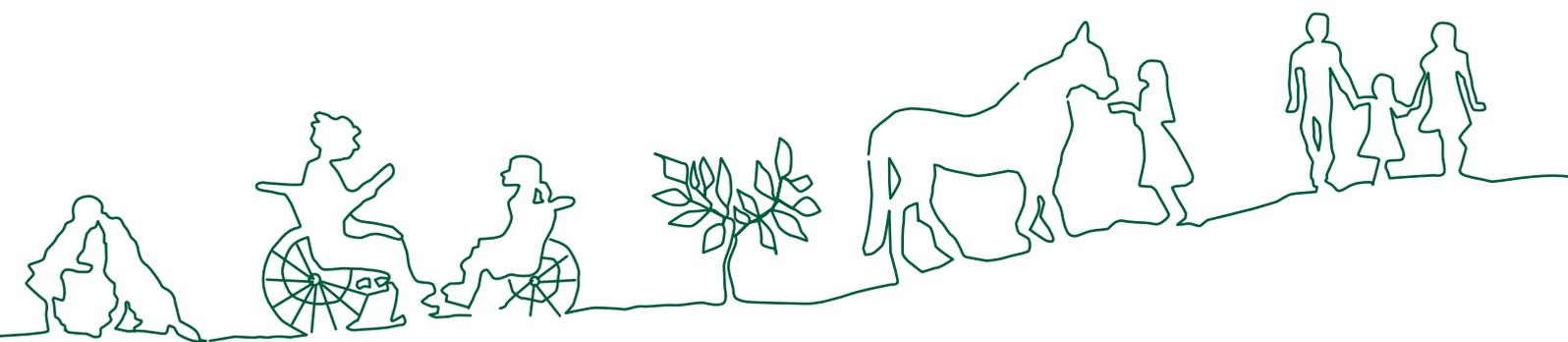


地域連携研究

帝京科学大学地域連携推進センター年報

第3巻



地域連携研究

帝京科学大学地域連携推進センター一年報 第3巻

目次

巻頭言

「地域連携推進センターが担う高等教育推進」～課外活動の実践による地域連携教育について～

花園誠…………… 5

地域連携活動研究報告

一人親／生活困窮家庭児童を対象とした学習を含めた大学生によるサポート活動の試行

木村龍平…………… 9

ミュージアム、学校等での活用を想定した環境学習教材の開発とプログラムの実践

古瀬浩史・藤川あも・横坂祐人・小川真由・宮竹一生…………… 13

ペット防災：区民一人ひとりが「自分の命そしてペットの命」を守れるように

～ ペット手帳の改定、およびペット防災アプリの開発 ～

山本和弘…………… 15

超高齢化・人口減少都市部における地域セーフティネットの構築

吉賀成子・一色哲・川口典男・坂野憲司・柊崎京子・山田健司・加藤洋子・楠永敏恵・浅沼太郎

井岡由美子・藤江慎二・三木良子・中西真・松永美輝恵・宮本佳子…………… 19

上野原特産農作物「キヌア」栽培に関する産官学連携活動の学術分野からの推進

和田龍一・細田直希・藤田尚也・谷晃・花園誠・永沼充・田中禅价・杉本公司・大神田良行…………… 23

地域住民への健康教育プログラムの実施を通じた学生の学び ―足立区生涯学習センターと協働した教育活動―

糸井和佳・小宮山恵美・吉岡幸子・吉田一子・田中恵美…………… 25

図書館体験型ランニングイベント「RUN×LIBRARY」の報告

高田由基…………… 29

学校教育学科SAT・女子駅伝チームによるシューズ回収プログラム「スマイルアフリカプロジェクト」の報告

高田由基・持田尚・千葉めぐみ・日比由依子・西野愛梨・田口綾乃…………… 33

「のびのびプレイデイ」三年間の取り組み

飯泉祐美子・木場有紀・富岡麻由子…………… 37

飼育体験活動による生活科授業支援の実践と成果

本多瑞希・花園誠…………… 41

初等理科教育におけるコクワガタ(Dorcus rectus)の教材化研究

佐々木琴音・花園誠…………… 45

児童に対する犬を用いた動物介在教育プログラムの実践とその効果	
長田翔太・花園誠	49
児童に対するアイガモを用いた動物介在教育プログラムの実践とその教育効果	
上田桃子・花園誠	53
イエネコを用いた動物介在活動の実践と成果	
山岸花陽・山本真理子・花園誠	57
馬介在活動センター「ふれあいの日」における「子ども・保護者・スタッフ」の3者間の行動ならびに コミュニケーションの実態調査	
田崎乃流・花園誠	61
フクロモモンガの教材化に関する検討～2018年青少年のための科学の祭典・山梨大会より	
中川千恵・花園誠	65
動物介在教育による児童の描画的関心に関する変化について	
堀米陽太・花園誠	69
哲学ワークショップ・プログラム『なぜ・なに？ どうして？ : 自由に考えるっておもしろい』の開発と実践 —「あだちの大学リレーイベント企画第15弾」帝京科学大学子どものための哲学ワークショップの活動報告—	
榊原健太郎・林和馬・矢澤雅弘・大山智子	73
地域連携活動実践報告	
動物介在更生保護プログラム	
山本真理子	81
生息域内外における啓発活動の普及—地域環境資源を次世代につなぐ—	
江田慧子・木場有紀・新家智子	82
地域住民と共に防災を学ぶ帝科学生の会	
伊藤あい・落合永昌・佐藤菜々子・吉田瑞樹	83
地域への貢献と活性化を目指して（動物介在活動部）	
池谷尚斗・岡崎拓実・阿部遼太郎・佐々木愛・南雲由美子	84
子どもの心をはぐくむ会	
竹村祐樹・吉田藍里	85
従来の水族館のボランティア活動に加え様々な活動を（水と水の生き物のすばらしさを伝える会 AQUASHIP）	
羽田飛騎	86
フリマガ「ネコノメ」と「広報うえのはら」を用いた本学と上野原市の情報発信（ねこの目報道部）	
鈴木沙羅	87
千住探検隊	
吉田藍里・有賀文恵・熊谷彩乃・鎌田零二・吉田託夢・原拓哉・篠平龍一	88

バドミントンサークル活動報告	
柳原朱里・松井高光	89
学ぶボランティア(アニマルボランティア)	
西野有紗	90
東京都多摩動物公園と横浜市立金沢動物園での教育普及活動（動物園研究部）	
山中隼輝	91
障がいのある方のための乗馬会	
平田達稔・佐々木愛	92
カフェサークル Bonn Bush	
林姫花	93
動物を教育のツールとして、命の大切さを学んでもらう（動物介在教育研究部）	
厚海玲奈	94

資料

平成30年度地域連携推進センター構成員一覧	97
平成30年度地域連携推進センター予算	98
平成30年度地域連携推進センター活動統計（教員）	99
平成30年度地域連携活動記録表（教員）	100
平成30年度地域連携推進センター活動統計（学生団体）	128
平成30年度地域連携活動記録表（学生団体）	129
地域連携研究投稿規程	147

巻頭言「地域連携推進センターが担う高等教育推進」 ～課外活動の実践による地域連携教育について～

花園誠(地域連携推進センター)

1. 地域連携教育と課外活動

地域連携推進センターの前身は、2004年に設立された「地域連携教育推進センター」である。名称に「教育」と標榜しているように、開学以来の本学の使命の一つである「地域貢献」を強化しつつ「高等教育を推進するための教学センターとして発足した」のが地域連携推進センターのそもそもの始まりであった。初代センター長・引馬教授は「地域社会の課題解決に一略一学生が参加することは大きな意義があります。(中略)苦労を重ねて課題の解決に成功すれば、難題に立ち向かう自信と、将来、社会に出た時に役立つ経験が得られるはずです。このような教育手法は『地域連携教育』と呼ばれ、文部科学省の高等教育活性化のテーマのひとつになっています。」と本学のニューズレター上で言及した(「地域連携教育推進センター発足の背景と活動方針」より引用)。

本学の地域連携教育が課外活動主導へと変容したのは、遡るとアニマルサイエンス学科の前身の「アニマルサイエンスコース」がバイオサイエンス学科(後に生命科学科に統合)に設置された2001年時に辿り着く。このとき、学生の主体性と意欲を活かしながら専門的な学びを深める目的で学科の専門性を反映した9つの課外活動団体を創設した。さらに、その活動の場を大学の外に展開し、地域社会のニーズと結びつけた。すなわち、課外活動を地域貢献活動化することで、地域連携教育を推進したのである。誤解を恐れず言えば、本学では、課外活動が地域連携教育を担うことにより高等教育を推進してきたのである。地域連携教育推進センターの設立時には年間200万円の予算を計上していただいたが、その全額が課外活動団体の助成金として活用された。課外活動による地域連携教育を承認したと言ってよい予算配分で、第一回目の学内公募の結果、24テーマ(24課外活動団体)が助成対象となった。

しかし、課外活動を高等教育と位置付けることに、当時の教員から全会一致の賛同を得たわけではない。「課外活動は教育ではない。」との根強い反対意見もあった。その異論を意識して地域連携教育推進センターは「課外活動による地域連携教育」を「学生1人ひとりに独自の解決法を創案させ、競わせることによって教育効果を向上させよう」という試みです」と定義し、「ティーラーメイド実習」と言い換えることでセンターの施策とした。前述のニューズレターからの引用である。苦肉の策の言い換えて「実習」と正課的に装うも、「学生1人ひとりに独自の解決法」のその実体は、依然として「課外活動」であり続けた。2004年以降、地域連携教育推進センター主催の「公開発表会」が毎年度末の恒例行事となったが、発表の常連は動物介在活動部、動物介在教育研究部、SWEET HEART(動物福祉を考える部)、野生動物系連合(ビオトープ研究部・野生生物研究部)、動物園研究部、AQUA SHIP(水族館研究部)、ネコの目報道部、乗る・馬・体験乗馬会(障がい者乗馬会)等と、全て課外活動団体である。

2. 地域連携推進センターの発足

2010年、千住キャンパス開設。「地域連携教育推進センター」は「地域連携推進センター」と名称変更した。「教育」の2文字を抜いたのは、センターの担う役割を拡充し、教員による「研究推進」と、そして「社会貢献」の推進もセンターの職務とするためであって、従来の「教育推進」はそのまま継承した。そして、「教育推進」・「研究推進」・「社会貢献」のそれぞれにコーディネーターを配置することで、大学の社会的使命である「教育」と「研究」の両方を「社会貢献」に結びつけるための組織としたのである。職務の拡充にともない、計上される毎年の予算も増額と、特段のご高配をいただいた。さらに地域連携のための外部資金も獲得したが、それら予算の過半が「地域連携教育」に配分された。「地域連携推進センター」の主要な役割が「高等教育の推進」であることに本質的な変容はなかったのである。本年報の巻末に2018年度の活動実績が網羅されているが、その過半が「課外活動」による「地域連携教育」である。そして、2019年度予算の68%は直接・間接的な「地域連携教育」の推進費として配分されている。

3. 学会の評価

2016年8月、日本高等教育評価機構からのご指名で本学は「第6回高等教育質保証学会」にシンポジウムのパネリストとして登壇した。このときのメインテーマは「内部質保証と三つのポリシー」で、登壇したセッションのテーマは「カリキュラムポリシーの実現に向けて」であった。発表は、宮崎大学、金沢工業大学、上智大学と続き、4番目の最後であった。本学からの演題は「課外活動と教育」とし、課外活動による質保証の実践と成果について発表した。「どのように受け止められるのか。場違いではないか」と前3者の発表後だったので、いささかの不安を覚えながらの発表であった。しかし、その後のディスカッションでは、フロアにいた各国公立大学の質保証を担う教授連より相次いで高評価と絶賛のコメントをいただいた。その後の情報交換会でも「課外活動にそんな活用法があったとは。まさに目からうろこが落ちる思いだった。」との感想をいただいた。「帝京科学大学は最先端の斬新な高等教育を実践している」それが高等教育の研究者からの率直な評価であった。地域連携推進センターがそれを担っているのである。

地域連携推進センター長

花園 誠 Makoto HANAZONO

(教育人間科学部 こども学科)

明治大学農学部を卒業後、名古屋大学大学院農学研究科博士課程修了、博士(農学)。専門は、動物介在教育学、動物学。帝京科学大学教育人間科学部こども学科科長・教授、理化学研究所、帝京大学医学部を経て平成12年、帝京科学大学ご着任。平成24年、地域連携推進センター長就任。



地域連携活動研究報告

一人親／生活困窮家庭児童を対象とした学習を含めた大学生によるサポート活動の試行

木村龍平（教育人間科学部 こども学科）

キーワード：学習支援、一人親、保育者養成学科、体験活動

1. はじめに

児童のいる世帯の内の一人親家庭は平成24年で約7%（厚生労働省国民生活基礎調査）^①、平成27年で10.5%（国勢調査）^②と年々増加の一途をたどり、子がいる世帯の1割は一人親世帯となっている。さらにその内の85%は母子家庭であり、母親の平均年間就労収入は200万円前後であり、非正規雇用の場合はさらに低くなる。こうした経済状態では当然のように子どもにかけられる教育費は限られ、全世帯平均と母子家庭を比較すると高校進学率で約2%、大学進学率で約30%の差が生じている^③。こうした状況に対して経済格差の固定化、経済的困窮状態の親から子への継承が危ぶまれている。本学の所在する上野原市（人口2.3万人）にこれを当てはめると、14歳以下の人口が約2千人であるので^④、2人兄弟を仮定して約100世帯が該当すると推測される。さらに市内にある小学校5校、中学校3校のうち、一般的な在校生数の規模である小学校2校、中学校1校にあてはめると、単純に見積もって各校20～30人の生徒がこれに該当すると推測される。一方で、日々の生活苦が原因となった子育てに対するネグレクト、児童虐待の増加も懸念され、一人親世帯における虐待の発生率が全国平均で約3倍（32%）と高いことが指摘されて久しい。^⑤

このような家庭の児童は精神的に不安定となり、健常な生徒と一緒に授業を受けることが困難になったり、問題行動を起こすこともある。将来に対する希望が小さく、総じて学習意欲が低下し低学力である。したがって、このような家庭や児童は学校ばかりでなく、地域で関係者が情報共有し特別な配慮が必要と考える。

さらに近年、保育の現場においては、従来の人材養成教育では想定してこなかった、注意欠陥多動性障害をはじめとした発達障害等をもった児の増加；20～30人のクラスでは高い確率でこれに該当する児が1～2人存在し、あるいは、モンスター・ペアレントの登場、児童虐待の増加；100～200人定員の幼稚園や保育所全体を見渡したときには、このような問題を抱える児・親が存在することが普通となりつつある。そのため新任保育士、幼稚園教諭が最初に戸惑うことの一つに、こうした児や親への対処が挙げられている。そのため、このような児・親に対する保育者・教諭の対応力が求められ、当学科をはじめ保育者・教員養成校においては、在学中に可能な限りこの方面の知識・実践力を身につける必要があるのではないかと考えてきた。

このような中で、上野原市母子寡婦福祉連合会^⑥（以降、母寡連と表記）から平成25年10月に一人親家庭の児童を対象にした「学習支援活動」について打診があり、翌平成26年度5月より活動を開始した。市内では学童保育が各地区で実施されているが、母親の帰宅時間（当時は概ね19時と見込んだ。その後、18～20時が約44%であることが報告された：厚生労働省平成28年度全国ひとり親世帯調査結果報

告^⑦）までの活動が難しいこと、広く一般家庭の児童を対象としているため、何らかの精神的な問題を持ち、指導に配慮や工夫が必要な児童に適切な個別対応がしにくいことが問題点として認識されていた。前述のような状況を踏まえ、筆者は何よりもこのような児童が放課後に落ち着いて過ごすことのできる「居場所」の提供が必要だと考えた。そこで、毎日の宿題指導、授業で理解できなかった部分の補習指導を中心とするが、児童の話し相手、相談にも乗り心理支援することで、日々の生活を正すきっかけを与え、ひいては学習意欲の向上に結びつけることを意図した。平成28年度より上野原市社会福祉協議会^⑧（以降、社協と表記）が主体となって活動を推進することになり、一人親家庭支援に「経済困窮家庭」（多くの場合、世帯が重なる）も対象に加えることになった。以上、これまでの本活動初期段階から今年度までの経緯詳細については本学紀要「教職指導研究」他^⑨⑩を参照されたい。

2. 研究及び活動方法

2-1. 活動スタッフ・活動場所・参加児童について

本活動を支えるスタッフとして、当学科4年次生を充てた。4年次生資格必修科目「保育教職実践演習」（通年2単位）の学外ワークの一つとして本活動を位置づけている。この授業では他に2つの学外ワークが提供されており、全開講回数30回の約半数を活動時間に充当した。授業では履修学生に本活動の社会的背景・趣旨を説明し、活動従事希望者を募った。その結果、履修者50名前後の内、約半数の27名が本活動従事を希望した。これを9人×3グループに分け、各グループに6回の活動＋クリスマス会への参加を課した。事前に授業内で上野原市教育委員会、上野原市社協各々の本活動担当者から、活動対象児童の指導上の注意や配慮について事前指導を行った。その他の活動スタッフとして、社協担当者2名、教育委員会担当者（委員）1名、市民ボランティア2名、（県内の）他大学生アルバイト（社協が雇用）2名が指導スタッフとして常駐した。活動場所は昨年度までの市役所庁舎内会議室から、今年度から上野原市総合福祉会館「ふじみ」会議室に変更となった。部屋（会議室）の収容人数の関係で小学生と中学生で部屋を分けて学習指導することにした。活動時間は17時～19時である。活動対象の家庭への本活動周知と参加希望受け付け等事務は社協が担った^⑨。

3. 活動結果・考察

3-1. 活動結果概要

活動結果を表1に示す。昨年度は12月～翌年1月の活動期間は、学生スタッフが4年次生であるため、一部の者は卒業研究とりまとめ時期と重なるため、活動に身が入らない、卒業研究取りまとめに支障

が生じる等、問題が指摘された。そこで、今年度は学生が参加する活動回は5月～12月中旬までとし、学習支援活動18回＋クリスマス会＝計19回とした（学生が参加しない活動は社協主催で休業期間中も含め4月～翌年3月まで実施している）。そのため、昨年度よりも活動回数が減じているが、その分、1回あたりの学生スタッフ人数を増加し、近年の本活動参加児童数の増加に対応した。

表1. 学習支援活動の実施結果（平成30年度）

回数	実施日	小学生人数（人）	中学生人数（人）	計（人）
1	5/29	4	11	15
2	6/12	4	10	14
3	6/19 *	3	7	11
4	6/26	4	11	15
5	7/10	1	10	11
6	7/17	5	8	13
7	7/24	1	10	11
8	9/11	4	7	11
9	9/18	2	10	12
10	9/25 *	3	11	14
11	10/2	4	10	14
12	10/9	4	11	15
13	10/16	4	11	15
14	10/23	2	11	13
15	11/6 *	3	12	12
16	11/20	2	10	12
17	12/8 **	—	—	—
18	12/11	4	12	16
19	12/18	1	14	15

表中*印：活動後半に夕食会を実施

表中**印：クリスマス会を実施

日頃の活動内容は宿題や補習の指導である。活動終了時間前であっても保護者が迎えに来たときは帰宅させた。参加児童数は今年度の特徴として中学生が増加して大部分を占め（7～14名）、小学生が著しく減少し（1～5名）、昨年度までと学年構成が逆転した。この原因として、本活動に長く通っている児童が学年進行により中学生になったことが一因と考えられるが、活動場所がいずれの市内小学校からも遠くなり、特に低学年児童が徒歩で小学校から活動場所まで1人で移動する場合の安全確保が懸念されたためではないかと考えている。総数では平均13.4人で昨年度の15.6人と比べると僅かに減少している。これはやはり、小学生の参加人数が減少したことが影響しているのではないかと考えられる。一昨年度、問題が指摘され、昨年からの対策を講じてきた、スマホ等IT機器の持ち込み禁止、時間の区切り（学習時間と休憩時間）と気持ちの切り替えをはっきりさせることや、活動で用意する菓子類の摂食マナー、活動終了後の片付け作業の協力等の指導・対応について⁹⁾、今年度は学生スタッフに授業で事前指導し、必要ならば参加児童に明確に指導するよう対応した。そのため、この点における参加児童の問題行動はほぼ解消された。

昨年度から上記活動に夕食会を加え、今年度は3回実施（昨年度は2回）することができた。場所は「学習支援活動」と同じ建物内の別フロアにある調理室と会議室である。食材は本研究予算の一部を充当し、また大学農園で筆者が栽培・収穫した（無農薬）野菜も使用した。夕食会の活動日は16時から調理開始し、17～18時は学習支援活動にあて、18～19時は夕食会とした。夕食会では児童の保護者も参加可能とした。そのため、夕食会では総勢30名前後となり、児童間、児童と学生はもとより、学生と保護者や各担当者間の交流が進んだ。

12月には「クリスマス会」を実施した。場所は「夕食会」と同じである。ただし、本会は社協の関与はなく母寡連主催となる。9時に集合し、午前中は参加児童をその保護者、母寡連会員と共に、昼食、クリスマスケーキを調理した。学生スタッフは極力、各世帯毎に割り当てられた調理台に1～2人ずつ入り、参加親子と交流を深められるよう配置した。正午過ぎに昼食をとり、13時からは学生スタッフ主催のレクレーションを約1時間実施した。レクを通して学生スタッフと参加児童がまとまった時間を楽しく過ごすことで、両者間の親睦がより深まった。レクの内容は、ゼスチャーゲームやしりとり等、当学科ならではの工夫を凝らした手作りの出し物を用意し大変好評であった。

3-2. 学習支援の指導状況

前述のように今年度から参加児童人数の学年構成が小学生と中学生で逆転した。表1から分かるように中学生は概ね毎回10人前後となり、本学学生スタッフ全員（9人/回）、市民ボランティア1名、他大学学生ボランティア2名が中学生を指導した。小学生の指導は市民ボランティア、社協担当者各1名が指導した。

中学の学習においては数学（負数、因数分解）や理科（化学記号暗記や化学反応の理解と暗記等）の理解に困難を感じる児童が大部分であった。1回の指導で理解が進まずに宿題を終えることが出来ないケースが散見された。ワークブックの宿題を行うにあたって、解答集を丸写しし、機械的に丸付けを短時間で行って表面的に「宿題が終わった。」とする児童が多い。時間をかけて考え解答を導くことができない児童が大半で、その反動として単純作業である漢字や英単語及び英例文書き取り練習を（機械的な作業として）行う児童が多い。しかし、このような状況でも、繰り返し解答を見ないで考えるよう粘り強く指導したりする中で、これまで1（スタッフ）対1～2（児童）の個別指導であったものが、自然発生的に説明方法に長けた学生が2～3名の中学生を集めて白板を用いて説明したり、書き取りの成果を小テストして、学習意欲がわくようにコメントしたりして、時間にメリハリを付け、児童が学習に飽きないよう工夫して指導するようになった。

中学2年/3年生各1名は保護者より受験のための入試対策の指導を求められたため、これらの児童の指導は他大学学生ボランティア（理系学生）が行った。この2名は活動時間中、落ち着いて学習に集中できていたが、活動後半は他の児童が立ち歩いたり騒がしくなるため、学習の障害になっていることが懸念された。

今年度の特徴的に認められた事象として、女子中学生と本学女子学生スタッフが、いずれの活動回においても親密になり、活動中、休憩時間もはさんで終始一緒に仲良さそうにいたことである。このことは

学生スタッフが3グループ編成のため、6回活動回ごとメンバーが入れ替わっても変わらなかった。このような状況は男子中学生と男子学生スタッフには認められなかった。

参加児童の中には、人生に希望を持っておらず、進学や将来の就職に対して志を持っていない者がいる（例：就職は「コンビニのアルバイトでいい。」等）。学校の授業はドロップアウトしてしまっているか、その寸前であり、基本学力はもとより、学習の基本姿勢が身につけていない児童が過半である。30分と集中できずに周囲に話しかけてしまう者、落ち着いて着席していられず、立ち歩き、部屋の外に出てしまい、戻ってこない者もいる。このような一部の参加児童の問題行動は年々顕著になるとともに、他の参加児童に波及し、今年度は特に落ち着きのない2名が新たに加わったことでさらに状況が悪化した。そのため、教育委員会委員（元小学校校長）と当該児の家庭状況他の情報共有をし、可能な部分は指導に反映させるために学生スタッフとも情報共有した。そして、指導にあたっては、まず、親身に話し相手になって人間関係を構築することからはじめ、話題によっては相談に乗り、先輩としてアドバイスを与える等対応して心理支援することにした。そのような人間関係を前提に、落ち着きがなくなってきたときは、少し強く指導（大声を出さない、近隣に不要に話しかけない、室内を立ち歩かない、室外に出ない、一定時間トイレから戻ってこないときは連れ戻す等）するようにした。その結果、年度後半には、活動時間中、全員が落ち着いて過ごせるようになり、投げやりな学習態度も低減する傾向が認められた。僅かではあるが「ここに来たときは勉強しよう。」という気構えができてきたのではないかと考える。

3-3. 配慮すべき事

参加児童は年々、学年進行し高学年化する一方で、今年度は小学生の新規参加者がなかったこと、中学生の参加者が大部分を占め、学習内容が高度化して授業について行けなくなり基礎学力がつかない児童が多くなったこと等から、年々「学習指導」の要素が強くなってきている。特に後述するように、中学2年～3年生の高校受験を意識した指導は入試対策中心にならざるを得ない。しかし、参加児童の多くは現状からの「学力向上」は難しく、学修指導面では最低限の「基礎学力 / 学習意欲の維持」に目標をおいている。

本研究でこれまで実施してきた活動は「学習支援活動」という看板を掲げてはいるものの、放課後の児童の「居場所」提供という要素を重視し、活動開始前の軽食提供、休憩時間の菓子提供、定期的な夕食提供やイベントとしてのクリスマス会などを取り入れてきた。そのため、社協の活動対象家庭に対する「学習支援」を主旨とした案内と、活動実態の乖離が年々大きくなってきていると考える。本活動の当初、そして、それを受けた本研究では、宿題や補修の指導を活動のメインメニューとして行うが、随時、参加児童と学生が緩やかに談笑しつつ、いろいろな相談にもものつてあげることができる、児童にとって「居心地の良い居場所」の提供を目指している。すなわち、親しくいろいろな話し相手になることが、児童への心理支援となり、ひいては学習意欲の向上につながるのではないかと考えている。そして、こうした面で保育士や幼稚園教諭資格取得のために各実習や心理学等、様々な知識とスキルを学んできた当学科4年次生が、その能力をフルに発揮で

きると考える。したがって、今後は当学科学生の専門性を生かしつつ、「学習支援」的要素と「居心地の良い居場所」提供的要素をいかにして両立していくかを、社協を交えて十分協議調整し、さらに学生スタッフの事前指導段階から、このことについて丁寧に意識付けていかねばならないと考えている。

4. 課題

本年度から新規に参加した中学生の中に、家庭環境他の諸要因で昨年度まで学校内外で問題行動がいくつかあり、落ち着いて学習できない者がいた。この者は特に活動の後半で集中が出来なくなり、周囲の者に頻繁に話しかけ、ふざけるので周囲の者の学習意欲に悪影響を及ぼしてしまう（全体が騒がしくなり、歩き回り、学習に集中しなくなる）ことが今年度前半の活動では常態化した。そのため、年度後半からこの者の指導にあたるスタッフを（学生を含めて）人選し、集中が切れそうになったら、周囲に話しかけたり、立ち歩かないように、行動面での指導を強化した。その結果、回を追う毎に次第に落ち着いて活動時間を通して宿題等を行えるようになってきた。しかし、「学習（支援）」を重視する場合は、他児の取り組み姿勢に与える悪影響は依然として大きいと、来年度以降、このような児童は別室で人選したスタッフが指導にあたるなどの対策が必要と考えている。

次に中学生の参加児童が学校で友人を任意に本活動に誘ってきってしまうことが2件発生した。本活動参加者は社協が活動対象（一人親・生活困窮家庭）世帯を認定して案内を出し、希望者に対して事前登録して決定している。しかし、その友人は本活動の対象とはならない一般家庭の子であった。活動の主旨などを保護者から説明を受けておらず、誘いをかけた児童から「この時間は、…、こうだよ。」というような誤った説明を受け、2人で場を乱す不測の行動を取ることがしばしば見られた。しばらくはこの状況を適宜、注意しつつ黙認していたが、2人目を誘ってきた段階で、これ以上、一般家庭の児童参加数が増加することは本活動の基本的な枠組みが崩壊し望ましくないため、友人本人やその保護者に本活動の趣旨を説明し、参加を取りやめてもらった。今後はこのような事態が再発しないよう、年度はじめの各家庭への本活動説明時に保護者に十分周知し、本人にも保護者を通して理解してもらうことが求められる。

今年度から中学2年生、3年生が各1名参加している。1名は本活動参加が3年目であり、他の1名は新規参加児童である。いずれも高校受験を意識しており、学習指導も入試対策を一部加味しなければならなかった。しかし、この部分は本研究で本学学生を指導スタッフとして参加させる当初の活動目的とは異なるため、受験指導に限っては、他大学学生スタッフに一任することにした。しかし、来年度は学年進行で中学生参加児童の過半が2年生以上となるため、何らかの人的な対策が求められる。また入試対策を強く意識した指導を行う必要性が生じた場合は、静穏な環境を確保するために指導する部屋を分けるなどの対応が必要ではないかと考えている。ただし、この部分は、これまでの経緯から今年度は本学学生スタッフも関与したが、来年度からは、本来の本研究の趣旨に鑑み、小学生も含めた他の低学年児童の指導にあたらせたいと考えている。

今年度から活動場所が変わり、市内小学校から放課後に（特に低学年児童が）徒歩で活動場所に通うことが距離的に難しいのではないかと問題が生じた（その結果、小学生参加児童が極端に減少し、当学科学生スタッフはもっぱら中学生の指導に当たることになった）。当学科在学生が保育者・幼稚園教諭、あるいは再来年度以降、小学校教諭の養成課程の仕上げ段階（4年次）で指導スタッフとして本活動によりよく関与するためには、活動対象を小学生以下にし、中学生以上は社協が手配する各ボランティアに指導を任せることが望まれる。そのため、来年度から小学生が安心して本活動へ通えるようにし、小学生の新規参加が増加するような対策（活動開始前後に各小学校へ市のマイクロバスで送迎する等）を講じてもらえないか等、その対策の検討を社協と協議する予定である。

5. まとめ

本活動は第1回活動から5年目を迎えた。当初は小学校4年生4～5人という小規模なもので、児の人間性や保護者が本活動に求めるニーズもある程度均一であり、無理なく本研究の趣旨を反映した活動が実施できていた。しかし、今年度最終回で第100回を迎え、参加児童数の増加、学年構成の高学年化を受けて様々な問題を抱えるようになった。現在までに「こうすればいい」という明確な解決方法は見つかっていない。しかし、本活動に参加する児童や本活動に期待を寄せる保護者にとっては現在進行形であり「待たなし」である。一昨年度から、このような状況に変化してきたが、常に社協や教育委員会担当者と現場で話し合い知恵を出し合って、より良い活動にしてきたと考えている。

今年度も新たな問題がいくつか発生したが、これも活動をしながら現場でより良い対応が出来るようになって考えている。

本研究で本活動に関与した当学科学生の教育に資することはもちろんであるが、活動に参加した児童達に人生の記憶に残る有意義な時間を与えることができればと願っている。そのため、この活動が現在の社協を中心とした実施体制をより強固なものとして継続的に発展していくことを願っている。

謝辞

本活動を実施するにあたり、日頃より綿密な活動実施体制を準備し実施下さっている上野原市社会福祉協議会 森山氏、上野原市母子寡婦福祉連合会会長 奈良氏、毎回の活動にあたって適切なアドバイス、情報提供とサポートと子供達への指導を頂いている上野原市教育委員会 近藤氏に御礼申し上げます。また活動の細部にわたりきめ細かなサポートを頂いている上野原市母子寡婦福祉連合会の会員の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 厚生労働省国民生活基礎調査；厚生労働省HP, URL:
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisaku-jouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000083324.pdf>.
- 2) HP「統計で見る日本 e-Stat 政府統計の総合窓口」；URL:
https://www.e-stat.go.jp/stat-search/database?page=1&toukei=00200521&result_page=1.

- 3) 厚生労働省HP, URL:
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisaku-jouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000083324.pdf>、平成23年度全国母子世帯等調査 全世界の進学率は平成26年度学校基本調査
- 4) 上野原市HP；<https://www.city.uenohara.yamanashi.jp/gyosei/docs/2799.html>.
- 5) 山野良一、「母子世帯と子どもへの虐待－抑うつ分析も含め－」；社会保障研究, No.2, Vol.1, pp.45-59 (2017).
- 6) 「やまなし女性の応援サイト」HP, URL:
<http://www.pref.yamanashi.jp/challenge/dantaidetail.php?id=210>.
- 7) 厚生労働省平成28年度全国ひとり親世帯調査結果報告、厚生労働省HP；<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000188147.html>.
- 8) 上野原市社会福祉協議会HP, URL；<http://uesya.com>.
- 9) 木村龍平、「母子家庭児童を対象にした学習支援活動が保育者養成学科学生に与える教育効果に関する考察」、帝京科学大学教職センター紀要、第1巻第1号、pp.175-181 (2016.3).
- 10) 木村龍平、「一人親/生活困窮家庭児童を対象とした学習を含めた大学生によるサポート活動の試行」、地域連携研究（帝京科学大学地域連携推進センター年報）第2巻、pp.13-16 (2017).

ミュージアム、学校等での活用を想定した環境学習教材の開発とプログラムの実践

古瀬浩史・藤川あも・横坂祐人・小川真由・宮竹一生（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

キーワード：環境学習、教材、展示

1. はじめに

帝京科学大学環境教育・インタープリテーション研究室では、2014年から、学生と教員が協力し、自然公園や都市公園等での環境教育の実践を想定したプログラムや教材の開発に取り組んできた。2017年度からは、教材等の使用場所を水族館等の社会教育施設にも拡大し、作成した教材はインターネット上に公開し普及を図っている¹⁾。

2018年度は、新たに動物園や学校での活用を想定した「竹筒バチ」に関するプログラムの開発と、学内ミュージアムやイベントへの出展の際に使用する、コンパクトに収納でき、繰り返し利用可能な展示の制作に取り組んだ。これらについて報告する。

2. 「竹筒バチ」を題材にした生物多様性の学習プログラムの開発

本学アニマルサイエンス学科野生動物コースの実習である「ビオトープ実習」では、2015年から2018年まで、借孔性ハチ類（竹筒等の既存の孔に営巣するハチ類、以下、竹筒バチ）の調査として、竹筒を用いたネストトラップを設置する調査を実施した。藤田は2017年度の卒業研究で、主として実習から得られたサンプルを精査し、教材化のための基礎的な情報を整理するとともに、竹筒バチが生物多様性に関する学習の題材として有益であることを示唆した²⁾。

2018年度には、横坂が、市街地の公園や個人宅に竹筒のネストトラップを設置する調査を行い、ある程度まとまった緑地があれば都市部でも観察が成り立つことを明らかにした³⁾。また、藤川は井の頭自然文化園の協力を得て、動物園内にネストトラップを設置し、動物園が主催する一般公募の行事として、竹筒バチを主な題材としたプログラムを実施した⁴⁾。それらをケーススタディとして、プログラムの資料化および教材の制作を行った。教材には、プログラムの実施方法を整理した「プログラムシート」（図1）、複数のプログラムを組み合わせる学習活動の進行過程を整理した「アウトライン」、昆虫の生活史について学ぶプログラムの中で使用する「カード教材」（図2）、指導者に必要な最低限の知識をまとめた「ファクトシート」（図3）、「イラスト素材集」などが含まれる。

藤川が井の頭自然文化園において実施したイベントで設置したネストトラップでは、ハチ類以外も含めて20種類の生物が観察された。また、藤田が整理した東京西キャンパスの実習のサンプルでは、ネストトラップから18種の昆虫が出現し、この中には6種の寄生種が含まれていた。竹筒を利用するハチ類は、異なる食性を持っており、それぞれの餌である花粉、ガの幼虫、バッタ、クモなどや、それらの痕跡が筒の中から見つかることも多い。また、空間をめぐる競争関係があり、複数の種が一つの筒を競合して使用していることもしばしば観察される。

ネストトラップを用いた竹筒バチの観察では、普段見ることの少

ない多様な昆虫が観察できること、食物連鎖関係や寄生、競争など、さまざまな生物間相互作用を直接観察できること、またプログラム参加者が自らネストトラップの制作、設置、回収を行うことによって主体的な学習が促されることなどから、生物多様性の学習教材として高い有効性を持つと考えられる。学校ビオトープや都市公園などでも実施が可能であり、普及が期待される。



図1. プログラムシート「トラップの回収と調査」



図2. カード教材（生活史について学ぶ教材）



図3. ファクトシート

3. 「アニマル展示プロジェクト」

本学東京西キャンパスでは、学芸員課程の実習や自然系のサークル活動などにおいて、学生が主体となって展示が制作される機会が少なくない。当研究室のゼミ活動においても、展示制作は毎年恒例の活動となっている。それらに共通して感じられる課題がある。まず1つ目は、繰り返し利用や収納性が想定されていないこと。たとえば、スチレンボードは工作が楽なので時間が限られている実習では素材として好ましいが、消耗しやすく、繰り返し利用する展示には向いていない。また、立体的に制作された展示は収納スペースに困ることが多い。小規模なミュージアム等においてはこの点の考慮はとても重要な要素である。2つ目は、展示の解説において、対象となる事物についての解説はされているが、展示製作者である学生が発信するメッセージが希薄であることである。ミュージアム等における展示は、施設のミッションに基づいて、それぞれの施設が保有している資源に関して解説を行うことが基本的なアプローチの一つだと考えられるため、実習としてはそれでも良いとも考えられるが、イベント等への出展や、学内ミュージアムを考えたときはやや物足りなさを感じる。例えば、学外のイベント等に出展する際には、本学の学生が何を考え、何を発信しようとしているのかが見る人に感じられる展示であって欲しい。

これらの課題点を踏まえて、今年度新たに企画したのが「アニマル展示プロジェクト」（略称、アニテン）である。アニテンは、学内外のイベントに出展することを想定した展示であり、制作にあたって以下の3つのコンセプトを意識した。一つは、繰り返し利用でき収納に場所を取らないこと。2つ目は、学生自身のメッセージが含まれること。3つ目が、平面の展示とクラフト等の作業をセットにすることで、展示する側（学生）と来場者の間に十分なコミュニケーションの機会が生まれることである。

2018年度は、教員が作成したサンプルを含めて4種類のバナー展示を作成し、それに関連したクラフトのミニワークショップを考案した。

(1) 展示バナー

制作を担当する学生が、自分が好きな野生動物を1種選び、その動物に関する写真および情報と、その動物に関連した環境保全のメッセージを記述することを基本フォーマットとし、バナー展示と、同様のデザインのポストカードを制作した。バナーは、バナースタンドもしくは掛け軸の様な方法で展示し、丸めて筒状の書類ケースに収納することができる。

仕様：W610×H1500mm、フリーカットクロス

(2) クラフトのミニワークショップ

展示ごとに、クラフトのミニワークショップを検討した。クラフトは、展示で扱われている動物の色をモチーフにした組紐や、動物のシルエットのステンシルを使用したトートバッグづくりなど。10分から20分程度で作業が終了できる程度の時間設定とし、その作成時間中に、インフォーマルな解説として動物やその保全の話、自分の研究分野の話などができることをねらっている。



図4. 「アニマル展示プロジェクト」のバナー

これらの展示とプログラムは、本学の学祭および桂川ウェルネスパークに試行的に出展し、形成過程評価を行った。次年度は、新しい学生によるコンテンツを増やすとともに、より大きい規模のイベント等への出展を計画している。

4. まとめ

学生が主体となって行う教育普及活動では、活動によって地域社会に貢献すること、そして学生各々が、活動に参画することによって得られる経験によって成長することが期待される。同時に成果が蓄積され、プロジェクトそのものが発展していくことも重要であろう。そのために、プロジェクトの成果を再現可能な教材としてまとめたり、繰り返し利用できる展示として集積していくことは重要だと考える。そのような目標の設定は学生にとって、より実践的な課題設定になっている。今後も継続して活動に取り組んでいきたい。

参考文献

- 1) 古瀬浩史：社会教育施設との連携による教育教材の開発とプログラムの普及，帝京科学大学地域連携推進センター年報，2，15-16，2018
- 2) 藤田 駿：ネストトラップを用いた借孔性ハチ類の調査～生物多様性に関する学習教材としての視点から～，帝京科学大学卒業研究，<https://www.furuse-lab.com/activity/卒業研究の成果>，2018
- 3) 横坂祐人：借孔性ハチ類の教材化の研究：都市部におけるネストトラップへの営業についての調査，帝京科学大学卒業研究，<https://www.furuse-lab.com/activity/卒業研究の成果>，2019
- 4) 藤川あも：借孔性ハチ類の教材化の研究：年間プログラムの開発～，帝京科学大学卒業研究，<https://www.furuse-lab.com/activity/卒業研究の成果>，2019

ペット防災：区民一人ひとりが「自分の命そしてペットの命」を守れるように ～ ペット手帳の改定、およびペット防災アプリの開発 ～

山本和弘（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

キーワード：ペット、防災、災害対策、自助、東日本大震災、熊本地震、アプリ

1. はじめに

毎年、私たちは過去に起こった大震災の追悼式典を映像上で見るたびに「防災」という意識を再燃させられる。今までは映像上でしか災害を経験したことのない人も、これから30年以内には25%の確率で何らかの災害に実際にあうと試算されている。日本の全世帯数は5,661万世帯であるが、ペットを飼育している家庭は犬で715万世帯、猫は553万世帯あり、全体割合で見ると犬12.64%、猫9.78%となる（平成30年日本ペットフード協会報告）。つまり犬猫を合わせると日本全体の20%近い世帯のご家庭が犬もしくは猫を飼育していることになり、発災時に5軒に1軒の割合でペットと共に避難生活をしなければならない家庭が発生することになる。決して看過できる数字ではなく、ペットと共に被災することが社会全体に対しても相当の負のインパクトを与えかねないということが東日本大震災、および熊本地震で問題が浮き彫りにされた。たとえば、震災時に自宅に取り残されたペットを迎えに行ったことで津波被害に遭ったり、余震が続く中ペットがいるために半壊した家屋にとどまり続けた結果、家が倒壊し下敷きになった人もいる。そこでペットの防災に注目し対策を行うことは、ペットの命を救うだけでなく飼い主（人の）の命も救うことにつながるということがわかる。

災害時には「自助（自分の身は自分で守る）」「共助（互いに助け合う）」「公助（行政機関などの公的機関が援助すること）」の3つの働きがあるが、一般的な意識においては発災後すぐに避難して、避難所で「誰か（主に行政）が何かをしてくれる」という公助に頼る受身的なことをイメージしがちである。しかしながら、2018年3月に環境省から発行された「人とペットの災害対策ガイドライン」（図1）によると「自助」によるところが最重要課題とされており、災害時の70-80%を占めると明記されている。つまり、「自分の命」ならびに「飼育しているペットの命」は自分で守ることが国としても既存のルールとされつつある。

2. ペット手帳の作成

2-1. 作成の背景

普段から災害に対する備えをすることが「自助」としての最大の防護策ともいえるが、実際に行動に移し災害に対する準備を進めていく人は多くはない。東日本大震災のわずか2年後の2013年の調査においても大地震への備えを何もしていない人は調査全体の32%に上る（ライフメディアリサーチバンク 2013）。「これからやるつもり」や「面倒だから。」といった実行に移せていない人も多く、「何をすれば良いかわからない」というのが一番多い理由であった。そこでペットを飼育している人がふだんから「防災」という課題に慣れ親しんでいただくために昨年平成30年度に地域連携活動助成の予



（図 1）

算をいただき、災害に対する備えを目的とするペット手帳（全16ページ）、約600部を作成した（図2）。作成にあたっては足立区保健所、足立区危機管理部災害対策課の協力をいただき、足立区シティプロモーション課を通してペット手帳作成にあたっての足立区の後援をいただいた。



（図 2）

2-2. ペット手帳のコンセプト

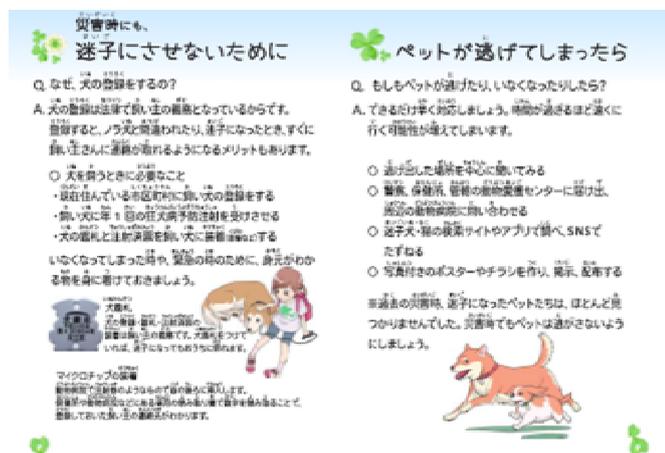
作成のコンセプトは、普段から何度も見てもらい、いざという時の助けとなることとした。そのため動物病院に携帯できるようにヒトのお薬手帳形式に似た形に作成し、後ろに診察券を入れることができるお薬手帳カバーと共に配布した。つまり、動物病院の診察券を入れて常備してもらい、動物病院に行く際には携行し待合室でページを開いて何度も見てもらえるように工夫を施した。また、最後のページには足立区の防災情報を掲載し、QRコードをスキャンすればすぐにアプリがダウンロードでき情報が入手できるようにした(図3)。さらにスマートフォンを持っていない人のために電話で情報が得られるように「あだち安心電話」を加え、なるべく多くの世代層に使用してもらえるように配慮されている。



(図 3)

2-3. ペット手帳の改正

昨年度ペット手帳を配布させてもらい、多くの動物関係者から好評をいただくことができた。今までにない試行であるが、「使いやすい」「普段から持っていたい」などの感想と共に、「実際に動物病院の診察券を入れて使用している」との意見もいただいている。しかしながら、いくつかの改善点も発見されてきた。「災害時の動物の逸走(ペットを逃してしまって発見できない)の欄のボリュームをもう少し増やした方が良い」「ペット手帳のフォントが識読障がいの方のためのものではない」など次年度の発行にあたって改正の課題となった(図4)。そこで、今年度はペットを迷子にさせないためにはどうすればよいのか、また逃げてしまった場合はどうするのか、そして全体のフォントをなるべく識読しやすいユニバーサルデザインのフォントに変更するなどの改定を行った。



(図 4)

配布方法としてはNPO法人あだち動物共生ネットワークや近隣の猫活動が行われている個人ボランティアの方々を通して、猫の譲渡会やイベントなどが行われるたびに配布していただいた。また、帝京科学大学付属動物病院の開院時、および来院時にペットのオーナーに手渡しをおこなった。

2-4. 他の地域への配布

ペット手帳は足立区だけでなく他の地方自治体でも使用できるように隠れた工夫を施してある。作成を依頼した際に、表紙の「足立区のみなさまへ」および後部の足立区だけの防災に対応したページは製版の段階ですぐに差し替えることができるように作成されている。また、重要な点として「著作権」はあえて取得してはいない。著作権を取得することは可能ではあるが、取得した場合に普及の障害になることを懸念したためである。2018年度ペット手帳をすでに近隣区の行政にも配布しているが、今後データをお渡しし、各区で印刷し、狂犬病の予防接種時などに配布していただくことが可能かどうか打診中である。このペット手帳の流れが全国の都道府県市町村に波及し、ペット防災意識が広がることを切に願う。

3. ペット手帳アプリ作成

3-1. アプリ作成の背景

昨年度から作成されたペット手帳は、紙媒体の情報であるため普及させるにも時間がかかり物理的、経済的な障壁が大きい。そこで、次世代向け、スマートフォン世代をターゲットとしたペット用防災アプリの開発を試みた。これまでに人用に作られた防災アプリは東京都(東京都防災 図5)や足立区(足立区防災アプリ 図6)からも配信されているが、ペット用防災アプリは、まだ入手することができない。そこで、ペット防災用に作成されたペット手帳を元に、ペット防災用のアプリを使用することによってより広範囲の人々にペット防災を知ってもらおうと開発を試みた。

基本的にはペット手帳を電子化し、それをアプリとして携帯上で操作する形式をとった。



(図 5)



(図 6)

3-2. アプリ作成のコンセプト

防災用の「ペット手帳」同様、アプリ作成時に留意した点は「簡素で使いやすいこと」を重視しつつ、「災害時の情報が確実に入手できるように」に制作者に依頼した。

また、防災アプリとしてのみ作成すると災害時のみにしかアプリを立ち上げないために命に関わる状況下での使用はさらに困難になると予測される。そこで普段から、このアプリに慣れ親しんでもらうた

めに楽しみながら自分のペットのプロフィールや健康管理が可能となる情報を保存しておくことができるようにし、その延長線上に防災アプリに自然に導入されるように設計された（図7）。

3-3. ペット手帳 防災アプリの内容

ペット手帳アプリは、初期設定として自分のペットの情報を登録することから始まる。これは災害に動物が逸走した際（行方不明になった場合）に必要な基本情報や写真を入手することが可能となるためである。また、ペットの飼い主自身がペットの健康維持のためにその情報も日記形式のように書き足していくことが可能である。

基本情報としては、飼い主（表1）とペット（表2）の情報を記入することができる（図8-10）。

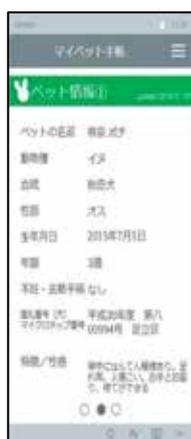
（表 1）

（表 2）

飼い主情報	ペット情報
<ul style="list-style-type: none"> ・ 飼い主名 ・ 住所 ・ 電話 ・ 携帯電話 ・ その他の連絡先 ・ 家族構成 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ペットの名前 ・ 動物種 ・ 血統 ・ 性別 ・ 生年月日 ・ 年齢 ・ 不妊・去勢手術の有無 ・ 鑑札番号（犬） ・ マイクロチップ番号 ・ 特徴/性格 ・ かかりつけの動物病院名 ・ 病院の電話番号 ・ 薬、医療食 ・ ワクチン接種歴



（図 8）



（図 9）



（図 10）

また、行方不明になった際に必ず必要となる写真はその場でペットの写真を撮り、ペット手帳アプリ上に掲載することができるため、いつでも LINE や Face Book の自分のアイコンのような感覚で現在のペットの最新の画像が保存されることになる。

これさえあれば、携帯電話を災害時に持ち出すだけですぐさま自分のペット情報、行きつけの動物病院、最新の写真などすべての情報が入手でき、わざわざ他の避難グッズと共に手帳などを持ち歩く必要がない。

3-4. アプリの機能

このアプリは Web カメラさえ自宅に設置すれば自宅のペットの様子が伺うことができる。留守にしがちが飼い主であってもインターネットの接続さえあれば自宅の状態を現在のペットの様子を動画状態（ライブ動画）で見ることができ、とくに持病をもっている経過観察を必要とするペットに対しても優しく安心できる機能が付属されている（図11）。



（図 11）

また、携帯電話には GPS 位置認識情報が付属されているために自分がいる位置や、ペット同行可能な避難所の位置や、災害危険区域の情報入手なども可能となり避難を余儀なくされた際もスムーズに安全に目的地に到達することができる（図12-13）。



（図 12）



（図 13）

3-5. 「共助」を目的とした他の飼い主とのコミュニケーション機能：

「自助」を目的とし災害に備えることを目的としたこのアプリであるが、「共助」も行うことができるように設計された。

「共助」を実現するためには普段からのコミュニケーションが必要となる。近隣の人同士では挨拶をしたり、町内会に所属するなどが考えられるがもっと広域のコミュニケーションをとることができ、被災地でないところからも被災者に対して援助の手を差し伸べることができるような機能を設定した。普段から自分のペットの写真を Web 上に公開し、コメントをつけたりし、飼い主同士が情報を交換することができるミニ SNS 上で知り合いを増やすという方法である。通常の SNS のように写真を閲覧できるようにしておき、さらに個人と個人が匿名でも良い形で繋がり合うことができるようにしておくことで万一、災害が起こり被災した場合に互いがコミュニケーションを取り安否を確認し合い、さらに助け合うことが可能となる。このミニ SNS を利用し、情報を交換し LINE、Twitter、Face Book、Instagram などの SNS サイトに移行しそこから普段使い慣れている情報交換を行い、「自助」と「共助」を可能にする (図 14)。



(図 14)

3-6. 「公助」もアクセスできる機能：

また、情報交換サイトであるため、各市町村区からどのような援助や避難施設があるのかなどの行政の情報も入手できスムーズに入手することができる。そのため自分が住む市町村区における、避難場所や、避難情報の入手方法などもアプリに入れておけば発災時に即利用することができ、このアプリひとつあれば、「自助」「共助」そして「公助」へとつながることができるツールでもある。

3-7. ペット手帳アプリの将来の展望

旧来のペット手帳に比べるとスマートフォンさえあればいつでもどこでもペット防災のアプリが使用できるという汎用性はある。また、機能の追加や改定を行う際にも Web デザインさえ行えば無限大に拡張することが可能となる。しかしながら、いくら良いアプリであって

も利用者数が少ないと全体の防災につながらないことになる。どのようにして普及していくかも課題であるが、各市町村区や国単位の行政の方からもアプリ提供して推進してもらったり、動物病院やペット関連の会社にアフィリエイト (宣伝) として掲載してもらうなどの方法をとつつ、将来の利用者の拡大につなげてゆきたい。

3-8. ペット手帳アプリの問題点

アプリはあくまでも携帯電話上での使用となるためインターネットの繋がりにくい状況下では利用することが難しいと予測される。災害時にはインターネットにアクセスする利用者は殺到し、サーバー自体がアクセス不可能となることも現在の方式では考えられるため、災害時のネット接続の対策も考慮に入れておく必要がある。また、スマートフォンに不慣れな世代の人はこの情報にアクセスすることができない。さらに飼い主情報、ペット情報、位置情報などを利用しながら使用するアプリであるため利用者の個人情報が流出しないようにネットのセキュリティ一面でも強化を図りつつ公開に踏み切る必要がある。

4. まとめ

このペット手帳の作成およびペット防災アプリの開発を行った目的はあくまで、地域の方々と連携し「飼い主とペットの命を守るため」である。ペット手帳アプリはまだまだ数多くの課題はあるが災害時における機能の汎用性から、有用なツールの一つと考えられる。何よりも普段から、国民一人ひとりが防災に対する意識を高めていくことが大切である。日本政府の地震調査委員会は、2018年2月、これまで南海トラフ大地震が発生する確率は70%程度としてきたものが、さらに80%と引き上げられた。もういつ次の大災害が起こってもおかしくない状態である。我々が災害大国日本に居住する限りは、このリスクマネジメントなくしては常に自らを危険に晒していることと同じである。自らが災害時に生き残り、ペットという「もう一人の家族」の小さな命を守るためにこの「ペット手帳」と「ペット手帳アプリ」が利用されることを心より願いつつ、さらに今日できることを何かを問いつつ社会に貢献してゆきたい所存である。

参考文献

- 1) 全国犬猫飼育実態調査 平成30年度版 日本ペットフード協会
- 2) 人とペットの災害対策ガイドライン 環境省 平成30年3月
- 3) 防災に対する意識調査 ライフメディアリサーチバンク 2013年

超高齢化・人口減少都市部における地域セーフティネットの構築

吉賀成子・一色哲・川口典男・坂野憲司・柘崎京子・山田健司・加藤洋子・楠永敏恵・浅沼太郎・
井岡由美子・藤江慎二・三木良子・中西真・松永美輝恵・宮本佳子（医療科学部 医療福祉学科）

キーワード：生活困難、社会的孤立、社会的紐帯、地域共生社会、セーフティネット

1. はじめに

社会福祉が制度的に確立した現代において、制度から漏れ落ち生活困難に陥っている人の増大が社会の課題となっている。特に、人口減少と高齢化が急進展する都市部において、日常生活を送るうえでどのような問題が起きているのか、起きている現象を食い止める方法はあるのか、ということの把握や分析は十分にできていない。人々のつながりが脆弱化した地域において、住民の生活実態に合わせたセーフティネットを構築していくことは、喫緊の課題である。

従来から都市部には特有の課題があることが指摘されてきた。例えば、人々のつながりが希薄化しているため、社会的孤立や孤独死の問題があるとされている¹⁾。移動が困難で経済的にも課題を抱える高齢者や障害者などは、都市部においても買い物難民となっている²⁾。これらの社会的孤立や生活困難は、セルフ・ネグレクトを引き起こすことにもつながる³⁾。防災の観点からも課題はあり、近隣とのつきあいのない人は、災害時の避難方法や避難先の情報が入りにくく、うまく避難できなかつたり、避難先で協調できなかつたりする場合があるとされる⁴⁾。さらに、単独世帯や高齢夫婦世帯が多い都市部では、家庭の介護力が極めて弱いため、急進展する高齢化を前に介護サービスが追いつかないといった課題もあげられている⁵⁾。

政府は、高齢者や障害者など生活課題を抱えた人々が住み慣れた地域で住み続けるために、地域住民や地域の多様な主体が参画して課題を解決していくという地域共生社会の実現を提唱している。その一環として、地域組織団体、行政などと協働しながら、高齢者や障害者を対象として、居場所づくり・見守り・ネットワークをキーワードに地域セーフティネットの実体化へ向けた活動を展開することには意義があるものと考えられる。

そこで本活動では、大学周辺の都市部地域において、本学教員・学生と足立区社会福祉協議会、足立区役所、地域自治会等と協働し、大学周辺の千住地区を中心に、主として以下の活動を恒常的に展開することをめざした。

1. 地域における人のつながり・絆を強めるための地域交流サロン活動
2. 一人暮らし高齢者や障害者の日常的な見守りや買い物の支援等の地域セーフティネットを構築するための取り組み

2. 方法

2-1. 活動の準備

2018年度の活動実績ではないが、活動に向けて準備してきたことをはじめに説明する。詳細は、別稿にも記載した⁶⁾⁷⁾。医療福祉学科が開設した2016年度から、足立区役所、足立区社会福祉協議会、地域包括支援センター千住西、地域包括支援センター千住本町の職員と教

員が話し合いをもち、活動内容を検討し、活動拠点の紹介を受けてきた。

足立区役所の職員との話し合いでは、大学に隣接する千住元町団地の住民が高齢化しており、自治機能が低下しているため、行政も支援が困難な実態があるということを知った。その後、足立区社会福祉協議会の協力を得ながら、教員が団地の自治会役員と会合する機会を設けて、住民と学生が共同で行える活動を検討した。

また、足立区役所の職員から、高齢者の生きがいづくりや児童館の機能をもつ足立区住区センターでの活動を行ってはどうかという提案があり、千住柳町住区センター職員と打ち合わせを行ってきた。

一部の活動は2016年12月ころより試行的に始め、2017年4月に始動した。

2-2. 2018年度の活動の概要

2018年度に行った活動の具体的内容は、以下の①～⑧である。

- ① カレー甲子園の開催
- ② 千住元町団地 1,2 号棟の高齢者の居場所作りのためのサロン開催
- ③ 千住元町団地 3,4 号棟や近隣の住民を対象にした映画観賞会の開催
- ④ 千住柳町住区センターを拠点としたイベント等への参加
- ⑤ 地域包括支援センター千住西と連携して「千住カレッジ」の開催
- ⑥ 認知症対応型共同生活介護（以下、認知症グループホーム）「千住さくら」の入居者への社会参加等の支援
- ⑦ 精神障害者共同生活援助（以下、精神障害者グループホーム）「仲」の入居者への社会参加等の支援
- ⑧ 近隣の住民を対象にした買い物支援、話し相手、見守り等の支援「千住便利隊」の実施

①～⑤は主に地域住民を対象に、⑥⑦は認知症高齢者、精神障害者を対象にしたサロン活動である。⑧は高齢者や障害者の自宅に訪問して地域セーフティネットの構築をめざす取り組みである。

①の活動は医療福祉学科1年生が行い、②～⑧は、医療福祉学科2年生が行った。②～⑧については、火曜と金曜の授業である「健康福祉科学セミナーⅠ」の時間帯と、その後約1時間かけて行った。学生を数名のグループに分け、②～⑧のいずれかの活動に参加できるように配置し、担当教員が指導し、必要に応じて引率した。

活動前に、学生にはマナー講習を行った。また、活動開始後も、マナーや支援方法について、教員や関係者の助言・指導を受けて活動した。毎回の活動後に、学生は活動記録を作成した。

3. 結果

以下、8つの活動を説明する。

3-1. カレー甲子園の開催

地域住民や行政等職員に大学に招待し、学生がグループに分かれて作ったカレーライスを招待者に採点してもらうという催しである。1年生が地域住民と初めて接する機会として設け、2018年度は3年目(3回目)となった(図1)。

7月14日(土)に実施し、参加者は約30名であった。2年生の活動で協力を得ている地域住民や行政職員などが参加者であった。学生は、緊張しながらもカレーライス的话题を通じて住民と交流していた。



図1. カレー甲子園の様子

3-2. 千住元町団地1,2号棟の高齢者の居場所作りのためのサロン開催

団地住民に対するサロン活動である。2017年度までは団地の集会所で行っていたが、2018年度から大学2号館のアリーナに場所を移し、月に2回程度行った。介護予防につながる体操などのレクリエーションを中心に活動した(図2)。毎回20名弱の住民の参加があり、継続して参加している住民と関係が築けてきている。



図2. 千住元町団地1,2号棟の住民へのサロン活動の様子

3-3. 千住元町団地3,4号棟や近隣の住民を対象にした映画鑑賞会の開催

千住元町団地や近隣の住民を対象にして、大学3号館地下階段教室などを会場として、映画鑑賞会を開催した(表1)。

映画のチラシを千住元町団地や千住桜木二丁目団地などに一軒一

軒ノックして直接配付することで、地域住民との交流を図ることができた。また、映画鑑賞会開催時に地域住民の方々の案内や誘導をすることで、交流することができた。回数を重ねることで、学生が地域住民に対し積極的に関わられるようになり、談笑する姿が見られるようになった。地域住民からは、「次はいつ?他の活動日とぶつかっているから違う日にできない?」など楽しみにしている様子が見られた。

映画上映、その準備、地域住民の交流を通して、地域活動の大切さ、活動の楽しさなどを感じたという学生の声がかかれた。

表1. 映画鑑賞会の概要

開催回数	月に1~2回(年間15回実施)
参加者数	30人前後、多いときは75名
鑑賞映画	「男つらいよ」「東京物語」「犬と私の10の約束」「嵐を呼ぶ男」「ラ・ラ・ランド」「学校(日本)」「雨に歌えば」「ハチ公物語」など

3-4. 千住柳町住区センターを拠点としたイベント等への参加

千住柳町住区センターで行われているイベント等への参加と、学生企画のイベントの実施を行った(表2)。

高齢者から学生が囲碁を教えてもらうという企画を立てたり、ハロウィンパーティや夕食会に参加したりして、住民との交流を深めた。

表2. 千住柳町住区センターを拠点としたイベント等への参加

5月1日	・地域を知るため街を歩き(元町神社、大川町、千住公園など)
5月22日	・地域を知るため街を歩き(大門商店街、大黒湯など)
6月19日	・「あなたのお話を聞かせてください」の会を主催 ・地域住民(高齢女性のみ、15名参加)と談話する
7月3日	・「囲碁・将棋を教えてください」の会を主催 将棋をしていた高齢男性10数名から、学生が将棋を教わった。
10月30日	・「ハロウィンイベント」を実施
11月13日	・住区DE団らんに参加 学生企画の「つりゲーム」「23区ピンゴ&秋の野菜ピンゴ」を実施。その他、夕食とカラオケ、コミュニケーションを参加者と楽しんだ。
12月5日	・住区センター主催のクリスマス会に参加

3-5. 地域包括支援センター千住西と連携して「千住カレッジ」の開催

学外のサロン活動である「千住カレッジ」計7回開催した(表3)。地域包括支援センター千住西には、活動場所の提供や、活動内容の広報誌への掲載などを協力してもらっている。

参加者は健康な高齢者が多く、継続して参加している人がほとんどである。女性高齢者の参加が多いが、男性高齢者の参加もある。「大学生と交流するのが楽しみ」などの声があがっていた。

学生は活動内容を考え準備し、チラシを作り、活動中の運営・進行も行い、大変さを実感していた。しかし、参加者の楽しんでいる姿を見ることで、意欲が高まっていた。

表3. 千住カレッジの概要

開催日	活動内容	参加者数
2018年6月8日	運動会(玉入れ・ジェスチャーゲーム)	10名
7月13日	夏祭り(射的・ヨーヨー他)	15名
9月14日	千住カレッジ番外編(学内家政実習室にて調理)	15名
10月12日	バルーンアート	7名
11月9日	ゲーム大会(ダーツ・ボトル倒し)	10名
12月14日	ガンバルーン体操、クリスマスカード作り	16名
2019年1月11日	ガンバルーン体操、なぞなぞかるた	18名

3-6. 認知症グループホーム「千住さくら」の入居者への社会参加等の支援

大学の近隣にある、認知症グループホーム千住さくらの入居者への支援を行った。学生は、外出する機会が少ない入居者とレクリエーションをしたり、買い物と一緒に出かけたり、映画鑑賞会に参加したりするなどの支援を行った(表4)。ほぼ毎週火曜日に行い、施設から好評を得ている。

実習以外では認知症高齢者と接する機会がないという学生が多い。学生は、職員や教員の助言を受けながら活動し、高齢者への理解を深め、接し方を学ぶとともに、高齢者の姿から社会参加の重要性を感じ取っていた。

表4. 認知症グループホーム千住さくらの入居者への活動内容

①施設内レクリエーション	・体操・ゲーム・パラシュートゲーム・カラオケ
②屋外レクリエーション	・映画鑑賞会・商店街等の散歩
③回想新聞などを介してコミュニケーションを広げる	

3-7. 精神障害者グループホーム「仲」の入居者への社会参加等の支援

千住地区にある精神障害者のグループホーム仲の入居者への支援を行った(表5)。

学生は、入居者の話し相手や買い物の付き添い、カラオケやバーベキュー、ボーリングなどを一緒に楽しんだ。さらに、他の学生にも精神障害者のことを知ってほしいと、グループホームの職員と入居者を講師とした講演会も開催した。

表5. 精神障害者グループホーム仲の入居者に対する支援

活動回数	年間40回
活動内容	・夕食会の準備を利用者とともに行う (利用者の買い物の同行) ・レクリエーションへの参加:カラオケ、バーベキュー、ボーリング等 ・精神障害者グループホームを他の学生に知ってもらうための講演会の開催

3-8. 近隣の住民を対象にした買い物支援、話し相手、見守り等の支援「千住便利隊」の実施

一人暮らし高齢者や障害者等を対象にした支援を通じて、地域セーフティネットを構築するための活動である。まず、「千住便利隊」のチラシを学生が作成した。千住大門商店街、千住元町町会の協力を得て、「千住便利隊」のチラシを配布、掲示した。前期は、地域住民から単発の依頼が数件あったが、なかなか増えていかなかった。そこで、地域包括支援センター千住西に対象者の紹介の協力を頼み、同センターから直接対象者を紹介してもらった。その後、同センターと連携しているケアマネージャーからも依頼がくるようになった。

2018年度の依頼件数は11件、継続して訪問していたのは7件である。火曜と金曜に活動した。学生2~3人が1組で訪問に行った。主な活動内容は、表6のとおりである。すべて高齢者を対象にした活動であった。

表6. 千住便利隊の依頼内容と訪問状況(抜粋)

依頼内容	訪問状況
病院に入院中の高齢者の男性に、携帯電話の使い方を教えてほしい。(退院後)ヘルパーでは不足する部分の家の掃除などを手伝ってほしい	毎週
ヘルパーでは不足する分の買い物、掃除、ご飯を炊いて小分けにするなどをしてほしい	毎週
本人の部屋ではない上の階の部屋の、換気と片づけなどをしてほしい	毎週
掃除を手伝ってほしい	隔週
天袋の片づけやエアコンの掃除などを手伝ってほしい	月に1回
車いすでの散歩や近くのスーパーへの買い物を手伝ってほしい	好天の日
ヘルパーに頼めない、電球の傘を拭くなどの大掃除をしてほしい	数回
自宅1階にある椅子を上階まで上げてほしい	1回
棚をゴミ置き場まで運んでほしい	1回
パソコンの廃棄について、メーカーに電話したがいまいかなかったため、教えてほしい。	1回

学生は住民の家庭に訪問し、生活の様子や困りごとを直に知り、職員や教員の助言のもと可能な範囲で支援した。家事を行うだけでなく、一人暮らし高齢者の話し相手になることや、見守りの役割を果たすことの重要性を徐々に感じ始めていた。また、介護保険制度では対応しきれない住民の生活困難を体感してきていた。さらに、ケアマネージャーや訪問介護員など、福祉職の業務の実際を見る機会にもなっていた。

ケアマネージャーの会合で千住便利隊の活動を宣伝してもらったため、千住地区外からの要請も出てきている。

4. 考察

4-1. 活動の意味

活動のねらいの一つ目「地域における人のつながり・絆を強めるための地域交流サロン活動」については、活動が定着してきており、周知度も上がってきた。介護予防などの公的なサービスを利用している層

以外の参加が見られたという評価を得ている。また、介護保険制度や障害者総合支援制度のサービスを利用している高齢者や障害者でも、社会参加の支援に関してはカバーしきれない現状があり、それを補足する意味があると考えられる。

もう一つの「一人暮らし高齢者や障害者の日常的な見守りや買い物の支援等の地域セーフティネットを構築するための取り組み」については、住民や福祉専門職の協力があり、活動がようやく始まった。介護保険などのサービスを利用しても足りない支援の部分や、一人暮らし高齢者の見守りなど、制度から漏れる部分の支援として意義がある。人とのつながりが希薄化した都市部におけるセーフティネットとして、徐々に機能してきている。

教育的効果としては、活動に参加した住民から高評価が返ってきたり、反対に注意を受けることがあったりすることを通して、学生は活動のあり方を考え住民との接し方を学んでいる。授業や実習では学べない、高齢者や障害者の生活困難や支援の実際、地域の課題を体験できているといえる。住民は、学生の対応に不十分なところがあっても温かいまなざしを注ぎ、学生の活動に期待してくれている。地域住民に学生を育ててもらおうという関係が築けてきている。

4-2. 今後の課題

しかしながら、本活動には課題がある。まず「サロン活動」は、必要としている人はいきわたっていないと考えられる。本来サロン活動には、高齢者の社会的孤立を防ぐ意義があるとされている⁸⁾。特に男性高齢者の孤立は社会的にも大きな課題となっているが、本活動の参加者のほとんどが女性高齢者である。男性高齢者が参加しやすいような工夫⁹⁾を検討していくことが必要かもしれない。

ケアマネージャーからは、千住便利隊のような活動を望んでいる人が地域に大勢いるということを知った。大学近隣の地区をまわり、住民と話をするなかでも、地域のニーズはあると感じられる。地域セーフティネットを構築していくにはまだ時間がかかるものと考えられる。今後、活動の拡充を図ることが必要である。

また、活動についての評価が十分に行えていないため、地域住民にもたらす効果や学生に及ぼす効果などを評価していくことも、今後の課題である。

謝辞

活動にご協力くださいました住民の皆様にご心より感謝申し上げます。また、足立区役所職員、足立区社会福協議会職員、地域包括支援センター千住西職員、地域包括支援センター千住本町職員、千住柳町住区センター職員、関係するケアマネージャーや訪問介護員、関係者の皆様にご感謝いたします。

参考文献

- 1) 福川康之, 川口一美: 孤独死の発生ならびにその予防対策の実施状況に関する全国自治体調査 日本公衆衛生雑誌 58(11): 959-966, 2011.
- 2) 杉田聡: 買物難民—もうひとつの高齢者問題 大月書店, 2008.
- 3) 斎藤隆茂, 岸恵美子, 野村祥平: 高齢者のセルフ・ネグレクト事例の類型化と孤立死との関連—地域包括支援センターへの全国調査の二次分析—. 厚生指標 63(3): 2016. 1-7.

- 4) 安部美和: 都市におけるマンション居住と震災時の高層階階級避難者の検討—大阪市北区における居住階層別高齢化率の可視化—. 自然災害科学, 32(4): 323-336, 2014.
- 5) 高橋泰, 渡部鉄兵, 加藤良平: 大都市の高齢化と医療・介護問題—医師数や病床・施設定員数の推移データを用いた地域別将来推計. フィナンシャル・レビュー, 131: 144-167, 2017.
- 6) 浅沼太郎: 日常生活圏域における生活課題への対応—千住地域における地域連携活動—. 地域連携研究 帝京科学大学地域連携推進センター年報, 1: 71-72, 2017.
- 7) 浅沼太郎: 千住エリアにおける地域連携活動—医療福祉学科の取り組み—. 帝京科学大学地域連携推進センター年報, 2: 87, 2018.
- 8) 孔英珠: 高齢者サロン活動による社会的孤立防止の可能性と課題—F市の公営住宅団地におけるYサロン活動に対する事例研究—. 社会分析, 44: 61-79, 2017.
- 9) 斎藤民, 近藤 克則, 村田千代栄, 鄭丞媛, 鈴木佳代, 近藤 尚己, JAGESグループ: 高齢者の外出行動と社会的・余暇的活動における性差と地域差 JAGES プロジェクトから. 日本公衆衛生雑誌, 62(10): 596-608, 2015.

上野原特産農作物「キヌア」栽培に関する産官学連携活動の 学術分野からの推進

和田龍一・細田直希・藤田尚也（生命環境学部 自然環境学科）・谷 晃（静岡県立大学）

花園誠（教育人間科学部 こども学科）・永沼充（教育人間科学部 学校教育学科）

田中禅价（臨済宗真福寺住職）・杉本公司・大神田良行（上野原ゆうきの輪）

キーワード：キヌア、大気汚染物質、オゾン

1. はじめに

キヌア (*Chenopodium quinoa*) はヒユ科アカザ亜科アカザ属植物に含まれ、我々にとって身近な野菜であるホウレンソウ (*Spinacia oleracea*) に分類上近縁とされている。南米アンデス山脈の高地において数千年前から食用として栽培されており、疑似穀物（アワやヒエといった雑穀に準じる作物でありソバなどが該当）に分類される。キヌアは良質なタンパク質、鉄やマグネシウムといった多種類のミネラルやビタミンを多く含んでおり、栄養バランスのよい作物として近年ヨーロッパや日本などで注目され、山梨県にて試験的な栽培が行われている¹⁾。

上野原市においても本学と包括的な連携協定を結び、キヌアの栽培を地域活性化の柱として積極的に行っている。(図1)²⁾ しかしながら日本の気候に適した栽培方法が確立されていないことから収穫量が安定していない。また大気汚染物質であるオゾンは、収量を低下させるなど植物に悪影響を及ぼすがキヌアの大気汚染物質に対する耐性の知見はほとんどない。昨年、一昨年と地域連携活動により、大気汚染物質の一種であるオゾンがキヌアの生育に悪影響を与えている影響を調査することを目的にオープントップチャンバー (OTC : section3にて後述) を用いてオゾンを除去した空気と除去しない空気中でキヌアを栽培し、その成長を比較した。播種の時期が春季である場合、キヌアが生長する初夏はオゾン濃度が高いが、播種の時期が夏季であるキヌアが成長する秋季はオゾン濃度が低く、その影響の調査が難しかった。本活動では、オゾンを人工的に生成し、生成したオゾンを加えた空気にて生長したキヌアと、外気にて成長したキヌアを比較することで大気汚染物質が、夏季に播種したキヌアの生育に与える影響を調査した。キヌア生産方法の確立に寄与し、産官学地域連携活動を学術的な面から推進する。

2. 活動報告

以下の活動を行った。

4月～7月（場所：東京西キャンパス実験研究棟）

オープントップチャンバー (OTC) と呼ばれる栽培実験を行うための装置の組み立て。

6月7日（場所：東京西キャンパス）

上野原ゆうきの輪 大神田副代表と打ち合わせ。

8月～9月（場所：東京西キャンパス）

オゾン暴露栽培システムの開発と評価。

8月3日（場所：東京西キャンパス）

キヌアの播種、および栽培の開始。

9月12日（場所：東京西キャンパス）

OTC内にポットを設置。

10月3日（場所：東京西キャンパス）

オゾンを加えてのキヌアの栽培実験開始。

11月7日（場所：東京西キャンパス）

生長して子実をつけたキヌアの刈り取りを実施。

11月～1月（場所：東京西キャンパス）

キヌアの新鮮重量、乾燥重量、子実重量、20粒重量の分析を実施。

3月11日（場所：東京西キャンパス）

成果報告会での報告の実施。

3月29日（場所：東京西キャンパス）

報告書の提出。

3. 結果と考察

オープントップチャンバー (OTC) と呼ばれる装置を用いて、オゾンを添加した大気を導入するオゾン暴露室と、そのままの大気を導入する非オゾン暴露室を設置し、この両室内で植物を生育させることで、野外における大気汚染による植物への影響を評価した。OTC は天蓋部が解放された形になっており、チャンバー下方から導入された大気は天蓋部から排気される (図1)。

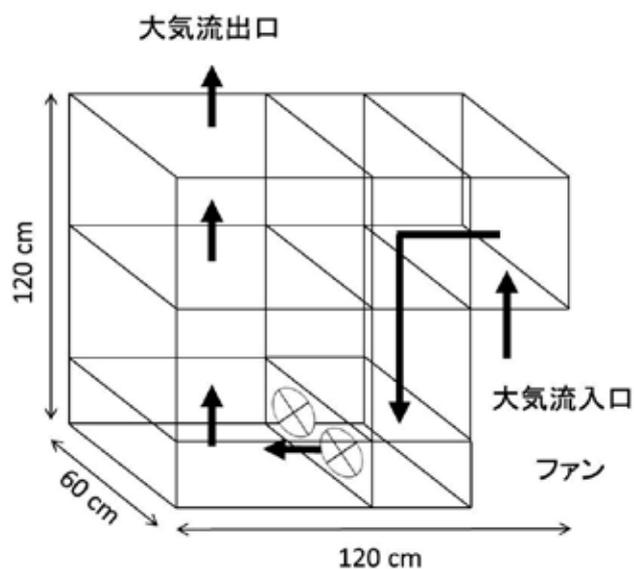


図1. オープントップチャンバー (OTC) の構造

この装置内で生長する植物の環境条件は、オゾンの有無を除いて同一である。本活動では、OTC を用いてキヌアのオゾンによる生長量・子実収量への影響を実験により評価し、大気汚染物質への耐性に関する知見を得るべく検討を行った。本年度は地域連携センター活動費用にて人工的にオゾンを発生させる装置（MC オゾンナイザー9855；レッキス工業）を購入し、当装置を用いて大気濃度より 50 ppb 高い空気にて植物を栽培するシステムを検討した。開発したキヌアのオゾン暴露栽培システムの概要を図2に示す。

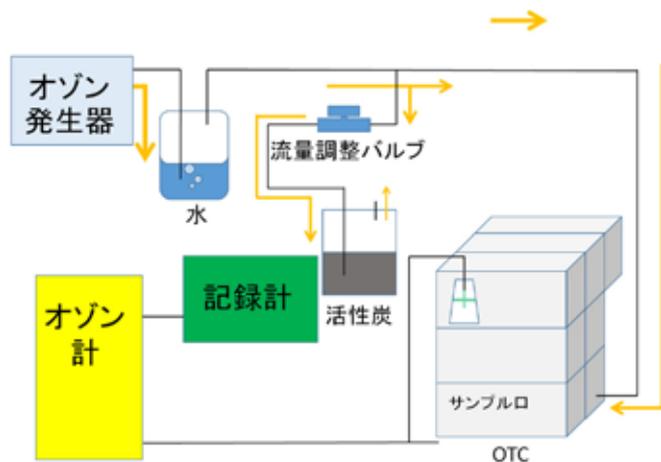


図2. 開発したオゾン暴露栽培システムのセットアップ概要

ここで発生したオゾンを全て OTC に供給するとオゾン濃度が高くなりすぎることから、一部のオゾンを OTC に供給できるように流路を分岐し、一方に流量制御バルブを取り付けることで OTC に供給するオゾン量を制御した。OTC 内のオゾン濃度を紫外吸収法によるオゾン計（UVAD-1000A；島津製作所）を用いて 1 分ごとに計測し、記録計（GL240；グラフテック）を用いて濃度を記録した。分岐した余剰分のオゾンは活性炭を用いて分解処理後、大気に戻した。

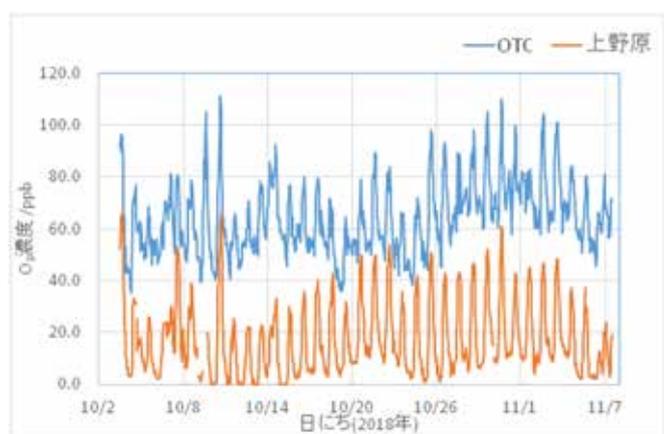


図3. オゾンを添加した OTC 内と上野原市のオゾン濃度 OTC 内のオゾン濃度が上野原市のオゾン濃度に比べて約50ppb 高いことがわかる。

ここで OTC 内と上野原市のオゾン濃度を図3に示す。10月3日～11月7日までの約1カ月の実験期間中の OTC 内、及び上野原市の平均オゾン濃度はそれぞれ 64.2 ppb、17.2 ppb であった。OTC 内のオ

ゾン濃度は上野原市のオゾン濃度に比べて 47.3 ± 10.3 ppb 高かった。おおよそ 50ppb オゾン濃度の高い空気にてキヌアを栽培するシステムを製作できたことを確認した。

開発したシステムを用いて、10月より OTC にオゾンを添加し、オゾン添加の有無で成長したキヌアを比較した。

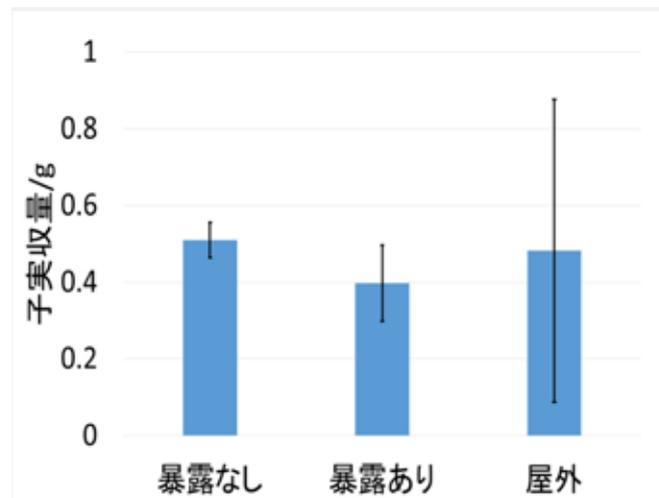


図4. オゾン暴露なし、オゾン暴露あり、屋外にて生育したキヌアの子実収量。オゾン暴露の有無により有意な差は見られなかった。オゾン暴露の時期が遅かったため、生育の早い段階でオゾン暴露を開始する必要がある。

オゾン暴露あり、オゾン暴露なし、屋外で生育したキヌアの草丈に、有意な差は確認されなかった。またこれら条件で生育したキヌアの新鮮重量はそれぞれ 1.35 ± 0.27 g、 1.52 ± 0.41 g、 1.97 g、乾物重量は 0.84 ± 0.16 g、 0.88 ± 0.13 g、 0.87 g であった。全子実重量はそれぞれ 0.40 ± 0.18 g、 0.39 ± 0.09 g、 0.48 g、20粒重量は、 19.1 ± 0.3 mg、 19.6 ± 2.2 mg、 20.0 mg であった。オゾン暴露の有無によるキヌアの生育および収穫した子実収量に有意な差はみられなかった。

昨年、一昨年の検討では有意にオゾンを取り除いた浄化 OTC にて生育したキヌアが大きいという結果が得られた。本年度のオゾン暴露により、よりはっきりした違いが得られると予想したが、予想した結果と異なった。オゾン暴露の有無にて有意な違いが得られなかった理由として、オゾン暴露の開始時期が、キヌアが十分に成長した10月上旬と遅かったためである可能性が考えられる。キヌアの成長段階の早い時期からオゾンの添加を開始する必要があると考えられた。実験データのほとんどのないキヌアの大気汚染物質の耐性を評価し、上野原市でのキヌアの栽培方法の確立に寄与する。

参考文献

- 1) 和田龍一、江頭雄雄、市来裕人、谷晃、花園誠、永沼充、田中禪价：オープントップチャンバーを用いた活性炭処理空気暴露によるキヌア栽培の試み、帝京科学大学紀要、13：251-257、2017。
- 2) 上野原市役所：キヌア栽培応用に関する情報、<http://uenohara-job.jp/seminar01/>、2019。

地域住民への健康教育プログラムの実施を通じた学生の学び —足立区生涯学習センターと協働した教育活動—

糸井和佳・小宮山恵美・吉岡幸子・吉田一子（医療科学部 看護学科）

田中恵美（足立区生涯学習センター）

キーワード：傾聴、健康支援、地域住民、双方向コミュニケーション

1. はじめに

地域の多様な健康課題をもつ住民の健康増進や疾病予防の行動変容を促すための看護技術として健康教育がある。健康教育を学ぶ科目として健康支援論があるが、その演習において、足立区生涯学習センター主催のコミュニティサロンである「おしゃべり処」で住民の話を傾聴する経験を持ち、その後に住民への健康教育をチームで展開する機会を持った。ここでは、地域住民に対する健康教育を通じた学生の学びを明らかにすることで、地域と協働した教育の実践活動について報告する。

2. 活動内容

1) 健康支援論の授業構成について

健康増進や疾病予防を促す理論やモデルを活用し、コミュニティの多様な健康課題を捉え、ニーズに基づく健康教育の企画・実施評価の一連のプロセスを理解することを目標に授業を構成した。

授業計画を表1に示す。

表1. 健康支援論授業計画

回	内容
1	健康支援の方法 健康教育とは 人間の行動・生活行動・保健行動・保健行動の変容・オリエンテーション
2	健康支援における対象の理解、傾聴
3	@おしゃべり処（足立区生涯学習センター学びピア4階）
4	おしゃべり処で出会った対象への健康教育企画立案
5	健康教育指導案立案
6	企画案の修正および媒体作り・シナリオづくり、デモンストレーション
7	・健康教育実施（発表会）
8	・実施したことに対する評価

本科目は、3年生の選択科目であり、44名が受講した。健康教育についての講義を行い、「傾聴」について調べる課題レポートを課し、その後にコミュニティサロン「おしゃべり処」に参加し、地域住民の話を傾聴する機会を持ち、健康に関するニーズの把握を行った。

「おしゃべり処」での傾聴経験から、地域住民の健康に関するニーズについてグループで討論し、健康教育のテーマを決定し、健康教育の企画及び指導案の立案を行った。なお、グループは8グループで、1つのグループの人数を5～6人とし、4人の教員がファシリテートを

行った。グループでシナリオや媒体を作成し、担当教員とデモンストレーションを実施して本番に臨んだ。

発表会は、「おしゃべり処」の傾聴ボランティアや地域住民の参加者に向けて、本校を会場として行った。発表終了後に、参加者からコメントをもらい、最終日には実施した健康教育について学生個人ならびにグループの評価を実施した。

2) 「おしゃべり処」の活動参加

「おしゃべり処」の紹介であるが、足立区生涯学習センターを拠点として、孤立予防や地域でのつながりをつくることを目的に月2回、2時間程度、地域住民が安心して「おしゃべり」できる集える場を開催している。活動開始から9年目であり、生涯学習センターが主催し、運営は同センターの傾聴ボランティアグループが行っている。「おしゃべり処」終了時には、傾聴のボランティア同士での振り返りを実施している。

学生は2回に分けて「おしゃべり処」に参加した。2回合わせて傾聴ボランティア15名、参加者29名であった。また、今回は、講師兼助手として、SPC（シニア・ピア・カウンセラー）17名が参加した。学生は、テーブルに、2名ずつ傾聴ボランティアと共に入った。

また、喫茶サービスを行っているため、学生2名が手伝いをした。「おしゃべり処」参加者は、学生の受け入れもよく、様々な話題を提供してくれており、傾聴ボランティアやセンター職員の配慮もあり、学生も話を聴くこと、時として語ることを安心して実践していた。



写真1. おしゃべり処での様子



写真2. おしゃべり処での様子



写真3. おしゃべり処終了時の振り返りの様子

3) 「おしゃべり処」からの学びと健康教育への連動

学生からの所感では、「おしゃべり処」の一連の活動を通して、事前課題レポートで学習した傾聴することや傾聴の技術について理解し、その時間を意識して過ごすことができていた。例えば、「うなずき」「相手の目を見ること」「話題や会話づくりをした」「相手の話を聴くこと、理解すること」を経験していた。

また、「振り返り」を通しては、「聴くときにはうなずきや相槌、表情で反応することが大切である」ということだけでなく、「しゃべる機会の場所がある」「世代の違う人の話を聴く機会ができた」などの広がりもあった。しかしながら、「傾聴は思っていた以上につかれる行為だ」などの意見もあった。この場を通して、参加者あるいは傾聴ボランティアと「傾聴」という技術を通してコミュニケーションすることにより、学生が参加者の状況や等身大の姿を把握し、ニーズアセスメントにつなげている。これらの活動を踏まえて、学内に帰り、グループで討議を通してテーマの決定を行った。

4) 健康教育の活動

具体的なテーマは、表2の通りである。奇抜なネーミングもあるが、地域住民のニーズアセスメントも踏まえて、企画を行った。誰を対象とするのか、どのようなことに地域住民は関心を持っているのか、健康課題は何かについてについて検討を行った。

表2. 健康教育のテーマ一覧

テーマ
ばいばい バイキン
ベジファースト～食事から生活習慣病予防～
あなたは知ってる？冬の死神～急激な温度変化によるヒートショック～
身体の中から転倒（骨折）予防
転倒予防のための筋力UP
マッスルカーニバル～転倒・つまづき防止の会～
足の筋力低下を予防しよう！～転んじゃやーよ～
恐れなくて！認知症！～今からできる認知症予防～

高齢者を対象としているところが多く、「転倒予防」が4題出ているが、他には認知症予防や感染症対策、生活習慣病予防などもあった。今回は、「おしゃべり処」に参加していた地域住民および傾聴ボランティア、生涯学習センターの事業部長や副所長併せて12名の方が、発表会に参加してくれた。生涯学習センターで「おしゃべり処」において、発表会のチラシ（図1）を作成してくれたことも一要因としてあると考える。

8題を90分の中で実施した。健康教育の媒体は、スライドを活用して、動画や体操実技など様々な工夫がされており、人に伝えるための工夫や知識の理解をしてもらうための技術としても傾聴での体験が活かされていた。また、他のグループの内容を学生同士で評価したこともあるが、しっかりと相手の話を聴く姿勢がみられていた。質疑応答もあり「伝えること」と「聴く」ことの双方のやり取りもある会であった。参加者からの感想をいただいた中には、「とても良い勉強になった」「若い皆さんとお話できてとても楽しく学ばせて頂きました」「私たちが元気に過ごしますので、みなさんもおおおいに学んでください」「今回のことが継続できているかどうか、おしゃべり処には是非また来て確認してください」などがあつた。

帝京科学大学 看護学科

大学生の発表会 《ご案内》

おしゃべり処で一層楽しく遊んだ大学生が、皆さんとの出会いで学んだことを含めて、地域の人の健康upをめざした「健康教育」として発表します。ぜひ、皆様もご参加下さい。お待ちしております！

【日時】1月21日（月）
午後1時30分～2時40分
【会場】帝京科学大学 2号館
2F03教室
【足立区千住元町3-4-1】

会場会場へ、お越し下さい！
《問合せ》
帝京科学大学 千住キャンパス
看護学科：糸井・小宮山
TEL 03-6910-1010
070-1254-4711

図1. 足立区生涯学習センター作成のチラシ



写真 4. 健康教育発表会の様子



写真 5. 健康教育発表会の様子

3. 学生の学び

終了時の学生の感想から、参加者の方が興味を持って聞いていただけるように、テーマ選びや構成を考え、双方向のやり取りやスライドの工夫を心掛けたなどが書かれていた。健康情報の根拠や、健康教育で学んだことを継続してもらえるようにするはしたらよいかを考えたという記述もあった。グループ内での協力や事前準備の大切さにも気づき、うまくいかなかったことへの反省もあった。教えることばかりを考えていたが、地域住民にも学びたい思いや知識があることが分かり、皆と一緒に勉強していけるような配慮が必要である、自分たちの態度やプレゼンの技術を磨いていく必要がある、さらなる勉強の必要性を痛感し引き出しを増やしたい、次に活かしたいという思いもあった。

授業の最初の方で、おしゃべり処に参加し、傾聴を学んだことでは、うなづく、相槌をうつことも大切だが、相手を理解したいという思いが大切である、地域住民が集う場所が重要である、最初に地域の人のお話を聞く機会があったことで、高齢者の等身大の姿や思いを知ることが出来、健康教育に活かしたなどがあった。また健康な方への健康教育の技術は、実習中に出会う療養中の対象にも活用できることに気づいていた。健康教育を通して自分も勉強になった、出会った地域住民に健康で過ごしてほしい、地域全体が健康になってほしいなどの願いも書かれていた。

4. まとめ

学生は、おしゃべり処に参加し、世代の異なる参加者あるいは傾聴ボランティアと「傾聴」という技術を通してコミュニケーションする

ことにより、参加者の状況や等身大の姿を把握し、ニーズアセスメントにつなげることができていた。相手と話しながら楽しい時間を過ごしたことで、生の対象の理解に基づき、構成を考えることや、プレゼンの技術や事前準備の重要性を学んでいた。

健康な方への健康教育を実践したことで、双方向のやり取りを心がけ、普段の授業とは異なることを体験していた。参加者の感想に自分たちのグループの発表のことが出てきたことを嬉しく思い、今回うまくできなかったことを次回や実習や看護に生かしていきたいと思いい、地域住民の健康を願うなどが見られていた。これらのことから、学生は異なる世代の人から学ぶことが多く、地域住民との交流が学生を成長させることが同え、地域との協働を取り入れる重要性が示唆された。

謝辞

今回の体験の場の機会いただきました「おしゃべり処」の参加者及び傾聴ボランティアの皆様、足立区生涯学習センターの皆様深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 上野昌江、和泉京子編集：公衆衛生看護学第2版 100-108 中央法規出版 2016

図書館体験型ランニングイベント「RUN×LIBRARY」の報告

高田由基（教育人間科学部 学校教育学科）

キーワード：図書館、ランニング、マラソン、体験型イベント

1. はじめに

平塚市中央図書館から「図書館でランニングのイベントを行いたいのですが、協力していただけませんか。」と協力依頼を受けた。当初「図書館でランニング？」と感じたが、今多くの図書館では、読み聞かせ会やお話会にとどまらず、音楽会、クイズラリー、〇〇教室など子供から大人まで幅広い利用者のニーズに対応する、または役に立つ様々な企画・イベントが行われている。そして、ランニングは、町で見かける市民ランナーの姿からもわかるように誰もができる生活密着型のスポーツである。今やランニング関連の書籍は、書店や図書館の一角にコーナーが設けられるほど豊富である。つまり、図書館とランニング、どちらも広く市民の教養や健康に資するものであり、その二つが融合したイベントは素晴らしいものになると感じ、図書館体験型ランニングイベント「RUN×LIBRARY」の開催に協力させていただくこととなった。

2. イベントのねらいと開催時期

開催については、協力依頼を受けた5月から担当職員の方と打合せを重ね、イメージを具体化していった。

本イベントは、広く市民が利用している公共施設である図書館で、座学と実技の両面から学ぶことができる体験型ランニングイベントを行うことで、健康増進を図るきっかけにさせていただくとともに、図書館や資料の活用を促す機会にさせていただきたいと考え計画された。また、図書館利用者をスポーツ実施へ、スポーツに関心がある方を図書館利用へと誘うねらいもあった。

開催時期については、涼しくなり、ランニング初心者も安全に取り組める時期がよいということ、「体育の日」があるということで10月とした。また、毎年10月には、箱根駅伝の予選会が行われるが、同市には箱根駅伝の強豪大学である東海大学があり、市民のランニングへの気運を高めるよいタイミングであることも10月開催を後押しした。

3. イベントについて

(1) 概要

期日：2018年10月11日(木)

場所：神奈川県平塚市中央図書館

および平塚市総合公園

名称：「RUN×LIBRARY

～まずはゆっくり走ってみませんか～

(2) 事前周知

平塚市の広報紙、スポーツ情報ポータルサイト、図書館ホームページおよびツイッター、チラシとポスター掲示で周知し、参加者を募った。



図1. イベントのポスター

(3) 対象と参加者

対象は「平塚市在住・在勤・在学で30分程度のウォーキング・ジョギングが可能な18歳以上の方」とした。初心者対象であるが、図書館から公園への往復(ウォーキング)を含め、ある程度の体力が必要のためである。申し込みは、図書館への電話申し込みとした。初開催のため、どの程度の申し込みがあるか予想ができなかったが、座学も実技も15~20人程度が適当な規模と考え、定員は20名とした。実際には申し込みが15名で、参加者は14名(1名欠席)であった。年齢は30代から70代、男性が4名、女性が10名であった。事前にランニングの実施状況を確認したところ、日頃から行っている方は6名であり、最近始めたという方からフルマラソン出場経験者までさまざまであった。

4. 当日のプログラム

時刻	プログラム
9:10	受付
9:30	(1) 講義 ランニング、はじめる一歩とつづける一歩 講師：高田由基
10:00	(2) ランニング関連資料の紹介 図書館職員から／講師から
10:20	<図書館から公園へウォーキングで移動>
10:35	(3) 実技 ランニング・ウォーキング・エクササイズ
11:30	<公園から図書館へウォーキングで移動>
11:45	整理体操
11:50	質疑・講評
12:00	アンケート記入後終了

図2. 当日のプログラム

(1) 講義「ランニング、はじめる一歩とつづける一歩」

ランニングに関する講義を30分程度で行った。内容は、①ウォーキングとランニングの消費エネルギー、②練習するとなぜ走れるようになるのか、③モチベーションの維持という3つ。①②は、科学的な根拠をもとに、初心者の方にもわかりやすい言葉や図を用いて説明を行った。③は、ランニングを実践・継続していくためのモチベーションを維持する工夫を、初級・中級・上級に分けて身近な例を挙げて紹介をした。



図3. 講義の様子

(2) ランニング関連資料の紹介

資料の紹介を15分程度で行った。まず、図書館職員から図書館で本を探すメリットを挙げ、書店との違い、図書館相互貸借について説明があった。続いて同じく図書館職員からランニング関連資料を5つの視点(①雑誌、②アスリートや指導者の方が書いた図書、③科学者や研究者が書いた図書、④著者自身の体験を書いた図書、⑤その他ランニングに役立つ図書)をもとに計6点の資料の紹介があった。講師(筆者)からも、同様の視点で、5点の資料紹介を行った。紹介した資料と時間の都合で紹介できなかった資料を一覧にし、資料として参加者に配付した。



図4. 紹介したランニング関連の資料

(3) 実技

図書館から平塚市総合公園へウォーキングで移動し(800m程度、約10分)、ランニング・ウォーキング・簡単なエクササイズを50分程度行った。最初に、公園内の芝生の広場で準備運動とストレッチを実施。二人一組で行うストレッチも取り入れ、参加者同士の交流や会話を促し、打ち解けられるようにした。その後、広場1周(約600m)をウォーキングから始め、少しずつペースをあげランニングを実施。単調にならないよう、また休憩を兼ねて、1周走り終えるごとに、上半身、下半身を鍛える簡単なエクササイズを行った。その流れでウォーキングとランニングで計3周した。実技終了後、水分補給をして、再びウォーキングで図書館まで戻り、整理体操とストレッチを行った。最後に質疑と講評をして、アンケートの記入後、解散とした。



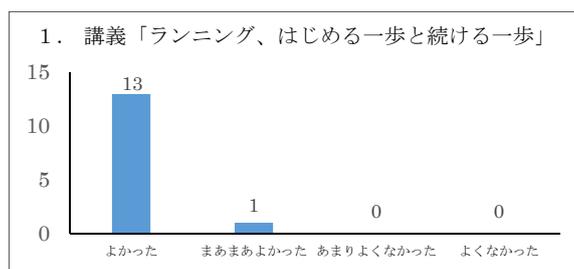
図5. 実技の様子

5. 参加者の反応とアンケート結果

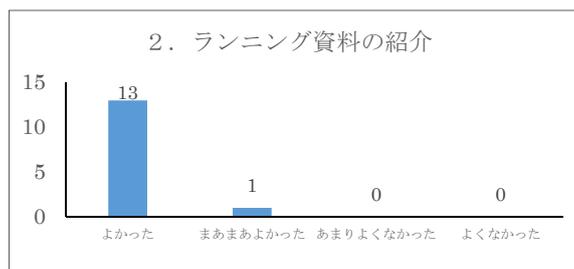
参加者からは「子供の時以来、走ったことが無く、でも走ってみたいと思って申し込みました。」「今後もこのイベントはありますか。」「今回のイベントを楽しみにしていた声、今後を期待する声が聞かれた。また、「先ほどのエクササイズをもう一度教えてください。」「今後も自分で実践していこうとする参加者もいた。

アンケートには、「初心者として楽しく、また安心して参加できました。」「健康レベル向上のため、よいイベントに参加できました。」「知

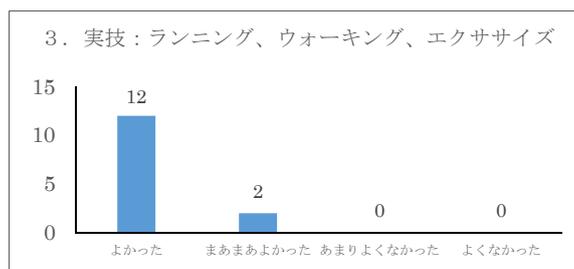
識が増えると走るのが楽しくなりそうです。」といった記述があり、図書館での体験型イベントの良さを実感されたようである。図書館の利用やメリットの説明、ランニング関連資料の紹介に関して、「図書館の利用の仕方を再認識しました。」「資料のリストをいただけたので、今後借りて勉強します。」「ランニングについて村上春樹さんの本があるとわかり、よい収穫となりました。」などの記述があった。また、「今回のみでなく、今後もマラソン教室を企画してほしいです。」「とても楽しかったので、同じ企画の第2弾、第3弾・・・があればうれしいです。」など、今後の開催への要望が14通中9通にあった。後日、同市の広聴制度である「市長への手紙」にも、今回のイベント継続を望む手紙が1通寄せられ、好評さがうかがえた。



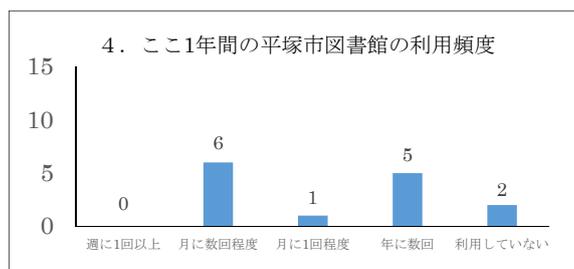
グラフ1. 講義について



グラフ2. ランニング資料の紹介について



グラフ3. 実技について



グラフ4. 1年間の平塚市図書館の利用頻度

表1. アンケートの自由記述（一部抜粋）

年齢 性別	自由記述
79歳 男性	一人で走っているのみでしたので、大変参考になりました。
57歳 女性	わかりやすく、ためになりました。また、企画してください。
32歳 女性	もっと走ることにしたいと興味がわいたので参加してよかった。
58歳 女性	実技、期待以上に楽しくわかりやすかったです！ストレッチが特に良かったです。ぜひまた企画して下さい。
39歳 女性	数年ぶりに運動をしたのに600mを3本軽く走れてうれしかったです。健康レベル向上のため、よいイベントに参加できました。
52歳 女性	楽しみながら専門的な知識を学びました。また、図書館の利用の仕方を再認識しました。
43歳 女性	ランニングについて分かりやすく説明して下さい楽しく参加することができました。
56歳 男性	今度は土日に開催してもっと大人数で行ってもよいと思いました。
61歳 女性	お話がお上手で、楽しくわかりやすかったです。特にモチベーションアップの色々な方法を教えてもらって参考になりました。
77歳 男性	資料のリストをいただけたので、今後借りて勉強します。

6. おわりに

ランニングの魅力は、子供から大人まで、また一人でも複数でも楽しめるスポーツであり、生活密着型のスポーツであることだと考える。その一方で、動きの単調さや過去の苦手意識から「走ることは辛い」「走ることは嫌い」という根強いイメージや思い込みをもつ人、「やってみたいがきっかけがない」「取り組み方がわからない」という人も多い。実際には自分に合ったペース、自分の生活に合った取り組み方、正しい知識と方法で実践することができれば「意外と悪くない」「けっこう走れる」と感じてもらえると考えている。今回の図書館体験型ランニングイベントで、初心者の方からランニングへの前向きな声が多数聞かれたのは大変喜ばしいことであった。こちらとしても、たくさんの方の新たな気づきをいただいた。

謝辞

図書館体験型ランニングイベントという大変貴重な機会をいただいた平塚中央図書館の皆様、ご参加いただいた皆様へ心から感謝申し上げます。イベントに参加された方々が、その魅力を実感し、図書館利用とランニング実践を今後も継続されることを祈念しております。

学校教育学科SAT・女子駅伝チームによる シューズ回収プログラム「スマイルアフリカプロジェクト」の報告

高田由基・持田尚(教育人間科学部 学校教育学科/陸上競技部女子駅伝チーム)

千葉めぐみ・日比由依子(教育人間科学部 学校教育学科)

西野愛梨・田口綾乃(陸上競技部女子駅伝チーム)

キーワード：スマイルアフリカプロジェクト、シューズ回収、SAT、貧困問題、社会貢献、地域連携

1. はじめに

2018年10月27～28日、桜科祭において学校教育学科公認サークルSATと女子駅伝チームは、学術企画としてシューズ回収プログラム『スマイルアフリカプロジェクト』を実施した。『スマイルアフリカプロジェクト』とは、まだ履けるシューズを日本で回収し、裸足や裸足に近い状態での生活を送る途上国の子供たちにそのシューズを寄贈するプロジェクトである。雑誌「ソトコト」の出版社である木楽舎が主催となり、2009年から行われている。途上国での靴の無い暮らしは、衛生上・安全上多くの問題を抱え、破傷風などウィルス感染症の危険にさらされ、幼くして命を失う子供もいるという。¹⁾

まだ使えるが、履かなくなったので捨てられてしまうシューズが日本には無数にある。アフリカにシューズを贈る社会貢献プログラムとしてだけでなく、使い捨て感覚に慣れてしまっている大学生や子供たちに物を大切に使う気持ちをもたせる環境教育プログラム、そして環境問題や途上国の貧困問題への理解を深めるきっかけとしてスマイルアフリカプロジェクトに取り組んだ。その活動について報告する。

2. SATと女子駅伝チームについて

SATとは、「学生教育研修生」の英語表記、Student Assistant Teacherの略であり、教員を目指す学校教育学科の学生で構成された学科公認サークルである。SATの目標は教員を目指す学生が、近隣地域の教育現場や様々なボランティアなどの地域貢献活動を通して、教員に求められる「社会性・コミュニケーション能力・企画調整力」を高めるとともに、教員になる意欲向上につなげることである。²⁾

陸上競技部女子駅伝チームは、2018年4月創設の帝京科学大学の強化指定部である。競技の特性上、シューズは何よりも大切な道具であるが、一方でアウトソールやクッション性の消耗が激しく、一般的な使用には支障なく履けるが、故障の予防など安全面の観点から、履かなくなってしまうシューズが多数輩出されてしまう現実がある。実際、このスマイルアフリカプロジェクトのフロントランナーは、シドニーオリンピックマラソン金メダリストの高橋尚子さんであり、ランニングシューズとして履かなくなったシューズを途上国で履いてもらうことができればどんなに良いことかと考えスタートしたが、スマイルアフリカプロジェクトである。

こうした背景から、帝京科学大学におけるスマイルアフリカプロジェクトをSATと女子駅伝チームの合同で行うこととした。

3. 活動内容

(1)活動のねらい

- ①環境問題や途上国の貧困問題への理解を深める。
- ②物を大切にすることを通して環境保護の意識をもつ。
- ③アフリカの子供をケガや病気から守る社会貢献への意識を高める。

(2)回収期日

2018年10月27～28日 帝京科学大学「桜科祭」

(3)回収場所

帝京科学大学「桜科祭」会場 SATブース

(4)回収対象者

帝京科学大学の学生・教職員および足立区民

(5)回収の対象となるシューズ

- ・運動靴(上靴、革靴、サンダルは不可)
- ・サイズは15～28cm

4. 活動の流れ

表1. 活動全体の流れ

月	活動内容
8～9月	・SATと女子駅伝チームの学生がポスターを作成(手書きポスター計12枚)
10月	・大学構内と足立区内の47の公共施設(表1)にポスター掲示、「帝京科学大学通信」等で事前周知。
当日	・桜科祭開催中、シューズ回収を実施。 ・シューズを持ってきた方にメッセージカードを書いていただき、記念品をプレゼント。 ・56足のシューズを回収
12月	・桜科祭後に回収されたシューズと合わせて、日本事務局に発送。

(1)事前周知

シューズは、すぐに準備できるものではないため、予め回収についての周知が必要であり、8～9月にかけてポスターを作成した。プロジェクトのねらいに即し、ぬくもりのあるポスターにしたいと考え、手書きのポスターを作成することとし、SATと女子駅伝チームで合わせて12枚の手書きポスターが出来上がった。



図1. 合宿中にポスターを作成する女子駅伝チームの学生

10月、ポスターを大学構内および足立区内の47の公共施設に掲示(表1)。本学地域連携係と足立区の協力を得て、北千住駅や区内小中学校など学外でも広く周知することができた。本プロジェクトと桜科祭のポスターがセットになったA3ポスターとすることで、両方を同時に周知することができた。また、ポスター以外に帝京科学大学通信、足立区公式ツイッター、広報紙でも周知していただいた。



図2. 学生が作成した手書きポスター



図3. 帝京科学大学通信 Vol.5

表2. ポスターを掲示した足立区内の47施設

施設種類	施設名
メイン施設(4)	足立区役所 屋外掲示板/足立区役所 屋内掲示板/ JR北千住 区の情報コーナー/総合スポーツセンター
小学校(15)	千寿/千寿桜/千寿本町/千寿双葉/千寿常東/千寿 第八/寺地/本木/関原/西新井/亀田/梅田第二/ 梅島/弥生/足立
中学校(7)	第一中/千寿青葉/千住桜堤/第四中/第六中/第七 中/第九中/〃/〃
保育園(5)	元宿こども園第一/元宿こども園第二/本木/本木東 /梅田
その他施設(16)	千住区民事務所/中央図書館/生涯学習センター/千 住保健センター/千住スポーツ公園/興本地域学習セ ンター/梅田地域学習センター/消費者センター/N PO活動支援センター/梅田図書館/障がい福祉セン ターあしすと/社会福祉協議会/社協・総合ボランティ アセンター/シルバー人材センター/あだち再生館(区リ サイクルセンター)/ギャラクシティ/生物園

(2)回収当日

10月27～28日、桜科祭の開催時間中は常設(27日9:00～17:00、28日9:00～15:00)として、シューズ回収を実施。子供から大人まで、あるいは親子で持って来てくださる方など様々であった。シューズを持ってきた方には、アフリカの子供たちへのメッセージをメッセージカードに書いていただき、記念品(ステッカー、缶バッジ、ペンのどれか一つ)を進呈した。15～28cmまで、2日間で48足回収することができた。その後、持ってきた方がおり、計56足のシューズが集まり、12月にスマイルアフリカプロジェクト日本事務局に発送した。



図4. 区内小学校でのポスター掲示



図5. 子供からシューズを受け取る様子



図6. シューズとともに送るメッセージを書く様子



図7. 回収したシューズ



図8. 回収したシューズを点検する様子

5. 関連イベントへの参加

11月24日、有明の東京臨海広域防災公園でスマイルアフリカプロジェクトのランニングイベント「ランニングフェスティバル2018」が開催され、帝京科学大学チームとして参加した。イベントは「年齢や性別、障がいの有無に関係なく走ろう!」をテーマに、子供から大人、健常者から車いすランナーまでたくさんの方が参加した。2~6名が1チームとなって3時間タスキをつなぎ続ける3時間リレーマラソンで、参加者同士が交流を深めた。順位を競うイベントではないが、参加チーム中、帝京科学大学チームが1位となり、プロ車いすランナー廣道純さん、スマイルアフリカプロジェクトフロントランナーの高橋尚子さんから表彰していただき、参加学生にとって忘れられない1日となった。桜科祭のシューズ回収以外でも、関連イベントに参加協力し、スマイルアフリカプロジェクトの盛況に貢献することができた。



図9. プロ車いすランナー廣道純さん(左)と、高橋尚子さん(右)に表彰される帝京科学大学チーム

6. 活動を終えて - 成果と課題 -

参加した学生は、単にシューズ回収をするだけでなく、プロジェクトの意義を理解したり、地域との交流に喜びを感じたりすることができたようである。一方で、プロジェクトへの参加学生数がまだまだ十分ではなかったため、プロジェクトの意義に加え、将来教員になった際にも、この経験が生きることを伝えるなど、学生の参加意欲を高めていけるようにしたい。

【参加学生の感想】

○海外の子供たちの力になりたいと思い参加しました。身近な人たちにも知っていただくため、ポスターの作成を行い、開催当日はたくさんの方が協力をしてくださり、皆さんの優しい心に触れることでやりがいを感じ、もっともっとこのプロジェクトを広めていきたいと思いました。(3年生)

○アフリカの子供たちにたくさんの靴を届けることができただけでなく、地域の方々とも交流でき、とても良い機会となりました。なかなか地域の方々とは交流することがないので、これからも積極的にこのようなプロジェクトに参加し、地域の方々とも交流していきたいと思いました。(1年生)

○私でも人の役に立つことができるのだと感じました。実際どれくらい集まるのか、不安な気持ちもありましたが、たくさんの靴を集めることができ嬉しかったです。一足の靴が一人の笑顔に、そしてそれが協力してくださったたくさんの方の笑顔に繋がる。そんなことを考えながら取り組むことができ、いい経験になりました。(1年生)

足立区がスマイルアフリカプロジェクトの趣旨に賛同していただき、本学地域連携係を介して、たくさんのご協力をいただいた。それにより区内公共施設でのポスター掲示、足立区公式ツイッター、広報紙などで周知させていただくことができた。ただその割にシューズ回収数がそれほど多くなかったのは、回収の上限(200足)があり、どの程度集まるか予想ができなかったため、周知開始を遅めにしたことが(10月中旬)一因と思われる。

プロジェクト自体は、シューズを持ってきてくれた方だけでなく、会場で取組みを知った人からも好評であった。スマイルアフリカプロジェクト事務局(木楽舎)担当者からも「大学での実施はこれまで例がないので大変うれしい。」との声をいただいた。なお、桜科祭での活動の様子は、雑誌「ソトコト」2019年5月号(2019年4月5日発売)に掲載された(図11)。

SATと女子駅伝チームでは、このスマイルアフリカプロジェクトの継続を含め、今後も地域貢献、社会貢献となる活動に積極的に携わっていきたいと考えている。

謝辞

帝京科学大学でのスマイルアフリカプロジェクトの取り組みにご理解ご協力いただきました木楽舎の皆様、足立区シティプロモーション課の皆様、そしてシューズ回収にご協力いただいた多くの皆様にご場を借りて御礼申し上げます。



図 10. シューズ回収を終えた SAT と女子駅伝チームの学生たち



図 11. 活動の様子が掲載された雑誌「ソトコト」2019年5月号

参考文献

- 1) 高橋尚子、スマイル アフリカ プロジェクト：シューズとアフリカと 500 日。2010。
- 2) 島田悠輝：学校教育学科公認サークル SAT 地域連携研究帝京科学大学地域連携推進センター年報第2巻 pp47-50, 2018

リンク

- 1) スマイルアフリカプロジェクトHP
<https://www.sotokoto.net/smileafrica/>
- 2) 帝京科学大学HP トピックス「【学校教育学科&女子駅伝チーム】桜科祭で『スマイルアフリカプロジェクト』実施」
https://www.ntu.ac.jp/journal/index.php?c=journal_view&pk=1541412655&type=

「のびのびプレイデイ」三年間の取り組み

飯泉祐美子・木場有紀・富岡麻由子（教育人間科学部 幼児保育学科）

キーワード：地域貢献、子育て支援、保育者養成

I. はじめに

「のびのびプレイデイ」は、教育人間科学部幼児保育学科が実施する、地域の未就学児と保護者を対象とする子育て支援活動である。足立区と連携し、2016年度から毎年秋に開催している。（後援（2016年度）・共催（2017、2018年度））。学科教員の専門性と大学設備を活かし地域貢献の一端を担うこと、同時に保育者養成課程である本学科学生の乳幼児・保護者理解を深め保育実践力を高めることを目的としている。

この企画は学科長より、幼児保育学科として地域貢献活動に取り組むことが学科会議で提案されたことが検討のきっかけとなり、各教員やグループが活動案を提出するコンペ形式で実施内容を決定した。そして、この活動は、1年生後期に開講される「保育教職セミナーⅡ」の主活動として位置付けられた。

本稿では、これまで3回に渡り実施されたのびのびプレイデイの概要を報告し、取り組みの意義と今後の課題について考察する。

II. 2016年度

1. 目的

(1) 幼児及び保護者にとって、秋の心地よい気候の中、のびのびと遊ぶ楽しさを感じることで、家庭、幼稚園または保育園とは異なる場での活動とともに参加することで親子の絆を感じることで、また、お互いに新たな一面を発見し、子育て情報共有の機会になることを目指す。(2) 学生にとって、①企画運営能力の育成、②大学での学習内容を実践に移す、③幼児が楽しめる遊びの場を考え幼児に提供することで、幼児期の育ちを感じ取ったり、幼児の経験内容を知ったりする、④実践経験により大学での学習意欲を向上させる機会となる。この2つを目的とした。これらを踏まえ、教員の専門性を活かし安全第一で、かつ、子どもが自分で作る体験が可能な内容や、再現して遊べる内容を心がけた。

2. 当日までの準備

(1) 学科内での準備

幼児保育学科1年生全89名、学科教員13名の合計102名によって準備・実施した。学生は遊びブースの運営と係活動、教員は遊びブースと係の監督を行った。

① 遊びのブース

のびのびプレイデイのメイン活動となる遊びブース設営のための準備は、学科1年生後期に開講される「保育教職セミナーⅡ」の授業内で行った。2ないし3教員の助言ゼミでグループを作り、教員のアドバイスのもとで子どもや親子が楽しめる活動を計画・準備した。遊びブースの内容は、かわりオセロ、ボウリング、ボール入れ、作って遊ぼう（ストロートンボ・万華鏡・スライム）、さかなつり、アクセサリ作りとした。

② 係活動

イベント運営のため、各ゼミから受付、案内、休憩・救護、駐輪場案内、おみやげ、廃棄物などの係を選出した。教員の指導のもと学生が準備を進めた。広報・渉外係の学生は引率の教員とともに、10月16日（日）に足立区役所で開催されたふれあいキッズデーを見学し、会場の設営・運営（進路を養生テープで示す、ベビーカー預かりの方法など）や遊びブースでの子どもとの接し方について学び、各ゼミに持ち帰った。

(2) 足立区との連携・広報

足立区との打ち合わせを随時行った。広報活動は、学科でチラシを作成し（図1）、区内の保育園、幼稚園、住区センター等で配布した。また大学HPやFacebookに情報を掲載した。

3. 前日と当日の概要

前日の11月18日（金）の4、5限に準備を実施した。諸注意等の確認を行い、7号館5階アリーナで会場設営を行った。そして11月19日（土）の10:00～11:30にのびのびプレイデイを開催した。対象は2歳以上の未就学児と保護者とし、定められた期日までにメールでの申し込みによる事前登録制とした。23組42人の応募があったが、当日は雨天の影響か15組33人（子ども18人、大人15人）の来場であった。

プレイデイ当日、係の学生は遊びブースを離れて係活動を行うこととし、前半・後半で入れ替わり制を取った（45分で交代）。それぞれの係に担当教員が入り指導を行った。

4. 課題

事前登録制が煩雑に感じられたのか参加者数が少なかった。そのため次年度は事前登録制を廃止することを検討することになった。また、参加者数を増加させるため、次年度は時間的余裕を持った開催周知ができる広報活動を検討することとなった。

学生指導については、遊びブースを離れての係活動が負担となり、また遊びブース内での学びを阻害してしまうため、次年度は係り専門の2年生を動員することが検討された。

さらに、子育て支援の意味合いから、より来場する保護者に役に立つ情報を提供し、教員とのコミュニケーションが図れる形を模索することとなった。



図1. 2016年度のチラシ

Ⅲ. 2017 年度

1. 目的と前年度からの変更点

2017 年度に実施した 2 度目ののびのびプレイデイでは、(1) 地域の保護者と乳幼児への遊びの機会の提供、(2) 大学生との交流の場の提供、(3) 保護者の生涯学習(子育てに関する学び)の機会の提供の 3 つが目的とされた。特に、前掲(3)の目的については足立区からの要望もあったため、学科の教員の専門性を活かし、参加した保護者が子育ての情報やヒントを得られる工夫が求められた。したがって、乳幼児期の特性や遊びについての「保護者の学びパネル」を作成し展示することとなった。

また、より多くの人の気軽な参加を可能にするために事前申し込みでなく、当日受付とし、前年の参加者や足立区から、開催時間を長くする要望がなされたため、開催時間を延長し 2 時間半とした。対象は前年度と変わらず 2 歳以上の未就学児と保護者とした。

運営方法の変更点としては、前年度までは 1 年生が遊びブースと係活動の両方を担当していたが、2017 年度はボランティアの 2 年生が係活動の一部を担い、1 年生は遊びブースの計画と運営をメインとし、一部の学生のみ遊びブースと係活動の両方に従事することとした。

遊びブースには、新たに新聞紙プール、おはなし、カプラを加え、ブースを編成した。家庭での子どもの遊びの参考になることを重視するとともに、家庭では難しいダイナミックな遊び、家庭ではあまり扱わない素材を利用する遊びを取り入れることに重点を置いた。

2. 当日までの準備

(1) 学科内での準備

幼児保育学科 1 年生全 79 名、幼児保育学科 2 年生ボランティア 11 名の計 90 名、そして学科教員 12 名の合計 102 名によって準備・実施した。1 年生は遊びブースの運営と係活動、2 年生は係活動、教員は遊びブースと係の監督を行った。

① 遊びのブース

のびのびプレイデイのメイン活動となる遊びブース設営のための準備は、学科 1 年生後期に開講される「保育教職セミナーⅡ」の授業内で行った。1 ないし 2 の助言ゼミでグループを作り、教員のアドバイスのもとで子どもや親子が楽しめる活動を計画・準備した。遊びブースは、かわりオセロ、魚釣り、カプラ、おはなし、スライムづくり、アクセサリーづくり、新聞紙プール、ボウリング・ボール入れとした。

② 係活動

イベント運営のため、受付、会場案内、休憩スペース設営、掲示物・配布物作成等の係を組織し、教員の指導のもと学生が準備を進めた。

③ 学びパネル

教員が、各遊びブースの遊びの意義やそれに関連する乳幼児期の特性、家庭でできる遊びの取り入れ方等を文章で簡潔に記した A2 サイズのパネルを作成した。

(2) 足立区との連携・広報

足立区との打ち合わせを随時行い、近隣地域への広報の方法、受付運営、混雑時の対応、アンケート作成等の検討を行った。結果、受付、混雑時の待機場所(カフェテリア)内での対応については青少年課職員に参加してもらい対応することとなった。広報活動は、区内の保育園、幼稚園、住区センター等でのチラシの配布、区報掲載、区長 HP での PR などが行われた。

3. 前日と当日の概要

前日の 12 月 8 日(金)の 4, 5 限時に当日の全体の動きの確認や諸注意の伝達を行い、7 号館 5 階アリーナで会場設営を行った。12 月 9 日(土)、13:30~16:00 にのびのびプレイデイが開催された。181 組 484 人(子ども 249 人、大人 235 人)が来場した。2 歳 36 人、3 歳 51 人 4 歳 38 人、5 歳 32 人、6 歳 30 人、その他(兄弟姉妹などの対象外の年齢の子ども) 26 人であった。各遊びブースではたくさんの親子が遊びを楽しみ、学生との交流がなされた。学生との学生はいきいきとした表情で、子どもの工作を手伝ったりし、子どもを明るく励ます様子が随所で見られた。

4. 課題

課題としては以下が挙げられた。まず、予想を大きく上回る来場者数で、会場への入場制限を行う必要があった。待機所となったカフェテリアではパルーンアートの材料や絵本等を準備していたが、待機時間により楽しめる環境を作ることが必要だと思われた。また、会場内の休憩スペースには多くの人が集まり、リラクセスして話をしたり子どもの遊ぶ様子を見守る保護者が多く見られた。しかし教員や学生の配置が少なく、臨時に教員が対応していた。よって今後は休憩スペースに教員や学生を配置する必要があると考えられた。

今後は学生にとってより多くの保護者や子どもとの交流の時間を持つ方がよいと考えられ、次回は係活動のあり方を検討する必要も出てきた。

Ⅳ. 2018 年度

1. 目的と前年度からの変更点

3 年目も 2 年目の目標を踏襲し、(1) 地域の保護者と乳幼児への遊びの機会を提供する、(2) 大学生との交流の場を提供する、(3) 保護者の生涯学習(子育てに関する学び)の機会を提供するという目的のもとで実施された。これまでどおり、身近な素材を使って親子の遊びの場を提供すること、学生主体で準備を進めることを重視した。ただ前年度より、遊び内容をより安全なものにすること、多くの来場者を想定し休憩スペースや入場制限中の待機所を活用すること、来場者に対する育児関連の情報提供を充実させること、係活動を 2, 3 年生のみで行い 1 年生は遊びブース活動に専念できるようにすることを目指し、計画と準備を進めた。前年同様当日受付とし、対象は前年度と変わらず 2 歳以上の未就学児と保護者とした。

遊びブースは一部の変更はあったが、大きな変更ではなかった。

2. 当日までの準備

(1) 学科内での準備

幼児保育学科 1 年生全 115 名及び幼児保育学科 2 年生ボランティア 31 名、3 年生ボランティア 9 名の計 155 名、そして学科教員 14 名の合計 169 名によって運営された。1 年生は遊びブースの運営を、2, 3 年生は係活動を、教員は遊びブースの指導及び係の指導を行った。

① 遊びのブース

遊びブース設営の準備はこれまでどおり学科 1 年生後期に開講する「保育教職セミナーⅡ」の授業内で行った。(図 4) 遊びブースのねらいと内容は表 1 に示す通りである。

表 1. 2018 年度の遊びブースのねらいと内容

遊びブース	ねらいと内容
ひっくり返しゲーム(かわりオセロ)	カードの裏表に異なる絵や色をつけ、お互いに決められた絵や色が表になるようにひっくり返し続け、その数を競うゲーム。
ボウリング・ボール入れ	段ボール箱やかさを使い、その中にボールを投げ入れる遊びと、飾り付けをしたペットボトルをボウリングのように倒す遊び。
ボールプール	大きな柵をつくり、新聞紙をちぎったものをたくさん入れプールのようにする。感触を楽しみながら身体を動かす遊び。
アクセサリ作り	紙粘土、ストロー、木の枝、毛糸など様々な素材を使って紐を通せるパーツを作り、子どもがパーツを選んでネックレスを作る遊び。
魚つり	折り紙や手書きの魚を作り、マグネットとクリップの釣竿で釣りをする遊び。
折り紙	遊べる折り紙、飾る折り紙を製作する遊び。
カブラ	3000 ピースのカブラ(積み木)を用いてさまざまなものを作ったり崩したりする遊び。
工作(動物の帽子)	大きな和紙で親子で一緒に帽子を折り、出来上がった帽子をかぶり、動物に変身する遊び。
工作(びっくり箱)	輪ゴムを仕掛けに使ったびっくり箱を製作する遊び。

② 係活動

前年度同様、イベント運営のため、受付、会場案内、休憩スペース設営、掲示物・配布物作成等の係を組織し、教員の指導のもと学生が準備を進めた。(表 2)

表 2. 2018 年度の係活動の内容

係	内容
駐輪場	駐輪場の準備・案内、ベビーカーの管理
記録	学生の発表のための写真、活動記録
受付	来場者の対応
会場整備	会場内のごみ箱の設置、お弁当の配布、お弁当の回収
会場案内誘導	館内、会場の案内、会場内の表示物の作成
休憩スペース・保健	休憩スペースの準備・管理、会場の見回り、授乳室の設営。
受付	来場者の受付

③ 学びパネル

教員が、各遊びブースの遊びの意義やそれに関連する乳幼児期の特性、家庭でできる遊びの取り入れ方等を文章で簡潔に記した A2 サイズのパネルを作成した。また、前年度では資料を配布しなかったが、子どもの様子を見守りながら保護者が会場内でパネルに目を通すことが難しいことが前年度にわかったため 2018 年度は資料を印刷し配布するための準備を進めた。

(2) 足立区との連携・広報

足立区との打ち合わせを随時行い、近隣地域への広報の方法、受付運営、混雑時の対応、アンケート作成等の検討を行った。特に混雑時

の待機所内の環境設定、制作を内容とする遊びブース用の整理券の配布等について綿密に打ち合わせと準備を行った。広報活動は、区内の保育園、幼稚園、住区センター等でのチラシの配布(図 2)、区報掲載、区長 HP での PR などが行われた。



図 2. 2018 年度チラシ

3. 前日と当日の概要

前日 11 月 23 日(金)の 5 限目を直前準備の時間として 7 号館 5 階アリーナで会場設営(図 3)(図 5)を行った。当日 11 月 24 日(土) 13:00~15:30、のびのびプレイデイが開催された。(図 6)(図 7)当日は 151 組 410 人(子ども 212 人、大人 198 人)が来場した。参加した子どもの年齢は 2 歳 41 人、3 歳 40 人、4 歳 42 人、5 歳 37 人、6 歳 28 人、その他(兄弟姉妹などの対象外の年齢の子ども) 24 人であった。今回で 3 回目という来場者親子が「楽しみ」という様子で入場されて行ったのが印象的であった。

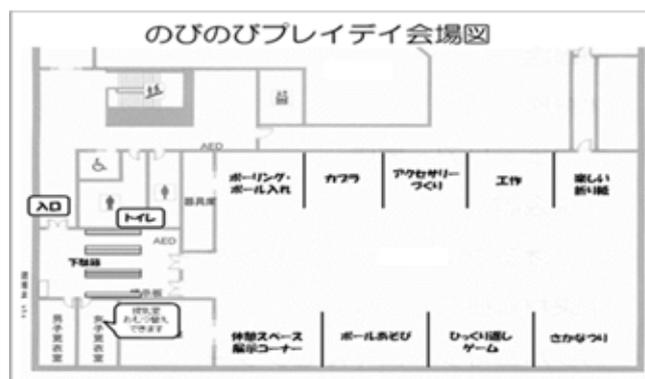


図 3. 2018 年度 会場図

4. 課題

昨年度までの待ち時間の解消として今年度より「アクセサリ」、「工作」に整理券を導入した。この整理券の配布により混雑や長時間待たせることが避けられたことは大変良かったが、配布場所をカフェテリアの入口としたことは来場者にとってはわかりにくかったようであった。また、入場制限がかかった際の待機場所をカフェテリア内とした。足立区より風船や折り紙絵本の提供があったが、この場所を会場と勘違いされた親子がおり、次年度はもう少しわかりやすい表示が必要であると思われた。

昨年度の課題であった地域と学生との交流は休憩スペースに学生

を配置したことなどにより改善がはかられた。

V. アンケート結果と学生の振り返りにみる評価と今後の課題

(1) 来場者の評価からみる意義と課題

「のびのびプレイデイ」では来場者へのアンケート調査を実施している。「遊びブースの満足度」、「学生との交流の満足度」、「展示内容や配布物の満足度」、「イベント全体の満足度」について、「とても満足」、「満足」、「ふつう」で回答を求めた。2017年度は、「とても満足」「満足」との回答を合わせると、「遊びブースの満足度」は94%、「学生との交流の満足度」は88%、「展示内容や配布物の満足度」は85%、「イベント全体の満足度」は97%であった。2018年度の結果も、前年度同様に「とても満足」・「満足」との回答が多く、この2つを合わせると「遊びブースの満足度」は96%、「学生との交流の満足度」は93%、「展示内容や配布物の満足度」は85%、「イベント全体の満足度」は94%であった。

自由記述欄には「またあったら行きたいです」、「今回は3回目です」、「子どもがとても楽しめました」、「学生さんの感じがとてもよかった」、「親にも参考になった」、「運営がスムーズでよかった」など、保育者を目指す学生にとって励みになるような内容のものが多数あり、「のびのびプレイデイ」の企画実施が地域の子育て家庭への支援のひとつとなり、同時に学生と交流の機会になっていると思われるものであった。反面、「開催時間が短い」、「体を動かすイベントがあると嬉しい」、「自転車での来校を検討してほしい」、「整理券のシステムをわかりやすくしてほしい」、「見本を置いてほしい」など、次年度以降に検討すべき課題も要望指摘事項として記述されていた。

(2) 学生の振り返り

大半の1年生はイベントとして多くの子どもに関わることは初めての経験であったようである。交流した際に目にした子どもの様子や親子の関わりから感じたことを振り返り、自分たちが企画したことで達成感や成就感があったと思われ、次年度係ボランティアでぜひ参加したいという学生の感想がきこえてきた。

反面、もっと保護者とのコミュニケーションの取り方や子どもの発達について知りたかったとの声もあり、次年度に向け、企画準備の段階でもっと意識していかなければならない課題でもあることも分かった。

(3) 教員の振り返り

多くの学生が意欲的に取り組み、積極的に役割を果たそうとする姿が見られたり、事後の学生のレポートからも新たな気づきや学びがあったことが伺えた。しかし、一部、子どもや保護者と対峙するときの座り方や話し方などについての課題も指摘された。

VI. これから

「のびのびプレイデイ」が「保育者養成の学びの場」として、また、「子育て支援の場として」地域に貢献し、地域に根付く活動として、その歴史を刻んでいけるような企画・運営を展開したい。



図4. 準備風景（保育教職セミナーⅡ）



図5. 前日準備



図6. イベント風景（魚釣り）



図7. イベント全景

飼育体験活動による生活科授業支援の実践と成果

本多瑞希（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）・花園誠（教育人間科学部 こども学科）

キーワード：生活科、飼育体験、日誌

1. はじめに

生活科は、小学校1・2年生の教科で、具体的な活動を通じた体験的な学びが求められている。その内容は三階層に分けられ、第二階層の「身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容」群に内容(7)「動植物の飼育・栽培」が配置されている。動物を教材としたとき、どのようにして充実した飼育体験活動とするかが、重要な課題となる。著者らは、アニマルサイエンス学科の専門性を活かし、2005年より地域の小学校で飼育体験活動の支援を展開してきた。「必要な時に」・「必要な動物数」を、飼育指導ができる学生とともに派遣する支援体制が好評で、毎年の恒例活動となっている。

2. 本報告の背景

動物介在教育（Animal Assisted Education）とは、教育の質や学習意欲の向上を目的として、動物を教材あるいは副教材として活用する教育手法である。著者らは、「学校飼育動物支援」や「ふれあい動物教室」等と標榜する活動を実践してきた。

木村（2013）は小学校での生活授業としての飼育体験におけるお世話の仕事量を増やすことによる教育効果について検証した。そして、仕事量を増やしつつ教育効果を高めるには、お世話を全く児童の自発性に委ねてしまうのではなく、その都度の目標提示のような支援が必要となるらしいことを示唆した。そこで本研究ではお世話日誌を児童一人に一冊与え、その記入を課題として課すことによる教育効果の検証を目的とした。

3. 材料と方法

1) 動物

大学で飼育しているモルモット雌3匹およびハムスター雌3匹を使用した。

2) 実践場所

小学校内の普段の授業では使用しない教室を飼育体験の部屋とした。

3) 対象児童及び活動内容

お世話の体験活動をしたのは、小学2年生3クラス計72名である。1班を3～5人に分け、各クラスとも5班編成の全体で15班とした。お世話をするのは月曜日から金曜日までの平日の5日間のみとし、土日は、動物を大学に引き取った。体験期間は2週間としたので、この体験期間中に、モルモットとハムスターのそれぞれについて毎週一回お世話及び観察ができるようにローテーションを組んだ。

4) 活動の記録方法

飼育体験の部屋には定点カメラを2台設置し、飼育体験中の児童の行動を記録した。その録画画像は、後日の解析に用いた。そして児童には、一人一冊「お世話日誌」を渡し、お世話・観察ごとに絵日記を

記入してもらうとともに冊子の中に設けたお世話および動物に関するクイズに回答してもらった。

5) 解析方法

録画画像からは班ごとのお世話時間の変化および児童一人ごとのお世話時間内のふれあい時間の変化を記録した。

絵日記の文章については、記述内容から「①行動的発見」、「②見た目の発見」、「③ふれあい発見」の3つの気づきに分類した。「触ったらふわふわしていました。」のような記述は、「③ふれあい発見」と評価した(図1)。

絵日記の絵については、描画内容から「①色があるかないか」、「②リアルか非リアルか」、「③環境を書いているか」の3つに着目した。この3つのそれぞれについて3点・2点・1点と3段階の評価点をつけた。「図2」の絵の場合は、リアルに彩色されているので3点、体の細部は描かれているがややリアルさに欠けているので2点、そして環境については飼育用品などが具体的に描かれているため3点の、合計8点と評価される。この文章と絵の気づきの数の合計点数を日誌の合計点とした。

クイズの回答については文章のみの正答・絵のみの正答をそれぞれ1点とし、両方での正答を2点とし4日間で8点満点として点数化した(図3)。



図1. 児童の日誌a



図2. 児童の日誌b

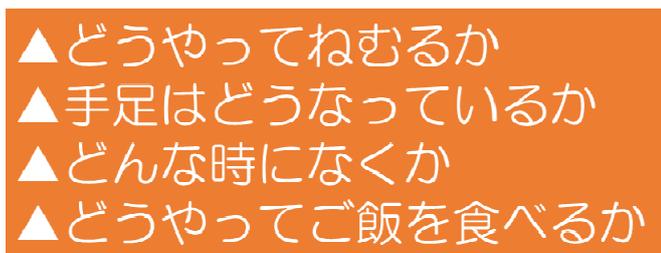


図3. 観察日記のクイズ項目

4. 結果

1) お世話時間の変化について

4日間のお世話にかかった時間を班ごとに計測。4日間のお世話所用時間の推移を比較したところ、47%(3クラス15班中7班)はお世話の時間が減少、53%(3クラス15班中8班)はお世話の時間が増加したという結果だった(図4)。

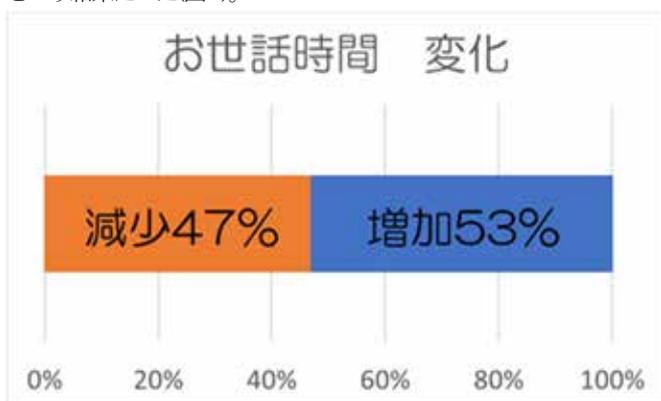


図4. お世話時間増減の全班的割合

2) ふれあい時間の変化について

お世話の日数の経過につれて、お世話中のふれあい時間が増えていると思われた為、お世話時間全体の内のふれあい時間の割合を録画面像から児童ごとに比較した。その結果、ふれあい時間が増加した児童は65%、減少した児童は35%という結果であった(図5)。



図5. お世話時間内のふれあい時間の増減割合

3) 日記の総合点比較

ふれあい時間の増減は日記の記述内容に影響するかを比較した。日記の総合点は、お世話日記の文章・絵・観察日記の文章・絵の4つの合計点とした。この総合点の平均点をふれあい時間の増減別に比較した結果、ふれあい時間が増加した児童の方が平均点は高い結果であった(表1)。

表1. ふれあい時間の増減別の日記総合点の平均

ふれあい時間増減	平均点
ふれあい時間増加(n=30)	37.6点
ふれあい時間減少(n=15)	33.2点

4) 観察日記クイズ平均点の比較

クイズの正答率は文章のみの正答・絵のみの正答を1点とし、両方での正答を2点とし、4日間で8点満点として点数化した。ふれあい時間の増減別に比較した結果、ふれあい時間が増加した児童の方が平均点は高い結果であった(表2)。

表2. ふれあい時間の増減別のクイズ平均点

ふれあい時間増減	平均点
ふれあい時間増加(n=29)	2.4点
ふれあい時間減少(n=13)	1.9点

5) 日記内容の変化

お世話日記の文章の記述内容を比較すると、ふれあい時間減少群に比べ、ふれあい時間増加群にお世話時の気づきが増加した児童が多かった(図6)。

お世話日記の絵の描画内容を比較すると、ふれあい時間増加群に比べ、ふれあい時間減少群に絵の評価点が高くなる児童が多かった(図7)。

6) 文章の気づきの種類について

気づきの種類については、行動的発見が一番多いという結果であった。そして気づきはお世話中より観察時間の方に多い傾向であった。また、ふれあい時間が増加した児童の方が気づきの数は多い結果であった(図8)。



図6. ふれあい時間増減別 文章のうちの気づきの量の変化について



図7. ふれあい時間の増減別 絵の点数の変化

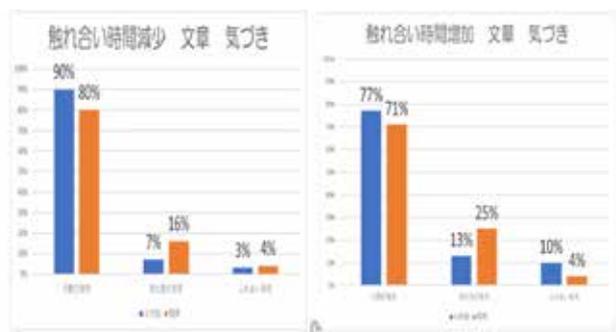


図8. 文章の気づきの種類について

5. 考察

ふれあい時間が増加した児童は、日誌の総合点の平均点・クイズ正答率の平均点のどちらもふれあい時間が減少した児童より高い結果であった。豊かな記述や表現は豊かな体験に基づいていると解釈される。よってふれあい時間が増加した児童の方が質・量ともに内容が豊かな学習をしていたと考えたい。

以上をまとめると、生活科で飼育体験活動をしたとき、動物との自発的なふれあい活動が許されるのであれば、評価するポイントとしては「自発的なふれあい活動の有無」および「その発現頻度」と「持続時間の長さ」に着目すると良いと結論する。

6. 今後の展望

生活科で飼育体験を導入したとき、どのようにして自発的なふれあい時間を確保するかが重要である。よって、本研究では日誌記入を課題として課したが、それはむしろふれあい時間確保の阻害要因となるので、必要最小限にとどめるか、日誌の記載に関しても児童の自発性に任せたほうがよいと思われる。そして、飼育体験を目的とするのではなく、動物とふれあうための手段として捉えた方がよいのではないだろうか。この点は、今後の検討課題としたい。

謝辞

本研究を行うにあたり、協力して下さった、上野原小学校の先生方と児童の皆様、そして調査にご協力して下さったAAEメンバーの皆様に心からの感謝を申し上げます。どうもありがとうございました。

参考文献

- 1) 文部科学省(2008)。「小学校学習指導要領解説 生活編」.大日本印刷
- 2) 文部科学省.学習指導要領 「生きる力」
www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/youryou/syo/sei.htm
- 3) 木村帆奈美(2013)。「動物介在教育と学校動物飼育～飼育体験(短期間)の効果について～」.帝京科学大アニマルサイエンス学科卒業論文
- 4) 田中理絵,立川奏枝(2009)。「小学校における動物飼育の状況と教師の負担感の研究」.研究論業 第3部 芸術・体育・教育・心理59,pp181-190.
- 5) 立川奏枝,田中理絵(2009)。「小学校における動物飼育といのちの教育」.研究論業 第3部 芸術・体育・教育・心理59,pp191-205.
- 6) 常田寛「学習指導書 朱書編 せいかつ【上】 みんな だいすき」.光村図書出版株式会社

- 7) 常田寛「学習指導書 研究編 せいかつ【上】 みんな だいすき」.光村図書出版株式会社
- 8) 常田寛(2015)。「学習指導書 せいかつ カードブック」.光村図書出版株式会社
- 9) 小林一光「せいかつ 上 みんななかよし 教師用指導書 授業編」.教育出版株式会社
- 10) 小林一光「せいかつ 上 みんななかよし 教師用指導書 研究編」.教育出版株式会社
- 11) 小林一光「せいかつ 上 みんななかよし 教師用指導書 地域事例編」.教育出版株式会社
- 12) 佐々木秀樹「わたしと せいかつ 下 ふれあい だいすき」.日本文教出版株式会社

初等理科教育におけるコクワガタ (*Dorcus rectus*) の教材化研究

佐々木琴音 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)・花園誠 (教育人間科学部 こども学科)

キーワード：理科、動物介在教育、コクワガタ、小学校、教材化研究

1. 序論

昆虫や節足動物を使った動物介在教育 (Animal Assisted Education; 以下 AAE と略) としては、先行研究ではカイコガとその幼虫を使ったふれあい、オオゲジを使ったふれあいが実践されている。本研究を行うに当たり、AAE にコクワガタを教材として選んだ理由は、コクワガタは本大学の東京西キャンパスのある上野原市内での採集が比較的容易であり、AAE に参加する児童の人数分の生体を提供できる見込みがあったからである。また、小さなクワガタムシであるため、初めてクワガタムシを見る児童でもあまり抵抗なく見る事ができるのではないかと考えたこともその理由である。

2. 目的

日常生活の中で見る機会の少ない生き物を間近で見てもらうことによる教育効果の検証と、コクワガタ教材化の検討を本研究の目的とした。

3. 材料と方法

コクワガタとは、日本全国に分布するクワガタムシで、活動期間は5～11月頃と、他のクワガタムシよりも生存期間は長い (図1)。



図1. コクワガタのオス

本研究は、足立区内の小学校在自然体験目的で上野原に来る機会を活用して実施した。対外的には「大学遠足」と標榜している体験活動である。大学遠足では、足立区の小学生を山梨県秋山地区の廃校「旧桜井小学校」へと招く。そして、本大学の動物介在教育研究部 (AAE) の学生が主となり自然体験や動物とのふれあい体験を提供する。本研究では、この活動内でコクワガタブースを設置した。その教育効果を判定するため、参加児童には、コクワガタに関するアンケートへの回答をお願いした。アンケートは事前と事後各 83 枚ずつ、計 166 枚を

回収した。

コクワガタは、細菌培養などに用いられる容器「シャーレ」の中に、コクワガタを各容器につき 1 匹ずつ入れて展示した。その際にコクワガタブースの机の上には鏡を置き、その上にガラス板を重ねて乗せることで、シャーレを持ち上げなくてもコクワガタの腹側まで観察することが出来るような工夫を取り入れた (図2)。

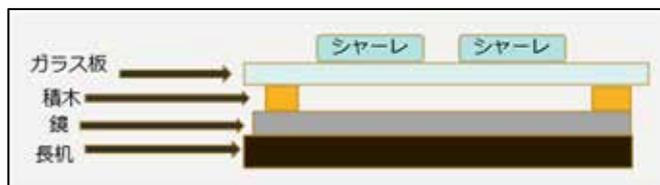


図2. 横から見たコクワガタ展示机

コクワガタは、児童から見て縦1列にオス・メスと並べてシャーレを配置し、シャーレの隣には児童の人数分の虫眼鏡を配置した (図3)。

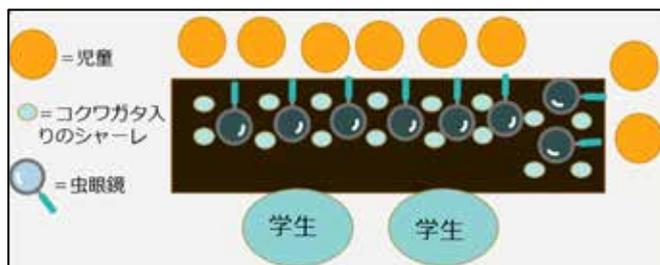


図3. 上から見たコクワガタ展示机

これまでの AAE ふれあい活動の方法として、1 匹の動物を数人グループでふれあいするという形式のものが一般的である。しかし、本実践では、20 匹以上のコクワガタを採集したことで、児童 8 人 1 班のグループでも、児童 1 人につき 1 ペアでの観察ができるようにした。児童は自分専用の 1 ペアが用意されていることで、自分の見たいように、自由に観察できることが可能になったのである。

ブース内での解説や観察は、はじめに児童に昆虫の名前が「コクワガタ」であることを伝えた後、その生態を紹介。次にコクワガタに関するクイズを 3 問出題し、クイズを終えると観察の時間とした。観察は、雌雄の見分け方や脚の本数に注目するよう声をかけながら行い、ブースの制限時間が終わるまでは自由に観察してもらった。

アンケートでは、「クワガタムシを知っているか」、「何で知ったか」、「どこで知ったか」の 3 問と、次にクワガタムシに関するクイズ問題として、「クワガタムシのエサについて」、「雌雄の見分け方について」、「昼間いる場所について」の 3 問を出題した。そして線上表記法にてクワガタムシのイメージを記入してもらい、最後にアンケート用紙上に設けた枠内に、自分の知っているクワガタムシを絵に表現してもらった書式とした。

活動の後に回答してもらう事後アンケートでは上述の質問のうち「クワガタムシを知っているか」等の前半3問は削除し、後半のクイズ問題3問、線上表記法によりクワガタムシのイメージを問う設問、そして、クワガタムシを絵に表現してもらう設問を残した。

線上表記法でのイメージについての質問は、回答項目は8問出題した。内容は、好きー嫌い、触れるー触れない、かっこいいーかっこよくない、かわいーかわしくない、きれいーきたない、こわいーこわくない、美しいー美しくない、つよいーよわい、とした(図4)。

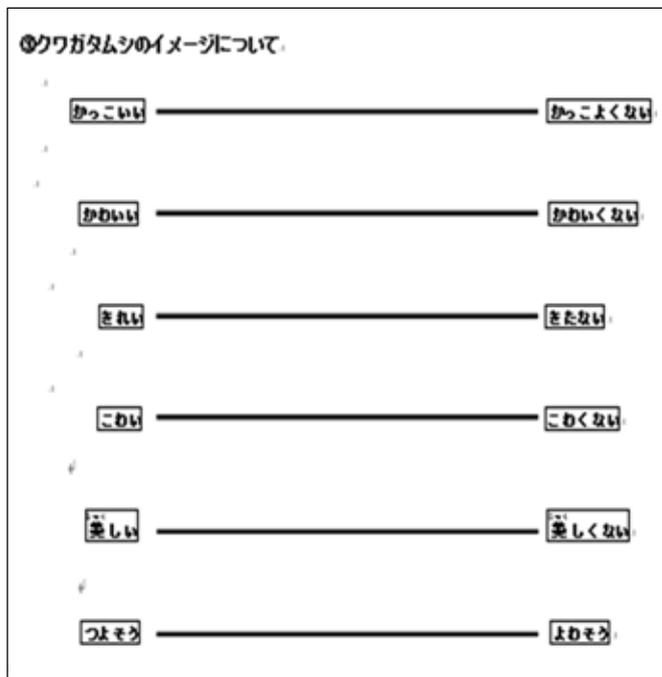


図4. 線上表記法の項目より一部抜粋

線上表記法とは、対になる言葉が両端に書かれた線の上に、自分のイメージがどちら寄りなのかを表現してもらう方法である。図4の「こわいーこわくない」を例に挙げ、回答例を下図に表わした(図5)。



図5. 線上表記法の回答例

図5は、左端にこわい、右端にこわくないと書かれており、回答である縦線は右端に寄っていることから、この場合は「こわくない」というイメージが強い、と判断される。左橋から何cmなのかを計測し、その数値をそのまま得点として集計する。

4. 結果

アンケート回答に協力頂いた児童の参加人数は83名であり、うち男子46名、女子37名であった。

「クワガタムシを知っているか」については83名中81名が知っていると回答し、ほぼ全ての児童がクワガタムシを知っていた(図6)。

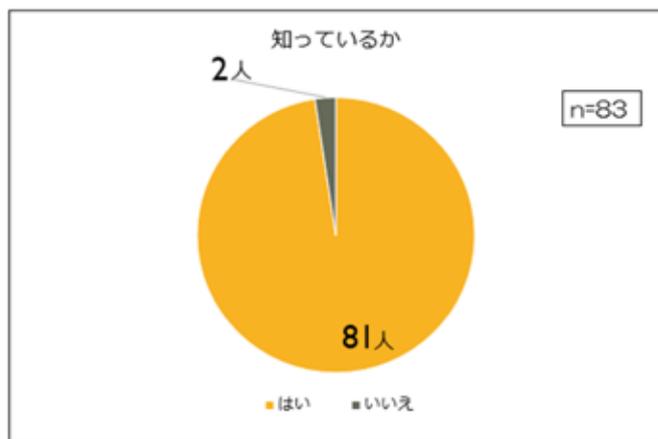


図6. クワガタムシを知っているか

「クワガタムシを何で知ったか」については、「生きたクワガタムシ」を見て知ったと回答した児童が最も多く27%、次いで図鑑25%、テレビ23%となった(図7)。

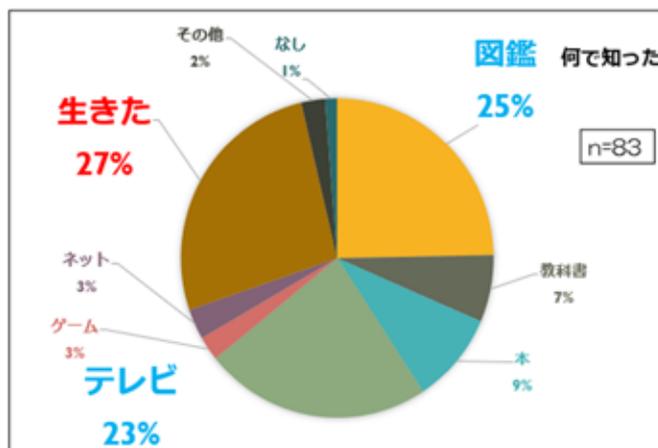


図7. クワガタムシを何で知ったか

クワガタムシを見たことがある児童のうち「クワガタムシをどこで見たのか」については、「実物を見たことがない」児童が最も多く27%、次いで家での飼育、自然の中がともに19%であった(図8)。

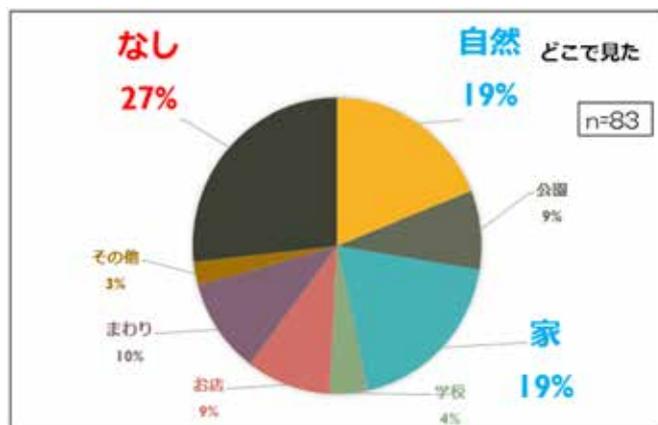


図8. クワガタムシをどこで見たのか

クワガタムシのエサを尋ねる問題では「クワガタムシは、何を食べてると思いますか?」と出題し、選択肢は「自分よりも小さな虫」「樹液(木の幹から出る液体のこと)」「葉っぱ」の三択とした。正解は「樹液」であるが、ほとんどの児童が事前アンケートの時点で既に正解を知っており、事後の正解率は変化しなかった(図9)。

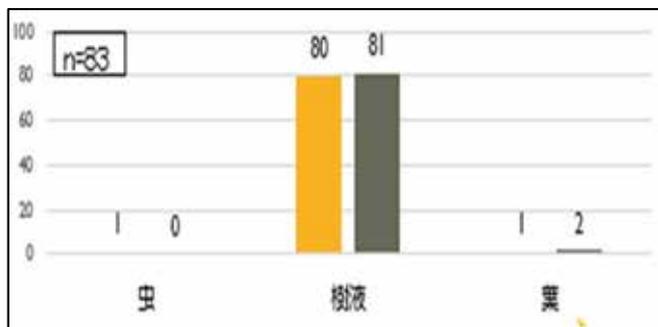


図9. クワガタムシは何を食べてると思いますか

雌雄の見分け方を尋ねる問題は「クワガタムシのオス・メスは、どこが違いますか」と出題。選択肢は「身体の色」「おしりの形」「はさみの大きさ」の三択とした。正解は「はさみの大きさ」である。この問いに関しては、食べ物よりは事前の知識を持たない児童が多く、この問いの正解率は、事後には上昇していた(図10)。

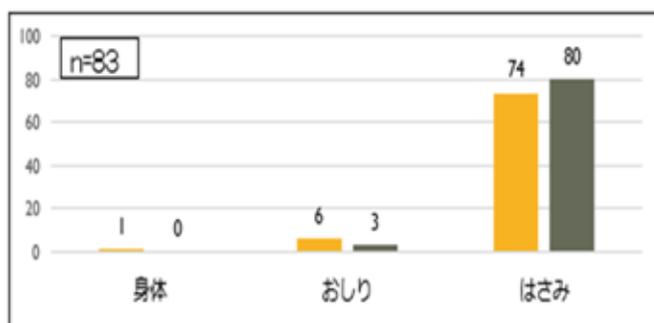


図10. クワガタムシの雌雄はどこが違いますか

昼間いる場所を尋ねる問題では「クワガタムシは夜行性(夜に活動する生き物)の昆虫です。では、昼間はどこにいますか?」と出題した。選択肢は「葉っぱの裏」「木の皮の裏」「石の裏」の三択とした。正解は「木の皮の裏」である。この問いについても事前の知識を持たない児童が多く、雌雄の見分け方と同様に、正解した児童の人数が事後アンケートにて増加した(図11)。

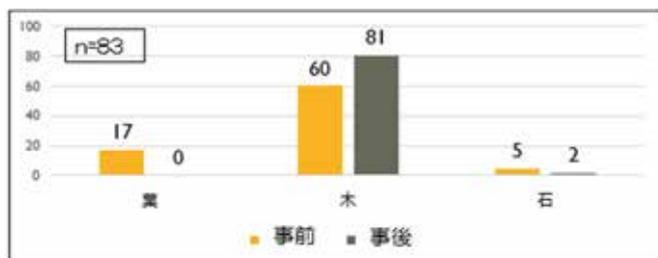


図11. クワガタムシは昼間はどこにいますか

線上表記法でクワガタムシのイメージを回答してもらうアンケートの結果について以下に示す。数値が高いほどポジティブなイメージ

であることを示す。学年全体でみると、全ての項目で上昇と、ポジティブな変化がみとめられた(図12 上段)。男子のみのイメージに限ってみても同様であった(図12 中段)。しかし、女子のみのイメージと限ってみると、「好き」「触れる」「かっこいい」「怖くない」「つよい」の項目のみに上昇が認められる結果であった(図12 下段)。

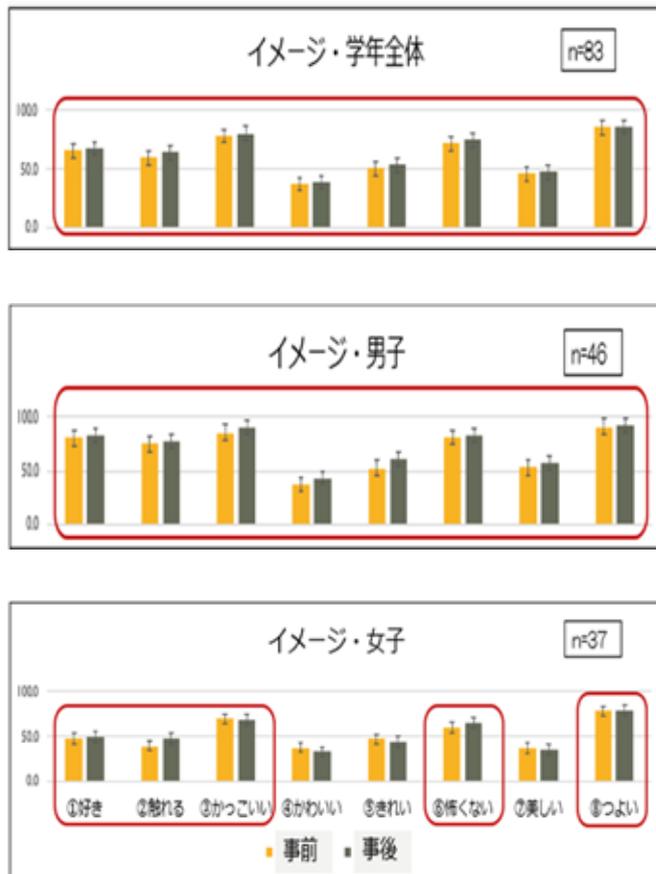


図12. クワガタムシのイメージ変容

図13は、「生きたクワガタムシを見たことがある」と回答した児童のうちの女子のみに注目したイメージ変容の結果である。「怖くない」がのみ有意に上昇していた($p < 0.05$; Wilcoxon の符号付順位和検定)

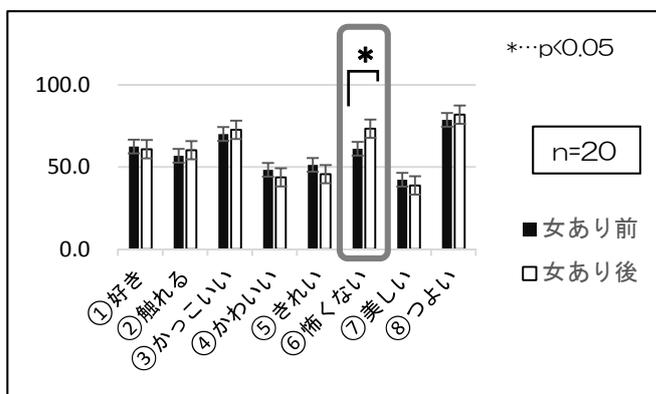


図13. 生きたクワガタムシ見たことがある女子のイメージ変容

しかし一方で、クワガタムシをみたことが「ない」女子の「かっこいい」「きれい」の項目は、有意に下降がみられた(図19)。

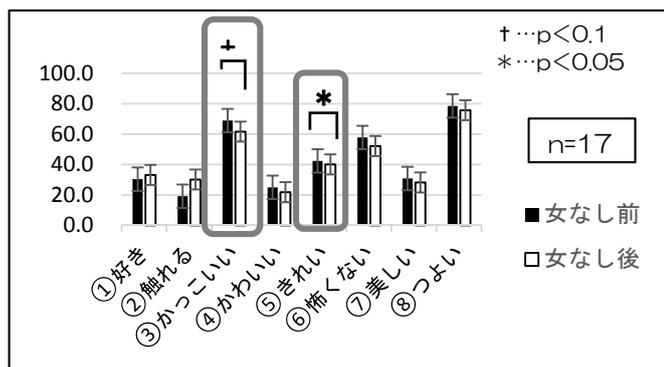


図19. 見たことが「ない」女子のイメージ

続いて、絵の評価についてである。絵は評価するにあたり8個のポイント(缺、脚、爪、羽、目、舌、触角、頭・腹・尻のかき分け)を定め、そのポイントが描けているごとに1点加点とし、8点満点で評価とした。例えば、缺、脚、目、羽が描けている絵は4点、のように採点する。図20は学年全体、図21は見たことが「ない」女子の点数の評価であり、これらはいずれも点数の上昇には有意差がみられた。

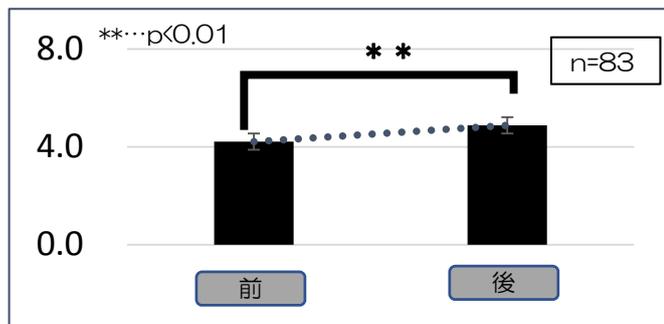


図20. 学年全体の絵の得点

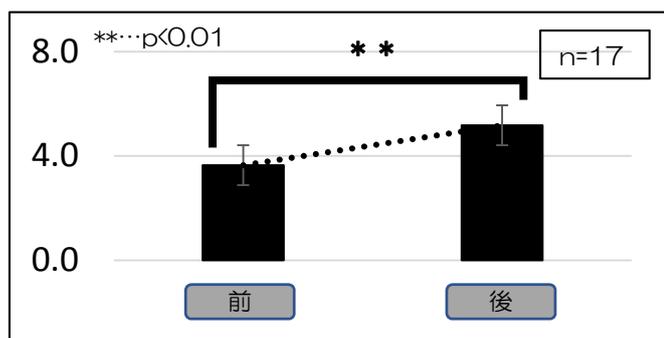


図21. 「ない」女子の絵の得点

V. 考察

クイズに関しては、生きた実物のコクワガタを、1人ずつ雌雄1ペアを目の前にして、クワガタムシを身近に感じられるようにしたことが奏功してクワガタムシへの関心が持てたことから、クワガタムシに関する知識を素直に取り入れることを促したのではないかと。

イメージについては、「こわくない」が上昇した点は、シャーレに入れた状態で安全に観察したことで恐怖感が和らいだのではないかと。しかし一方で「かっこいい」「きれい」が下降した主な要因は、コクワガタは小さなクワガタムシであるということ、色味が地味なクワガタムシであったことなどが挙げられると考える。

シであったことなどが挙げられると考える。

絵の得点が全体及び全ての属性分けで上昇したが、これは、実物のクワガタムシをみることでより特徴を覚えられたため上昇したのではないかと。特に、みたことの「ない」女子が有意に上昇した点は、これまでは想像で描いていたクワガタムシを、観察により確認できたことでより正解に近づいたのではないかと。

よって、コクワガタを使った観察及び教育は、実物をみることによりその生態と特徴を覚えやすくなるよう促す効果がみられたといえるのではないだろうか。

謝辞

本研究を行うに当たりご指導いただきました花園教授、アンケートにご協力いただきました中島根小学校の先生方、児童の皆さん、活動にて協力していただいたAAEの皆様、花園研究室の皆様、また、コクワガタの採集と教材作成に協力いただいた皆様、心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 「コクワガタ-Dorcus rectus」
URL: <http://mushibu.na.coccan.jp/Specimen/ja/kokuwagata.html>
- 2) 高井幹生, 奥山清市, 長島盛大, 井村仁平, 市毛勝義, 佐藤和樹, 中島淳, 横川忠司, 梶真 (2013). 「日本の昆虫1400 (2) トンボ・コウチュウ・ハチ (ポケット図鑑)」. 文一総合出版
- 3) 岡島秀治 (監修) (2004). 「学研わくわく観察図鑑 カブトムシ・クワガタムシ」. 学習研究社 東京
- 4) 海野和男 (2013). 「見わかるポイントがよくわかる フィールドガイド 身近な昆虫図鑑」. 誠文堂新光社 東京
- 5) 今森光彦 (2000). 「ヤマケイポケットガイド (10) 野山の昆虫」. 山と溪谷社 東京
- 6) 新開孝 (2002). 「里山 昆虫ガイドブック」ティビーエス・ブリタニカ 東京
- 7) 田仲義弘, 鈴木言夫 (2009). 「野外観察ハンドブック 校庭の昆虫」全国農村教育協会 東京
- 8) 杉本悟, 森田真樹子, 中川はづき, 棕野純一 (1999). 「完全図解 虫の飼育方全書」東陽出版 東京
- 9) 花園誠 (2016). ダンゴムシ・ワラジムシ類 (Armadilloidea) とチョークを活用した虫類に関する教材化の報告. 帝京科学大学教職指導研究: 帝京科学大学教職センター紀要, 1(1), 217-221.
- 10) 花園誠, 木村龍平, 青木直樹, 榊原健太郎, & 古瀬浩史 (2016). 足立区の小学校4年生を対象とした環境教育の実践と成果: 廢校を拠点とした校外学習支援の報告. 帝京科学大学教職指導研究: 帝京科学大学教職センター紀要, 1(1), 237-244.
- 11) 花園誠, 金子智恵理, 河合樹奈, 蛭田多美慧, 青木直樹, 榊原健太郎, & 古瀬浩史 (2015). 足立区の小学校4年生を対象とした環境教育の実践と成果. 帝京科学大学紀要, 11, 201-213.
- 12) 文部科学省(2008a). 「小学校学習指導要領解説 理科編」. 大日本印刷

児童に対する犬を用いた動物介在教育プログラムの実践とその効果

長田翔太（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）・花園誠（教育人間科学部 こども学科）

キーワード：生活科、動物介在教育、犬、ドッグショー

1. はじめに

本研究の契機は、足立区内のとある小学校より本学の教務課の職員を經由して「いのちの大切さをこどもたちに教える講演をお願いできないか。」と依頼を受けたことから始まる。日ごろからなにかとお世話になっている教務課伝手のお願いである。無下にはできずそのもつめに応じたところ、依頼の内容が「講演」ではなく「ふれあい動物教室を実施してもらえないか」に変貌してしまった。そこで断る選択肢もあったが、当方にも利するようにと思案を巡らし、そもそもの小学校からの依頼は聴かなかつたことにして、当方より「新しいスタイルのふれあい動物教室を試してみたい」と申し出たことにした。「小学校からの依頼を新たに受けた」のではなく、「小学校に新たな依頼を受けてもらった」にそもそもの発端を転じたのである。事態を丸く収めるための方策でもあった。

2. 本研究の背景

本学の企画する「ふれあい動物教室」が始まったばかりのころ、どのようにしてその教育効果を検証するかが、重要な課題であった。親交のあった精神科医からのアドバイスで、活動の前後で同じテーマの絵を描かせ、その前後比較から教育効果を判定することにした。図1、図2はその実例である。このときの教材は「イヌ」で、イヌとのふれあい教室を実施した。絵の変化は歴然としている。イヌのふれあい教室の直前に描かれたイヌは、筆致は縦に細かく極彩色に塗られた上に、イヌは歯をむき出してこちらをにらみ、いまにも噛みつきそうな怖い表情である。ところがイヌとのふれあい教室を終えた直後に描かれたイヌはというと、筆致は水平方向にのびのびと灰色・茶系統の色などにリアルに彩色されているばかりか、イヌの表情は笑顔で、傍らにはこれも笑顔のイヌにふれた手を強調して大きく書かれた男の子が描かれている。動物介在教育の効果がこれほど如実に現れることは、その後もそんなにはない。動物介在教育を始めた当初にこのようないわば「チャンピオンデータ」を手にしたことはまさに奇蹟とってよく、その後の研究の目標が定まった。



図1. ある児童によるふれあい直前のイヌの絵



図2. 図1と同じ児童によるふれあい直後のイヌの絵

動物にふれることが絶大な教育効果を発揮することは、その後の研究からも明らかである。しかし、「動物にふれる」ことが「動物に負担を強いている」との批判もある。そこで本研究では、イふれあいを少なくするが、児童に対する教育効果を補償するため、ドッグショーを取り入れるプログラムについて検討することを目的とした。

3. 材料と方法

1) 実践日・場所

2018年11月9日と11月27日に東京都足立区内の小学校で実施。ふれあい動物教室の実施会場は普通教室の2倍ほどの面積の多目的室である。

2) 参加動物とスタッフ

参加したイヌは、ドッグトレーナー研究部からゴールデン・レトリバー、ウィペット、シェットランド・シープドッグ、ミニチュア・ピンシャー、ミックス犬の5頭、こども動物教室アニマルシップからゴールデン・レトリバー、キャバリア・キング・チャールズ・スパニエル、ミックス犬の3頭である。参加したスタッフは、本学から11名とアニマルシップから3名の合計14名であった。

3) 実践対象の児童

小学校1年生88名(11月27日実施)、2年生80名(11月9日実施)の計168名であった。

4) ふれあい動物教室の内容と調査方法

多目的室に移動する前に、教室で事前指導をするとともに、事前ア

ンケートに回答。そして八つ切りの画用紙に今思うイヌの絵を描いてもらった。その後多目的室に移動し、「ふれあい動物教室」を以下に示す順序で体験してもらった。

①始めの会

児童が多目的室に到着後、横一列に整列してもらって、挨拶とスタッフ紹介。その後、ふれあい動物教室に参加するための必要最低限の約束ごととして「(イヌに)やさしくする」・「しずかにする」・「(スタッフのいうことをきく)」の3つをパネルで提示しながら伝える。その後、イヌとの挨拶の交わり方を、実際のイヌを使いながら実演してみせた。そして以下に示す②～⑤のドッグショーを順に実演してみせた。

②オビディエンス(図3)

まずハンドラー一人とイヌの1ペアで実演してみせた。内容は、脚側行進から始め、常歩、速歩、そして緩歩。最後に指示なし停座で終了である。次いでハンドラーとイヌが2ペア登場。ハンドラー2名が中央に立ち、互いに背を向けて外側へ歩き出し、脚側行進。そして常歩、速歩、緩歩と実演し、犬を左右の壁際に同時に停座で待たせてからそれぞれのハンドラーが反対方向の壁際に離れ、そこから同時に呼び戻しを実演してみせた。イヌは、すぐ傍のハンドラーのところに戻るのではなく、反対側の壁際にいる自分に指示を出したハンドラーのところに戻る。飼い主の言うことを聞くことや忠実性を重視した内容である。

③宝探しゲーム(図4)

小さい穴の開いた空のケースを複数個用意。その中の1つにおやつを入れ、それをイヌに当てさせる。1回目はケース5個で、2回目は10個に増やして実演してみせた。イヌの特徴である嗅覚の鋭さを伝えることを重視した内容である。

④アジリティー(図5)

使用した障害物は、ハードル2つ、トンネル1つ、スラローム1つである。これらを組み合わせ、多目的室内に「コの字型」のコースを作った。そして、ハンドラーの指示とおりに、次々と障害物をクリアするようすを実演してみせた。イヌの身体能力の高さを伝えることを重視した内容である。

⑤ディスク(図6)

1枚のディスクを使ってレトリーブを行うディスクスタンスと、複数枚使って音楽に合わせて様々な投げ方を披露するフリースタイルの2種類を実演した。アジリティー同様、イヌの身体能力の高さを伝えることを重視した内容である。



図4. 宝探しゲーム



図5. アジリティー



図6. ディスク



図3. オビディエンス

⑥イヌとのふれあい

ドッグショーの終了後、クラスを4つのグループに分け、イヌとのふれあいを行った。この時、アレルギーの児童にはあらかじめ教室でマスクと手袋を着用してもらった。ふれあいの時間は7~10分程度、児童に伝える内容は「あいさつの仕方の確認」「犬の名前」「犬種」「温かいということ」「爪の数」と伝える内容を統一した。イヌが怖いなどの理由で、全くイヌに触れない児童に対しては、お皿にイヌのおやつを置いてもらい、距離を置いた位置から「ヨシ」の合図でイヌにおやつを食べさせるという、コマンドでイヌにいうことを聴かせる体験をしてもらった。



図7. ふれあいの様子



図9. アジリティ

4. 結果

1) 絵の変化について

複数の評価者で事前と事後の絵を評定、全員が一致して「変化あり」と判定したのは、1年生88名中56名、2年生全体が80名中55名と、1,2年生共に6割以上の児童が絵に変化が認められた。

変化が認められた絵は、ふれあいの様子を描くというよりは、ドッグショーの様子を書いたものが多かった。



図7. オビディエンス



図8. ディスク

2) アンケート結果: 語群選択について

語群選択では1,2年生ともに共通して、事後にはイヌについてプラスイメージの言葉を選択する児童が増加した。特に選択する児童が事後に増えた言葉は、「あたたかい」・「おせわがしたい」・「やさしい」・「すき」・「つよい」などであった。

またそれとは相反して、マイナスイメージの言葉を選択する児童が減少した。特に減少していたのは「つめたい」・「きもちわるい」・「うるさい」などである。

5. 考察

本実践では、ふれあいによるイヌの負担軽減を目指して、特に「ふれあいの時間を短くした」ふれあい動物教室を実施した。それにも関わらず、事前・事後の絵のイヌの絵の変化からは、6割以上の児童にイヌに対する印象が好転したと思われる変化が認められた。それは、アンケートの語群選択の結果にも現れ、事後にはイヌについてプラスイメージの言葉を選択する児童が増加、それとは相反してマイナスイメージの言葉を選択する児童は減少していた。すなわち、ふれあいに依らずとも見せ方の工夫次第では、動物に対するイメージを好転させる可能性が示唆された。

語群選択の結果では、事後に「つよい」の言葉を選択する児童が増えていた。いままでのふれあいを中心とした内容では見られなかった変化である。ドッグショーの特に、アジリティやディスクなどのイヌの身体能力の高さを伝えることを重視した内容が奏功したとも解される。しかし、今回のふれあい動物教室のイヌのイメージを好転させる効果は、児童全員について確認できたわけではない。どのような工夫をすることでより多くの児童のイメージを好転させることができるかについては今後の課題としたい。

謝辞

アンケートにご協力いただきました小学校の児童の皆さん、先生方、ショーの協力をしてくださったことも動物教室アニマルシップの皆さん、また活動に参加して下さった学生スタッフと動物たちにこの場を借りて深くお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 「動物ふれあい活動と飼育活動の効果に対する比較研究」 岡部香織 (2016)
- 2) 「こどもによる「イヌのかかわらしさ」の貼り絵表現の解析」 津野尚子 (2013)

児童に対するアイガモを用いた動物介在教育プログラムの実践とその教育効果

上田桃子（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）・花園誠（教育人間科学部 こども学科）

キーワード：生活科、動物介在教育、アイガモ、ウコッケイ

1. はじめに

著者らが実践する「ふれあい動物教室」と標榜の動物介在教育に用いられる動物は主に哺乳類である。ついで多いのは、ヘビヤトカゲなどの爬虫類で、鳥類登用の機会はそんなには多くない。その理由の一つは、ふれあい動物教室運営の主戦力である学生の中で、鳥類に対する関心がそんなに高くはないことがある。ただ、著者のスタンスとして、学生からの希望があればその動物がなんでもあれ実践投入を受け入れてきた。

2. 本研究の背景

登用の機会がそんなには多くない鳥類の中で、ウコッケイは比較的用いられることが多い。過去3編の卒業研究でウコッケイのAAEにおける有用性が検証されている。そこでウコッケイと同じ家禽であるが、水鳥であるため児童にはより馴染みが薄いアイガモを用い、動物介在教育におけるその有用性の検証を試みた。

3. 材料・方法

1) 使用動物

アイガモはペットショップから購入のオス1羽とメス2羽の計3羽を使用した。人の出入りが多い大学内で飼育し、様々な人に触れてもらうことで人に対する馴致を徹底した。



図1. アイガモの雌2羽

ウコッケイはオス2羽とメス1羽の計3羽を使用した。2010年より大学内で飼育しており、動物介在教育活動の経験が多くある人に対して十分に馴致された個体である。



図2. ウコッケイの雄2羽(左右)と雌1羽(中央)

2) 実践対象

山梨県上野原市の小学校と埼玉県越谷市の小学校を対象とし、計3校で実施した。

上野原市のA小学校全体と越谷市のC小学校の1・5・6班では、アイガモは観察のみ、ウコッケイは観察とふれあいを行った。上野原市のB小学校全体と越谷市C小学校の2・3・4班では、アイガモは観察とふれあい、ウコッケイは観察のみを行った。

表1. 実施校ごとの実践内容

小学校		アイガモ	ウコッケイ
上野原市 A小学校		観察	観察 + ふれあい
上野原市 B小学校		観察 + ふれあい	観察
越谷市 C小学校	2・3・4班	観察 + ふれあい	観察
	1・5・6班	観察	観察 + ふれあい

3) 解析方法

ふれあい動物教室の活動前後でカモとニワトリに関するアンケート調査を行った。活動の前後で同じ問を設け、活動前と活動後のアンケート回答の差をふれあい動物教室の効果とした。

カモ、ニワトリ共に同じ3設問群とした。1つ目の設問の回答方式は、10cmの横線上のうち当てはまるところに縦線を引く線上表記法とした。本研究では、中心より左に近いほど質問項目に当てはまらない、右に近いほど質問項目に当てはまるという回答様式とした。設問は、ウコッケイあるいはカモについて設問1「好きですか」、設問2「飼いたいと思いますか」、設問3「ペットだと思いますか」、設問4「あたたかい生き物だと思いますか」、設問5「きたない生き物だと思いますか」、設問6「食べるものだと思いますか」、の6項目とした。

2つ目の設問は、プラスのイメージの言葉を12個とマイナスのイメージの言葉は12個の計24個の言葉を呈示し、語群から複数回答可とする語群選択の設問とした。

3つ目の設問は、カモあるいはニワトリについてイメージで絵を描いてもらう問とした。

絵画表現の評価方法は下記の通りである。くちばし、足の本数、趾に着目し、正しく表現できているものに1点、そうでないものは0点とし、カモ、ニワトリそれぞれ3点満点の評価とした。

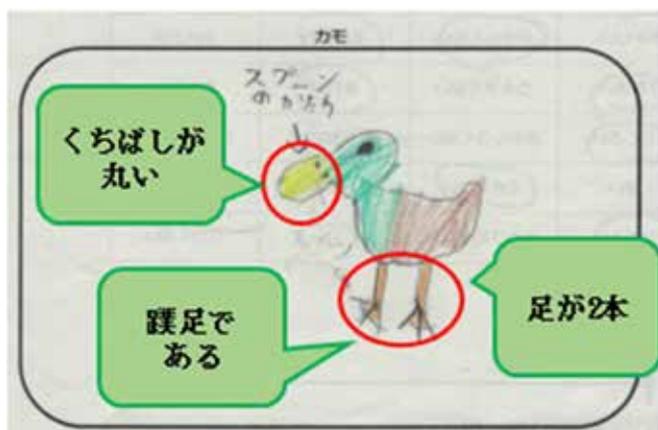


図3. カモの絵画表現と評価のポイント



図6. ニワトリの足を示すパネル



図4. ニワトリの絵画表現と評価のポイント



図7. カモのくちばしを示すパネル

5) 活動内容

ふれあい動物教室では、色々な動物を教材としたブースを複数配置し、児童は引率の学生とともにブースをローテーション形式で順に巡る。



図5. カモの足を示すパネル



図8. ニワトリのくちばしを示すパネル

各ブースの体験時間は、概ね10分程度とし、短くとも多様で濃厚な体験ができるように工夫されている。本研究は、その中の1ブースとして実施した。

図5・6・7・8はブースで使用したパネルである。カモとニワトリ(ウコッケイ)のそれぞれの特徴が分かりやすいようにと対比させた。アイガモの観察には、アクリルの120cm水槽を使用し、児童たちにアイガモが泳いでいる様子を観察してもらった(図9)。



図9. 水槽の中で泳ぐアイガモ

続いてアイガモかウコッケイのどちらかのふれあいを行なった(図10)。



図10. ウコッケイとのふれあい(上段)およびアイガモとのふれあい(下段)

その後、食材として利用されていることをパネルで解説した(図11)。



図11. 食利用されていることを解説するパネル

4. 結果

1) 線上表記法で評価したニワトリのイメージ変容

「ふれあいなし」では事前と事後で有意なイメージ変容は認められなかった。しかし、「ふれあいあり」では「ペットだと思いませんか」のみに有意な減少が認められた。

2) 線上表記法で評価したアイガモのイメージ変容

ニワトリとは対照的に、アイガモでは「ふれあいなし」でも「好きですか」、「ペットだと思いませんか」、「食べ物だと思いませんか」に有意な増加が認められた。「ふれあいあり」では、「好きですか」、「あたたかいと思いませんか」、「食べ物だと思いませんか」に有意な増加が認められた。

3) 語群選択で評価したニワトリのイメージ変容

「ふれあいなし」では事前と事後で有意な変化は認められなかった。しかし、「ふれあいあり」では、「やさしい」、「きもちいい」、「くさくない」などのプラスイメージを選択する児童が有意に増加していた。

4) 語群選択で評価したアイガモのイメージ変容

「ふれあいなし」でも「やさしい」、「くさくない」、「うつくしい」などのプラスイメージを選択する児童が有意に増加した。「ふれあいあり」では、「あたたかい」、「ふわふわ」、「きれい」、「きもちいい」、「くさくない」を選択する児童が有意に増加した。

5) 絵画表現

ウコッケイのふれあいのみ、そしてアイガモのふれあいのみのいずれも場合も、ニワトリの変化と対比するとアイガモの絵がより正確にと変化していた(図13、図14)。

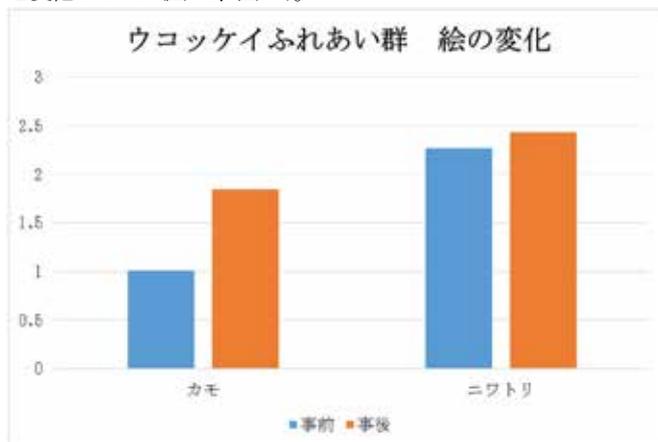


図13. ウコッケイのみのふれあいを経験した児童の絵画表現

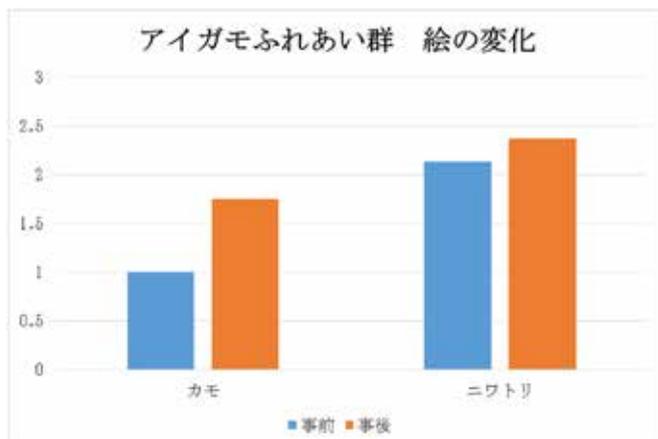


図14. アイガモのみのふれあいを経験した児童の絵画表現

5. 考察

アイガモとニワトリの両方とも「ふれあい」はイメージ変容により効果的であった。

今回の実践では、「ふれあいなし」ではウコッケイと比べるとアイガモのイメージ変容が大きかった。アイガモが児童にとってなじみが薄く新鮮であったことがより関心を引いたこと、そして、水槽を使用して泳ぐというアイガモの特徴をよく観察させることが奏功したと考える。動物をこどもたちに観察させるときの工夫として留意したい。

謝辞

本研究を行うに当たりアンケートにご協力頂きました小学校の先生方、児童の皆さん、活動に参加してくれたAAE並びに花園研究室の皆さん、アイガモの飼育に関しご協力いただきました渡辺先生、ウコッケイの活動にご協力いただきました花園美樹先生、協力してくれたアイガモ、ウコッケイたちに心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 山下喜久, 菊池日出夫 (1999) . 「そだててあそぼう [20] ニワトリの絵本」. 社団法人 農山漁村文化協会.
- 2) 古野隆雄, 竹内通雅 (2005) . 「そだててあそぼう [65] アイガモの絵本」. 社団法人 農山漁村文化協会.
- 3) 中村千尋. 「継続飼育による子どもの観察力と変容についての一考察」. 聖徳大学人文学部児童学科第4学年理科研究室助手.
- 4) 貞國利夫 (2018) . 「創設翌原国立公園指定30周年記念釧路市立博物館企画展 カモにも事情がありまして…〜餌から恋の三角関係まで〜」. 釧路市立博物館報, No. 421.
- 5) 井口楓 (2013) . 「ブンチョウを用いた動物介在教育の検証」. 帝京科学大学アニマルサイエンス学科卒業論文.
- 6) 木本美帆 (2010) . 「児童に対する鳥類 (ウコッケイ) を用いた動物介在教育の試み」. 帝京科学大学アニマルサイエンス学科卒業論文.
- 7) 大内雄太 (2011) . 「ウコッケイを用いた動物介在教育の実践と成果」. 帝京科学大学アニマルサイエンス学科卒業論文.
- 8) 福田瑞希 (2012) . 「動物介在教育におけるウコッケイの提示方法の検証〜子どもの反応に対する影響要因の検証」. 帝京科学大学アニマルサイエンス学科卒業論文.

イエネコを用いた動物介在活動の実践と成果

山岸花陽・山本真理子(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)・花園誠(教育人間科学部 こども学科)

キーワード：動物介在活動、育成プログラム、ネコ

1. はじめに

「動物介在活動」は Animal Assisted Activity の和訳で、動物と触れ合うことによる情緒の安定や QOL の向上、レクリエーションを目的とした活動である。現在、動物介在活動に多用されている動物は、ハムスターなどの小動物類の他、伴侶動物のイヌやウマなどが主なものである。ネコは、一般的に認知され人気をイヌと二分する伴侶動物であるが、新奇な場所に慣れないことや警戒心が強いことなどのネコに固有の特性から動物介在活動に用いられることは少ない。しかし、日本人の動物観に照らし合わせると、ネコは古来より室内と屋外の出入りの自由を許された唯一の伴侶動物である。イヌが公共の場所では未だに室内に入れることに抵抗感を抱かれてしまうのと対照的である。

2. 本研究の背景

鈴木 (2016) と諸岡 (2017) は動物介在教育に特化したイヌの育成プログラムを考案した。馴致の対象は「新奇な環境」・「不特定多数とのふれあい活動」・「多種・同種の動物」である。本研究では、鈴木 (2016) と諸岡 (2017) が考案し効果的であったと結論した育成プログラムのネコに対する応用を検討した。

3. 材料・方法

1) 使用動物

本研究に用いた動物は以下に示す同腹の兄妹ネコである。

①2015 年生まれ雄ネコ (MIX)。名前は「まっちゃん」と名付けている。3 歳の去勢済み(図 1.左側のネコ)。

②2015 年生まれ雌ネコ (MIX)。名前は「きなこ」と名付けている。3 歳の避妊済み(図 1.右側のネコ)。



図 1. 左：まっちゃん 右：きなこ

2) 育成・馴致について

ネコの育成・馴致は鈴木 (2016) と諸岡 (2017) が考案した育成プログラムの方法に準じた。その詳細を以下に示す。

①新奇な環境

ネコを引き取り後、アパートの一室あるいは平屋の一軒家で同居した。1 歳になる前から友人宅など他の家に度々連れて行くことを繰り返した。その他に公園、大学の施設であるうま介在活動センターなどにも連れて行くことを繰り返した。この時、必ず同じクレートを使用することで、どこに行ったとしてもそのクレートがありさえすれば落ち着いていられるように馴致できた。

②不特定多数とのふれあい

子ども、学生、大人、高齢者と様々な世代の方とのふれあい経験を積み重ねた。子どもとは 1 歳になる前から始め、様々な場所でのふれあいを経験させた。学生や高齢者等とは、お世話をしてもらったり、遊んでもらったりしながらのふれあいを経験させた。2 匹のネコがもともと触られることを好む個体であったことも奏功、さわる場所を注意さえすれば、長時間のふれあいが可能になった。

③動物

2 匹のネコは普段から一緒にいるようにした。また、他の家に連れて行ったとき、そこにネコ、あるいはイヌがいる場合は接近と接触を繰り返して馴致に努めた。その他、うま介在活動センターに連れて行き、そこで飼育されているウマやヤギとも接近を繰り返した。その結果、同種他個体に対しては個体よっての適度な距離をとることで相手を気にすることはなくなった。また異種他個体では一定の距離を保つことで気にすることはなくなった。

3) 動物介在活動の実施場所・実施日時

更生保護施設の寮 (以下、施設 A と表記) で 12 月 13 日 (木) 15 時から 16 時までの少人数相手の約 1 時間のふれあい活動を行った。

もう 1 つは地域密着型介護老人福祉施設 (以下、施設 B と表記) で 12 月 15 日 (土) 15 時 30 分から 16 時 30 分までの約 1 時間のふれあい活動を行った。施設 B では他の動物とのふれあいブースも設け、大人数でのふれあい活動を行った。

4) 実践方法

①施設 A

ふれあい活動の前後に気分調査と動物 (ネコ・ウサギ) の 2 種類のアンケートに記入をお願いした。してもらった。ふれあい活動中は、ネコとウサギ、ハンドラーの場所は変えず、利用者さんの自由意思に任せて動物のところへ回ってもらえるようにした。

②施設 B

ふれあい活動中に施設のスタッフさんに協力を依頼し、活動中の利用者さんの様子を評価表と調査アンケートを記入してもらった。評価表の記入はネコとイヌのブースのそれぞれ記入してもらった。調査アンケートは利用者さんに質問をしてもらい形で回答してもらった。ふれあい活動中は、ネコとハンドラーの場所そして、その他のブースも場所を変えずに、利用者さんの自由意志に任せて動物のところへ回っ

てもらえるようにした。

5) アンケート

①動物アンケート

ネコとウサギに関する動物の飼育経験の有無を問う1問と、それぞれの動物に対する印象を問う7問についてふれあい活動の前後に回答してもらった。

②気分調査アンケート

「不安だ」「疲れている」などのマイナスの気持ちを表した項目と、「元気いっぱいだ」「やわらいでいる」などのプラスの気持ちを表している項目の合計8項目についてふれあい活動の前後に回答してもらった。

③評価表

高齢者に対する犬のセラピー効果の検討のために鈴木(2015)が用いた評価表を基に作成した。この評価の項目は全部で6項目あり、その項目別に当てはまる点数を施設のスタッフに記入してもらった。

④調査アンケート

動物の印象についての質問と動物の飼育経験、利用者さん自身がふれあい活動に参加したことがあるのかを回答してもらった。

6) ふれあい方法

A・B どちらの施設でもハンドラーが抱いたままの状態であう方法の他、ネコ用ベッドを利用者さんの膝の上に乗せるふれあい方法を実施した(図4・図5)。



図2. 動物介在活動前のミーティング



図3. ネコとのふれあいに使用した個室



図4. ハンドラーが抱いたままのふれあい



図5. ネコベッドを使用したふれあい

4. 解析方法

1) 施設A

動物アンケート、気分調査アンケートでは線上市記法を用いた。計測した数値は、Microsoft Excel2013で統計処理をした。

2) 施設B

項目別に記入してもらった点数を項目ごとに0点、1点、2点とカウント、全項目の合計が多くなるほど高評価とした。

5. 結果

1) 施設A

①動物アンケート

活動前後にネコ、ウサギのそれぞれについて印象をアンケートに回答してもらった。その結果、有意な数値上昇は認められなかったが、ネコとウサギのいずれに対しても活動後の印象は好転していた。また、ウサギとネコの事前の印象を比較すると、ネコはウサギより好印象であった。

②気分調査アンケート

気分調査アンケートでは「気力に満ちている」、「おっとりしている」2つの項目で事後に数値は有意に増加していた(図6)。

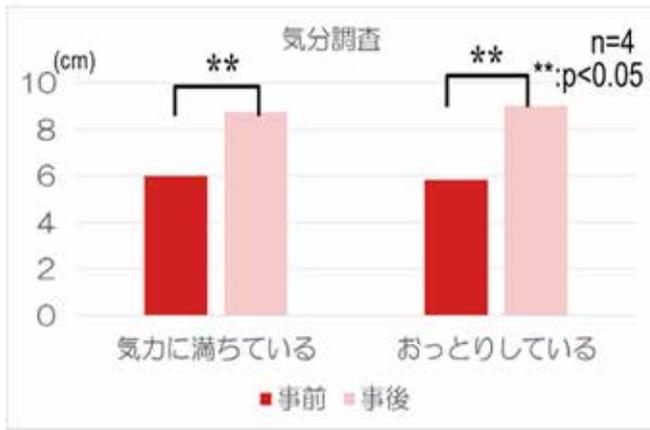


図6. 気分調査アンケート

2) 施設B

特に変化が認められた2名の結果を図7～図10に示す。Fさんは「リハビリ活動のみ」イヌよりネコのほうが良い結果が得られた(図7、図8)。

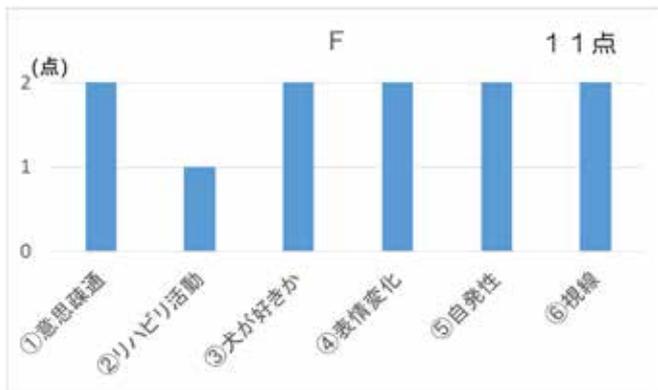


図7. Fさん「イヌ」時の評価

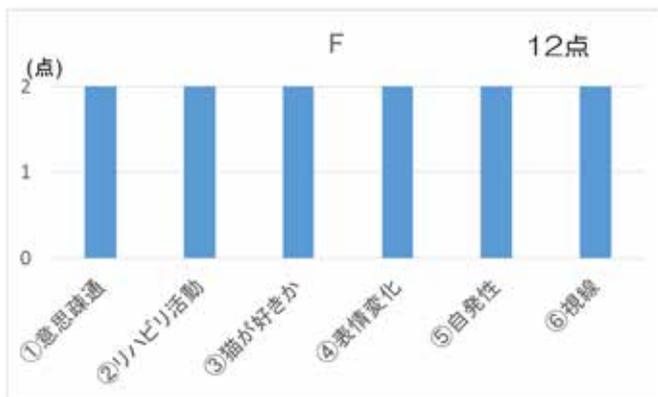


図8. Fさん「ネコ」時の評価

Mさんは「リハビリ活動」と「好き」、「表情変化」の3項目についてネコのほうが良いという結果が得られた(図9、図10)。

2名の評価表からはイヌよりネコのほうが良いという結果が得られた。

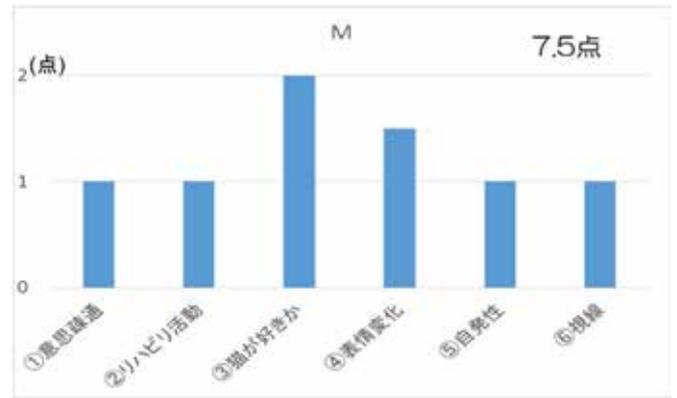


図9. Mさん「イヌ」時の評価

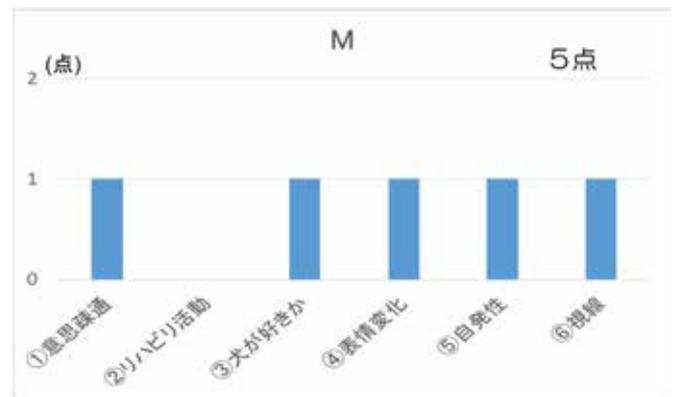


図10. Mさん「ネコ」時の評価

6. 考察

イヌとネコは人気を2分する伴侶動物である。それにも関わらず、種固有の特性から、動物介在活動にはより社会性の強いイヌが専ら使用されてきた。本研究では、イヌの馴致プログラムをネコに応用、そのネコを動物介在活動に用いてみて、特段の問題は生じないことが確認できた。鈴木(2015)と諸岡(2016)が犬の育成プログラムとして使用したものはネコの育成・馴致するプログラムとしても有効であると考えられる。しかし、ネコにも個性があるので、ネコを動物介在活動で使用するためには育成・馴致をする中で適性のある個体を見極めるということが必要ということにも留意したい。

また、人によってはイヌよりもネコの方が効果的らしいことを示唆する結果を得た。特に施設BのMさんはイヌに対してあまり関心を示さず、評価点も低かった。しかし、ネコに対してはアンケートで「ネコが好き」と回答したことそのままの反応を活動中に示した。ネコとのふれあい中には発語が増え、表情はにこやか(こと)に変化した。利用者に対する事前のアンケートで「イヌはきらい」あるいは「ネコが好き」と分かっているのならば、それに対応できるようにネコの活用を促進したい。

謝辞

本研究を行うにあたり、多くのご協力をいただきました。更生施設の職員の皆様、利用者の皆様、老人ホームの職員の皆様、利用者の皆様、活動に参加して下さった本学の学生、動物たち(に)この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 鈴木綾花 (2015) 「動物介在教育に特化した犬の育成とその成果」帝京科学大学アニマルサイエンス学科2015年度卒業論文
- 2) 諸岡亜由美 (2016) 「AAE 犬育成プログラムの検証～特に他種動物に対する順化の検証と成果」帝京科学大学アニマルサイエンス学科2016年度卒業論文
- 3) 堀洋道 監修/山本真理子 編集 (2001) 「心理測定尺度集I—人間の内面を探る<自己・個人内過程>」株式会社サイエンス社, p. 253-260
- 4) メリー・R・バーチ (2010) 「よくわかる！アニマルセラピーの本 動物介在療法の方法とケーススタディ」株式会社創英, 東京, p133-138

馬介在活動センター「ふれあいの日」における「子ども・保護者・スタッフ」の3者間の行動ならびにコミュニケーションの実態調査

田崎乃流（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）・花園誠（教育人間科学部 こども学科）

キーワード：コミュニケーション、馬、ふれあい

1. はじめに

2001年、帝京科学大学がまだ理工学部のみ単科大学であったころ、バイオサイエンス学科(のちにメディアサイエンス学科と統合、生命科学科として再編)に「アニマルサイエンスコース」が誕生した。電車内のそれを受験生に告知する中刷り広告には、「かわいらしい犬」と「躍動するイルカ」にならんで、「やさしげな眼差しの馬」が掲示されていた。

「アニマルサイエンスコース」は、殺到する受験生が追い風となり、その翌年には「アニマルサイエンス学科」として独立。それ以来、「馬」は「ヒトと動物の共生」の象徴として、専門教育構想の一翼を担うこととなった。ただ、その青写真が、現在の「うまセンター」として具体化するまでにはなお紆余曲折があった。東京西キャンパス敷地内のどこに「馬を飼育する場所を作るか」で、ハイテクリサーチセンター前の空き地(現医療科学部棟が建っているところ)、体育館東側下の空き地、あるいは馬輪場裏の空き地と、構想は二転三転したのである。その後、筆者の個人的な知り合いであった当時の市議会議員から「上野原町内にこどものための動物園をつくりたい」との構想を聴かされたことが契機となり、工場誘致が進んでいた東京西工業団地の一角に、2000年〇月、上野原町と提携しての「うまセンター」の建設によりやく漕ぎつけたのである。

そして、上野町との協定で、土地の提供をうける代わりに月1回の「市民サービス」が始まった。毎月第二日曜日に「ふれあいの日」が設けられ、上野原住民および地域住民向けに「乗馬体験」や「うまとのふれあい体験」を無償でサービスしたのである。

2. 本報告の背景

動物介在介入(Animal Assisted Interventions 以下AAIと略)とは治療的・改善的なプロセスや環境の一部として動物を意図的に介入することと定義された、動物介在活動(以下AAA)、動物介在教育(以下AAE)、動物介在療法(以下AAT)の総称である。

著者らが専門とするAAEは「動物」・「子ども」・「大人」の3者で構成される。このとき「大人」は動物を扱う係の「ハンドラー」として、また子どもたちの「保護者」として子どもに相対し、その子どもに与える影響は大きいと思われる。

石木(2017)は動物園における小動物とのふれあいコーナーにおける「子ども・保護者・飼育員」間のコミュニケーションの実態を解析し、子どもが小動物と対峙するとき、子どもに対する保護者の働きかけおよび、小動物を扱う飼育員の働きかけは、子どもと小動物の関わり合いを促し、活動のスムーズな進行に欠かせないことを示唆した。

本報告では、小動物とは関わり方が明らかになる大型動物のウ

マを研究対象とした。そして、ウマとのふれあいを通じたコミュニケーションの特色を明らかにすること、およびその知見を基に、大型動物である「ウマとのふれあい」に適したアプローチ方法」の追究を目的とした。

2. 材料と方法

1) 実践場所について

本研究は、帝京科学大学東京西キャンパスの施設である馬介在活動センター(以下うまセンターと略)で実施した。

うまセンターでは、3頭の馬と2頭の山羊を飼育している(2018年度実績)。うまセンターは、学生の実習や研究以外にも、地域連携活動の一環として地域住民との交流目的でも活用されている。その主たるものは、幼稚園や小学校を対象とした「ふれあい動物教室」(動物介在教育)や、障がいのある子どもたちを招いての「障がい者乗馬会」などである。そして、うまセンタースタッフが主体となり実施している毎月第二日曜日のイベントが、「ふれあいの日」である。この日は、子どもたちのみならず、一般の成人の方々も馬に触れたり乗ったりすることができる。

本研究では、施設内の実際にふれあいを行う蹄洗場(図1、図3)と馬房前(図2、図4)の2か所でデータを収集した。



図1. 蹄洗場でのふれあいの様子



図2. 馬房前でのふれあいの様子

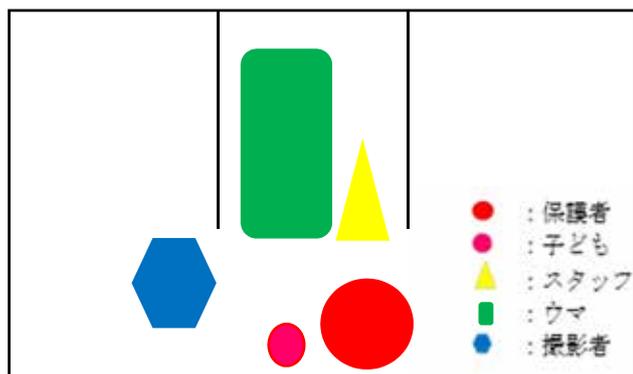


図3. ふれあいの配置(蹄洗場)

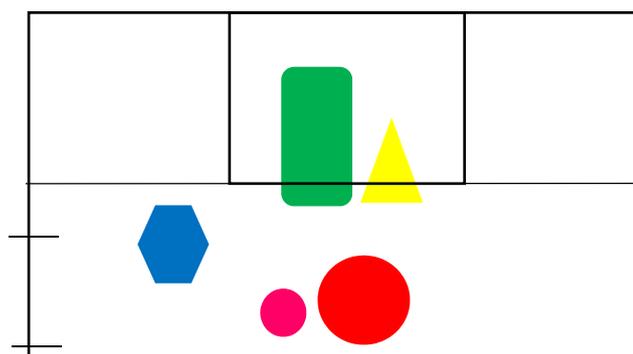


図4. ふれあいの配置(馬房前)

2) 実践日時

「ふれあいの日」は月に一度、原則第二日曜日に開催される。本研究の実践日時は表1に示した。

実践時間は各日も午前10時から12時と、お昼休みをはつみ、午後1時から午後3時の、午前2時間・午後2時間の合計4時間を原則とした。

なお、研究対象とした全5回のうち、2018年10月6日(土)と2018年10月7日(日)の第二回・第三回は両日も第28回科大祭の開催当日であった(※)。

3) 調査対象

本研究の調査対象は、「ふれあいの日」に訪れた、「ウマのふれあいをする子ども」と「その保護者」、そして「ウマとのふれあいのサポートをするうまセンターの学生スタッフ」と「職員」とした。

表1. 本報告の実践日時

	調査日
第1回	2018年9月23日(日)
第2回※	2018年10月6日(土)
第3回※	2018年10月7日(日)
第4回	2018年11月11日(日)
第5回	2018年12月9日(日)

4) 研究に使用した動物

うまセンターで飼育されている3頭の馬を使用した(表2)。これらの馬はうまセンターでの定期的なふれあい活動や、地域の小学生や幼稚園児等を招いての遠足活動も多く経験しており、馴致も十分で温厚で安全な馬である(図5、図6、図7)。

表2. 使用した馬の詳細

個体名	種類	性別	体高※
モカ	ハーフレインガー	去勢雄	142.6 cm
チョコ	中間種	雌	148.0 cm
さくら	日本ポニー種	雌	117.8 cm

※体高：2017年7月時



図5. モカ (2018年12月撮影)



図6. チョコ (2018年12月撮影)



図7. さくら (2018年12月撮影)

5) 調査方法

「ふれあいの日」を訪れる親子連れに口頭で研究協力を依頼した。研究協力を承諾して下さった方のみさらに文章で詳細を説明。そして最終的な同意を得た方には同意書の記入をお願いした。

馬の前に研究対象者が来た時点より調査を開始。そして、馬の前を離れた時点を調査終了とした。馬とのふれあいを再度希望する対象者に関しては、この行程を繰り返した。最後に手洗い・消毒をし、退場して終了である。

馬のふれあいをしている子どもとその保護者、スタッフの様子はビデオカメラ (Panasonic HC-V360M) とボイスレコーダー (OLYMPUS Voice-Trek V-842) で記録、それらの画像・音声データは後日に詳しく解析した。

4. 分析方法

子ども・保護者・スタッフの会話に着目。それらを発話採集法 (Rosenfeld and Terkel, 1982) で採集したのちに、以下に示す 11 カテゴリーに分類した。

- ① 「あいづち」：相手の言葉に合わせて言う言葉、相手の発言の繰り返し。
- ② 「ふれあい」：触り方、ふれあい後の消毒の促し。
- ③ 「動物」：動物の外見的特徴、生態の知識、動き、鳴き声、動物に対する気遣いなど。
- ④ 「予想」：物事の成り行きや結果についての見当。
- ⑤ 「事実確認」：存在や行動など見て分かる事実。
- ⑥ 「印象」：見た目を表す形容詞や触った感触。
- ⑦ 「その他」：状況とは関係のない発話。
- ⑧ 「質問」：相手に対する何かの問いかけ。
- ⑨ 「うながし」：ある行為をするように仕向ける、あるいは催促。
- ⑩ 「誘い」：一緒に行動するように相手を誘う。
- ⑪ 「拒否」：ふれあいや動物に関する否定。

また、録画データより、子どものふれあい行動を分類した。そして、「あいづち・ふれあい」を「導入的」、「動物・予想・事実確認・印象・その他」を「対時的」、「質問・うながし・誘い・拒否」は「展開的」と大分類した (図8)。



図8. 発話採集法のカテゴリー分類

5. 結果

収集したデータの総時間は3時間59分、そのうち解析に使用できた録画時間は3時間34分であった。調査人数は146人で、総発話数は2366語であった。

結果1. コミュニケーションの特徴

以下、「子どもをA」「保護者をB」「スタッフをC」「馬をD」とす

る。

4者間のコミュニケーションの割合は、AB間で49.9%、BC間で17.3%、AC間で29.5%であり、A・B・CのからDへの発話に関しては、AD間で1.1%、BD間で1.4%、CD間で0.8%であった。A・B・C・D、4者間の相互コミュニケーションの割合を見てみるとAB間では対時的発話、BC間では対時的発話、AC間では導入的発話、D(馬)への発話では対時的発話が多いという結果であった。つまり、馬のふれあいにおける4者間の相互コミュニケーションは対時的発話が多いという傾向であることが分かった。AB間ではBから展開的な発話が多く、Aからはそれに対しての「あいづち」や「拒否」が多いという結果であった。BC間ではBから馬に関する質問が多く、CはAからの質問の回答として、「動物」の発話が見られ、答えを知ったBからは「あいづち」が多かった。AC間ではAからの対時的発話をきっかけにしてCからは「ふれあい」や「動物」が多かった。そして、Cからの説明を受けたAは「あいづち」で返すことが多かった。A・B・Cの三者からDへの発話では、いずれも馬が何らかの行動をした時や馬という存在に対する対時的な発話であった。

A・B・C・Dの相互のコミュニケーション割合を見ると、AからBが12.4%、BからAが37.4%、BからCが8.4%、CからBが8.9%、AからCが6.8%、CからAが22.8%となり、Dへの発話はAから1.1%、Bから1.4%、Cから1.1%であった。つまり、馬のふれあいにおいて、コミュニケーションの割合は「B保護者→A子ども」と「Cスタッフ→A子ども」の割合が多いという結果であった (図9)。

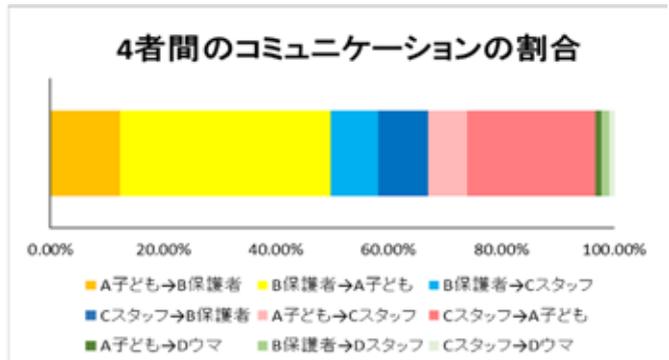


図9. 4者間のコミュニケーションの割合

結果2. ふれあいパターンごとの特徴

映像データより A(子ども)のふれあい行動に着目すると、馬に触れる行動があったグループ(「ふれあい群」)、馬に触れる行動が見られなかったグループを(「ふれあいなし群」)、馬に餌を与える行動があったグループ(「えさやり群」)と3群に分類できた。

子どものふれあい行動パターンごとに A(子ども)・ B(保護者)・ C(スタッフ)の3者間のコミュニケーションの割合を見てみると、「ふれあい群」ではAB間で42.7%、BC間で21.9%、AC間で30.4%であった。「えさやり群」ではAB間で46.6%、BC間で16.1%、AC間で34.6%、「ふれあいなし群」ではAB間で68.5%、BC間で15.5%、AC間で12.9%であった。AC間のコミュニケーションの割合が「ふれあいなし群」では他の2群に比べて、半分以下の割合になり、AB間のコミュニケーションの割合が増加していた。

結果3. 子どもを中心としたコミュニケーションの特徴について

結果1よりA(子ども)中心のコミュニケーションが行われていることから、A(子ども)とB(保護者)間、そして、A(子ども)とC(スタッフ)間のコミュニケーションに着目した。

「ふれあい群」、「えさやり群」ではA(子ども)・B(保護者)間、A(子ども)・C(スタッフ)間ともに大きな差異はみられなかった。しかし、「ふれあいなし群」に注目すると、A(子ども)からB(保護者)へのコミュニケーションでは「拒否」が多く見られた(図10)。

また、A(子ども)からC(スタッフ)へのコミュニケーションにおいて、「ふれあいなし群」とそれ以外とを比較してみると、「ふれあいなし群」では「その他」と「質問」の2つのみであった(図11)。

B(保護者)からA(子ども)へのコミュニケーションとC(スタッフ)からA(子ども)へのコミュニケーションでは「ふれあいなし群」において若干「質問」の割合が多い(図12・図13)。A(子ども)のふれあい行動パターンの「ふれあいなし群」では、他に比べ、発話の категорияが少なくなることが分かる。特にA(子ども)からC(スタッフ)への発話が顕著に減少している。

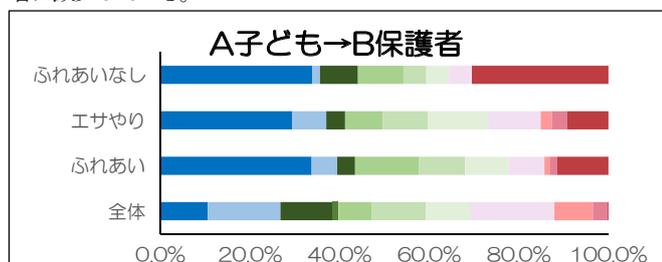


図10. A子どもからB保護者への発話

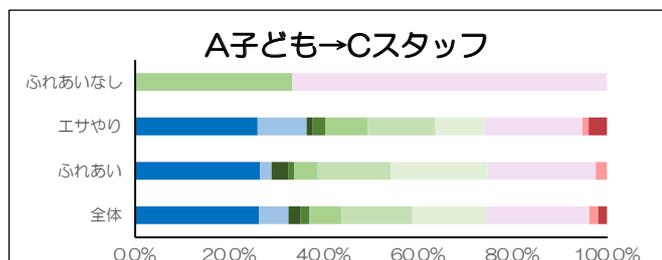


図11. A子どもからCスタッフへの発話

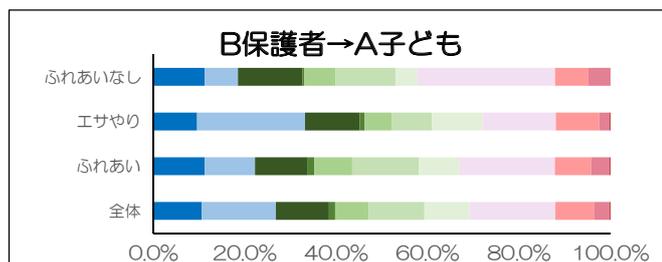


図12. B保護者からA子どもへの発話

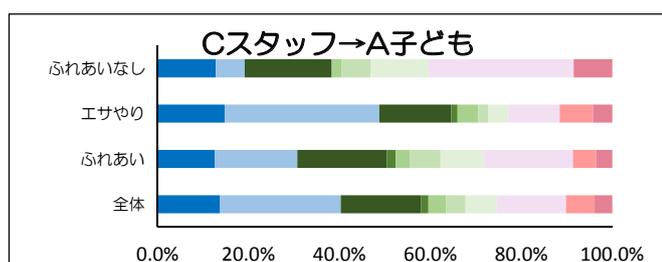


図13. CスタッフからA子どもへの発話

6. 結果のまとめ

結果1より、馬のふれあいにおいて、A(子ども)中心のコミュニケーションが行われていることが分かった。さらに、A(子ども)・B(保護者)・C(スタッフ)の3者からD(馬)への発話があることも判明した。

結果2、3より、A(子ども)のふれあい行動の「ふれあいなし群」ではA(子ども)からC(スタッフ)への発話が顕著に減少、「ふれあいなし群」は「ふれあい群」と「えさやり群」と比べて、子どもは他者とのコミュニケーションが希薄化する傾向にあることが伺えた。

7. 考察

本研究により「馬のふれあい」においては、子ども中心のコミュニケーションに加え、介在動物である馬中心のコミュニケーションも発生していることが明らかになった。モルモットのふれあいにおけるコミュニケーションの実態調査を行った石木(2017)の研究では、小動物であるモルモットに対する発話についての言及が一切なかった。このことから、動物に対する発話が発生することが「馬のふれあい」の特徴と考える。すなわち、小動物とのふれあいと比べ、馬とのふれあいの方が、より多様なコミュニケーションが発生しているらしいことが示唆されるのである。よって、馬とのふれあい活動に際しては、その特徴を活かすため、子どもが馬に対する恐怖心から馬を遠ざけてしまわないような働きかけや支援の工夫をすることが必要であると考える。

謝辞

本研究を行うに当たり、ご理解とご協力をいただきました馬介在活動センターの職員・学生のみなさま、チョコ、モカ。さくら、来場者の児童のみなさん、保護者の方々、調査に協力してくれた学生のみなさまに心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 「新・馬の医学書」 JRA 日本中央競走馬総合研究所 編著 (2012)
- 2) 「動物園のふれあいコーナーにおける「子ども・保護者・動物園スタッフ」の3者間のコミュニケーションの実態調査」 石木めぐみ (2017)
- 3) 「馬の特化した動物介在教育の実践と効果～児童の絵画表現からの検討～」 高橋美咲 (2015)
- 4) 「保育者と教師のための動物介在教育入門」 谷田創 木場有紀 岩波書店 (2014)
- 5) 「アニマルセラピーの現状と応用」 吉田尚子 (2015)
- 6) 「保育園における馬介在教育の試み」 中川美和子 (2016)
- 7) 株式会社アニマルアシステッド <https://a-assisteed.net/service/>
- 8) 「動物園における幼児の動物ふれあい活動に関する考察」 百瀬ユカリ (2015)
- 9) 「動物介在教育活動の「ふれあい」における動物種別の効果について」 田村ら (2005)
- 10) 特定非営利活動法人 動物介在教育・療育学会 <https://asaet.org>

フクロモモンガの教材化に関する検討 ～2018 年青少年のための科学の祭典・山梨大会より

中川千恵・花園誠（教育人間科学部 こども学科）

キーワード：動物介在教育、AAE、フクロモモンガ

1. はじめに

青少年のための科学の祭典・山梨大会は、2000年に始まった。本学は、県内の団体で唯一、第一回大会から連続して出展を続けている。他の団体には見られない本学独自の特徴は「生きた動物」が展示されることである。これまでに展示した動物は、マウス・ジャコウネズミ・モルモット・スナネズミ・ハムスター・イヌ・ミニブタ・ブンチョウ・ウコッケイ・インコ・ウズラ・アオダイショウ・コーンスネーク・カイコ・オオゲジ・カブトムシ・ドクターフィッシュと多種多様である。

科学館の担当者からは「他の科学館の出展には見られない山梨県立科学館の特色として報告させていただいている」と聴かされた。今年はどうな動物が出展されるのだろうか、科学館の職員も楽しみにしているらしい。そして、出展の工夫を通じて、生きた動物の教材化研究も兼ねられるのが著者らにとっての最大のメリットで、教材化研究を卒業研究とする学生も多く輩出してきた。

2. 本研究の背景

科学の祭典に多種多様な生きた動物が展示されてきたのは、「学生のやりたいことをやりたいようにさせてあげる」のが指導教員としての矜持だからという理由である。今回はフクロモモンガであった。動物に対する学生個人の関心からのテーマ選択であったが、卒業研究にと昇華するため、子どもにフクロモモンガの行動観察をさせた上で、その反応を手掛かりに教材として可能性を追究することを目的とした。

3. 材料と方法

1) 動物

フクロモモンガとは、双前歯目フクロモモンガ科に属する有袋哺乳類である。学名は (*Petaurus breviceps*) で、オーストラリア・インドネシアに分布している。体長は、頭胴長では約 12～32 cm、尾長は約 15～48 cm、体重はオスで約 100～160 g、メスで約 80～130 g とシリアンハムスターよりはやや重い。寿命は野生下で 5～7 年、飼育下で 12～15 年と言われており、鳴き声と匂いが重要なコミュニケーション手段であることが特徴である。また、前足の小指から後ろ足の親指、尾の付け根から後ろ足の小指にかけて、よく伸び縮みする被膜がある。その皮膜を広げて木から木へと飛び移る（滑空）のも特徴である。そして、食性は昆虫食傾向の強い雑食性である。

本実践には、学生の自宅で飼育のフクロモモンガ 1 匹個体を使用した。「ざぶとん」と名付けている。推定 4 歳の去勢雄である。

2) 実践場所と実践対象

平成 30 年 11 月 17 日、18 日の 2 日間に山梨県立科学館で行われた「青少年のための科学の祭典 2018・山梨大会」の多目的ホールに本展

示ブースを設置。そこに訪れた来場者を調査対象とし、アンケート調査を実施した。

両日とも、午前中はフクロモモンガについてのクイズ、そして午後にはフクロモモンガの行動観察を実施した。行動観察は可搬式ネットテントの内側にフクロモモンガを放飼することで実施した。この時、ビデオカメラにより来場者の反応や発言を録画した。図 1・図 2・図 3 はブース前に設置した解説用のパネルである。常時ブース前にて掲示した。

ブースを体験する前にフクロモモンガに対する事前アンケートに回答してもらった。フクロモモンガに対するイメージを問うアンケートには選択肢を 28 通り設け、思い当たる選択肢にいくつでも丸を付けてもらう複数回答方式とした。



図 1. モモンガ分類パネル



図2. 生態についてのパネル



図3. 有袋類・真獣類パネル

2つ目の設問からは、アンケートの回答方法を「線上表記法」とし活動の前後で得点の変化を調べた。



図4. ブースのレイアウト



図5. ブース前のパネル配置



図6. 行動観察する子どもたち

フクロモンガの行動観察では、タイミングよく滑空しない場合に備え、フクロモンガが滑空している動画も事前に用意し、適宜、代替えとして観察してもらった。

計測した数値は、Microsoft Excel 2013 で統計処理した。

4. 結果

1) 実施数の結果

「青少年のための科学の祭典 2018・山梨大会」の来館者数は、11月17日が710名、18日は1,072名の合計1,782名であった。そして、「フクロモンガを見てみよう!」の本ブースに立ち寄り、フクロモンガの行動観察をした来場者数は、11月17日が39名、18日は43名の合計82名であった。

2) 線上表記の回答結果

フクロモンガの行動観察をすることにより、事前から事後の回答結果に変化が認められた。

①子どもの結果

事前比に比べ、事後に数値が有意に ($p < 0.05$) 高くなっていたのは、Q1「フクロモンガは好きですか?」事前 78.5 ± 23.6 ・事後 90.8 ± 17.6 、Q2「フクロモンガを飼いたいと思いますか?」事前 70.0 ± 27.6 ・事後 80.0 ± 29.7 、Q3「フクロモンガは良いと思いますか?」

事前 83.2±22.0・事後 90.9±15.1、Q4「フクロモモンガはペットだと思いますか？」事前 59.9±37.8・事後 72.0±34.1、Q5「フクロモモンガは面白い生き物だと思いますか？」事前 73.0±33.1・事後 83.8±27.3、Q7「フクロモモンガは見て楽しむものだと思いますか？」事前 66.3±38.0・事後 75.7±32.7 の6項目であった。

②大人の結果

事前に比べ、事後に数値が有意に ($p < 0.05$) 高くなっていたのは、Q1「フクロモモンガは好きですか？」事前 76.5±24.4・事後 85.2±30.0、の1項目であった。また、有意に ($p < 0.05$) 低くなっていたのは、Q6「フクロモモンガは汚い生き物だと思いますか？」事前 14.0±16.0・事後 7.1±9.5 の1項目であった。

3) 発話の解析結果

子どもと大人合わせて記録できた発話数は370発話であった。それらの発話の内容を吟味し、「あいづち」・「他のものに例える」・「予想」・「知識」・「形態」・「行動」・「質問」・「願望」・「その他」の9つカテゴリー分類した。

子どもと大人の発話について、どのカテゴリーのものが多いかを調べたところ、子どもは「あいづち」・「他のものに例える」・「予想」そして「行動」の発話が多かった。それに対して大人は、「知識」・「質問」が多かった。

5. 考察

今回使用したフクロモモンガはテントの中を「飛び回る」というよりは、「走り回る」ことが多かった。しかし、常同行動的などか決まったルートを走り回るというよりは、どこを走るのか全く予測がつきにくかったので、「飛び回る」ことはなくても、子ども、そして大人の関心をひきつけていた。それは、アンケートの回答結果にも現れていて、「面白い」や「見て楽しむ」の数値が事後には高くなっていた。

また、子どものほとんどが「フクロモモンガ=飛ぶ動物」と想起あるいは期待したためなのか、フクロモモンガを行動観察している子どもの発話で1番多かったのが、「飛ぶ?」「飛ばないの?」等の行動に関することであった。未就学の幼児からも頻繁にそのような発話をしていて、フクロモモンガは行動観察するだけでも子どもの発話を促進できる効果が期待できるらしい。フクロモモンガを教材活用するならば留意すべきポイントと考える。

子どもが「飛ぶの?」や「かわいい」と発話する反面、大人に多かったのが「何を食べるのか」「家でも飼育・放し飼いをしているのか」等の「質問」であった。大人は自分で飼育することについて関心があったと推察する。

また、フクロモモンガに関する「何の動物の仲間か?」という子供向けのクイズでは、選択肢を写真付きで「リス・サル・カンガルー」と3つ設けた3件法の回答方式とした。子ども達はフクロモモンガの小さくて前歯のある姿から連想したのか「リス」と答えることが多かった。筆者が「カンガルーの仲間」と正解を伝えると、驚く子どもが多かった。カンガルーと言われると大きい体でお腹に袋を持っていると想像する子どもが多いためなのか、「本当に?」と疑問を發する子どももいた。筆者がフクロモモンガはあたたかい地域に生息する動物で、お腹にある袋で子どもを育てることを伝えたことで、「カンガルーの仲間」と納得することができたようであった。

6. 今後の展望

フクロモモンガを教材化に向けて、子どもがフクロモモンガに対して興味を持てるような生態や行動を分かりやすく示した導入に使える紙芝居を作成したい。また、テントの中で縦横無尽に飛び回るよう、フクロモモンガを馴致したい。

謝辞

本研究を行うにあたって協力頂いた県立科学館の職員の皆様、動物介在研究部の学生、花園研究室の皆様、行動観察を頑張ってくれたフクロモモンガのざぶとんに厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 大野瑞絵著(2010)「ペットガイドシリーズ ザ・モモンガ」
- 2) 谷田創、木場有紀著(2014)「保育者と教師のための動物介在教育入門」
- 3) 中井奈々子著(2014)「デグー (Okutodon degus) のふれあい活動としての可能性について」
- 4) 盛口満作著(1989)「自然は友だち ムササビ大作戦」
- 5) 飯島正広、土屋公幸著(2015)「リス・ネズミハンドブック」
- 6) 遠藤秀紀著(2018)「有袋類学」
- 7) 松本忠夫著(2015)「新・生命科学シリーズ動物の生 - 脊椎動物の進化生態を中心に -」
- 8) 佐藤幹夫著(2009)「大自然のふしぎ 動物の生態区鑑」
- 9) 長谷川政美著(2004)「生命の科学 55巻3号 哺乳類の系統進化」
- 10) 大野瑞絵、いかわとしひこ(2011)「フクロモモンガ」
- 11) 三輪恭嗣監修(2017)「エキゾチック臨床シリーズ Vol.17 ハリネズミとフクロモモンガの診療」

動物介在教育による児童の描画的関心に関する変化について

堀米陽太・花園誠(教育人間科学部 こども学科)

キーワード：生活科、国語、動物介在教育、描画

1. はじめに

本学では、動物介在教育研究部が学生有志により組織され、上野原市内の小学校や幼稚園・保育園・認定こども園で動物介在教育活動に取り組んでいる。本学のAAEではハムスターやモルモットそしてイヌなどの一般的にはペットとして飼育されている動物に加え、ヘビやカイコなどの様々な動物をAAEに用いている。どの動物をAAEに用いるかは、その都度対象校の児童数や教育環境などを勘案して決定している。この時、教育者側からの観点で教育目標に叶う動物を教材として選定しているが、実際に児童がどの動物に対して強い関心を持つのかについては、未だに詳細な検討はされていない。

心理学分野の研究では、言葉や文字での表現が限られている幼児を対象に、描画による心理検査が行われてきた(柿沼ら, 2015)。描画は子どもの内面を反映するとも考えられていて、保育園や幼稚園、小学校などでは自己表現の方法として用いられている。そして描画による児童、生徒の心理検査は幼稚園や小学校、中学校などの教育機関などでも用いられている。

動物介在教育活動による動物に対するイメージの変容については様々な動物について研究されてきた。荒島(2012)は動物介在教育によりウサギのイメージが向上することを示した。また動物介在教育は認知度の高い動物だけでなく、認知度の低い動物についてもそのイメージも向上させる(浦本, 2014)。しかし、本学で実施している「様々な動物を用いた状況下ではどの動物のイメージがより向上するか」については相対的な検証はされていない。また、同様の状況下描画表現においてはどの動物の彩色がより変化するかについても相対的な検証はされていない。

2. 本研究の背景

本研究では、「動物の写真を見た際の児童による絵画」と「その後動物ふれあい教室を体験した児童の絵画」を比較し、動物介在教育を体験した児童の動物に対する興味や関心の変化を絵画表現から調査することを目的とした。

3. 材料と方法

1) 実施校

本研究は、山梨県山間部の小学校に通う小学生一年生44名(男児: 26名 女児18名)を対象にして担任教諭の協力のもとに実施した。

2) 動物

ふれあいをする動物として以下の5種類の動物を用いた。

ハムスター(学名: *Mesocricetus auratus*, 和名: ゴールデンハムスター)

アオダイショウ(学名: *Elaphe climacophora*, 和名: アオダイショウ)

ウコッケイ(学名: *Gallus gallus*, 和名: ウコッケイ)

カイコ(学名: *Bombyx mori*, 和名: カイコ)

イヌ(学名: *Canis lupus familiaris*, 和名: ウィペット, ミックス(マルチ

ーズ×トイプードル), トイプードル)

それぞれ哺乳綱・爬虫綱・鳥綱・昆虫綱と、綱のレベルで分類した時に、分類に偏りがないように配慮した。

3) 実践の場

本研究は本学の動物介在教育研究部が運営する「動物ふれあい教室」の機会を利用して実施した。本実践の実施校における動物ふれあい教室は、生活科および国語の授業支援として毎年実施されている。今回は国語の授業支援として国語の時間中で「動物ふれあい教室」を実施した。

実施場所は体育館であった。5ブースを並置し、1ブース当たりの配分時間は10分程度とした。各ブースには、「ハンドラー」と呼ばれる大学生を1~3人配置。小学生は5グループに分かれ「班付き」と呼ばれる大学生と共に5ブースをローテーションする運営方式とした。また、今回の活動では各児童が動物を観察する時間を設けた。

4) タイムテーブル

進行は、前半2ブース計20分、そして観察20分、さらにトイレ休憩を挟み後半3ブース計30分とした。

5) ふれあいブース内容

各ブースのふれあい内容は以下の通りである。

① 手順

- i. ブースの前に児童を1列に整列させ、「よろしくお願いします。」と挨拶をする。
- ii. ハンドラーは児童に自己紹介をして、児童を2グループに分けて座らせる。
- iii. 触る時の注意点や触り方を説明し、児童の手の消毒をする。
- iv. 動物を児童の前に移動し、一人ずつ順番に触る。
- v. 児童が全員触ったことを確認してから動物をケージに戻す。
- vi. 動物の生態のクイズを行う。
- vii. 動物をケージから出し、もう一度児童に触らせる。
- viii. 再び手の消毒を行う。
- ix. ブースの前に児童を整列させ、「ありがとうございました」と挨拶をする。

② 観察方法

カイコ・ハムスター・ヘビ:透明なケージに動物を入れ観察。

イヌ:お座りをした状態にして観察。

ウコッケイ:サークル内に放鳥して観察。

各児童は触れ合いとは別に観察をする動物を1種類事前に選択し、前半2ブース、後半3ブース間に20分間選択した動物を観察した。児童はその観察時間に動物を観察しながら気が付いたことをノートに記入した。



図1. 体育館内で動物の説明をする学生



図2. 教室内で描画している様子



図2. 体育館内で動物を観察する児童

6) 絵画調査方法

活動の前と後に絵画を用いた調査を行った。八つ切サイズの画用紙とクレヨンを配布し描かさせた。この時、児童一人一枚ずつ、動物の写真がセットになって掲載されたものを渡し、それを見ながら描いてもよいことにした。所要時間は、説明を含み概ね 40 分で、総合の授業内に実施した。



図1. 動物の写真

7) 質問紙の内容について

事前と事後で同一の質問とし、その回答の変化から効果を判定した。

8) 絵の計測及び評価方法

本論文では、児童の絵について対象物の大きさ、色の使用数、細部の精密さ、環境描画の4点から評価した。

9) 児童の描画対象とした動物の選択履歴の分類

今回の描画活動に関して事前・事後の描画対象とした動物の選択履歴実際について観察した動物の関連で以下に示すA・B・C・D・Eの5群に分類した。

A群; 事前に描いた動物の観察をして、事後も同じ動物を描いた児童。

B群; 事前に描いた動物の観察をして、事後は違う動物を描いた児童。

C群; 事前に描いていない動物の観察をして、事後も同じ動物を描いた児童。

D群; 事前に描いていない動物の観察をして、事後に観察をした動物の絵を描いた児童。

E群; 事前に描いていない動物の観察をして、事前に描いても観察もしていない動物の絵を描いた児童。

10) 統計処理

本研究におけるすべての統計処理はExcelを用いた。有意差の検定にはウィルコクソンの符号順位和検定を用いた。

4. 結果

1) 絵画回収率及びアンケート回収数

絵画の全回収率は、事前44枚(100%) 事後44枚(100%)であった。また、アンケートの回収率は、事前44枚(100%) 事後44枚(100%)であった。

2) 動物ふれあい教室の事前事後で描いた動物の変化

(1) 活動前に描いた動物種

全児童44名の中、ハムスターを描いた児童は27名、イヌは2名、ウロコケイは1名、カイコは4名、へびは9名であった。過半数を超える児童がハムスターを描き、次いで全体の2割となる9名の児童がへびを描いた。次に描いた児童が多かったのがカイコで、4名であった。

(2) 活動後に描いた動物種

全児童44名の中、ハムスターを描いた児童は19名。また、イヌは

3名、ウコッケイは5名、カイクは5名、ヘビは11名であった。最多なのはハムスターの19名であったが、事前の27名より減少は、過半数を下回った。カイクは事前と人数は変わらずであったが、他のイヌ・ウコッケイ・ヘビは人数が増加していた。

3) 児童の描画対象とした動物の選択履歴

描いた対象が事前と事後で同じA・C群は20名、描いた対象を事前と事後で変えたB・D・E群は24名と対象を変えた児童は過半数を超えた。

同じ対象を描いた児童は共通して「可愛いから」「好きだから」と元々持っていた印象を選出の理由としていた。対象を変えた児童は「好きになった」「触ってみたらよかった」など動物介在教育を通して印象が変わったことを理由としていた。しかし、中には「同じ動物を描いてもつまらないから」という回答もあった。

4) 描画した動物を選択した理由

児童の感想を以下に示す4つに分類した。「かっこいい」「かわいい」は視覚的な要素から「視覚」、「ふわふわしていた」は実際に触れ合ったことから「触覚」、「触ったらよかった」は体験後の印象から「半断」、「簡単だから」は描画表現から「表現」とそれぞれ定義した。事前では写真から得られる情報である「視覚」を理由とした児童が8割以上を占めた。事後では事前と同様、最多は「視覚」であったが16名と約3割に減り、「表現」が3名から12名と大幅に増加した。また、「触覚」も9名と約2割の児童が属した。「半断」も5名から7名と微増し、減少したのは「視覚」のみだった。

5) 絵の評価

(1) 大きさの比較

動物・全体ともに描画面積の平均値は増加した。特に動物の描画面積の増加は事前事後の動物に限らず増加していた。全体として動物の飼育環境や餌などを描画する児童が多く、動物介在教育での体験が絵に表れている児童の絵が多かった。

(2) 色の使用数

色の使用数は動物、全体どちらも活動後に増加した。動物単体の使用色数は0.7色増加し、約3人に2人が事後に使用する色を1つ増やしたと解される結果であった。全体では1.71増加し、事後に各児童1色以上の使用色数の増加があった。動物、全体の両方ともに事前に比べ、事後に有意な使用色数の増加が認められた。

(3) 動物の細部の精密さ

事前は全44名中動物の細部に記述が見られたのは1名だったが、事後になり15名と増加した。

(4) 環境描画

環境の描画は事前15名より13名増加し、28名となり過半数を上回った。動物介在教育で体験したことを絵で表す点が見られた。

5. 考察

1) 選択した動物の変化

動物介在教育後に選択数により大きな変化が認められたのはウコッケイとカイクであった。理由としては「初めて触った」や「触ったらよかった」など直接体験を挙げる児童が多かった。ハムスターやヘビは、動物介在教育による影響よりも児童の先入観を選択の理由としたらしい児童が多く、動物介在教育による影響はあまり認められな

かった。

男女の比較をすると、事前事後の両方とも男女差が大きく表れた。事前は男女ともにハムスターを選ぶ児童が多く、男児は同等にヘビの描画も見られた。それに対して、女児は全員がハムスターを選択した。事後の描画では男女ともにハムスターを選ぶ割合は減少したが、男児はハムスターの割合が過半数を下回ったのに対し女児は依然として過半数以上をハムスターが占めていた。以上のことから、今回の実践に関しては、女児のほうが動物介在教育の影響は少なかったと思われる。

2) 描画した動物を選択した理由

動物を選択した理由には明確な男女差が認められた。それぞれ事前では視覚的要因が大きな割合を占めたが、男児は事後になり「表現」を理由とした児童の割合が最も多く占めるように変化し、しかし女児は視覚的要因が大きな割合を占めたままだった。

3) 絵の評価

男児と女児の変化率を考察すると、男児は絵全体の増加率が非常に高く、動物単体の増加が少ないことが特徴であった。対比すると女児は動物、全体共に増加する傾向にはあるが男児の増加率と比べると低い。以上のことから男児は動物そのもののみではなく、動物を含めた環境全体に対する関心がより高いと思われる。対比すると女児は動物そのものに対する関心がより強いと思われる。

また、動物の細部に関する描画を男女で比較すると、事前では目立った男女差は認められなかったが、事後では男児で細部の描画割合が増加していた。男児のほうが動物介在教育を通し動物の細部について関心を持ったと解され興味深い。

5) 今後の展望

本研究では動物介在教育を体験した児童の描画に対する変化を調べた。その結果、絵の大きさ、使用する色、細部の描画、環境描画とすべての面で増加傾向が見られた。また、男女差を比較したところ、男児のほうがより動物の細部や動物をとりまく環境を描画するように変化するらしいことが示された。男児と女児では影響のされ方が違うらしいことは、動物に対する関心に何らかの差異があることが示唆される。今後のプログラム開発に向けて留意したい。

謝辞

本研究を行うにあたってご協力いただいた禾生第一小学校の児童、先生方、動物介在教育研究部の学生、花園研究室の皆様、触れ合い参加した動物たちに厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 磯部錦司(2006) 「子どもが絵を描くとき」
- 扇田博元(1999) 「絵による児童診断ハンドブック」
- 荒島(2012) 「ウサギを用いた動物介在教育の実践」
- 松浦小百合(2009) 「中学生に対する美術教育と動物題材教育のコラボレーションの試み」
- 佐藤かよこ・寺尾慧 芸術による教育の会(1986) 「子供のころは絵でわかる問題児はなぜつくられるか心のゆがみを絵でチェックする」
- 北川 民次(1970) 「子どもの絵と教育」
- VIKTOR LOWENFELD(1956) 「子どもの絵 両親と先生への手引き」

哲学ワークショップ・プログラム

『なぜ・なに？ どうして？：自由に考えるっておもしろい』の開発と実践 —「あだちの大学リレーイベント企画第15弾」

帝京科学大学子どものための哲学ワークショップの活動報告 —

榊原健太郎（総合教育センター）・林和馬・矢澤雅弘・大山智子（教育人間科学部 学校教育学科）

キーワード：あだちの大学リレーイベント企画、子どものための哲学ワークショップ、小学3・4年生とその保護者、「対話」する哲学の体験、「コミュニケーション能力」のその先へ

1. はじめに

本学の地域連携推進センターでは、2018（平成30）年度の活動の一つとして「あだちの大学リレーイベント企画第15弾 帝京科学大学子どものための哲学ワークショップ『なぜ・なに？ どうして？—自由に考えるっておもしろい—』を開催した。

本稿では、本活動の概要をはじめ、小学3・4年生とその保護者を対象として開発した哲学ワークショップ・プログラムの内容と本活動におけるその実践、ワークショップ参加者からのアンケート結果などについて、本活動のパンフレット資料やワークショップの実施風景などの写真を交えながら報告する。

2. 活動の概要

2-1. 活動の日時・会場

本学の地域連携推進センターでは、2019（平成31）年3月2日（土）の9:30から16:30まで、千住キャンパスの附属図書館にて「あだちの大学リレーイベント企画第15弾」として「帝京科学大学子どものための哲学ワークショップ『なぜ・なに？ どうして？』」を開催した。

2-2. 「あだちの大学リレーイベント企画」の概要

「あだちの大学リレーイベント企画」とは、足立区内の6つの大学が連携して各大学の特色を生かしたイベントをリレー形式で実施することである。「大学が持つ知の還元」、「大学と地域とのつながりの創出」、「地域への大学のPR」を図ることを目的とする催しとして実施されている。15回目（「第15弾」）を数える今回のリレーイベントは、本学が担当した。

2-3. 「あだちの大学リレーイベント企画第15弾」の意図

今回の「あだちの大学リレーイベント」では、これから到来するであろうAI社会を生き、そして未来を拓いてゆく子どもたちに「伸び伸び、深く、考える体験」を通して「考えるチカラ」「問う力」を伸ばしてもらうこと、また「対話」する哲学を通じて、「コミュニケーション能力」のその先の、さまざまな知性・感性のあり方を想像してもらうことを意図して、本学の総合教育センター（共通・教養教育を主管）の教員であり、地域連携推進センターの構成員（兼プロジェクト・コーディネーター）である筆者が「子どものための哲学ワークショップ」を実施した。

3. 「子どものための哲学ワークショップ」の概要

3-1. ワークショップの参加対象

さて、このワークショップ参加対象については、主に足立区シティプロモーション課と本学との調整によって、足立区内の小学3・4年生とその保護者が設定された。ワークショップ開催日の1カ月半程度前より、足立区内のすべての小学校の3・4年生の児童に対して、本イベント開催の告知とイベント参加申込書をかねたチラシを配布し、参加者募集を行った（図1）。

チラシの配布に当たっては、足立区シティプロモーション課や足立区教育委員会等のご協力を頂いた。

3-2. ワークショップの実施回数、および各回の参加定員

今回の「子どものための哲学ワークショップ『なぜ・なに？ どうして？—自由に考えるっておもしろい—』」は、「1回90分」のワークショップを、合計「3回」の実施回数に分け、各回の参加者を「総入れ替え」するスタイルにて実施した。（なお、ワークショップのプログラム内容は、各回共通。）

参加定員は、各回20組40名。児童1名とその保護者で「一組」とかぞえ、申込書には「保護者の方もワークショップに参加していただきます」と明記した。先述のとおり、「足立区内の小学3・4年生とその保護者の方」が「共に」「一緒になって」参加していただくことを特色とする「子どものための哲学ワークショップ」だからである。



図1. 「子どものための哲学ワークショップ」配布チラシ

3-3. 申込者数、及び実際の参加者数

募集の結果、「60組定員」のところ、117組もの申込みがあった。

なお、当日の実際の参加は、(体調等の理由による欠席者などがありながらも)「56組」であった。児童56名、保護者59名の計115名が「子どものための哲学ワークショップ」に参加した。

3-4. ワークショップの時間割

なお、各回のワークショップの時間割は次の通りである。

- 1回目 / 9:30~11:00 (受付開始 9:00)
- 2回目 / 12:30~14:00 (受付開始 12:00)
- 3回目 / 15:00~16:30 (受付開始 14:30)

上記のように、実施回数「3回」という(この種のワークショップにしては比較的多い)数を確保したねらいは何か。それは、一つは、プログラムにとって「適正な人数」(20組程度以内)にて実施するということである。さらに、もう一つは、『なぜ・なに? どうして?—自由に考えるっておもしろい—』というテーマや「子どものための哲学ワークショップ」といった項目に興味・関心を抱く足立区内の小学3・4年生とその保護者に、「ひとりでも多く」この「対話」する哲学のワークショップに触れる機会を提供するということである。つまり、これらの条件を同時に成立させたいという願いに他ならない。そこには行政サービスの一環として本イベントを推進する足立区シティプロモーション課の方々の真摯な熱意も織り込まれていた。



図2. 会場エントランスの風景

4. ワークショップの実施内容

4-1. プログラムの背景と特徴

「子どものための哲学ワークショップ『なぜ・なに? どうして?—自由に考えるっておもしろい—』」のプログラムは、ワイキキ小学校等の米国・ハワイ州の小学校(および中学・高校・大学)で推進されている「子どものための哲学(Philosophy for Children)」のハワイアンスタイルをその由来として、日本の小学3・4年生生とその保護者に向けに開発したプログラムである。このプログラムは「対話を軸とした」哲学教育プログラムであることと、「小学生と保護者が共に」参加できることに大きな特徴がある。今回のワークショップは、そうした背景や特徴を持つプログラムを「小学生と保護者」に「共に」体験してもらいつつ哲学的な思考や感性を醸成するための機会を提供するものであった。

4-2. プログラムの内容

今回のワークショップにおいて実施した『なぜ・なに? どうして?—自由に考えるっておもしろい—』のプログラムは次の通り(各回共通)。

- オープニング(はじめのあいさつ・趣旨説明・講師等紹介)(5分)
- ワーク1・「おはなし作りあそび」(20分)
- ワーク2・「しつもん(質問)ゲーム」(20分)
- ワーク3・「たいわ(対話)の時間」(20分)
- 休憩(5分)
- 特別プレゼント企画(対話用グッズ工作)(15分)
- クロージング(おわりのあいさつ・アンケート協力依頼)(5分)



図3. オープニングでの趣旨説明の様子

4-3. プログラム進行の様子

ワークショップでは、参加者が4~6名程度の(小学生と保護者を含む)グループに分かれてストーリーキューブ(ユニークな絵が描かれているサイコロ)を転がして出た目の絵をもとに一つのストーリーを自由に創作する「おはなし作りあそび」(ワーク1、図4)、「一日のうちでいちばん好きな時間はいつですか?」など設定したテーマに基づいて参加者が順に自分の意見を言って他の参加者から質問をもらう「しつもん(質問)ゲーム」(ワーク2、図5)、さらに、子どもたちと保護者たちとの二つに分かれてもらい、「友達って必要?」「なんで勉強するの?」「苦手なコトもやらなきゃいけないの?」など問い(テーマ)に沿って、意見を交わしつつ問い(テーマ)を掘り下げる「たいわ(対話)の時間」(ワーク3、図5)など、三つのワークを中心に体験してもらった。



図4. ストーリーキューブを使った「おはなし作りあそび」の様子



図5. 「しつもんゲーム」の様子



図6. 「たいわの時間」の様子

ワーク終了後には、特別プレゼント企画として、「たいわ（対話）の時間」の中で使用した通称「コミュニティーボール」（対話的な思考やコミュニティーの形成を誘起するハワイ由来の対話用グッズ）を、参加した親子で一緒に実際に工作してもらい、各組（各家庭）に一つずつ「子どものための哲学ワークショップ」の記念のお土産として自作のオリジナルなコミュニティーボールを持ち帰ってもらった。さらに、参加記念のプレゼントとして、帝京科学大学のロゴ入りのオリジナルハンドタオルが各組の一つずつプレゼントされた。



図7. 「コミュニティーボール」作りの様子

5. 活動を終えて

5-1. ワークショップを終えて

ワークショップ終了後の会場では、参加した子どもたちからは「おはなしづくりがおもしろかった」「対話の時間がよかった」「ハワイに行ってみたくなった」「学校の勉強よりつかれた」、また保護者からは「大人向けの哲学ワークショップも開催してほしい」「フラ（ダンス）のスピリットともつながる面があるように感じられた」「親子で一緒に考える機会を持つことができうれしかった」といった多様な感想を頂いた。

5-2. アンケート結果

ワークショップ終了後に実施したアンケートについて次項以下に紹介する（なお、区内6大学の認知度比較に関する項目に限り、紙幅の都合上、割愛する）。同アンケート実施と集約・集計等においては足立区シティプロモーション課のご協力を頂いた。

5-3. アンケート結果—アンケート回答者：小学生—

① 回答数

	人数
3年生	25名
4年生	26名

② 満足度

満足度の五段階評価（結果）：4.7

項目	%	人数	1回目	2回目	3回目
とても楽しかった	71.7%	38名	12名	14名	12名
楽しかった	26.4%	14名	7名	2名	5名
ふつう	2%	1名	—	—	1名

③ 勉強になったか

項目	%	人数	1回目	2回目	3回目
とても勉強になった	59.7%	31名	10名	11名	10名
勉強になった	31.5%	17名	8名	3名	6名
ふつう	11.1%	4名	1名	2名	1名

④ 「楽しさ」と「勉強になったか」の関係

- ・「とても楽しかった」と答えた38人のうち、
28人が「とても勉強になった」
7人が「勉強になった」
2人が「ふつう」

- ・「楽しかった」と答えた14人のうち、
3人が「とても勉強になった」
9人が「勉強になった」
2人が「ふつう」

・「ふつう」と答えた1人は、「勉強になった」と回答

⑤ 自由意見

● 小学校に自習できた先生が帝京科学大学の生徒で、今回の「なぜ・なに? どうして?」に学生ボランティアとして出ていたのを知ってとても驚いたと同時に、とてもうれしく感じました。また、今回のワークショップでは、哲学の勉強をできたうえに、とても楽しかったので、心からうれしく思います。
● 一番最初のサイコロがおもしろかったです。ポンポンがもらえてうれしかったです。
● 哲学を学校で習わないから良い勉強になりました。
● 色々なことが分かってうれしかった。
● 学校の勉強より疲れた。
● 人の意見を聞いて色々な意見があつて面白かった。
● みんなの様々な意見を聞いてよかった。
● とても勉強になったから楽しかったです。
● 哲学のことをとても知れたので勉強になりました。
● コミュニティーボールをつくるのが難しかったです。考えたことないことを考えることができました。
● お話作りが楽しかったです。
● 人のことも知れたし、知らない人とも仲良くなりました。
● 対話の時間が面白かった。ボールをつくるのが大変だった。
● すごく楽しかったです。
● みんなで話し合うときに1回だけ自分で意見を言ったけれど、心の中、頭の中で考えているみんなの気持ちを知れて良かったです。最初はどんなことをやるかわからなかったけれど、とても楽しかった。
● みんなで対話をして自分の意見を言えてよかった。今日やったゲームを家に帰ってやりたいです。
● 気軽に色々なことを話せて良かったです。
● みんなの意見や自由に考えること、哲学を学びました。とても楽しく、勉強になりました。また来たいです。
● みんながそれぞれ自分の個性を持っているところがすごいと思った。
● 人によって思うことがまったく違うことを感じた。
● みんなの意見がそれぞれ違うんだなと思った。大人になると意見を聞いたりできないからとても楽しかった。
● みんな人工知能のことや、色々なことをよく知っているなと思いました。
● お話作りが楽しかったです。
● 人それぞれの感想や意見があつて、そうだねと思うのがあつた。

● 自分の考えがとても不思議なように素早く頭に浮かんだ。
● 自分の考えが言えた。
● 一番最初の話を作るやつは、不思議なものがあつたけれど、色々な考え方があつて面白かったです。
● 「友達が必要か」の問いで、改めて必要なときもあれば必要のないときもあると思いました。
● 普段友達と遊んでいる中で思いつかない遊びがあつたので、今度友達とやってみたいです。
● ゲームがいっぱいで楽しかった。ゲームとかテーブルもハワイ風で面白かった。
● 色々なことを自由に発表したりするのは楽しかった。
● とても楽しいワークショップでした。
● 気持ちを伝えることは大切だとわかりました。
● 自分の考えを発言することが楽しかったです。
● みんなで話し合っていて楽しかった。
● 友達は大変なことがわかった。
● 帝京科学大学では、こういう勉強をしているんだとわかりました。
● 勉強になった。
● 友達が必要だけど、必要じゃないという人もいてびっくりした。みんなの話を聞けたし勉強になった。サイコロを振って、話をつくるのがとても楽しかった。ハワイに行きたくなった
● 僕もやらなきゃいけないことはしっかりやります。

5-4. アンケート結果—アンケート回答者：保護者—

① 応募にいたるまで

項目	人数
お子様が行きたいと言った	26名
保護者の方が行きたいと言った	28名
その他	1名

② その理由 (①について)

i) 「お子様が行きたいと言った」と回答した方

● ハンカチがほしい。
● 哲学って何だろう? という好奇心で応募したようです。
● なんとなく楽しそうだったからと言っていました。
● おもしろそうだったから。
● 大学が何するところか知りたかった。
● 何か楽しいかなと思ひ。
● 学校でもらったプリントを見て。
● 日々なぜなぜが多いので。
● 以前別の講座 (英語) で帝京科学大学に来たことがあつたので。
● ハワイの哲学ってなに?
● 何をやるのかわからなかつたので興味があつた。

ii) 「保護者の方が行きたいと言った」と回答した方

● 楽しそうだったから。
● 疑問が多かったので。
● おもしろそうだから。
● 「考える」を自分もしてみたいし、子どもにも機会を与えられたから。
● 「どうしてやらなきゃいけないの？」と質問されることが多いので、一緒に考え方を学ぶきっかけになったらと思ったため。
● 子どもの「なぜ」などが多かったから。
● 子どもに考える重要さを知ってもらいたい。
● 「行ってみない？」と聞いたら「行くと」。
● 答えのない質問について考えるというのが面白いと思ったから。
● 子どもと一緒に考えたかったから。
● いつもと違う体験をしてほしかった。
● 常に何でどうしてと言う子だから。
● パンフレットを見て面白そうだったから
● 考えることに興味があったから。
● 考えるプロセスへの関心。
● 哲学に興味があり、子どもも考え方を広げられそうだったから。
● 話を聞く、話すを見たかったから。
● 色々なことをチャレンジさせてみたいから。
● 昔、心理学に興味があった。仕事をしていて「心」を考えるのが重要だと思った。
● なんて勉強するのかの回答を知りたかったため。
● 大学という場所を見せたかった。テーマに興味があったから。
● 大学でのイベントに参加させてみたいと思ったから。
● ハワイ式哲学という言葉に目が行きました。面白そうと思いました。
● チラシのないように興味をもったから。
● 哲学は初めてだったので興味があった。
● 考えることが苦手な息子のために。
● なぜ？なに？について考えるのがおもしろそうだったから。

③ お子様の満足度

満足度の五段階評価：4.34

項目	%	人数	1回目	2回目	3回目
とても満足した	43%	24名	7名	7名	10名
満足した	48%	27名	10名	10名	7名
ふつう	9%	5名	2名	1名	2名

④ 保護者の満足度

満足度の五段階評価：4.18

項目	%	人数	1回目	2回目	3回目
とても満足した	30%	17名	6名	7名	4名
満足した	57%	32名	12名	9名	11名
ふつう	9%	5名	1名	1名	3名
あまり満足しなかった	1.8%	1名			1名

⑤ 自由意見（大学に期待していること）

● 若い人が他の区からも来てくれると区の雰囲気が変わると思う。
● 人口増加、定住に期待しています。
● 今回のように、大学でどのようなことが行われているのかを体験できることはありがたいと思います。授業の様子が見られるのも良いかと思ひます。
● ロジックシンキングのセミナーを開いてほしい。
● 大学生と子どもたちの交流の場がけっこうあるので、もっとたくさんあるといい町になるなと思ひました。
● 子供向けイベントを学校などに来てやってもらいたい。
● このようなイベントは興味深く、今後も期待しています。
● 足立区内の小学校にもっと関わってほしいと思ひます。
● 地域の子どもたちへ様々な学ぶ機会を与えてくださることを期待しています（音楽・美術なども）。
● もう少し小さなグループで全ての子どもに話す機会があるワークショップ。
● 子どもと一緒に参加できるワークショップを今後も開催していただきたいです。
● 子ども向き、大人向きに文化的な講座を色々やってほしい。手軽に行けることで、皆の興味が出て区の文化度が上がっていくのだと思ひます。
● 楽しく、または遊びながら学べるイベント。
● ワークショップなど開かれた企画で、将来について考えるきっかけができれば良いと思ひます。
● 子どもたち、大人たちが学習に興味を持てるようなPRを期待します。
● 知恵の獲得。
● 小中高のうちに大学との関わりをもたせることで、大学に行きたいと思ひ子どもが増えると思ひますので、今回のようなイベントがあると良いと思ひます。
● 小学生のうちから「学ぶ」ということに興味を持てるよう、ワークショップをたくさんやってほしい（小学校の授業はつまらないので）。

● 問う力、答える力を養ってほしい。
● 小さいうちから大学とは…みたいなのを知ることができる機会があるとうれしい。
● 学生のみなさんが楽しいキャンパスライフが過ごせますように。
● 大学の専門を生かして専門的なことを子ども向けにアレンジして連続でやってほしい。実験はあまり機会がないので、やってほしい。自由研究を半年くらいかけて、伴走してくれるような講座があると達成感のある体験ができそうです。
● 足立区子どもたちに向けてイベントや講座・講習等を行ってほしい。
● それぞれの大学に興味を持てるようなワークショップを開催してほしい。
● 各大学の専門性を生かしたものをもっとたくさん教えてほしい。
● 足立区子どもたちに教育面でこういうワークショップをもっと行ってほしいです。

6. 学生アシスタントの声

6-1. 学生アシスタントと本プログラム

最後に、本プログラム進行に協力した学生アシスタントから寄せられた声の一部を示す。学生アシスタントは、本ワークショップに関する事前研修（プログラムの概要・意図や学生アシスタントの役割の理解等についての研修）を終えた上で、参加者たちに共に（参加者に混じって）参加した方々である。こうした学生たちの声は、本活動についての理解を促進する手助けとなるばかりでなく、本活動が有する重要な側面を覗かせてくれる貴重な資料でもある。

6-2. 学生アシスタントAさんの声

①ワークショップに参加した感想

「子どものための哲学ワークショップ」というイベントを最初に聞いた時、何を行うのか、また学生アシスタントとして何をすれば良いのかなどほとんどわからないまま事前研修に参加した。しかし、学生アシスタントとしての役割やプログラムの概要や意図や進行を把握することができた時、単にアシスタントとしてだけではなく、自分自身も参加者のひとりとして主体的に参加したいと思った。当日は、子どもや保護者たちと一緒に活動しながらイベントの流れを円滑に進める中で、自分も多くのことを学ぶことができた。まず、子どもと話したり、対話したりすることで、今の小学生がどんなことを考えているのかななどを、見て学ぶことができた。保護者からも、自分より年長の人の考え方、子どもに対しどう接し、どうなって欲しいと思っているかを知ることができた。特に「友だちって必要？」という問いをめぐる対話では、「友達」の定義が人によって異なっており、相手への利害関係を考えずに接することができる相手が「友達」であるという考えには非常に共感を持った。一方で友達は必要ではないという意見もあり、普段会うことのない様々な人から普段話さないことを聞き、自らの意見を発する機会があることの重要性を知ることができた。

②今後の自分にどのように生かすことができるか

「哲学」は、小学校の授業の枠に当てはめるならば「道徳」や「学

級活動」の内容に近いと考える。今回は「おはなし作り（ストーリー作り）」「質問ゲーム」「対話」という三つのワークを行った。私はいずれも小学校の活動の中に取り入れることができるものだと考えた。「ストーリー作り」「質問ゲーム」は、年度始めや宿泊行事前のオリエンテーションなど、周りが新しい環境の時の児童間の関係形成の導入に対して有効であると考えている。「対話」についても、通常の授業、特に国語や社会といった文系科目での活動や学級活動で、今回の様な対話の方式を使うことができると考える。機会があれば、実際の学校現場で今回の活動を取り入れていきたい。

③哲学と他教科との違いに関して

国社数理英などの教科は、ある一定の知識や技術、教養を身につけることが主な目的であると思う。しかし、哲学は、答えがある、ないに関わらず、常識などに疑問を持たせ、まず自分の考えを振り返り、他者の考えを聞き、それを統合して自分の知識や考えを昇華させていくことであると考えた。

6-3. 学生アシスタントBさんの声

①ワークショップに参加した感想

子どもたちは、哲学について興味や関心を持ち、考えながらテーマについて話していた。内容的には大人であっても難しいと感じたが、子どもたちが、自分の生活の場面に置き換えて発言していた点など、自分としてはおもしろい発見のできる良い機会だった。

②今後の自分にどのように生かすことができるか

今回の活動で、どのように考えを砕いていくのかという流れが少しは分かったが、もう少し経験値をためて、学校における「道徳」「特別活動」等の授業で使っていきたい。

③哲学と他教科との違いに関して

哲学は、単に知識を身につけていくものではなく、その場で感じたことを発言できることだと考える。今までの経験や今後のことを想像しながら好きなように発言ができるため楽しい雰囲気でも物事を考えられると感じた。

謝辞

ご参加下さった皆様をはじめ本イベントに関心をお寄せ下さった皆様、本活動の推進・実施にあたってご尽力頂いた足立区シティプロモーション課をはじめとする足立区の関係各位、そして本活動にご尽力・ご助言くださった本学教職員・学生スタッフの皆様へ、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

地域連携活動実践報告



動物が他者との交流の潤滑油に！！居場所づくりに向けて

REPORT

教員助成

動物介在更生保護プログラム

山本真理子 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

目的

更生保護施設とは刑務所の仮釈放者や出所者が一時的に入居する施設であり、住食・就労支援・生活指導等を提供することで入居者の円滑な社会復帰をサポートしている。本活動は更生保護施設の(元)入居者を対象に「社会参加・地域交流の促進」「生きがい・居場所づくり」を目的とした動物介在介入 (Animal Assisted Intervention: AAI) を実施した。また、持続可能なAAI システム開発も目的とした。

内容

施設スタッフと連携し、対象者の状況・希望や活動への参加回数等を踏まえて、動物(犬・猫・ウサギ)との触れ合い、犬とのコミュニケーション、新しい動作のトレーニング(犬)、動物や動物のケアに関する勉強、散歩(犬)を実施した。

成果

本活動は2015年より継続して実施している。これまでに43回(2018年度:11回)実施し、延べ参加人数は97名(2018年度:22名)であった(2019年3月13日時点)。

課題

AAI は多くの場合、ボランティアにより行われている。AAI への期待が高まる中、専門的な技術・知識を持つ者が本学をはじめ複数の教

育機関で育成されているものの、社会で活躍できる場が限られているのが現状である。本活動はボランティアに頼らない「持続可能な AAI システム開発」を一つの目的とした(図1)。具体的にはAAI の実施を一つの場所に集約し、対象者に実施場所に向かいってもらうシステムを考案した。これにより頻度の少ないAAI を補いつつ、実施者と動物の負担を軽減することを期待した。さらに、各施設から負担のない程度の費用負担をしてもらうことで、サービスに対する対価が発生する仕組みを作ることも長期的な目標とした。しかし、実際にはいくつかの課題(例:対象者同士の相性への懸念、実施場所までの移動の負担)から計画通りの実施とはいかなかった。そのため、更生保護施設入居者の属性に合った方法をさらに検討する必要があることが示された。

今後の予定

現在の活動を継続し、活動の効果を客観的に明らかにしていく。また、更生保護施設ごとに状況が異なることから、AAI を実施したことのない他の施設とも連携を図ることで、持続可能なAAI システム開発に向けてより多くの意見を収集する予定である。



図1. 持続可能なシステム(案)



生きものの価値を多くの人たちへ伝え、そして広める

REPORT

教員助成

生息域内外における啓発活動の普及 —地域環境資源を次世代につなぐ—

江田慧子（教育人間科学部 学校教育学科）

木場有紀・新家智子（教育人間科学部 幼児保育学科）

目的

昨年度は絶滅危惧種のおオルリシジミに関する手袋シアターの手遊びとプラ板によるキーホルダー作りという2つの教材と教育プログラムを開発することに成功した。今年度はそれらの教材を使って、おオルリシジミが生息している熊本県と長野県、生息していない足立区生物園でプログラム実施を行った。

内容と成果

2018年6月2日に長野県で行われたおオルリシジミの観察会に参加した。おオルリシジミや食草であるクララの状況を確認した。おオルリシジミに関して、実際の翅の色あいや卵の大きさや産卵場所を細部まで観察し、手袋シアターの色の変更とプラ板の発色の調整を行った。

2018年11月25日に熊本県では、おオルリシジミの講演会と教材の発表会を行った。40人定員の講座であったが、事前予約で満員となった。講演ではおオルリシジミの生態や現状、これからの保全方法について提案した。その後は手袋シアターの手遊びとプラ板によるキーホルダー作りを自由参加する形としたが、ほとんどの人が参加した。地元からは「幼い子どもたちが楽しみながらおオルリシジミのことを知るきっかけ作りになる」「歌と手袋シアターはかなり若い年齢でも興味を持てる手法だと思う」という意見が出た。

2019年2月24日には足立区生物園にて、おオルリシジミのプラ板作りのワークショップを行った。親子合わせて30人が参加した。生物園はおオルリシジミと同じシジミチョウ科であるツシマウラボシシジミの飼育を行っている繋がりがあり、生息域外保全に対する意識が高い。はじめにクイズ形式で、おオルリシジミとツシマウラボシシジミについて説明し、最後に標本にすることができないおオルリシジミの自分だけの図鑑とするべく、プラ板を作成した。子どもたちは出来上がったプラ板を友達に見せたり、比較したりした。

課題

手袋シアターによる手遊びイベントの導入として使うため、短い時間しか出来ず、単体では成立できない。また作成に多大な人手と労力がかかる。一方プラ板作りはトースターを必要とするため、運搬費が発生し、電源を確保する必要がある。また、1回に1人分のプラ板しか焼成できないため複数台用意したとしても待ち時間が生じ、その間のプログラムが必要であることがわかった。

今後の予定

教材のパッケージ化を行い、多くの人たちが自分たちで保護活動ができるようにする。また、アンケート等で効果測定を行いたい。

代表者の感想・コメント

江田 慧子
（教育人間科学部 学校教育学科）



生きものの保全は一人の立場では実現しません。多くの人たちがそれぞれの立場を活かして、参加することが重要です。教材を作るにもたくさんの人が集まるともっとたくさん作ることができます。私たちと一緒に活動し、次世代へ繋ぎましょう！



帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう

REPORT

学生助成

地域住民と共に防災を学ぶ帝科学生の会

伊藤あい・落合永昌・佐藤菜々子・吉田瑞樹
(医療科学部 医療福祉学科)

目的

近年、日本各地で大きな災害が起こり、また、本学がある足立区北千住近辺は、水害のリスクが非常に高い地域と言われている。そこで、学生、防災を主活動とするボランティア団体、地域住民と一緒に自助、公助、共助、ご近助(所)について学ぶ機会を設け、皆が楽しみながら防災の知識と技術を深めることを目的とした。

内容

災害ボランティア団体であるチームあだちの協力を得て、「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」を開催した。災害時を想定した調理として、ポリ袋を使用した炊飯とカップケーキ作りを行った。また、調理の加熱中は、発災時の対応や、防災に関する知識を深める防災〇×クイズを行った。各クイズの後は、事前に用意した防災拠点のスライドを見たり、防災マップの確認を行い、参加者間で意見交換を行った。被災時に使用できる物として、タブレット型簡易トイレのデモンストレーションも実施し、新しい情報の提供も行った。

成果

参加者は33名であった。アンケート結果より、イベント全体について好評を得た。また、防災クイズでは、参加者が住む地域の避難所や給水所について再確認を促すことができた。「学生と学ぶことが

きてより楽しく過ごすことができた」という意見から、机上で防災の知識を学ぶのではなく、活動を通して地域住民と学生が交流し、楽しみながら防災に関する知識や技術を深めることができたと分かった。

課題

活動では火を使用するため、参加対象者を大人とし、実際は高齢の参加者が多かった。しかしながら、今回行った内容はどのような年齢層にも伝えたい内容である。今後は、様々な年齢層を対象とした活動内容の検討および、開催情報の周知を行っていきたいと考えている。

今後の予定

アンケートからは、「同じことを毎年くりかえしていただいても良いと思います」「避難所での具体的な生活の仕方を知りたい」「誰でもできる手軽な料理を知りたい」との要望を頂いた。次年度以降もチームあだちの協力を得ながら、学生と地域住民が共に防災や減災について学ぶ機会を設けると同時に、地域住民同士のつながり作りの場としての役割を担っていきたい。

代表者の感想・コメント

伊藤 あい
(医療科学部 医療福祉学科)

学生自身も防災・災害について学ぶきっかけとなり、イベントを通して地域住民の方と、共に楽しみ学ぶことができました。イベントの全体評価が良く次開催を望む声もあったので、本活動の結果をもとに次回の活動につなげたいです。





～関わる人に最高の笑顔とスパイスを～

REPORT

学生助成

成果

地域への貢献と活性化を目指して

(動物介在活動部)

池谷尚斗・岡崎拓実・阿部遼太郎・佐々木愛・南雲由美子
(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

目的

上野原市では高齢化が進んでおり、市民の約3人に1人が高齢者です。この現状を受け、上野原市の内科医をしている上條医師が地域活性化をねらいとし、上野原市でのアニマルセラピーの実施を提案して下さいました。このことがきっかけで現在の動物介在活動部創立に至りました。

このような経緯から、最終目的を「上野原市における継続的な認知症高齢者へのアニマルセラピーの実施」とし、目的に近づくために「そこに参加した入居者さんに少しでも“楽しいと感じてもらえるもの”や“喜んでもらえるもの”を作ること」を理念として掲げています。

内容

現在、29名の方が過ごしている市内にある老人ホーム「桜の里」で、2か月に1回の動物介在活動と月に4回程度の訪問活動の実施。介在動物として桜の里に連れていく兔を部員で飼育しています。

活動の際には、他団体の協力を得て犬・蚕などの動物を連れていき入居者さんに触れ合いや会話を楽しんでもらいます。

訪問活動では、動物は連れて行かず入居者さんと1時間程の会話やあやとり等の遊びで交流し、入居者さんとの接し方を学びます。

今年度の動物介在活動は、計3回実施し、訪問活動は昨年度26回に対し今年度は41回と大幅に増やすなど訪問活動に力を入れました。

また、今年度は施設行事(8月に花火大会、12月にワッフル作り)のお手伝いをしました。

今年度から幅広い年齢の方と関わることで対象年齢を広げる、私たちの普段の活動を知ってもらうことを目的に桂川フェスティバルと明日の風に参加を始めました。

課題

介在活動への学生参加人数が少なく、入居者さんの参加人数も限られてしまいました。

活動に行く際に使うバスのチャーター料金がいため、活動に行ける回数が少なかった。

今後の予定

活動頻度を1か月に1回に増やしたいと考えています。さらに活動領域を広めて地域活性化に貢献したいです。





子どもの心をはぐくむ会

REPORT

学生助成

子どもの心をはぐくむ会

竹村祐樹・吉田藍里（医療科学部 医療福祉学科）

目的

本活動では連携先である放課後等デイサービスの卒業生でその後も SST（ソーシャルスキルトレーニング）の活動に参加している発達障害または知的障害がある 10 代～20 代の方（1 人から 5 人）を対象に、円滑な対人関係を築くために必要なスキルを身に付けられるようにすることを目的とした。

内容

活動内容は、知的・発達障害児者を対象とし、パネルやパペットを用いたロールプレイ、寸劇を用い、対象者の感情表出を促し、心の発育を支援する活動を行なった。

アイスブレイク→頭の体操→最近の出来事の発表→ロールプレイングという流れで行った。

その際に、学生が参加者とペアを組むなどし、活動に取り組んだ。

成果

最初は人の顔写真が印刷されたパネルを用い、表情からその人の気持ちを読み取るということを行った。次に、そこから日常的に起こりうる場面を写したパネルにステップアップし、どのようにしたらその場面で円滑に対処することが出来るかを考えるという活動を繰り返し行なった結果、徐々に他者の思いも考えることができるようになっていった。また、ロールプレイングを行い自分たちで考えて実演でき

るようになり、活動当初よりも対人関係に必要なスキルを身に付けることが出来ていた。

課題

4 人～5 人の参加者に対し、学生が 2 人であったため、活動中全員を均一にサポートすることが出来なかった。学生の人数を増やす必要がある。

参加者は、自分の知っている人達の間や慣れている場所でのコミュニケーションをとることができるようになったため、慣れていない場所、人達に対しても身に付けたコミュニケーションスキルを活用できるようにすることである。

今後の予定

これまでの活動の内容や成果を学生に広め、参加学生人数を増やすと共に、活動を継続していきたいと考える。

代表者の感想・コメント

竹村 祐樹

（医療科学部 医療福祉学科）

1 年間の活動を通して、コミュニケーションや人間関係で悩みを抱えている人は少なくないと感じた。また、人それぞれ悩みが違うため、その人に合った支援を見つけることが重要であると感じた。



ボランティアで学び 新たな活動につなげる。

REPORT

学生助成

従来の水族館のボランティア活動に加え様々な活動を

(水と水の生き物のすばらしさを伝える会 AQUASHIP)

羽田飛騎 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

目的

ボランティア活動を通して山梨県立富士湧水の里水族館と連携し、水生生物を例にとりて来館者に環境について考える機会を提供することを目的とした。また、参加学生自身の知識と技術の向上をはかり、各々が様々な場面で活躍できる人へ成長することを目指した。

内容

本団体は山梨県立富士湧水の里水族館を主な活動場所としているが、今年度はさらにその経験を様々な場面で活かすことができた。

1. 「桂川フェスティバル」への桂川の水族展示ブース出展
2. 足立区の小学生の遠足における環境教育活動
3. アクアリウムさがみはら「ふれあい縁日」にブースを出展
4. 6月と12月の「障がい者乗馬会」への参加

成果

1. 「桂川フェスティバル」では上野原を流れる桂川に生息する水生生物の展示・解説を行い、参加者の方々から好評を頂いた。
2. 足立区遠足では足立区を流れる荒川と桂川との関係を解説し、水とそこに暮らす生き物とヒトとの繋がりを伝えることができた。
3. 相模川ふれあい科学館アクアリウムさがみはらにて行われた「ふれあい縁日」にブースを出展。子供向けのクイズラリー形式の環境教育活動を行った。ブースの内容を0から全く新しいものを企

画したため非常に大変であったが、幸い好評の声も頂くことができ、今後の活動への励みや自信につなげることができた。

4. 6月と12月の障がいのある方のための乗馬会「乗る・馬・体験」に参加。生き物の展示と解説を行った。この活動の歴史は長く、学外の子供たちと密に関わることのできるイベントなので、内容をさらにアップデートしていき、力を入れていきたい。

課題

現状の課題としては、長期休みによる帰省に伴い、湧水の里水族館のボランティアの参加人数が減ってしまうこと、また現在、助成頂いている資金と部費から参加者の片道分の交通費を支給しているが、それでも負担は大きく、思うように活動に参加できない部員がいることである。今後もボランティアに参加しやすい環境づくりを推し進めていきたい。

今後の予定

上野原を流れる桂川をフィールドに、教育普及活動や調査活動なども行っていきたい。

代表者の感想・コメント

羽田 飛騎

(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



今年度は水族館のボランティア活動のみならず様々な場所でその経験を活かす活動ができました。今の活発さを落とすことなく、来年度はさらに良いものとしていきたいです。



よめば見えてくる！

REPORT

学生助成

フリマガ「ネコノメ」と「広報うえのはら」を用いた本学と上野原市の情報発信

(ねこの目報道部)

鈴木沙羅 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

目的

1. 本学で日々行われている魅力的な活動を、学内のみならず学外(受験生や地域の方々など)に発信すること。
2. 地域情報や学外の話題を学内(教職員や学生)に紹介すること。

内容

AdobeIndesign を使用して、フリーマガジンの作成・発行及び、上野原市の広報誌「広報うえのはら」への記事提供を行った。

1. 冊子「ネコノメ」(年2回発行)
担当者それぞれが気になる上野原市内のスポットを訪れ、その時感じたことやその場所の紹介などを行った。
2. 広報うえのはら版「ネコノメ」(6回掲載)
上野原市の広報誌、「広報うえのはら」に隔月で記事を提供した。上野原市で行われるイベント及びスポットの紹介、大学の活動などを紹介した(各号1ページ)。

成果

当初の予定通りフリーマガジン2冊の発行と、「広報うえのはら」への掲載(6回)が行われ、学内外双方に情報発信することができた。

1. 冊子「ネコノメ」Vol.25、Vol.26
25号では、桂川河川敷で行われた音楽イベント「リアニメーション」を取材し、26号ではコモアしおつの「日本最長エレベーター」などを取り上げた。

タ」などを取り上げた。

2. 広報うえのはら版「ネコノメ」

平成30年4月、6月、8月、10月、12月と平成31年2月に掲載された。大学関連情報としては市内で行われたプロジェクトや科大祭の告知を、地域情報としては地域活性化施設「ふらっと上野原」や地域おこし協力隊が開催した「シャボン玉イベント」などを取り上げた。

課題

「ネコノメ」25号は様々なトラブルで発行が半年遅れてしまった。

今後の予定

来年度は細かいスケジュール調整を行い、締め切りをしっかりと設けることで、予定通りの発行を目指したい。また、来年度は上野原に住む地元の方を訪れるなど、もっと地域住民との交流を増やせるような企画を考えたい。

代表者の感想・コメント

鈴木 沙羅

(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



今年は様々な出来事が重なったことで、思うようにことが進まず、何度も壁にぶち当たり行き詰ってしまいました。ですが、何とか冊子・広報うえのはらを予定通り、発行することができ嬉しく思います。地域の方々や読者様がいるからこそ、今回も頑張ることができました。本当にありがとうございました。



地域住民の方々との交流を通して学んだこと

REPORT

学生助成

成果

千住探検隊

吉田藍里・有賀文恵・熊谷彩乃・鎌田零二・吉田託夢・原拓哉
篠平龍一（医療科学部 医療福祉学科）

目的

千住元町団地の住民と交流し、日常生活で困っている方のお手伝いができる関係づくりをする、生活実態を知ることです。

内容

2号館地下一階アリーナでのレクリエーションでは、元町団地の方をお招きして安全で楽しいゲームを目指して活動を行いました。レクリエーションでは、おしゃれをして来てくださる方やお隣さんと待ち合わせをして来てくださる方がおり、ご近所でのコミュニケーションのきっかけにつながったと感じます。

そして、ゲームは複数のチームにわかれ協力して勝負をするもので、優勝したチームには折り紙で作ったメダルをお渡ししました。中には、メダルをお部屋に飾ってくださる方や、入院の際に持って行って下さった方がいらっしまったことが印象に残りました。

レクリエーションで「おうちで何か困っていることはないか」という質問の投げかけや活動にいらっしまったら困っている方はいないかなどを聞き、戸別訪問へ活動の幅を広げていきました。戸別訪問では、窓ふき、お風呂の壁の掃除、電気のかさ拭き、たんすの上の荷物を降ろすなどのお手伝いをしました。

一人暮らしの高齢者の方は、私たちが日常的に当たり前に出ていることも、想像以上に困難になっているということを知りました。課題として、あまり地域に出られなくなってしまっていることや行政のサービスが追いついていないという現状を見ることが出来ました。

また、レクリエーション活動でお話した方も、戸別訪問のほうがより親密なお話ができ、団地で暮らす方々の悩みの根底に近付けたと感じています。この活動を通して、若い世代の学生との関わりが住民間での交流のきっかけとなったと考えています。

今後に向けて

一部の住民の方の積極的な受け入れの姿勢や先輩方が築いた住民の方との信頼関係なしには成しえない活動だったと感じています。団地の方々との交流を通して地域の生活実態に触れ、多くを学ぶ体験となりました。

学生代表者のコメント

吉田 藍里
（医療科学部 医療福祉学科）



私たちの活動が来年度の活動に活かせるよう、活動で学んだことや改善点などの情報共有を積極的に行い、後輩に引き継いでいきたいと考えています。

ご支援くださった柗崎先生、浅沼先生に感謝申し上げます。



運動の楽しさを伝えるために！！

REPORT

学生助成

バドミントンサークル活動報告

柳原朱里 (教育人間科学部 学校教育学科 2年)

松井高光 (教育人間科学部 学校教育学科 特任助教)

目的

体育教師を目指す上で必要な知識や経験の蓄積や、教師の現状や実際の教育現場を肌で感じることで、今後の夢への実現に生かす為に活動している。今回行った地域連携活動の主旨としては、専門的な指導者のいないバドミントン部において、技術的な指導をすることで、部活動の活動を活性化させることであった。

内容

荒川区内の中学校にて、バドミントン部 (女子24名) を対象に主に技術的な指導を行った。週に一回、一時間半の活動の中で、「東京都大会出場」という目的達成のための技術指導の他に、体力の向上や健康の維持増進だけでなく、集団としての規律等の社会性を育てるためのサポートをした。

成果

活動の成果は、改めて教師の仕事 (主に課外活動に関して) の一端に触れ、今後教師を目指すうえで重要な経験となった。部活動中に、クラスの運営や成績管理などの事務作業を行わなければいけない教師が多数いることが、実際に中学校で活動している中で知ることができ、外部指導者との連携の重要性を認識した。また、指導場面においては、自分が伝えたいことを実際に教師という立場で、生徒に伝えることの難しさを知ることが出来た。

地域連携活動としては、バドミントン部の生徒からは、技術的な質

問だけでなく、大学生生活に関する質問も多く受けた。大学での学びを生徒に伝えることで、より学校生活が深いものになることを期待している。また、顧問の先生からは、「怪我の予防や技術指導などの観点から、競技の専門的な知識を持った指導者がいると、とても有り難い」という感想をもらい、一定の成果があったと感じている。

課題

活動の場が学校現場であるという特性上、部活動全体を見るにあたって、少人数に集中しがちのときがあるので、全体を大きく見ながら指導していく必要があると感じており、メンバーの技術的な部分も含めた全体的な指導力の向上が課題と感じた。また、教師という立場で生徒と関わっているのだから、言葉遣いや礼儀作法など、自分自身が手本となるような行動をするための準備がより一層必要であると考えている。

今後の予定

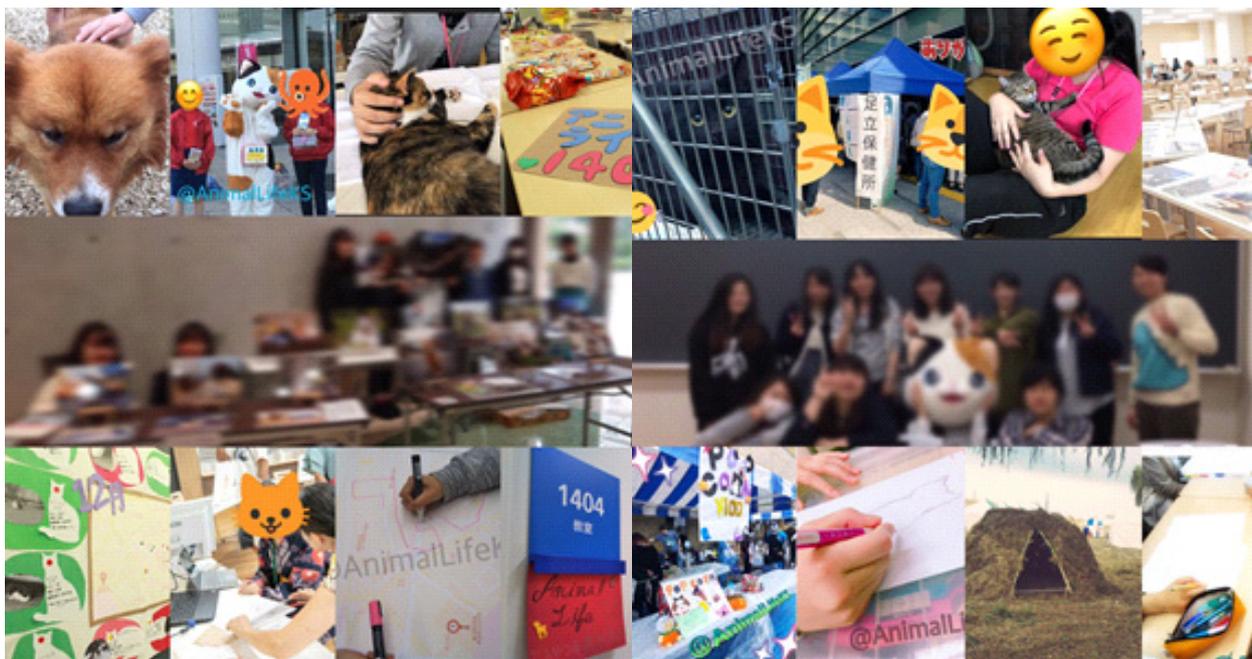
今後も継続的に中学校のバドミントン部にて指導等を行っていく予定である。その他、より地域と連携した活動が出来るよう、部活動に限らないかたちで、生涯スポーツの獲得に寄与するような場の提供を考えている。

代表者の感想・コメント

柳原 朱里
(教育人間科学部 学校教育学科)



この活動の中で得たものを生かしながら、地域の子供などを対象としたバドミントン教室、またはスポーツ教室を開き、自分のスキルの向上や地域のスポーツに関する環境の活性化に努めていきたいと考えています。



地域と動物の関係

REPORT

学生助成

課題

前年度までとは活動形態が大きく変わったこともあり、参加人数が思わしくありませんでした。

今後の予定

昨年度は部員の興味を引き出すため、また、足立区での動きを知るために様々な地域活動に参加させて頂きました。今年度は今回得た経験や情報を活かし、「地域と動物の関係を学ぶボランティア」として「地域猫対策」に的を絞った活動にします。

学ぶボランティア (アニマルボランティア)

西野有紗 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

目的

地域に発生する動物関連の問題を、地域住民、区役所、足立区で活動しているボランティア団体等と連携し解決を目指す。また、部員が自分が将来携わっていきたい動物関係を見つけられる場にする。

内容

足立区で行われている地域ボランティアの参加、動物関係のセミナーやシンポジウム、そして動物保護団体さんでのボランティアの参加をすることで、現場では実際、何がどんな目的で行われているのかを知ると同時に、地域の方々と交流を深めました。

また、現場でどう動いたら良いのか、自分たちの知識や経験をどう活かすことが出来るのかを部員同士で考え次につなげて活動できるような部活でした。

成果

人と動物が地域の生活の中でどう関わっているのか。また、大学周辺ではどのようなボランティア活動がどんな目的をもっておこなわれているのかを知ることが出来たと同時に、地域の方々と友好的な関係を築くことが出来ました。また、部員も活動中に言われたことだけでなく、自分から自主的に何をしたらよいのか考えて行動したり、意見を言う事ができようになりました。

代表者の感想・コメント

西野 有紗

(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



人と動物の共生を考えていく際に、それを目指すにあたって、今どんなことが行われているのか。何が必要とされているのかを考えるきっかけとなる活動を沢山行うことができました。将来、部員ひとりひとりが自分達だから出来ることを見つけて実行していける活動にこれからもできればと思います。



動物の魅力を多くの方に伝えたい

REPORT

学生助成

東京都多摩動物公園と 横浜市立金沢動物園での教育普及活動 (動物園研究部)

山中隼輝 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

目的

動物園研究部では、動物園の4つの役割の1つである教育普及活動に取り組んでいる。学生が主体となって動物園で教育普及活動を行うことで、動物園という現場を学ぶと同時に、伝えることの難しさや楽しさを学び、人前で話す力を身につけることを目指している。

内容

第1・第3・第5日曜日は金沢動物園、第2・第4日曜日は多摩動物公園で教育普及活動を実施している。

多摩動物公園では、2004年から「おえかきっず！」を継続して実施しており、今年度はプログラムの更新に取り組んだ。

金沢動物園では、オカピ・コアラ・バク・オリックス・カピバラに関する定例活動と、季節ごとのイベントに参加した。

成果

多摩動物公園での活動に参加した来園者は664名で、前年度より78人増えた。このうち保護者にアンケートを行い、その声をプログラムの改善に反映させたり、学生の勉強会を増やしたりした。新プログラムに変更したことで親も積極的に参加するようになり、親子の会話が増え、プログラム自体の雰囲気明るくなった。

金沢動物園では体系的な評価は行っていないが、多くの来園者が企画に参加し、「動物の体の仕組みがよく分かった」「もっと動物のこと

知りたい」といったコメントが得られた。

活動回数と参加人数を表にまとめたが、全体として学生の積極的な参加が継続している。(8月と9月は多摩動物公園の事情で活動できていない)

課題

多摩動物公園のプログラムは、まだ導入したばかりで、プログラム運営の体制作りと、参加者の評価を受けた改善に取り組みたい。

金沢動物園では体系的な評価の導入に取り組み、定例活動の改善につなげたい。

今後の予定

従来どおりのスケジュールで活動を続け、多摩動物公園では今年度導入したプログラムを洗練させ、金沢動物園では定例企画の全体的な見直しを進める予定である。

	2018年度 活動回数と参加人数			
	回数	延べ人数	多摩活動	金沢活動
4月	4回	47人	1回 7人	3回 40人
5月	3回	24人	1回 7人	2回 17人
6月	4回	37人	2回 16人	2回 21人
7月	5回	42人	2回 18人	3回 24人
8月	2回	14人	0回	2回 14人
9月	3回	21人	1回 7人	2回 14人
10月	3回	24人	2回 15人	1回 9人
11月	4回	31人	2回 15人	2回 16人
12月	4回	27人	2回 13人	2回 14人
1月	4回	30人	2回 15人	2回 15人
2月	4回	31人	2回 15人	2回 16人
3月	3回	19人	1回 9人	2回 10人

代表者の感想・コメント

山中 隼輝

(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



動物園での教育普及活動を通して、動物の魅力をいかに分かりやすく楽しく伝えられるかに僕自身は取り組んだ。これからも動物園に来る来園者1人でも多くの方に魅力を伝えていきたい。



障がいのある方のための乗馬会「乗る・馬・体験」

REPORT

学生助成

毎回作成しています。

障がいのある方のための乗馬会

平田達稔・佐々木愛 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

目的

ヒトとヒト、ヒトと動物との交流の場としての障がい者乗馬の実施と、障がい者乗馬の普及・啓発を目的とし、障がい児を対象に乗馬活動を行っております。

内容

乗馬会を開催する約2か月と2週間前から企画会議を始めます。乗手さん(乗馬をする障がい児)に楽しんでいただけるよう、季節ごとにテーマを設定し、それに沿った装飾作成や企画をします。

約1か月前までに乗手さんと当日のボランティアを募集します。乗手さんを募集する前段階として、前回までの参加者や特別支援学校などに向けて資料作成や郵送をします。申し込み人数が多い場合は抽選を行い、当日についての資料を作成・郵送します。ボランティアはポスターや授業アナウンスで募集をかけ、その後講習会や打ち合わせなどを行います。1週間前にご協力していただくまセンターの職員さん、学生スタッフ、先生方とスケジュール確認をした上で当日に臨みます。

前日は1日をかけて会場の設営をし、当日タイムスケジュールの最終確認も行います。

当日を終えようまセンターの職員さん、学生スタッフ、先生方と反省会をし、準備期間や当日の反省を次に活かせるよう話し合います。その後ご協力いただいた先生方にお渡しする報告書を、感謝を込めて

成果

2018年度は6月と12月の計2回開催しました。6月は11人、12月は7人の乗手さんに来ていただきました。

今月に行われた第28回乗馬会では、雨のため乗馬は中止となりましたが、1名参加して下さりふれあいのみの開催となりました。

課題

毎回同じ乗手さんが多いため、新しい乗手さんの獲得とうまセンターの馬が高齢となってきたため、新しい借入先の検討必要と感じています。

今後の予定

乗馬会のさらなる向上のために実行委員で参加者一人一人に合わせた質の高い乗馬会を目指していきたいと考えています。

一回あたりの規模を少し抑えることで開催頻度を増やし、より多くの方に楽しんでいただけるようにしたいと考えています。



※活動準備中の写真



身近な自然を使ったカフェで地域のコミュニティ作り

REPORT

学生助成

カフェサークル Bonn Bush

林姫花 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

目的

- ・自ら畑で野菜を育てることで、食べ物を作る大変さを経験、理解し、さらにそれらを伝えることによって、生き物に感謝する気持ちを育む。
- ・カフェ活動を通して、開催地の地元の方やカフェを利用して下さるお客様の交流する機会を設け、新しいコミュニティを作る。また、その利用を活性化させて地域の活性化に貢献する。
- ・学内カフェを通して、地域の情報を学生や教員などのより多くの人に届けることで、地域に人を呼び込んだり、新たなネットワークができたりするきっかけを作る。

内容

- ・学内外カフェオープンに向けた運営方法やメニューの検討、試作
- ・学内・学外に向けた宣伝活動
- ・地域ボランティア活動
- ・畑での作物の栽培

成果

活動1年目の今年度は、学内外への宣伝活動や畑での作物栽培に力を注いで活動してきた。その結果、地域イベントへのカフェ出店やボランティア活動を通して、学内外へ「カフェサークル」の知名度を上げることができた。また活動を通して地域の方との交流を持ち、笑顔を作ることもできた。

課題

部員数の増減、資金面、衛生面、安全面等の管理不十分により、予

定していた活動ができないことがあった。特にカフェ活動では圧倒的知識不足により多くの困難に直面し、学内カフェの運営が大幅に遅れてしまった。また、目的の一つである地域のコミュニティ、ネットワーク作りもこれらに伴って不十分に終わってしまった。

今後の予定

今年度うまく運営できなかったカフェ活動と、地域のコミュニティ作りにも力を入れて活動していきたい。安定したカフェ活動を行うために周辺調査の実施や資金の運営方法の確立に力を入れて活動したい。また、コーヒーを販売する活動を今年度よりも増やし、よりカフェに近づくように努力していきたい。さらに外部ボランティア活動を増やし、地域との関わりも増やしていきたい。

代表者の感想・コメント

林 姫花

(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



上野原を、学校をもっと明るい場所にした、食を通して地域を活性化したいという思いから、この活動を始めました。はじめはコーヒーを淹れたり、料理を作ったりなんて出来なくて、人集めや資金獲得、場所や道具の確保に追われていました。

しかし、外部に出店したときには、地元の方を始めとした多くの方と交流したことで、改めて人の温かみに触れることができました。本当に大変なことばかりだったけど、この1年でここまで大きな団体になれたのも、支えてくださった多くの人のおかげだと思います。今後は今まで以上に皆さんに貢献できるような活動を作っていきたいです。



動物の温もりで命の大切さを学ぶ

REPORT

学生助成

動物を教育のツールとして、 命の大切さを学んでもらう

(動物介在教育研究部)

厚海玲奈 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

目的

動物を教育のツールとして、動物の温もりや毛の質感等を直接実感し命の大切さを学んでもらい、そして動物に触れる機会を作ってもらふことと、動物が人にとって安全なように、動物にとってもストレスがかからないように人に慣れた動物の育成をすることを目的としている。

内容

動物の触れ合いや動物に関するクイズを行い、命について学んでもらふことを上野原や足立区の小学校で生活科等の時間等で飼育している動物を連れて行う活動や大学に幼稚園児や小学生を招待したり、上野原や甲府等のイベントの一角でブースを出し、動物の触れ合いや科学実験を行うなど、様々な場所で活動を行っている。

成果

ふわふわしていて初めから可愛らしいウサギやモルモットに比べて悪い印象の多いヘビや気持ち悪いという印象の多いカイコなどを触れ合いすることで、触感から意外に可愛いと思う子どもや怖くないのだと思う子どもが増え、子どもの動物に対するイメージに変化がある。

そして、動物介在教育活動を行うことで、私たち参加学生のコミュニケーションスキルも上がり、活動を見守ってくださる第三者(小学校や幼稚園の先生、親御さん等)からの評価も高い。

課題

活動を行う為には学生の手伝いが必要となります。参加学生が少ないことで起こる、学生一人に対し、対象の小学生や幼稚園児を多数見なければいけず、瞬時に対応できないことが問題となる。その為に、参加経験のある学生から経験が浅い学生に活動での注意点や大事なことを伝えていくことで参加学生を減らさないことが課題となる。

今後の予定

桂川フェスティバル、上野原の小学校・幼稚園、足立区の小学校、帝京めぐみ幼稚園、秋山ふるさと祭り、甲府遊亀公園、科学の祭典、富士湧水の里水族館等で活動を行う。



動物クイズを行っている子ども達と学生

資料

平成30年度地域連携推進センター構成員一覧

地域連携推進センター長 花園 誠

地域連携推進センター副長 古瀬 浩史

	東京西・山梨市			千住		
	コーディネーター	氏名	学部 学科	コーディネーター	氏名	学部 学科
教育推進 (学生助成)	○	並木 美砂子	生命環境学部 アニマルサイエンス学科	○	小黒 正幸	医療科学部 東京柔道整復学科
		佐藤 光浩	柔道整復学科<山梨市>		飯泉 祐美子	教育人間科学部 幼児保育学科
		吉川 和幸	教育人間科学部 こども学科		小泉 亜希子	生命環境学部 アニマルサイエンス学科
					東 克己	生命環境学部 生命科学科
研究推進 (教員助成)	○	石井 孝弘	医療科学部 作業療法学科	○	榎原 健太郎	総合教育センター
		和田 龍一	生命環境学部 自然環境学科		江田 慧子	教育人間科学部 学校教育学科
					鳥山 実	医療科学部 東京理学療法学科
					山本 和弘	生命環境学部 アニマルサイエンス学科
社会貢献	○	小川 家資	生命環境学部 アニマルサイエンス学科	○	小宮 山 恵美	医療科学部 看護学科
		渡辺 長	医療科学部 理学療法学科		橋本 慎治	生命環境学部 自然環境学科
		上野 良平	生命環境学部 生命科学科		浅沼 太郎	医療科学部 医療福祉学科

事務	上野原事務室長	村田 正一
	管理係長	山口 敬美
	管理係主任	大石 恵里佳

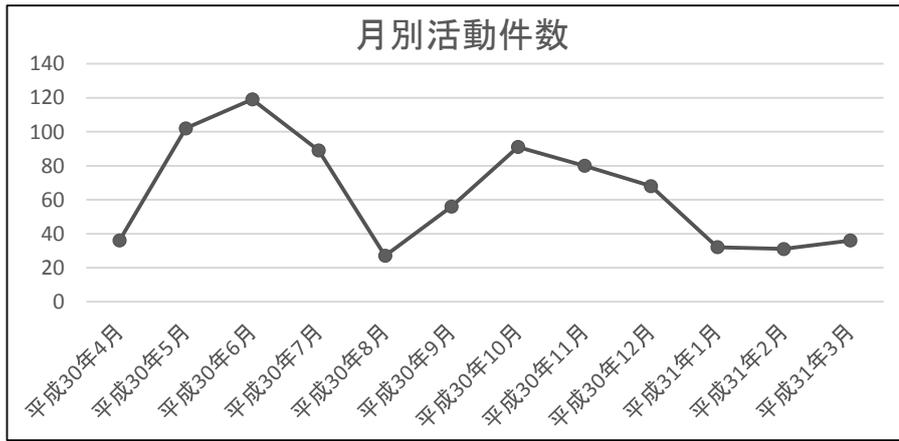
事務	企画評価・地域 連携室長	岡本 忠典
	地域連携係	箕田 都起子 佐藤 仁紀

平成30年度 地域連携推進センター予算

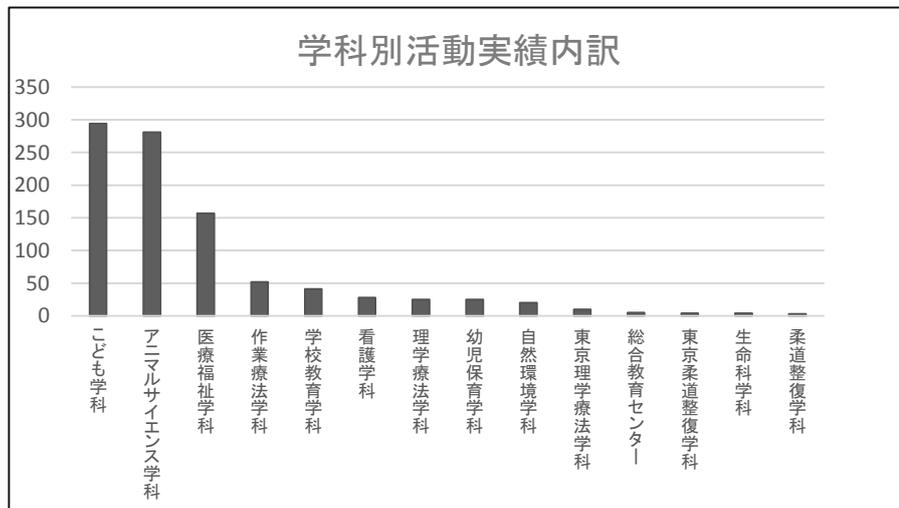
大項目	中項目	小項目(活動名)	活動名
A 教育連携・学生参画プロジェクト	(1)学生参画プロジェクト	動物園・水族館の教育普及支援	①多摩動物公園
			②羽村市動物公園
			③その他
	(2)学生の課外活動活用	学生の地域連携活動助成	全学から公募
(3)動物維持費	①都市農業公園動物維持費	都市農業公園	
		②東京西動物維持費	東京西キャンパス
(4)都市農業公園環境整備	都市農業公園環境整備費(動物関係除く)	都市農業公園	
B 地域活性化プロジェクト	(1)地域社会連携プロジェクト	地域社会連携	①地域乗馬活動
			②障がい児乗馬活動支援
	(2)地域産業連携プロジェクト (教職員の地域連携活動助成)	教職員の地域連携活動助成	全学から公募
			(3)地域活性化プロジェクト
			②桂川フェスティバル
		③Re:animation	
		④秋山地区活性化	
		⑤そのほか	
		情報配信	帝京科学大学通信
(4)計画資料・実践記録・ 発表資料	前年度活動記録 年報	地域連携研究 帝京科学大学地域連携推進センター年報第2巻	
C 社会貢献プロジェクト	(1)学生の社会貢献プロジェクト	地域の教育支援事業	①ふれあい動物教室(足立区以外)
			②帝京めぐみ幼稚園
			③科学の祭典
			④帝京科学の夏まつり
			⑤富士湧水の里水族館
	(2)教員の社会貢献プロジェクト	①NHK 渋谷DEども出展	NHK 渋谷DEども出展
			②子育てプレイルーム事業
(3)大学の社会貢献プロジェクト	①障害者乗馬会	障害者乗馬会(年2回)	
		②ふれあいの日	ふれあいの日(うまセンター/月1回)
		③動物介在教育アドバイザー講習会 ペット同行避難訓練	①動物介在教育アドバイザー講習会 ②ペット同行避難訓練
D.国際化貢献プロジェクト	(1)国際化教育プロジェクト	TEIKA English Day(年2回)	TEIKA English Day(年2回)
	(2)国際化産業プロジェクト	地域産業国際化支援	①愛犬の健康診断(年2回) ②わんフェス ③その他(大辻先生)
E 運営経費		通信連絡費	東京西キャンパス 地域連携室コピー機リース代
F 予備費		予備費	予備費
G 足立区教育連携事業 (足立区助成)			①動物ふれあい教室
			②小中学生を対象とした自然体験活動
			③小学生の大学生体験
			④中学生の大学生体験
			⑤のびのびプレイデイ
			⑥困難家庭対象大学遠足

合計	20,720,000
----	------------

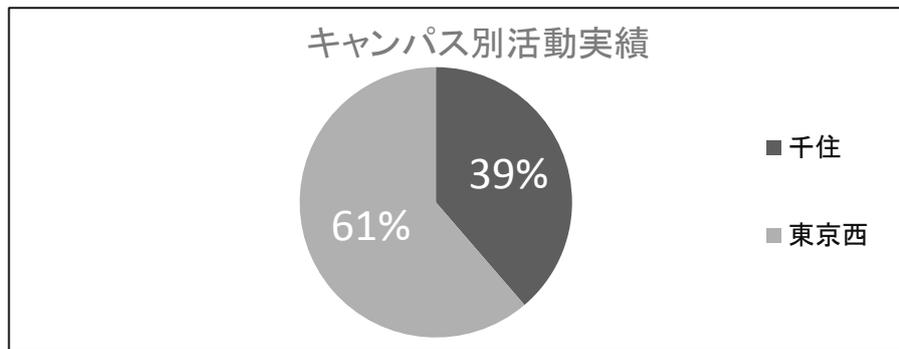
平成30年度地域連携推進センター活動統計(教員)



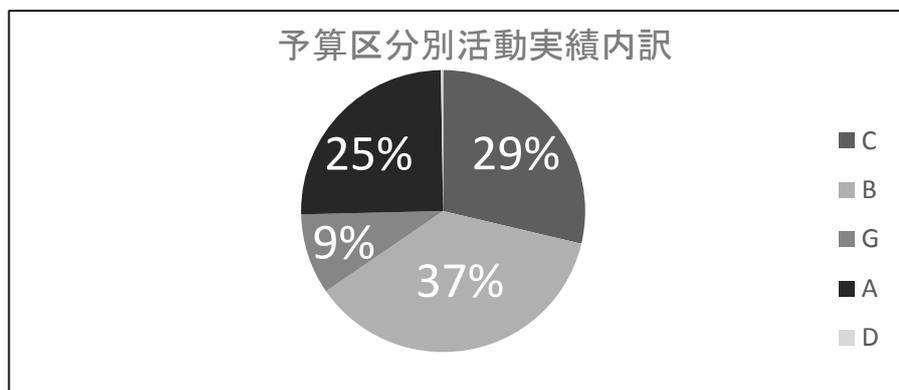
活動月	件数
平成30年4月	36
平成30年5月	102
平成30年6月	119
平成30年7月	89
平成30年8月	27
平成30年9月	56
平成30年10月	91
平成30年11月	80
平成30年12月	68
平成31年1月	32
平成31年2月	31
平成31年3月	36
総計	767



学科	件数
小児も学科	294
アニマルサイエンス学科	281
医療福祉学科	157
作業療法学科	52
学校教育学科	41
看護学科	28
理学療法学科	25
幼児保育学科	25
自然環境学科	20
東京理学療法学科	10
総合教育センター	5
東京柔道整復学科	4
生命科学科	4
柔道整復学科	3
総計	949



場所	件数
千住キャンパス	297
東京西キャンパス	470
総計	767



区分	件数
C	112
B	143
G	36
A	98
D	1
総計	390

- 〈予算区分〉
 A: 教育連携・学生参画プロジェクト
 B: 地域活性化プロジェクト
 C: 社会貢献プロジェクト
 D: 国際化貢献プロジェクト
 E: 運営経費
 F: 予備費
 G: 足立区教育連携事業

平成30年度地域連携活動記録表(教員)

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模(全学・学科等)
4月3日	上野原活性化事業「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第4回桂川フェスティバルの開催を目指した企画・連絡・調整のための全体会議	部の会	20名	5名	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
4月10日	上野原活性化事業「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第4回桂川フェスティバルの開催を目指した企画・連絡・調整のための全体会議	部の会	20名	5名	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
4月11日	板橋区いじめ問題専門委員会・専門調査委員会	板橋区いじめ問題専門委員会・専門調査委員会への出席	板橋区教育委員会			山田知代	こども学科
4月12日	地域の教育支援事業「うまセンター遠足」	うまセンター遠足実施のための実地踏査および企画・連絡会議	大月市立馬沢小学校	2名	3名	花園誠 喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科 こども学科
4月14、15日	乗馬療法 NPO法人EP B13	障害児	NPO法人EPO	10名	3名	石井孝弘	作業療法学科
4月14日	たまひよDX	成長・発達がつくりな子どもたちを育てる保護者の会に託児ボランティアとして参加	たまひよDX		上4年1名	吉川和幸	こども学科
4月14日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	ふれあい動物教室実施のための連絡会議および練習会		30名	10名	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
4月15日	ふれあいの日	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	53名	13名	喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科
4月16日	山梨県私学教育振興会 幼稚園部 教育研究委員会(東部地区)	山梨県私学教育振興会 幼稚園部 教育研究委員会(東部地区)に助言者として参加	山梨県私学教育振興会 幼稚園部			吉川和幸	こども学科
4月16日	板橋区いじめ問題専門委員会・専門調査委員会	板橋区いじめ問題専門委員会・専門調査委員会への出席	板橋区教育委員会			山田知代	こども学科
4月17日	甲府支援勉強会	教員、保護者対象勉強会	甲府支援学校	50名	0名	石井孝弘	作業療法学科
4月17日	障害児教育 外部専門指導	肢体・情緒障害児の評価と教育指導活動	甲府市教育委員会	2名	0名	石井孝弘	教員個人 (作業療法学科)
4月17日	障害児教育 外部専門指導	肢体・情緒障害児の評価と教育指導活動	甲府市教育委員会	2名	0名	大関健一郎	教員個人 (作業療法学科)
4月17日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	7名	0名	小橋一雄	作業療法学科
4月17日	地域の教育支援事業「帝京めぐみ幼稚園」	帝京めぐみ幼稚園の全園児に対する動物介在教育	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
	上野原活性化事業「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第4回桂川フェスティバルの開催を目指した企画・連絡・調整のための全体会議	部の会	20名	5名	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
4月20日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親の孤立に対するサポートとして、地域で支えあう交流の居場所づくりとしての、水引を用いた講座型交流プログラム	水引Lab	13名	2名	糸井和佳 吉岡幸子 小宮山恵美	看護学科
4月20日	授業/体験活動	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の高齢者ロボット介在活動	社会福祉法人 恒陽会	32名	上2年13名	木村龍平	こども学科
4月20日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実施に向けた企画・連絡会議	上野原市立上野原小学校	3名	1名	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
4月21日	ギフチョウ・ヒメギフチョウの観察会	小谷村の天然記念物ギフチョウ・ヒメギフチョウの観察会	小谷村教育委員会	30名	0名	江田慧子	学校教育学科
4月21日	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区教育委員会	53名	31名	花園誠 青木直樹	アニマルサイエンス学科 こども学科
4月22日	障害者支援施設春祭りボランティア	障害者支援施設での行事の運営サポート、利用者支援	社会福祉法人 フアエル会 藤野薫風		上4年2名 2年2名	吉川和幸	こども学科
4月23日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区地域包括支援センター 千住本町	31名	0名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
4月24日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	7名	0名	小橋一雄	作業療法学科
4月24日	造形指導支援(2018年度 第1回)	2歳児クラスの子どもたちへの造形指導と指導者(保育者及びアトリエスタ)の指導支援活動。触・色遊びの体験	学校法人 正和学園 つながり 保育園・町田	2歳児10名 保育者4名		藤井志帆	こども学科
4月24日	動物介在更生保護プログラム	更生保護施設退所者を対象とした動物介在活動	こども動物教室 アニマルシップ	1名	3名	山本真理子	アニマルサイエンス学科
4月24日	特別支援ケース会議	幼稚園に在籍する特別な支援を要する幼児について、幼稚園と教員がネットを介してケース会議を行う	学校法人 リズム学園 恵庭幼稚園			吉川和幸	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)	
4月24日	板橋区いじめ問題専門委員会・ 専門調査委員会	板橋区いじめ問題専門委員会・専門調査委員会 への出席	板橋区 教育委員会			山田知代	こども学科	
4月24日	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第4回桂川フェスティバルの開催を目指した企画・ 連絡・調整のための全体会議	郵の会	20名	10名	花園誠	東京西 キャンパス 全学科	
4月26日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育 演習Ⅰ」の学外保育体験活動	上野原市役所 福祉課	在園全園児	上1年10名	木村龍平	こども学科	
4月26日	上野原市地域づくりワークショップ	上野原の地域づくりについてのワークショップ	上野原市	15名	0名	小橋一雄	作業療法学科	
4月26日	横浜市動物園等指定管理者 選定評価委員会	横浜市の動物園の実態調査とあり方の検討	横浜市	10名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科	
4月27日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人		12名	3名	吉賀成子	医療福祉学科
4月27日	タイプインター市での デイサービス立ち上げ	ポイント市で立ち上げとなるデイサービスで利用 すべき福祉用具や運動機器の選定を実施	ポイント市	10名	0名	渡辺長	理学療法学科	
4月29日	上野原活性化事業「秋山地区活性化」	秋山川・秋山の県道沿いの清掃活動	秋山青年会	30名	8名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科	
平成30年4月 ～平成30年9月	ペット手帳配布	あだち動物共生ネットワークが行われている譲渡 会にて毎週配布	あだち動物共生 ネットワーク	50名		山本和弘	アニマル サイエンス学科	
5月1日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科	
5月1日	地域連携活動	商店街の探索		0名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科	
5月1日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科	
5月1日	地域連携活動	元町地域の街歩き調査	住区センター	0名	3名	松永美輝恵	医療福祉学科	
5月1日	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第4回桂川フェスティバルの開催を目指した企画・ 連絡・調整のための全体会議	郵の会	20名	15名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科	
	地域の教育支援事業「うまセンター遠足」	うまセンター遠足実施のための会場設営	大月市立 鳥沢小学校		10名	花園誠 喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科 こども学科	
5月2日	鳥沢小学校遠足	馬とのふれあい、世話体験、曳馬による乗馬、餌 あげ。	鳥沢小学校	13名	15名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科	
	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じ て生き物について学習させる活動。	足立区 教育委員会	106名	39名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科	
5月2日	地域の教育支援事業「うまセンター遠足」	馬とのふれあい・馬房掃除体験、小動物とのふれ あい体験を通じて動物について学習させる。	大月市立 鳥沢小学校		12名	花園誠 喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科 こども学科	
5月7日	学生参画プロジェクト「多摩動物公園遠足」	多摩動物公園での校外学習支援の実践	上野原市立 上野原小学校	78名	57名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科	
	地域の教育支援事業 「帝京科学の夏まつり」	「帝京科学の夏まつり」実施に向けた事前連絡・企 画会議	富士北麓 北都留教育事務所	1名	2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科	
5月8日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科	
5月8日	子育て支援活動(第10/215回)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。 学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支 援活動の実際を学ぶ	上野原市役所 福祉課	子10名 保護者10名	2年1名	木村龍平	こども学科	
5月8日	地域連携活動	団地へのチラシ配布、商店街の店舗にチラシを置 いてもらうよう依頼		0名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科	
5月8日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科	
5月8日	地域の教育支援事業「帝京めぐみ幼稚園」	帝京めぐみ幼稚園の全園児に対する動物介在教 育	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科	
	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第4回桂川フェスティバルの開催を目指した企画・ 連絡・調整のための全体会議	郵の会	20名	15名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科	
5月10日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育 演習Ⅰ」の学外体験活動。	上野原市役所 福祉課	在園・在校 全児童	1年33名 4年5名	木村龍平	こども学科	
5月10日	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第4回桂川フェスティバルの開催準備・会場設営	郵の会	30名	30名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科	
	地域の教育支援事業「授業参観・学習支援」	初等教育の授業参観と学習支援活動	上野原市立 上野原小学校	120名	5名	花園誠	こども学科	

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
5月11日	障害児教育 外部専門指導	肢体・情緒障害児の評価と教育指導活動	甲府市 教育委員会	2名	0名	大関健一郎	教員個人 (作業療法学科)
5月11日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	16名	7名	柘崎京子 浅沼太郎	医療福祉学科
5月11日	地域連携活動	千住カレッジ実施に向けた話し合い	地域包括 支援センター	0名	8名	宮本佳子	医療福祉学科
5月11日	地域連携活動	商店街でチラシ配布		0名	9名	山田健司	医療福祉学科
5月11日	板橋区いじめ問題専門委員会・ 専門調査委員会	板橋区いじめ問題専門委員会・専門調査委員会 への出席	板橋区教育委員会			山田知代	こども学科
5月11日	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第4回桂川フェスティバルの開催準備・会場設営	部の会	30名	30名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月12、13日	乗馬療法 NPO法人EP B13	障害児	NPO法人EPO	10名	3名	石井孝弘	作業療法学科
5月12日	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル」	第4回桂川フェスティバルの運営・ふれあい動物広 場の運営。「出張オープンキャンパス」による大学 の広報活動。	部の会	6000名	150名	花園誠	東京西キャンパス 全学科 千住キャンパス 東京理学療法学科
5月13日	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル」	第4回桂川フェスティバルの運営・ふれあい動物広 場の運営。「出張オープンキャンパス」による大学 の広報活動。	部の会	6000名	150名	花園誠	東京西キャンパス 全学科 千住キャンパス 東京理学療法学科
5月14日	ダイビングガイドのための顕微鏡観察講座	ダイビングガイドの方を対象とした顕微鏡を用いた 自然観察の講習会	NPO法人 日本安全潜水 教育協会	12名	0名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
5月14日	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第4回桂川フェスティバルの会場撤収作業および 会場清掃	部の会	30名	30名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実施 に向けた企画・連絡会議	上野原市立 上野原小学校	3名	1名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月15日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	11名	4名	井岡由美子	医療福祉学科
5月15日	桂川フェスティバル	担当教員のボランティア参加(ロボット体験コー ナー担当)		FES参加者	ボラン ティア 6名	木村龍平	こども学科
5月15日	子育て支援活動(第11/216回)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。 学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支 援活動の実験を学ぶ	上野原市役所 福祉課	子10名 保護者10名	2年1名	木村龍平	こども学科
5月15日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	7名	0名	小橋一雄	作業療法学科
5月15日	地域連携活動	住区センターの見学と体験	住区センター	10名	3名	松永美輝恵	医療福祉学科
5月15日	造形指導支援(2018年度 第2回)	2歳児クラスの子どもたちへの造形指導と指導者 (保育者及びアトリエスタ)の指導支援活動。感触・ 色遊び/接着(のり)の体験	学校法人正和学園 つながり保育園 ・町田	2歳児10名 保育者4名		藤井志帆	こども学科
5月16日	甲府支援勉強会	教員、保護者対象勉強会	甲府支援学校	50名	0名	石井孝弘	作業療法学科
5月16日	猿橋小学校遠足	馬とのふれあい、世話体験、餌あげ。	猿橋小学校	57名	27名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実 践「ふれあい動物教室」	上野原市立 上野原小学校	80名	12名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月16日	地域の教育支援事業「うまセンター遠足」	馬とのふれあい・馬房掃除体験、小動物とのふれ あい体験を通じて動物について学習させる。また、 自然体験を通じて春の草花について学習させる。	大月市立 猿橋小学校	60名	20名	花園誠 喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月17日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教 育演習Ⅰ」の学外体験活動。			在園・在校 全児童	木村龍平	こども学科
5月17日	地域の教育支援事業「授業参観・学習支援」	初等教育の授業参観と学習支援活動	上野原市立 上野原小学校 上野原西小学校	170名	14名	花園誠	こども学科
5月18日	地域貢献活動「おはなしカフェ」特別企画	リハビリテーションを受けている子どもの母親を対 象としたストレッチ講座	訪問看護 カノウの森	4名	0名	安齋久美子	理学療法学科
5月18日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親の孤立に対するサ ポートとして、地域で支えあう交流の居場所づくり としての、水引を用いた講座型交流プログラム	水引Lab	14名	0名	糸井和佳 吉岡幸子 小宮山恵美	看護学科
5月18日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」		33名	5名	川口典男 藤江慎二	医療福祉学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
5月18日	長野市教育委員会「平成30年度 長野市教育センター研修講座 キャリアUP研修Ⅱ(中堅研修)② 生徒指導力の充実」講師	長野市立小中学校の教職経験10年目の教員を対象とした研修会において、「信頼される学校づくりとスクール・コンプライアンス—教員の非違行為・生徒指導—」について講演	長野市教育委員会	長野市立小中学校の教職経験10年目の教員22人(小学校9名 中学校13名)		山田知代	こども学科
5月19日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人宝山寮	利用児童の人数	上3年4名	吉川和幸	こども学科
5月20日	授業/体験活動(第116回 高齢者ロボット介在活動)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の高齢者ロボット介在活動	社会福祉法人恒陽会	高齢者20人	2年2名	木村龍平	こども学科
5月20日	オオルリジミの観察会	東御市に生息しているオオルリジミの観察会	北御牧のオオルリジミを守る会	80名	0名	江田慧子	学校教育学科
5月20日	ふれあいの日	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	85名	36名	喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科
5月21日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践「動物のお世話の学習会」	上野原市立上野原小学校	80名	12名	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
5月22日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会福祉法人	23名	4名	一色哲加藤洋子	医療福祉学科
5月22日	子育て支援活動(第12/217回)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実験を学ぶ	上野原市役所福祉課	在園全園児	2年1名	木村龍平	こども学科
5月22日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科
5月22日	地域連携活動	元町地域の街歩き調査	住区センター	0名	3名	松永美輝恵	医療福祉学科
5月22日	上野原活性化事業「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第4回桂川フェスティバルの反省会	鄙の会	30名	30名	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践「動物のお世話の指導、飼育日誌の書き方指導」	上野原市立上野原小学校	80名	3名	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
5月23日	動物介在更生保護プログラム	更生保護施設退所者を対象とした動物介在活動	こども動物教室 アニマルシップ	1名	0名	山本真理子	アニマルサイエンス学科
5月23日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践「動物のお世話の指導、飼育日誌の書き方指導」	上野原市立上野原小学校	80名	3名	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
5月24日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育演習Ⅰ」の学外体験活動。		在園・在校全児童	1年10名 4年1名	木村龍平	こども学科
5月24日	足立区子育て支援事業「子育てサロン」参加	足立区在住の乳幼児と保護者が利用する子育てサロン千住に学生が保育スタッフとして参加	足立区住区推進課		2名	旦直子 富岡麻由子 新家智子	児童教育学科に所属し参加を希望する学生
5月24日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	小動物を園に持ち込んでの動物ふれあい体験	上野原市立上野原こども園	105名	18名	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践「動物のお世話の指導、飼育日誌の書き方指導」	上野原市立上野原小学校	80名	3名	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業「授業参観・学習支援」	初等教育の授業参観と学習支援活動	上野原市立上野原西小学校	80名	3名	花園誠	こども学科
5月25日	障害児教育 外部専門指導	肢体・情緒障害児の評価と教育指導活動	甲府市教育委員会	2名	0名	大関健一郎	教員個人(作業療法学科)
5月25日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町アパート自治会	13名	7名	柘崎京子 浅沼太郎	医療福祉学科
5月25日	地域連携活動	高齢者施設にチラシ配布		0名	9名	山田健司	医療福祉学科
5月25日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会福祉法人	12名	3名	吉賀成子	医療福祉学科
5月25日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践「動物のお世話の指導、飼育日誌の書き方指導」	上野原市立上野原小学校	80名	3名	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
5月25日	上野原活性化事業「桂川館リノベーションプロジェクト」	旧桂川館の再生作業		5名	4名	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業「うまセンター遠足」	うまセンター遠足実施のための実地踏査および企画・連絡会議	上野原市立島田小学校	2名	3名	花園誠 喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科 こども学科
5月26日	せんじゆカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区地域包括支援センター千住本町	43名	1名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
5月26日	たまひよDX	成長・発達がゆっくりな子どもたちを育てる保護者の会に託児ボランティアとして参加	たまひよDX		上2年1名 4年1名	吉川和幸	こども学科
5月26日	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	来園者に対して動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区教育委員会	49名	6名	花園誠	アニマル サイエンス学科
5月27日	障害者支援施設イベントボランティア	障害者支援施設での行事の運営サポート、利用者支援	社会福祉法人さつきの会 藤野さつき学園	入所者の 人数	上2年2名 3年1名 4年2名	吉川和幸	こども学科
5月27日	オオルリジミの観察会	安曇野市に生息しているオオルリジミの観察会	日本自然保護協会	50名	0名	江田慧子	学校教育学科
5月27日	猫の譲渡会	猫の譲渡会にてペット手帳を配布	あだち動物共生 ネットワーク	100名	10名	山本和弘	アニマル サイエンス学科
5月28日	造形指導支援(2018年度 第1回)	2歳児クラスの子どもたちへの造形指導と指導者(保育者及びアトリエスタ)の指導支援活動。触・色遊びの体験	学校法人正和学園 幼保連携型 認定こども園 町田自然幼稚園	2歳児30名 保育者4名		藤井志帆	こども学科
5月28日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践「動物のお世話の指導、飼育日誌の書き方指導」	上野原市立 上野原小学校	80名	3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月29日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	10名	4名	井岡由美子	医療福祉学科
5月29日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
5月29日	子育て支援活動(第13/218回)	「コミュニティワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所 福祉課	子8名 保護者8名	2年3名	木村龍平	こども学科
5月29日	学習支援活動(第82回)	1人親・生活困難家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	小学生4名 中学生11名	4年9名	木村龍平	こども学科
5月29日	地域連携活動	映画会でのチラシ配布		35名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科
5月29日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	7名	0名	小橋一雄	作業療法学科
5月29日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科
5月29日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」		35名	4名	三木良子	医療福祉学科
5月29日	板橋区いじめ問題専門委員会・ 専門調査委員会	板橋区いじめ問題専門委員会・専門調査委員会への出席	板橋区教育委員会			山田知代	こども学科
5月29日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践「動物のお世話の指導、飼育日誌の書き方指導」	上野原市立 上野原小学校	80名	3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月30日	保育参加	保育園児を対象とした活動	こどもの森	20名	9名	鈿持勉 田口直子	幼児保育学科
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践「動物のお世話の指導、飼育日誌の書き方指導」	上野原市立 上野原小学校	80名	3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月30日	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区教育委員会	64名	36名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月31日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育演習Ⅰ」の学外体験活動。	上野原市役所 福祉課	在園・在校 全児童	1年23名 4年4名	木村龍平	こども学科
5月31日	足立区子育て支援事業 「子育てサロン」参加	足立区在住の乳幼児と保護者が利用する子育てサロン千住に学生が保育スタッフとして参加	足立区 住区推進課		2名	且直子 富岡麻由子 新家智子	児童教育学科に 所属し参加を 希望する学生
5月31日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	小動物を園に持ち込んでの動物ふれあい体験	私立島田幼稚園	66名	13名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	小動物を園に持ち込んでの動物ふれあい体験	私立上野原幼稚園	13名	6名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	小動物を園に持ち込んでの動物ふれあい体験	私立羽佐間幼稚園	36名	13名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	小動物を園に持ち込んでの動物ふれあい体験	私立島田幼稚園	66名	10名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	小動物を園に持ち込んでの動物ふれあい体験	上野原市立 蔵こども園	70名	13名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践「動物のお世話の指導、飼育日誌の書き方指導」	上野原市立 上野原小学校	80名	3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月1日	障害児教育 外部専門指導	肢体・情緒障害児の評価と教育指導活動	甲府市 教育委員会	2名	0名	大関健一郎	教員個人 (作業療法学科)
6月1日	地域連携活動	団地にチラシ配布		0名	9名	山田健司	医療福祉学科
6月1日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	吉賀成子	医療福祉学科
6月1日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践。振り返り、反省会	上野原市立 上野原小学校	80名	17名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月2日	第20回 音のまちTONEふれあいコンサート	地域の特性を生かした生涯学習のまちづくりを目的としたコンサートに出演(観客は10代から80代)	茨城県利根町 音のまちTONE 推進委員会 利根町生涯学習 センター	250名	0名	飯泉祐美子	幼児保育学科
6月2日	地域連携活動	バーベキュー、グループホーム入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司 吉賀成子	医療福祉学科
6月2日	障害者支援施設イベントボランティア	障害者支援施設での行事(運動会)の運営支援	社会福祉法人 かながわ黎明会 くりのみ学園	入所者の人数	上4年3名 上3年1名	吉川和幸	こども学科
6月2日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	利用児童の 人数	上3年4名	吉川和幸	こども学科
6月2日	足立区教育連携事業 「小中学生を対象とした自然体験活動」	校外学習支援のための旧桜井小会場設営、秋山地区の実地踏査および環境整備、教材作成。	足立区 教育委員会		4名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月3、4日	インタープリターズフォーラム	インタープリテーション関係を対象とした研究集会(実行委員)	一般社団法人 日本インタープリテ ーション協会	60名	0名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
6月3日	足立区教育連携事業 「小中学生を対象とした自然体験活動」	校外学習支援のための旧桜井小会場設営、秋山地区の実地踏査および環境整備、教材作成。	足立区 教育委員会		4名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月4日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	上野原市立 秋山小学校	21名	12名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月5日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
6月5日	子育て支援活動(第14/219回)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所 福祉課	子11名 保護者9名	2年3名	木村龍平	こども学科
6月5日	地域連携活動	商店街にある喫茶店で地域住民と打合せ		7名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科
6月5日	地域の教育支援事業「帝京めぐみ幼稚園」	帝京めぐみ幼稚園の全園児に対する動物介在教育	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業 「帝京科学の夏まつり」	「帝京科学の夏まつり」実施に向けた事前連絡・企画会議	富士北麓 北都留教育事務所	2名	10名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月6日	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区 教育委員会	167名	37名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月7日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育演習Ⅰ」の学外体験活動。	上野原市役所 福祉課	在園・在校 全児童	1年33名 4年5名	木村龍平	こども学科
6月7日	キヌアの圃場の見学	キヌアの栽培方法を対象とした活動	上野原ゆうきの輪 上野原市役所	5名	2名	和田龍一	自然環境学科
6月7日	足立区子育て支援事業 「子育てサロン」参加	足立区在住の乳幼児と保護者が利用する子育てサロン千住に学生が保育スタッフとして参加	足立区 住区推進課		2名	且直子 富岡麻由子 新家智子	児童教育学科に 所属し参加を 希望する学生
	地域の教育支援事業「授業参観・学習支援」	初等教育の授業参観と学習支援活動	上野原市立 上野原小学校 上野原西小学校	170名	8名	花園誠	こども学科
6月7日	足立区教育連携事業 「小中学生を対象とした自然体験活動」	校外学習支援のための旧桜井小会場設営、秋山地区の実地踏査および環境整備、教材作成。	足立区 教育委員会		4名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月8日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	15名	7名	椋崎京子 浅沼太郎	医療福祉学科
6月8日	地域連携活動	千住カレッジ	地域包括 支援センター	22名	8名	宮本佳子	医療福祉学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
6月8日	地域連携活動	千住便利隊(重い家具の移動)		1名	9名	山田健司	医療福祉学科
6月8日	島田小学校遠足	馬とのふれあい、世話体験、曳馬による乗馬。	島田小学校	18名	11名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践「ふれあい動物教室」	上野原市立 上野原西小学校	50名	14名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月8日	地域の教育支援事業「うまセンター遠足」	馬とのふれあい・馬房掃除体験、小動物とのふれあい体験を通じて動物について学習させる。また、自然体験を通じて春の草花について学習させる。	上野原市立 島田小学校	19名	10名	花園誠 喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月9日	乗馬療法 NPO法人EP B13	障害児	NPO法人EPO	10名	3名	石井孝弘	作業療法学科
6月9日	山梨県私立幼稚園教職員研究会 (東部地区)	山梨県東部地区の私立幼稚園教諭の研究会にこども学科教員が助言者として参加する	山梨県 私学教育振興会 幼稚園部会	幼稚園教諭 約80名		大海由佳 吉川和幸 望月崇博	こども学科
6月9日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	7名	0名	小橋一雄	作業療法学科
6月9日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	利用児童の 人数	上3年4名	吉川和幸	こども学科
6月9日	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区 教育委員会	85名	49名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月11日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践「動物のお世話の学習会」	上野原市立 上野原西小学校	50名	15名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月12日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	11名	4名	井岡由美子	医療福祉学科
6月12日	子育て支援活動(第15/220回)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実験を学ぶ	上野原市役所 福祉課	子16名 保護者13名	2年3名	木村龍平	こども学科
6月12日	学習支援活動(第83回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	小学生4名 中学生10名	4年9名	木村龍平	こども学科
6月12日	地域連携活動	千住便利隊(車庫の下の仔猫をつかまえてほしい)		2名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科
6月12日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科
6月12日	地域連携活動	住区センターで活動打合せ、夕食会への参加	住区センター	26名	3名	松永美輝恵	医療福祉学科
6月12日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践「動物のお世話の指導、飼育日誌の書き方指導」	上野原市立 上野原西小学校	50名	3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月13日	帝京科学大学 presents 「ひっくり返しゲームで遊ぼう (変わりオセロ)」	未就学児～小学生とその保護者を対象とした活動	ギャラクシティ	30名	9名	飯泉祐美子 杉本信	幼児保育学科
6月13日	羽村市動物公園 ふれあい動物縁日打ち合わせ	イベント実施にむけた打合せ	羽村市動物公園	1名	2名	佐渡友陽一	主に アニマル サイエンス学科 こども学科
6月13日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践「動物のお世話の指導、飼育日誌の書き方指導」	上野原市立 上野原西小学校	50名	3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月14日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育演習Ⅰ」の学外体験活動。	上野原市役所 福祉課	在園・在校 全児童	1年24名 4年5名	木村龍平	こども学科
6月14日	夢の体験教室打ち合わせ	アニマルサイエンス学科「ラブフェスタ」との打合せ		10名	5名	江田慧子 松井高光	学校教育学科
6月14日	犬の健康診断	アニマルサイエンス学科の学生による犬の体脂肪測定と健康相談	株NEXCO中日本	30名	8名	大辻一也	アニマル サイエンス学科
6月14日	足立区子育て支援事業 「子育てサロン」参加	足立区在住の乳幼児と保護者が利用する子育てサロン千住に学生が保育スタッフとして参加	足立区 住区推進課		2名	且直子 富岡麻由子 新家智子	児童教育学科に 所属し参加を 希望する学生
6月14日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践「動物のお世話の指導、飼育日誌の書き方指導」	上野原市立 上野原西小学校	50名	3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	談合坂サービスエリア利用者に対する小動物とのふれあい体験、動物の展示および解説、上野原市の紹介。大学の広報活動。	NEXCO中日本	600名	50名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
	地域の教育支援事業「授業参観・学習支援」	初等教育の授業参観と学習支援活動	上野原市立 上野原小学校 上野原西小学校	170名	8名	花園誠	こども学科
	足立区教育連携事業 「小中学生を対象とした自然体験活動」	校外学習支援のための旧桜井小会場設営、秋山地区の実地踏査および環境整備、教材作成。	足立区 教育委員会		40名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月15日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親の孤立に対するサポートとして、地域で支えあう交流の居場所づくりとしての、水引を用いた講座型交流プログラム	水引Lab	14名	0名	糸井和佳 吉岡幸子 小宮山恵美	看護学科
6月15日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	吉賀成子	医療福祉学科
6月15日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践・振り返り、反省会	上野原市立 上野原西小学校	50名	12名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のためのふれあい動物教室実施に向けた企画・連絡会議	大月市立 大月東小学校	3名	1名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月16日	海洋教育出前授業	中学校における海洋教育の実践	一般社団法人 葛西臨海教育 フォーラム	100名	14名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
6月16日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	利用児童の 人数	上3年4名	吉川和幸	こども学科
6月16日	上野原活性化事業「中学生討論会」	上野原活性化のための中学生討論会。情報提供として上野原の歴史・自然資産について講義	上野原市	50名		花園誠	こども学科
6月17日	ふれあいの日	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	47名	19名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
6月17日	足立区教育連携事業 「小中学生を対象とした自然体験活動」	校外学習支援のための旧桜井小会場設営、秋山地区の実地踏査および環境整備、教材作成。	足立区 教育委員会		4名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月18日	上野原市認知症ネットワーク会議	上野原市の認知症支援を考える会議	上野原市			小橋一雄	作業療法学科
6月18日	足立区教育連携事業 「小中学生を対象とした自然体験活動」	校外学習支援のための旧桜井小会場設営、秋山地区の実地踏査および環境整備、教材作成。	足立区 教育委員会		10名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
	甲府勉強	教員、保護者対象勉強会	甲府支援学校	50名	0名	石井孝弘	作業療法学科
6月19日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
6月19日	子育て支援活動(第16/221回)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所 福祉課	子17名 保護者15名	2年2名	木村龍平	こども学科
6月19日	学習支援活動(第84回)	1人親・生活困難家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	小学生3名 中学生7名	4年9名	木村龍平	こども学科
6月19日	地域連携活動	高齢者施設にチラシ配布		0名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科
6月19日	タイ・自治体能力強化研修の講師	介護者負担軽減のための福祉用具・生活環境の必要性と実演	野毛坂グローバル	80名	0名	西條富美代	理学療法学科
6月19日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科
6月19日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」		38名	4名	三木良子	医療福祉学科
6月19日	グローバル社会と健康について講義担当	グローバル社会と健康について学部生に対して講義	順天堂大学	50名	0名	渡辺長	理学療法学科
6月19日	地域連携活動	住区センターで交流会を実施	住区センター	14名	3名	松永美輝恵	医療福祉学科
6月19日	足立区教育連携事業 「小中学生を対象とした自然体験活動」	校外学習支援のための旧桜井小会場設営、秋山地区の実地踏査および環境整備、教材作成。	足立区 教育委員会		10名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月20日	横浜市動物園等指定管理者 選定評価委員会	横浜市の動物園の実態調査とあり方の検討	横浜市	10名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
6月20日	足立区教育連携事業 「小中学生を対象とした自然体験活動」	校外学習支援のための旧桜井小会場設営、秋山地区の実地踏査および環境整備、教材作成。	足立区 教育委員会		15名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月21日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育演習Ⅰ」の学外体験活動。	上野原市役所 福祉課	在園・在校 全児童	1年21名	木村龍平	こども学科
6月21日	足立区子育て支援事業 「子育てサロン」参加	足立区在住の乳幼児と保護者が利用する子育てサロン千住に学生が保育スタッフとして参加	足立区 住区推進課		2名	且直子 富岡麻由子 新家智子	児童教育学科に 所属し参加を 希望する学生

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	小動物を園に持ち込んでの動物ふれあい体験	上野原市立 蔵こども園	70名	13名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	小動物を園に持ち込んでの動物ふれあい体験	私立 上野原幼稚園	13名	6名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月21日	足立区教育連携事業 「小中学生を対象とした自然体験活動」	足立区立淵江第一小学校4年生児童を対象として、旧桜井小校舎、体育館、真福寺境内、秋山地区の自然を活用した自然体験活動。	足立区 教育委員会	107名	60名	花園誠 青木直樹 榊原健太郎	アニマル サイエンス学科 こども学科 総合教育センター
6月22日	障害児教育 外部専門指導	肢体・情緒障害児の評価と教育指導活動	甲府市 教育委員会	2名	0名	大関健一郎	教員個人 (作業療法学科)
6月22日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	14名	7名	袴崎京子 浅沼太郎	医療福祉学科
6月23日	園行事体験活動(バザー)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。 園行事当日の実際を学ぶ		在園全園時	1~4年 12名	木村龍平	こども学科
6月23日	打ち合わせ	長野県内のイベント実施のために打ち合わせを行った。	国営アルプス あづみの公園			江田慧子	学校教育学科
6月23日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	利用児童の 人数	上3年4名	吉川和幸	こども学科
6月23日	甲府市との連携協定に基づく活動	甲府市遊亀公園附属動物園でのエンリッチメント ツール制作練習	甲府市	4名		並木美砂子	アニマル サイエンス学科
6月24日	第24回障がいのあるかたのための乗馬会 「乗る・馬・体験」	近隣の障がい児を招待しての活動。 本会内では乗馬以外の行事あり。	本学主催	12名	28名	小川家資 喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
6月24日	授業/体験活動 (第117回 高齢者ロボット介在活動)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の高齢者ロボット介在活動	社会福祉法人 恒陽会	高齢者26人	2年6名	木村龍平	こども学科
6月24日	障害者乗馬会「ふれあい動物教室」	小動物によるふれあい体験および簡単な工作		20名	6名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	来園者に対して動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区 教育委員会	50名	5名	花園誠	アニマル サイエンス学科
6月25日	地域連携活動	千住便利隊		2名	9名	山田健司	医療福祉学科
6月25日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区地域 包括支援センター 千住本町	27名	0名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
6月26日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	13名	4名	井岡由美子	医療福祉学科
6月26日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
6月26日	子育て支援活動(第17/222回)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。 学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支 援活動の実際を学ぶ	上野原市役所 福祉課	子20名 保護者16名	2年2名	木村龍平	こども学科
6月26日	学習支援活動(第85回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。 「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	小学生4名 中学生11名	4年9名	木村龍平	こども学科
6月26日	地域連携活動	地域ケア会議	地域包括 支援センター	45名	0名	宮本佳子 浅沼太郎	医療福祉学科
6月26日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	大月市立 大月東小学校	43名	11名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月27日	読み聞かせ	保育園児を対象とした活動	元宿こども園	30名	9名	林友子	幼児保育学科
6月27日	動物介在更生保護プログラム	更生保護施設関係者を対象とした動物介在活動	更生保護法人 清和会	2名	0名	山本真理子	アニマル サイエンス学科
6月28日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育 演習Ⅰ」の学外体験活動。	上野原市役所 福祉課	在園・在校 全児童	1年37名 4年5名	木村龍平	こども学科
6月28日	小学校での顕微鏡の メンテナンス協力	出前授業の一環での顕微鏡メンテナンス	一般社団法人 葛西臨海教育 フォーラム		1名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
6月28日	小学校での顕微鏡の メンテナンス協力	出前授業の一環での顕微鏡メンテナンス	一般社団法人 葛西臨海教育 フォーラム		1名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
6月28日	足立区子育て支援事業 「子育てサロン」参加	足立区在住の乳幼児と保護者が利用する子育て サロン千住に学生が保育スタッフとして参加	足立区 住区推進課		2名	且直子 富岡麻由子 新家智子	児童教育学科に 所属し参加を 希望する学生

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
6月28日	地域の教育支援事業「授業参観・学習支援」	初等教育の授業参観と学習支援活動	上野原市立 上野原小学校 上野原西小学校	170名	8名	花園誠	こども学科
6月28日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	小動物を園に持ち込んでの動物ふれあい体験	上野原市立 上野原こども園	105名	18名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	小動物を園に持ち込んでの動物ふれあい体験	上野原市立 桐原保育所	20名	3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	上野原活性化事業「RE:animation12」	Re:animation12～桂川新田地区近隣公園特設会場 の開催を目指した企画・連絡・調整のための全 体会議	株式会社 Re:animation		50名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月29日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」		45名	5名	川口典男 藤江慎二	医療福祉学科
6月29日	流しそうめんと手遊び	保育園児を対象とした活動	かいづか保育園	17名	9名	呂ショウトン	幼児保育学科
6月30日	地域連携活動	2018カレー甲子園(試行)		0名	46名	医療福祉学科 教員	医療福祉学科
6月30日	園行事体験活動(夏祭り)	「コミュニティワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。 園行事当日の実際を学ぶ	上野原市役所 福祉課	在園全園時	2年3名	木村龍平	こども学科
6月30日	里モニ講習会講師	環境省のモニタリング1000里地調査の実地研修 会の講師を行った。	日本自然保護協会	30名	0名	江田慧子	学校教育学科
6月30日 ～7月1日	中学生を対象とした 干潟観察プログラム造成の協力	中学生を対象とした干潟観察プログラム造成の協 力	NPO法人bridge	15名	2名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
6月30日	帝京科学大学presents 「ジャンピングびっくり箱」をつくらう	未就学児～小学生を対象とした活動	ギャラクシティ	60名	9名	本多みどり	幼児保育学科
6月30日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子ども たちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	利用児童の 人数	上3年4名	吉川和幸	こども学科
6月30日	甲府市との連携協定に基づく活動	甲府市遊亀公園附属動物園でのエンリッチメント ツールの構想会議(市民参加の補助)	甲府市	4名		並木美砂子	アニマル サイエンス学科
7月2日	上野原活性化事業「RE:animation12」	Re:animation12～桂川新田地区近隣公園特設会場 の開催を目指した企画・連絡・調整のための全 体会議	株式会社 Re:animation		50名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月3日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
7月3日	子育て支援活動(第18/223回)	「コミュニティワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。 学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支 援活動の実際を学ぶ	上野原市役所 福祉課	子11名 保護者10名	2年2名	木村龍平	こども学科
7月3日	地域連携活動	商店街でチラシ配布		0名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科
7月3日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	7名	0名	小橋一雄	作業療法学科
7月3日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科
7月3日	タイ・自治体能力強化研修の講師	タイの地域医療に生かせる福祉用具の紹介	野毛坂グローバル	80名	0名	渡辺長	理学療法学科
7月3日	地域連携活動	住区センターで交流会を実施	住区センター	18名	3名	松永美輝恵	医療福祉学科
7月3日	地域の教育支援事業「帝京めぐみ幼稚園」	帝京めぐみ幼稚園の全園児に対する動物介在教 育	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月4日	帝京科学大学presents 「魚つり大会」	未就学児～小学生とその保護者	ギャラクシティ	60名	8名	上田玲子 旦直子	幼児保育学科
7月4日	シアターごっこ	保育園児を対象とした活動	日の出町保育園	70名	9名	鈿持勉 田口直子	幼児保育学科
7月4日	山梨県富士東部地域リハビリテーション 広域支援センター事業会議	富士・東部地域リハビリテーション広域支援セン ター管轄の、介護事業者を対象とした、リハビリ テーションを視点とした支援	山梨県	20名	0名	小橋一雄	作業療法学科
7月4日	帝京科学大学presents 「不思議な板カブラで遊ぼう」	未就学児～小学生とその保護者を対象とした活動	ギャラクシティ	50名	8名	木場有紀	幼児保育学科
7月4日	天王寺動物園経営形態検討懇談会	天王寺動物園の経営形態についての検討	大阪市	20名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
7月4日	手遊びと読み聞かせ	未就学児～小学生を対象とした活動	子育てサロン 千住大橋	24名	8名	新家智子	幼児保育学科
7月4日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	自然環境学科 (橋本研究室)
7月4日	読み聞かせ	保育園児を対象とした活動	元宿こども園	30名	9名	林友子	幼児保育学科
7月4日	地域連携活動	商店街にある喫茶店で活動説明、意見交換		7名	3名	山田健司 楠永敏恵	医療福祉学科
7月4日	帝京科学大学presents 「変身！動物の帽子づくり」	未就学児～小学生を対象とした活動	ギャラクシティ	30名	8名	渡部晃子	幼児保育学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
7月4日	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区教育委員会	98名	42名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月5日	足立区子育て支援事業「子育てサロン」参加	足立区在住の乳幼児と保護者が利用する子育てサロン千住に学生が保育スタッフとして参加	足立区住区推進課		2名	旦直子 富岡麻由子 新家智子	児童教育学科に 所属し参加を 希望する学生
7月6日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	13名	7名	椋崎京子 浅沼太郎	医療福祉学科
7月6日	地域連携活動	千住便利隊		1名	9名	山田健司	医療福祉学科
7月6日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	吉賀成子	医療福祉学科
7月7日	園行事体験活動(夏祭り)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。園行事当日の実際を学ぶ		在園全園時	2年5名	木村龍平	こども学科
7月7日	園行事手伝いボランティア(夏祭り)	園行事当日の手伝い(「お店屋さんごっこ」手伝い)		在園全園時	4年2名	木村龍平	こども学科
7月7日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	利用児童の 人数	上3年4名	吉川和幸	こども学科
7月7日	甲府市との連携協定に基づく活動	甲府市遊亀公園附属動物園でのエンリッチメントツール制作(市民参加の補助)	甲府市	5名		並木美砂子	アニマル サイエンス学科
7月8日	ふれあいの日	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	29名	26名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
7月9日	遊亀公園附属動物園応援団会合	遊亀公園附属動物園応援団の活動方針についての会合	甲府市 遊亀公園附属 動物園応援団	5名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
7月10日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	9名	4名	井岡由美子	医療福祉学科
7月10日	子育て支援活動(第19/224回)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所 福祉課	子12名 保護者9名	2年2名	木村龍平	こども学科
7月10日	学習支援活動(第86回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	小学生1名 中学生10名	4年9名	木村龍平	こども学科
7月10日	地域連携活動	町会会合へ参加、活動説明	町会	16名	0名	山田健司	医療福祉学科
7月10日	特別支援ケース会議	幼稚園に在籍する特別な支援を要する幼児について、幼稚園と教員がネットを介してケース会議を行う	学校法人 リズム学園 恵庭幼稚園			吉川和幸	こども学科
7月10日	地域の教育支援事業「帝京科学の夏まつり」	「帝京科学の夏まつり」実施に向けた事前連絡・企画会議	富士北麓 北都留教育事務所	2名	10名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月11日	帝京科学大学presents「ひっくり返しゲームで遊ぼう(変わりオセロ)」	未就学児～小学生とその保護者を対象とした活動	ギャラクシティ	15名	9名	飯泉祐美子 杉本信	幼児保育学科
7月11日	木曽福島小学校の授業・課外実習	木曽福島小学校にて理科の授業「昆虫」について学ぶ授業と昆虫採集をして、昆虫の種類を知る課外実習を行った。	木曽町	50名	0名	江田慧子	学校教育学科
7月12日	動物介在更生保護プログラム	更生保護施設関係者を対象とした動物介在活動	更生保護法人 静修会	1名	0名	山本真理子	アニマル サイエンス学科
7月12日	足立区子育て支援事業「子育てサロン」参加	足立区在住の乳幼児と保護者が利用する子育てサロン千住に学生が保育スタッフとして参加	足立区住区推進課		2名	旦直子 富岡麻由子 新家智子	児童教育学科に 所属し参加を 希望する学生
7月12日	上野原活性化事業「RE:animation12」	Re:animation12～桂川新田地区近隣公園特設会場の開催準備、会場設営、企画・連絡会議。	株式会社 Re:animation	30名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月13日	「介護予防(生活環境整備)」講義	介護予防のための生活環境整備(特に福祉用具普及)理解のための講義	帝京福祉 専門学校	25名	0名	西條富美代	理学療法学科
7月13日	地域連携活動	千住カレッジ	地域包括支援セン ター	16名	8名	宮本佳子	医療福祉学科
7月13日	地域連携活動	千住便利隊		1名	9名	山田健司	医療福祉学科
7月13日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	吉賀成子	医療福祉学科
7月13日	上野原活性化事業「RE:animation12」	Re:animation12～桂川新田地区近隣公園特設会場の開催準備、会場設営、企画・連絡会議。	株式会社 Re:animation	30名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
7月14日	地域連携活動	2018カレー甲子園	足立区役所 千住元町会 千住元町 アパート自治会 大門商店街 地域包括 支援センター他	52名	51名	医療福祉学科 教員	医療福祉学科
7月14日	乗馬療法 NPO法人EP B13	障害児	NPO法人EPO	10名	3名	石井孝弘	作業療法学科
7月14日	Re: animation	アニソンの運営支援	株式会社 リアニメーション			花園誠	こども学科 アニマル サイエンス学科
7月14日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	利用児童の 人数	上3年4名	吉川和幸	こども学科
7月14日	上野原活性化事業「RE:animation12」	Re:animation12～桂川新田地区近隣公園特設会場の運営、会場警備、場内整備。「出張オープンキャンパス」による大学の広報活動。	株式会社 Re:animation	7000名	200名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月15日	授業/体験活動 (第118回 高齢者ロボット介在活動)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の高齢者ロボット介在活動	社会福祉法人 恒陽会	高齢者27人	2年5名	木村龍平	こども学科
7月15日	福祉用具プランナー研究会大会でのシンポジウムパネリスト	福祉用具普及および研究活動普及を対象とした活動	福祉用具 プランナー研究 ネットワーク	70名	0名	西條富美代	理学療法学科
7月15日	上野原活性化事業「RE:animation12」	Re:animation12～桂川新田地区近隣公園特設会場の運営、会場警備、場内整備。「出張オープンキャンパス」による大学の広報活動。	株式会社 Re:animation	7000名	200名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月16日	身近ないきもの探検 「蜂宿(はちやど)ってなんだろう？」	井の頭自然文化園での公募イベント	井の頭 自然文化園	20名	12名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
7月16日	上野原活性化事業「RE:animation12」	Re:animation12～桂川新田地区近隣公園特設会場の撤収、場内清掃。	株式会社 Re:animation	7000名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月17日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、反省会	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
7月17日	子育て支援活動(第20/225回)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所 福祉課	子8名 保護者7名	2年2名	木村龍平	こども学科
7月17日	学習支援活動(第87回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	小学生5名 中学生8名	4年9名	木村龍平	こども学科
7月17日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	7名	0名	小橋一雄	作業療法学科
7月17日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」		41名	4名	三木良子	医療福祉学科
7月17日	足立区教育連携事業 「小中学生を対象とした自然体験活動」	校外学習支援のための旧桜井小会場設営、秋山地区の実地踏査および環境整備、教材作成。	足立区 教育委員会		5名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月18日	甲府支援勉強会	教員、保護者対象勉強会	甲府支援学校	50名	0名	石井孝弘	作業療法学科
7月18日	地域連携活動	ポーリング、グループホーム入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司 吉賀成子	医療福祉学科
7月18日	上野原市ゴミ対策推進協議会	市の主催する協議会出席(座長)	上野原市	8名	0名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
7月18日	足立区教育連携事業 「小中学生を対象とした自然体験活動」	校外学習支援のための旧桜井小会場設営、秋山地区の実地踏査および環境整備、教材作成。	足立区 教育委員会		10名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月19日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	自然環境学科 (橋本研究室)
7月19日	足立区子育て支援事業 「子育てサロン」参加	足立区在住の乳幼児と保護者が利用する子育てサロン千住に学生が保育スタッフとして参加	足立区 住区推進課		2名	且直子 富岡麻由子 新家智子	児童教育学科に 所属し参加を 希望する学生
7月19日	足立区教育連携事業 「小中学生を対象とした自然体験活動」	足立区立平野小学校4年生児童を対象として、旧桜井小校舎、体育館、真福寺境内、秋山地区の自然を活用した自然体験活動。	足立区 教育委員会	65名	35名	花園誠 青木直樹 榊原健太郎	アニマル サイエンス学科 こども学科 総合教育センター
7月20日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親の孤立に対するサポートとして、地域で支えあう交流の居場所づくりとしての、水引を用いた講座型交流プログラム	水引Lab	12名	0名	糸井和佳 吉岡幸子 小宮山恵美	看護学科
7月20日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	11名	7名	椋崎京子 浅沼太郎	医療福祉学科
7月20日	地域連携活動	千住便利隊(携帯操作を教えてほしい①)		1名	9名	山田健司	医療福祉学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
7月21日	夢の体験教室	足立区との連携で小学生を対象に「夢の体験教室」を学校教育学科の教員・学生で実施した。	足立区	168名	135名	学校教育学科 全教員	学校教育学科
7月21、22日	第3回帝京科学大学こども学科 表現発表会	こども学科学生の音楽、造形、身体表現等の授業で培った成果を、地域の子どもたち、保護者、保育関係者を対象に発表を行う	上野原市役所 上野原市 教育委員会		こども学科 全学生	こども学科 全教員	こども学科
7月21日	たまひよDX	成長・発達がゆっくりな子どもたちを育てる保護者の会に託児ボランティアとして参加	たまひよDX		上4年1名	吉川和幸	こども学科
7月24日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	8名	4名	井岡由美子	医療福祉学科
7月24日	障害児教育 外部専門指導	肢体・情緒障害児の評価と教育指導活動	甲府市 教育委員会	2名	0名	大関健一郎	教員個人 (作業療法学科)
7月24日	子育て支援活動(第21/226回)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所 福祉課	子* 保護者*	2年2名	木村龍平	こども学科
7月24日	学習支援活動(第88回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	小学生1名 中学生10名	4年9名	木村龍平	こども学科
7月24日	地域連携活動	チラシを配付した地域施設へ様子を見に出かける(御用聞き)		0名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科
7月24日	打ち合わせ	足立区生物園との事前打ち合わせを行った				江田慧子 木場有紀	学校教育学科 幼児保育学科
7月24日	地域貢献活動「おはなしカフェ」相談室	リハビリテーションを受けている子どもと母親を対象としたストレッチなどの運動指導	訪問看護 カナウの森	3名	0名	安齋久美子	理学療法学科
7月25日	障害児教育 外部専門指導	肢体・情緒障害児の評価と教育指導活動	甲府市 教育委員会	2名	0名	大関健一郎	教員個人 (作業療法学科)
7月25日	動物介在更生保護プログラム	更生保護施設関係者を対象とした動物介在活動	更生保護法人 清和会	0名	0名	山本真理子	アニマル サイエンス学科
7月26日	足立区子育て支援事業 「子育てサロン」参加	足立区在住の乳幼児と保護者が利用する子育てサロン千住に学生が保育スタッフとして参加	足立区 住区推進課		2名	且直子 富岡麻由子 新家智子	児童教育学科に 所属し参加を 希望する学生
7月27日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」		39名	5名	川口典男 藤江慎二	医療福祉学科
7月27日	地域連携活動	千住便利隊(携帯操作を教えてほしい②)		1名	9名	山田健司	医療福祉学科
7月27日	地域連携活動	千住便利隊(ゴミ置き場まで運んでほしい)		1名	9名	山田健司	医療福祉学科
7月30日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区地域 包括支援センター 千住本町	25名	0名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
8月1日	キヌアの播種	キヌアの栽培方法を対象とした活動	上野原ゆうきの輪 上野原市役所	5名	2名	和田龍一	自然環境学科
8月1日 ~10月22日	キヌアの栽培と成長観察	キヌアの栽培方法を対象とした活動	上野原ゆうきの輪 上野原市役所	5名	2名	和田龍一	自然環境学科
8月2日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	自然環境学科 (橋本研究室)
8月4日	園行事手伝いボランティア(納涼祭)	「コミュニティーワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。園行事当日の実際を学ぶ		在園全園時	4年4名 3年以下 10名	木村龍平	こども学科
8月10日	障害者支援施設イベントボランティア	障害者支援施設での行事のイベントブース運営	社会福祉法人 かながわ黎明会 くりのみ学園	入所者の 人数	上4年3名 上3年3名	花園誠 吉川和幸	こども学科 アニマル サイエンス学科
8月10日	児童デイサービス事業所 イベントボランティア	児童デイサービス事業所の利用児童の遠足に伴う付き添い支援	社会福祉法人 宝山寮	利用児童の 人数	上4年2名	吉川和幸	こども学科 アニマル サイエンス学科
8月11日	上野原活性化事業「秋山地区活性化」	秋山ふるさと祭りの会場設営・場内整備	秋山青年会	30名	8名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
8月11日 ~10月22日	富士スバルライン大気汚染物質計測	富士スバルラインで大気汚染を対象とした活動	山梨県道路公社	3名	3名	和田龍一	自然環境学科
8月12日	上野原活性化事業「秋山地区活性化」	秋山ふるさと祭りの運営、「ふれあい動物教室」の出席	秋山青年会	600名	12名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
8月13日	上野原活性化事業「秋山地区活性化」	秋山ふるさと祭りの会場撤収・場内清掃	秋山青年会	30名	12名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
8月16日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	自然環境学科 (橋本研究室)
8月18日	乗馬療法 NPO法人EP B13	障害児	NPO法人EPO	10名	3名	石井孝弘	作業療法学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
8月20日	富士北麓における地域産業活性化のために 行う、富士山酵母の調査	富士山酵母の探索	山梨県 富士山科学研究所	1名	7名	上野良平	生命科学科
8月21日	天王寺動物園経営形態検討懇談会	天王寺動物園の経営形態についての検討	大阪市	20名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
8月22日	災害時ペット用アプリ開発 ミーティング	アプリの開発のためのミーティング	足立区災害対策課	8名		山本和弘	アニマル サイエンス学科
8月23日	遊亀公園附属動物園応援講演会	遊亀公園附属動物園のあり方についての講演	甲府市 遊亀公園附属 動物園応援団	20名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
8月23日	動物介在更生保護プログラム	更生保護施設関係者を対象とした動物介在活動	更生保護法人 静修会	1名	0名	山本真理子	アニマル サイエンス学科
8月24日	山梨産業保健総合支援センター セミナー 「腰痛借金と腰痛対策」講師	産業保健における腰痛予防および腰痛対策普及 を目的とした活動	山梨産業保健 総合支援センター	30名	0名	西條富美代	理学療法学科
8月24日	読み聞かせ ゲーム	保育園児を対象とした活動	もみじの森保育園	30名	9名	富岡麻由子	幼児保育学科
8月25日	障害者支援施設イベントボランティア	障害者支援施設での行事の運営サポート、利用 者支援	社会福祉法人 さつきの会 藤野さつき学園	入所者の 人数	上4年6名	吉川和幸	こども学科
8月25日	たまひよDX	成長・発達がゆっくりな子どもたちを育てる保護者 の会に託児ボランティアとして参加	たまひよDX		上4年2名	吉川和幸	こども学科
8月26日	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	来園者に対して動物とのふれあい体験を通じて生 き物について学習させる活動	足立区 教育委員会	9名	5名	花園誠	アニマル サイエンス学科
8月27日	せんじゆカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職 などが自由に交流できる場の提供	足立区地域 包括支援センター 千住本町	26名	8名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
8月28日	遊亀公園附属動物園の整備に関する検討	動物園整備に関する検討	甲府市	7名	0名	佐渡友陽一 並木美砂子	アニマル サイエンス学科
8月28日	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第5回桂川フェスティバルに向けた会議	部の会	30名		花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
8月31日	障害児教育 外部専門指導	肢体・情緒障害児の評価と教育指導活動	甲府市 教育委員会	2名	0名	大関健一郎	教員個人 (作業療法学科)
8月31日	小諸市動物園への助言とシンポジウム打ち 合わせ	小諸市動物園についての現況把握とあり方につ いての助言、シンポジウム開催についての検討	小諸市	2名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
9月1日	動物園研究会	動物園に関する研究会	日立市 かみね動物園	20名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
9月3日	上野原市地域ケア会議	地域ケア包括契約構築に向けての総合的会議	上野原市	15名		小橋一雄	作業療法学科
9月3日	介護働初任者研修事業講師「介護に関す るからだのしくみの理解」	高校生に対する介護に必要な解剖・生理学の講 義	山梨県立 甲府城西高校		0名	西條富美代	理学療法学科
9月4日	打ち合わせ	次回の熊本でのイベントについて日本自然保護 協会と打ち合わせを行った	日本自然保護協会			江田慧子	学校教育学科
9月4日	幼稚園巡回教育相談	幼稚園に在籍する特別な支援を要する幼児につ いて、巡回教育相談を行う	学校法人 リズム学園 恵庭幼稚園			吉川和幸	こども学科
9月5日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	秋の大学遠足支援のための企画・連絡会議	上野原市立 上野原小学校	3名	1名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月6日	看護学生による中学生を対象とした 保健指導	統合実習の一環で、中学生を対象に「熱中症につ いて」の保健指導を実施した	柏市立 第四中学校	6名	2名	新野由子 岡潤子	看護学科 (母性看護学領域)
9月7日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親の孤立に対するサ ポートとして、地域で支えあう交流の居場所づく りとしての、水引を用いた講座型交流プログラム	水引Lab	14名	8名	糸井和佳 吉岡幸子 小宮山恵美	看護学科
9月7日	障害児教育 外部専門指導	肢体・情緒障害児の評価と教育指導活動	甲府市 教育委員会	2名	0名	大関健一郎	教員個人 (作業療法学科)
9月7日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	自然環境学科 (橋本研究室)
9月7日	ペット手帳配布	足立区獣医師会に対してペット手帳を配布	足立区獣医師会	30名		山本和弘	アニマル サイエンス学科
9月7日	看護学生による小・中学生を対象とした 保健指導	統合実習の一環で、小・中学生を対象に「睡眠・貧 血・小児生活習慣病について」の保健指導を実施 した	足立区立 竹の塚中学校	30名	2名	新野由子 岡潤子	看護学科 (母性看護学領域)
9月7日	地域の教育支援事業 「富士湧水の里水族館」	「ふれあい動物教室」の実施のための事前連絡会 議	富士湧水の里 水族館	1名		花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月8日	乗馬療法 NPO法人EP B13	障害児	NPO法人EPO	10名	3名	石井孝弘	作業療法学科
9月8日	山梨県私立幼稚園教職員研究会 (東部地区)	山梨県東部地区の私立幼稚園教諭の研究会にこ ども学科教員が助言者として参加する	山梨県 私学教育振興会 幼稚園部会	幼稚園教諭 約80名		大槻千秋	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
9月8日	看護学生による中学生を対象とした保健指導	統合実習の一環で、中学生を対象に「月経中のエチケット・宿泊での注意について」の保健指導を実施した	荒川区立 原中学校	50名	2名	新野由子 岡潤子	看護学科 (母性看護学領域)
9月10日	せんじゆカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区地域 包括支援センター 千住本町	29名	8名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
9月11日	学習支援活動(第89回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	小学生4名 中学生7名	4年5名	木村龍平	こども学科
9月11日	ペット手帳ミーティング	ペット手帳再編集ミーティング	あだち動物共生 ネットワーク	3名		山本和弘	アニマル サイエンス学科
9月11日	動物介在更生保護プログラム	更生保護施設関係者を対象とした動物介在活動	更生保護法人 静修会	4名	0名	山本真理子	アニマル サイエンス学科
9月14日	地域連携活動	千住カレッジ	地域包括 支援センター	26名	8名	宮本佳子	医療福祉学科
9月14日	地域貢献活動「おはなしカフェ」特別企画	リハビリテーションを受けている子どもの母親を対象としたストレッチ講座	訪問看護 かなつの森	2名	0名	安齋久美子	理学療法学科
9月14日	元宿こども園PTA講演会「しつけについて」	元宿こども園PTA主催の講演会「しつけについて」講師	足立区立 元宿こども園	15名	1名	富岡麻由子	幼児保育学科
9月15日	伊那市昆虫教室の開催	長野県伊那市ますみが丘にある「市民の森」にて昆虫採集指導と昆虫の体の仕組みの観察方法の指導を行った。	伊那市	20名	0名	江田慧子	学校教育学科
9月15日	TEIKA English Day in Senju		足立区役所 足立区内小学校	148名	28名	馬場千秋	学校教育学科 幼児保育学科 総合教育センター
9月15日	上野原活性化事業「中学生討論会」	上野原活性化のための中学生討論会。情報提供として上野原の歴史・自然資産について講義	上野原市	50名		花園誠	こども学科
9月16日	羽村市動物公園 ふれあい動物緑日実施準備	イベントの開催準備	羽村市 動物公園	1名	17名	佐渡友陽一	主に アニマル サイエンス学科 こども学科
9月16日	横浜市インタープリテーション研修会	研修会での講師	横浜市	10名	0名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
9月16日	地域連携活動	みんなのくるま2018	公益財団法人 いしずえ	50名	5名	吉賀成子 藤江慎二	医療福祉学科
9月17日	打ち合わせ	構成メンバーで打ち合わせを行った				江田慧子 木場有紀 新家智子	学校教育学科 幼児保育学科
9月17日	羽村市動物公園 ふれあい動物緑日	イベントの開催	羽村市 動物公園	500名	42名	佐渡友陽一	主に アニマル サイエンス学科 こども学科
9月17日	動物園・水族館の教育普及支援 「羽村市動物公園」	羽村市動物公園の場内に教育普及のための工作体験ブース等を出展	羽村市 動物公園	1000名	50名	花園誠 佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月18日	学習支援活動(第90回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	小学生2名 中学生10名	4年7名	木村龍平	こども学科
9月18日	教材の開発	構成メンバーで環境教育教材の制作を行った				江田慧子 木場有紀 新家智子	学校教育学科 幼児保育学科
9月18日	地域の教育支援事業「帝京めぐみ幼稚園」	帝京めぐみ幼稚園の全園児に対する動物介在教育	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業「ことぶき勸学院」	地域の高齢者に対する生涯学習支援	富士北麓 北都留教育事務所	20名	10名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月19日	甲府支援勉強会	教員、保護者対象勉強会	甲府支援学校	50名	0名	石井孝弘	作業療法学科
9月19日	横浜市動物園等指定管理者 選定評価委員会	横浜市の動物園の実態調査とあり方の検討	横浜市内会議室	10名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
9月19日	足立区教育連携事業 「小中学生を対象とした自然体験活動」	校外学習支援のための旧桜井小会場設営、秋山地区の実地踏査および環境整備、教材作成。	足立区 教育委員会		15名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月20日	介護側嘱初任者研修事業講師 「医療との連携とリハビリテーション」	高校生に対する李はりりテーション及び連携の講義	山梨県立 甲府城西高校		0名	西條富美代	理学療法学科
9月20日	足立区教育連携事業 「小中学生を対象とした自然体験活動」	校外学習支援のための旧桜井小会場設営、秋山地区の実地踏査および環境整備、教材作成。	足立区 教育委員会		15名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月21日	障害児教育 外部専門指導	肢体・情緒障害児の評価と教育指導活動	甲府市 教育委員会	2名	0名	大関健一郎	教員個人 (作業療法学科)

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
9月21日	スマイルアフリカプロジェクト(履かなくなったシューズを回収し、アフリカの子供たちに贈る活動)の周知活動	履かなくなったシューズを再利用する環境教育活動。および、アフリカの子供たちにシューズを贈る社会貢献活動を、足立区への周知(ポスター・チラシ)を依頼。	足立区	0名	0名	高田由基	学校教育学科
9月21日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	自然環境学科 (橋本研究室)
9月21日	足立区教育連携事業 「小中学生を対象とした自然体験活動」	足立区立中島根小学校4年生児童を対象として、旧桜井小学校舎、体育館、真福寺境内、秋山地区の自然を活用した自然体験活動。	足立区 教育委員会	92名	70名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月23日	ふれあいの日	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	35名	24名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
9月25日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、活動打合せ	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
9月25日	学習支援活動(第91回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。 「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	小学生3名 中学生11名	4年7名	木村龍平	こども学科
9月26日	地域の教育支援事業 「学校周囲の自然を活用した理科教育支援」	小学校の敷地内、周囲の自然の実地踏査	足立区立 千寿常東小学校	5名		花園誠	こども学科
9月28日	アクアリウムさがみはらイベント打ち合わせ	イベント実施にむけた打合せ	相模川ふれあい 科学館アクアリウム さがみはら	1名	1名	佐渡友陽一	主に アニマル サイエンス学科 こども学科
9月28日	地域連携活動	千住便利隊(ご自宅の掃除)		1名	9名	山田健司	医療福祉学科
9月28日	地域連携活動	千住便利隊(ご自宅の掃除、洗濯)		1名	9名	山田健司	医療福祉学科
9月29日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上3年4名		吉川和幸	こども学科
9月30日	授業/体験活動 (第119回 高齢者ロボット介在活動)	「動物ロボット介在教育演習Ⅰ」の高齢者ロボット介在活動	社会福祉法人 恒陽会	高齢者30人	1年13名	木村龍平	こども学科
9月30日	小諸市動物園シンポジウム	シンポジウム	小諸市	50名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
9/8, 9/9, 2/17,18	神津島 観光アドバイザー派遣	神津島観光協会をビジターセンター化するプロジェクトでのアドバイザーとして協力	公益財団法人 東京観光財団 神津島観光協会	10名	0名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
10月1日	遊亀公園附属動物園の整備に関する検討	動物園整備に関する検討	甲府市	7名	0名	佐渡友陽一 並木美砂子	アニマル サイエンス学科
10月2日	上野原小学校遠足	馬とのふれあい、世話体験、餌あげ。	上野原小学校	78名	26名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
10月2日	学習支援活動(第92回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。 「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	14名	8名	木村龍平	こども学科
10月2日	学習支援活動(第92回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。 「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	小学生4名 中学生10名	4年8名	木村龍平	こども学科
10月2日	上野原小学校遠足	馬とのふれあい、世話体験、餌あげ。	上野原小学校	78名	26名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
10月2日	地域の教育支援事業「うまセンター遠足」	馬とのふれあい・馬房掃除体験、小動物とのふれあい体験を通じて動物について学習させる。また、自然体験を通じて春の草花について学習させる。	上野原市立 上野原小学校	80名	25名	花園誠 喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月3日	福祉講話	小学校2年生を対象に、発達障害理解教育のための福祉講話を行う	上野原市立 上野原小学校	70名	6名	吉川和幸	こども学科
10月3日	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区 教育委員会	95名	20名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月4日	地域の教育支援事業「うまセンター遠足」	馬とのふれあい・馬房掃除体験、小動物とのふれあい体験を通じて動物について学習させる。また、自然体験を通じて春の草花について学習させる。	大月市立 大月東小学校	43名	20名	花園誠 喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月5日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	3名	0名	石井孝弘	作業療法学科
10月5日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	吉賀成子	医療福祉学科
10月6日	ふれあいの日	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	89名	17名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
10月6日	ふれあいの日	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	89名	17名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
10月7日	ふれあいの日	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	111名	22名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
10月7日	ふれあいの日	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	111名	22名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
10月9日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	12名	4名	井岡由美子	医療福祉学科
10月9日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
10月9日	学習支援活動(第93回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。 「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	15名	8名	木村龍平	こども学科
10月9日	地域連携活動	商店街でチラシを配布		0名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科
10月9日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科
10月9日	北海道深川西高等学校 開校80周年記念講演会	卒業生として後輩へ贈る言葉	北海道 深川西高等学校	333名	0名	高田由基	学校教育学科
10月10日	大月東小学校遠足	馬とのふれあい、世話体験、餌あげ。	大月東小学校	49名	16名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
10月10日	大月東小学校遠足	馬とのふれあい、世話体験、餌あげ。	大月東小学校	49名	16名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
10月11日	平塚市中央図書館 体験型ランニングイベント 「RUN × LIBRARY ～まず「はゆっくりに走ってみませんか～」	ランニングビギナーを対象とした講義と初歩的な 実技指導。	平塚市 中央図書館	14名	0名	高田由基	学校教育学科
10月11日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	自然環境学科 (橋本研究室)
10月12日	地域連携活動	千住カレッジ	地域包括 支援センター	23名	8名	宮本佳子	医療福祉学科
10月12日	地域連携活動	戸別訪問		1名	9名	山田健司	医療福祉学科
10月12日	地域連携活動	戸別訪問		2名	9名	山田健司	医療福祉学科
10月12日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	吉賀成子	医療福祉学科
10月13日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子ども たちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮		4名	吉川和幸	こども学科
10月13日	うまキャンプ	乗馬、世話体験、キャンプ、レクリエーション	足立区	8名	13名	古瀬浩史 喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
10月13日	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じ て生き物について学習させる活動。	足立区 教育委員会	183名	64名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月13日	【協力】小学校公開講座	小学生向け傷害予防講座	東京都 理学療法士協会 公開講座準備委員 会 東京都 理学療法士協会 足立区支部	100名		金子千香	東京理学療法学科
10月13日 ～14日	乗馬療法 NPO法人EPO	障害児	NPO法人EPO	10名	3名	石井孝弘	作業療法学科
10月13日 ～14日	馬キャンプ	うまセンター周辺を活用したキャンププログラム。 足立区の一親家庭の親子を対象に実施、	足立区	8名	30名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
10月14日	授業/体験活動 (第120回 高齢者ロボット介在活動)	「動物ロボット介在教育演習Ⅰ」の高齢者ロボット 介在活動	社会福祉法人 恒陽会	30名	20名	木村龍平	こども学科
10月14日	うまキャンプ	乗馬、世話体験、キャンプ、レクリエーション	足立区	8名	14名	古瀬浩史 喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
10月15日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実 践。「動物のお世話の学習会」	大月市立 鳥沢小学校	14名	8名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月16日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
10月16日	学習支援活動(第94回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。 「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	15名	7名	木村龍平	こども学科
10月16日	地域連携活動	ちらし作成、商店街に持参する		0名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科
10月16日	地域包括支援センター千住本町 家族介護者教室 「介護ストレスと上手に付き合うヒント」	家族介護者教室講師	足立区地域 包括支援センター 千住本町	24名	2名	小宮山恵美	看護学科
10月16日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科
10月16日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」		33名	4名	三木良子	医療福祉学科
10月17日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅱ」の学外体験活動。	上野原市役所 福祉課		33名	木村龍平	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
10月18日	甲府支援勉強会	教員、保護者対象勉強会		50名	0名	石井孝弘	作業療法学科
10月18日	足立区教育委員会主催 理科安全教育研修会	足立区内小中学校教員対象の理科実験講座	足立区 教育委員会	45名	3名	小池守	学校教育学科
10月18日	地域の教育支援事業「授業参観・学習支援」	初等教育の授業参観と学習支援活動	上野原市立 上野原小学校 上野原西小学校	170名	14名	花園誠	こども学科
10月19日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親の孤立に対するサポートとして、地域で支えあう交流の居場所づくりとしての、水引を用いた講座型交流プログラム	水引Lab	15名	0名	糸井和佳 吉岡幸子 小宮山恵美	看護学科
10月19日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	15名	7名	柊崎京子 浅沼太郎	医療福祉学科
10月19日	地域連携活動	戸別訪問		3名	9名	山田健司	医療福祉学科
10月19日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	吉賀成子	医療福祉学科
10月19日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	立川市立 立川第八小学校	79名	18名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月19日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親の孤立に対するサポートとして、地域で支えあう交流の居場所づくりとしての、水引を用いた講座型交流プログラム	水引Lab 水引クラフト庫	16名	0名	糸井和佳 吉岡幸子 小宮山恵美	看護学科
10月20日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮		4名	吉川和幸	こども学科
10月20日	犬の健康診断		㈱NEXCO中日本	35名	8名	大辻一也	アニマル サイエンス学科
10月20日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	談合坂サービスエリア利用者に対する小動物とのふれあい体験、動物の展示および解説、上野原市の紹介。大学の広報活動。	NEXCO中日本	600名	11名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	地域の教育支援事業 「富士湧水の里水族館」	富士湧水の里水族館来館者に対する小動物とのふれあい体験、動物の展示および解説。大学の広報活動。	富士湧水の里 水族館	700名	10名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月21日	第47回タートルマラソン国際大会兼第21回 バリアフリータートルマラソン大会in足立	救護(AED搬送係と救急連絡受付係)	足立区 (公社)日本 タートル協会	12000名	23名	大石徹	東京柔道整復学科
10月21日	地域の教育支援事業 「富士湧水の里水族館」	富士湧水の里水族館来館者に対する小動物とのふれあい体験、動物の展示および解説。大学の広報活動。	富士湧水の里 水族館	700名	11名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月22日	災害時ペット用アプリ開発ミーティング	アプリの開発のためのミーティング	アプリ開発企業 PISIS	3名		山本和弘	アニマル サイエンス学科
10月22日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区地域 包括支援センター 千住本町	27名	0名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
10月22日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践「動物のお世話の指導、飼育日誌の書き方指導」	大月市立 鳥沢小学校	14名	4名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月23日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
10月23日	学習支援活動(第95回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	13名	8名	木村龍平	こども学科
10月23日	地域連携活動	戸別訪問		2名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科
10月23日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科
10月23日	地域連携活動	住区センターで活動準備、夕食会への参加	住区センター	30名	3名	松永美輝恵	医療福祉学科
10月23日	地域の教育支援事業 「学校周囲の自然を活用した理科教育支援」	小学校の敷地内、周囲の自然の实地踏査	足立区立 千寿常東小学校	90名	9名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月24日	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区 教育委員会	95名	27名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月25日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅱ」の学外体験活動。	上野原市役所 福祉課		36名	木村龍平	こども学科
10月25日	地域の教育支援事業「授業参観・学習支援」	初等教育の授業参観と学習支援活動	上野原市立 上野原小学校 上野原西小学校	170名	14名	花園誠	こども学科
10月26日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	自然環境学科 (橋本研究室)

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
10月26日	地域連携活動	戸別訪問		2名	9名	山田健司	医療福祉学科
10月27日	体育館レク	地域の児童デイサービスの利用児を対象に、大学体育館でのレクリエーション活動を行う	社会福祉法人 宝山寮	17名	25名	藤井志帆 吉川和幸	こども学科
10月27日	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	特別な問題を抱えた児童の学習支援。動物とのふれあい体験と自然体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区 教育委員会	29名	11名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月27日	桂川ウェルネスパークでの展示	桂川ウェルネスパークの里山交流館に展示を展開し、解説活動を実施	桂川ウェルネス パーク	20名	13名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
10月27日 ~28日	スマイルアフリカプロジェクト	履かなくなったシューズを回収し、アフリカの子供たちに贈る活動。シューズを再利用する環境教育活動。および、アフリカの子供たちにシューズを贈る社会貢献活動。	足立区 木楽舎/ 月刊ソトコト	0名	0名	高田由基	学校教育学科 地域連携係
10月28日	AVRC多摩川 講師	ランニングクラブにおいて、ランニングに関する講話と実技指導	ランニング学会	14名	0名	高田由基	学校教育学科
10月28日	上野原活性化事業 「談合坂やさい村出張販売」	上野原活性化のための広報活動もかねて、桜科祭で談合坂やさい村の出張販売。	いいじゃん山梨	500名	15名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月29日	地域の教育支援事業「うまセンター遠足」	うまセンター遠足実施のための実地踏査および企画・連絡会議	上野原市立 秋山小学校	2名	3名	花園誠 喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月30日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	32名	7名	井岡由美子 松永美輝恵	医療福祉学科
10月30日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」		25名	4名	三木良子	医療福祉学科
10月30日	動物介在更生保護プログラム	更生保護施設関係者を対象とした動物介在活動	更生保護法人 静修会	5名	1名	山本真理子	アニマル サイエンス学科
10月30日	福祉講話	小学校3年生を対象に、発達障害理解教育のための福祉講話を行う	甲府市立 甲運小学校	50名	6名	吉川和幸	こども学科
10月30日	地域の教育支援事業「帝京めぐみ幼稚園」	帝京めぐみ幼稚園の全園児に対する動物介在教育	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月31日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための動物飼育体験活動実践・振り返り、反省会	大月市立 鳥沢小学校	14名	8名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区 教育委員会	90名	19名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月31日	【企画運営】足立区理学療法士研修会	地域在勤在任理学療法士向け研修会	東京都 理学療法士協会 足立区支部	40名		金子千香	東京理学療法学科
平成30年10月 ~平成31年3月	ペット手帳配布	あだち動物共生ネットワークが行われている譲渡会にて毎週配布	あだち動物共生 ネットワーク	50名		山本和弘	アニマル サイエンス学科
平成30年10月 ~平成31年3月	ペット手帳配布	帝京科学大学付属動物病院の来院者にペット手帳配布	帝京科学大学 付属動物病院	15名		山本和弘	アニマル サイエンス学科
11月1日	中学生への陸上競技指導	中学生への陸上競技の指導	千住青葉中学校	14名	4名	高田由基	学校教育学科
11月1日	ペット手帳配布	ペット手帳の配布	RENSA	20名		山本和弘	アニマル サイエンス学科
11月1日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	都留市立 禾生第一小学校	44名	17名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月2日	地域連携活動	戸別訪問		2名	9名	山田健司	医療福祉学科
11月2日	地域連携活動	GH入居者との交流会	運営社会 福祉法人	18名	5名	坂野憲司 吉賀成子	医療福祉学科
11月2日	上野原市文化保護財審議会	上野原市の文化財保護に関する審議	上野原市	5名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
11月2日	地域公開講座	地域住民を対象とした活動	川崎市宮前区	35名	0名	平賀篤	理学療法学科
11月3日	帝京科学大学ふれあい緑日 @アクアリウムさがみはら	イベントの開催	相模川ふれあい 科学館アクアリウム さがみはら	500名	44名	佐渡友陽一	主に アニマル サイエンス学科 こども学科
11月3日	動物園・水族館の教育普及支援 「アクアリウム相模原」	アクアリウム相模原の場内に教育普及のための工作体験ブース等を出展	アクアリウム 相模原	500名	11名	花園誠 佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月3日	わんフェス	わんフェス出展 帝京科学大学付属動物病院	足立区生物園	400名		山本和弘 宮田拓馬 川村和美 村山真秀	アニマル サイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
11月5日	スマイルアフリカプロジェクト 打合せ	履かなくなったシューズを回収し、アフリカの子供たちに贈る活動。その後打合せ。	木楽舎／月刊ソコト	2名	0名	高田由基	学校教育学科
11月5日	遊亀公園附属動物園の整備に関する検討	動物園整備に関する検討	甲府市	7名	0名	佐渡友陽一 並木美砂子	アニマル サイエンス学科
11月6日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
11月6日	学習支援活動(第96回)	1人親・生活困難家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	14名	8名	木村龍平	こども学科
11月6日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科
11月6日	特別支援教育ワークショップ	幼稚園教諭を対象に特別支援教育に関するワークショップを行う	学校法人リズム学園 恵庭幼稚園	7名		吉川和幸	こども学科
11月6日	地域の教育支援事業「帝京めぐみ幼稚園」	帝京めぐみ幼稚園の全園児に対する動物介在教育	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月7日	秋山小学校遠足	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	秋山小学校	21名	14名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区 教育委員会	170名	30名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月7日	地域の教育支援事業「うまセンター遠足」	馬とのふれあい・馬房掃除体験、小動物とのふれあい体験を通じて動物について学習させる。	上野原市立 秋山小学校	21名	15名	花園誠 喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月8日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	「ふれあい動物教室」の実施のための事前連絡会議	都留市立 谷村第一小学校	3名	1名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月9日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」		40名	5名	川口典男 藤江慎二	医療福祉学科
11月9日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	自然環境学科 (橋本研究室)
11月9日	地域連携活動	千住カレッジ	地域包括 支援センター	20名	8名	宮本佳子	医療福祉学科
11月9日	地域連携活動	戸別訪問		3名	9名	山田健司	医療福祉学科
11月9日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親の孤立に対するサポートとして、地域で支えあう交流の居場所づくりとしての、水引を用いた講座型交流プログラム	水引Lab 水引クラフト凵	15名	0名	糸井和佳 吉岡幸子 小宮山恵美	看護学科
11月9日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科の授業支援。イヌとのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区立 千寿双葉小学校	80名	15名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月9日	【企画運営】介護の日イベント	地域住民向け介護予防イベントにおけるリハビリ相談会	足立区 介護サービス 利用者協議会 東京都 理学療法士協会 足立区支部	50名		金子千香	東京理学療法学科
11月10日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮		4名	吉川和幸	こども学科
11月10日	「Lフェスタ」(足立区女性フェスティバル)参加	子どもの遊び広場でのボランティア活動	足立区女性団体		8名	林友子	幼児保育学科
11月11日	AVRC SAITAMA 講師	ランニングクラブにおいて、ランニングに関する講話と実技指導	ランニング学会	25名	0名	高田由基	学校教育学科
11月11日	ふれあいの日	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	59名	23名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
11月13日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
11月13日	子育て支援活動(第22/227回)	「コミュニティワーク演習Ⅱ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実践を学ぶ	上野原市役所 福祉課	16名	2名	木村龍平	こども学科
11月13日	地域連携活動	就労している身体障害者の方にお話を伺う		1名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科
11月13日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科
11月13日	地域連携活動	住区センターで活動準備、夕食会への参加	住区センター	26名	3名	松永美輝恵	医療福祉学科
11月13日	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第5回桂川フェスティバルに向けた会議	郵の会	30名		花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月13日	上野原小学校八重山自然観察事前授業	11/21の八重山での自然観察(総合的な学習の時間)の事前授業	上野原小学校	60名	9名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
11月15日	甲府支援勉強会	教員、保護者対象勉強会		50名	0名	石井孝弘	作業療法学科
11月16日	教育研究協議会 助言者	教育研究協議会において複数の公開授業をもとに、参加した教員同士で協議会を行い、その助言を行う。	東京学芸大学 附属小金井中学校	50名		松原洋子	こども学科
11月16日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	13名	7名	柘崎京子 浅沼太郎	医療福祉学科
11月16日	地域連携活動	戸別訪問		3名	9名	山田健司	医療福祉学科
11月16日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	吉賀成子	医療福祉学科
11月16日	地域の教育支援事業「科学の祭典」	科学の祭典の会場設営、出展準備および事前の打ち合わせ会議	山梨県立科学館	3名	70名	花園誠 木村龍平 青木直樹 大須賀隆子 山田知代	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月17日	青少年のための科学の祭典2018山梨大会	「動物・ロボット会時垂教育演習Ⅱ」(1年)、「保育教職実践演習」(4年)の学外体験活動	山梨県立科学館		45名	木村龍平 花園誠 大須賀隆子 山田知代	こども学科 アニマル サイエンス学科
11月17日	地域の教育支援事業「科学の祭典」	科学の祭典の出展、運営。	山梨県立科学館	710名	130名	花園誠 木村龍平 青木直樹 大須賀隆子 山田知代	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月18日	青少年のための科学の祭典2018山梨大会	「動物・ロボット会時垂教育演習Ⅱ」(1年)、「保育教職実践演習」(4年)の学外体験活動	山梨県立科学館		58名	木村龍平 花園誠 大須賀隆子 山田知代	こども学科 アニマル サイエンス学科
11月18日	地域の教育支援事業「科学の祭典」	科学の祭典の出展、運営。会場撤収作業、その後反省会。	山梨県立科学館	1072名	130名	花園誠 木村龍平 青木直樹 大須賀隆子 山田知代	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月20日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	18名	4名	井岡由美子	医療福祉学科
11月20日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
11月20日	子育て支援活動(第23/228回)	「コミュニティーワーク演習Ⅱ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所 福祉課	19名	2名	木村龍平	こども学科
11月20日	学習支援活動(第97回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	12名	8名	木村龍平	こども学科
11月20日	地域連携活動	戸別訪問		2名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科
11月20日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科
11月20日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」		36名	4名	三木良子	医療福祉学科
11月20日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮		6名	吉川和幸	こども学科
11月21日	横浜市動物園等指定管理者 選定評価委員会	横浜市の動物園の実態調査とあり方の検討	横浜市	10名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
11月21日	上野原小学校八重山自然観察	上野原小学校5年生の総合的な学習の時間へのプログラム提供	上野原小学校	60名	14名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
11月22日	木曾町との打ち合わせ	生物多様性基本協定に関わる木曾町と、今年度の事業の振り返りと、来年度に向けた打ち合わせを行った。	長野県 木曾町	5名		江田慧子	学校教育学科
11月22日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	都留市立 谷村第一小学校	42名	14名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月22日	座間警察署管内中学校・ 警察連絡協議会研修会講師	座間警察署管内中学校・警察連絡協議会が主催する研修会において、座間警察、児童相談所関係者、小中学校長・児童生徒指導担当教諭を対象に、「生徒指導とスクール・コンプライアンスー学校と関係機関の連携ー」について講演を行った。	座間警察署 管内中学校 警察連絡協議会	50名		山田知代	こども学科
11月23日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」		45名	5名	川口典男 藤江慎二	医療福祉学科
11月23日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	自然環境学科 (橋本研究室)
11月23日	地域連携活動	戸別訪問		4名	9名	山田健司	医療福祉学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
11月23日	のびのびプレイデイ	就学前の子どもとの遊びを通じた交流活動	足立区	410名	115名	飯泉祐美子 上田玲子 富岡麻由子 林友子 渡部晃子 木場有紀 鉦持勉 杉本信 新家智子 田口直子 巨直子 本多みどり 呂曉彤	幼児保育学科
11月23日	井の頭自然文化園での行事実施	動物園の公募行事を学生が主体となって実施(2回め)	井の頭 自然文化園	30名	10名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
11月24日	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	来園者に対して動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区 教育委員会	32名	4名	花園誠	アニマル サイエンス学科
11月24日 ～25日	日本自然保護協会の市民カレッジ(Nカレ)での講演	日本自然保護協会の市民カレッジ(Nカレ)でのオオルリンジミに関する講演を行った。	日本自然 保護協会	60名		江田慧子	学校教育学科
11月25日	授業/体験活動 (第121回 高齢者ロボット介在活動)	「動物ロボット介在教育演習Ⅱ」の高齢者ロボット介在活動	社会福祉法人 恒陽会	30名	18名	木村龍平	こども学科
11月25日	高森町でのプログラム実施	熊本県高森町市民33名を対象にプログラムを実施した。		33名		江田慧子 木場有紀 新家智子	学校教育学科 幼児保育学科
11月26日	八王子市片倉台小学校 海洋教育実践	小学校の正課での海洋教育のプログラム実践	一般社団法人 葛西臨海環境教育 フォーラム 八王子市 片倉台小学校	60名	6名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
11月26日	せんじゆカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区地域 包括支援センター 千住本町	23名	2名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
11月26日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	越谷市立 大袋東小学校	109名	19名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月27日	子育て支援活動(第24/229回)	「コミュニティワーク演習Ⅱ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実験を学ぶ	上野原市役所 福祉課	4名	2名	木村龍平	こども学科
11月27日	地域連携活動	戸別訪問		3名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科
11月27日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科の授業支援。イヌとのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区立 千寿双葉小学校	80名	15名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月30日	地域連携活動	戸別訪問		4名	9名	山田健司	医療福祉学科
11月30日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	吉賀成子	医療福祉学科
11月28日 ～30日	国立公園満喫プロジェクト 人材育成支援 研修講師	環境省事業「国立公園満喫プロジェクト人材育成支援業務」における研修会講師	環境省 公益社団法人 日本環境教育 フォーラム	60名	0名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
12月1日	体験！一日大学生	「心理テストで知る！私の性格」の講座を行った。	足立区	40名	4名	大山智子	学校教育学科
12月1日	体験！一日大学生	中学生を対象とした体験含む模擬講義「もしもの時の応急手当」	足立区	24名	4名	小黒正幸	東京柔道整復学科
12月1日	体験！一日大学生	足立区内の中学生を対象とする「体験！一日大学生」において、「大学講義体験」のプログラムを実施。	足立区 教育委員会			榑原健太郎 井腰圭介 小出哲也 小堀馨子 石田良仁	総合教育センター
	上野原活性化事業 「秋山!AKIYAMA!みらい創りプロジェクト」	上野原活性化のための討論会と人脈形成。	富士ゼロックス	50名	3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
12月1日	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区 教育委員会	82名	31名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
12月2日	学習支援活動(第98回)(クリスマス会)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	6名	24名	木村龍平	こども学科
12月2日	第25回障がいのあるかたのための乗馬会 「乗る・馬・体験」	近隣の障がい児を招待しての活動。本会内では乗馬以外の行事あり。	本学主催	12名	28名	小川家資 喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
12月2日	ミヤマシジミ研究会での司会	ミヤマシジミ研究会での司会を行った。		54名		江田慧子	学校教育学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
12月2日	障害者乗馬会「ふれあい動物教室」	小動物によるふれあい体験および簡単な工作		20名	4名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
12月2、3日	白峰林泊推進協議会アドバイザー	白山市白峰地区における地域活性化事業における計画立案のアドバイザー	白峰林泊 推進協議会	5名	0名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
12月4日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
12月4日	子育て支援活動(第25/230回)	「コミュニティーワーク演習Ⅱ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所 福祉課		2名	木村龍平	こども学科
12月4日	地域連携活動	戸別訪問		1名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科
12月4日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科
12月4日	地域の教育支援事業「帝京めぐみ幼稚園」	帝京めぐみ幼稚園の全園児に対する動物介在教育	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
12月5日	地域連携活動	講演会「グループホームと愉快的仲間たち」	運営社会 福祉法人	28名	15名	坂野憲司 吉賀成子	医療福祉学科
12月5日	地域連携活動	住区センターのクリスマス会に参加	住区センター	50名	3名	松永美輝恵	医療福祉学科
12月5日	保育内容 表現、環境、総論合同表現発表会	保育内容表現、保育内容環境、保育内容総論による表現発表	北千住 もみじの森保育園	35名	80名	飯泉祐美子 木場有紀	幼児保育学科
12月5日	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区 教育委員会	34名	15名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
12月6日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	自然環境学科 (橋本研究室)
12月7日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	3名	0名	石井孝弘	作業療法学科
12月7日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	12名	7名	柘崎京子 浅沼太郎	医療福祉学科
12月7日	地域連携活動	戸別訪問		3名	9名	山田健司	医療福祉学科
12月7日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	吉賀成子	医療福祉学科
12月7日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親の孤立に対するサポートとして、地域で支えあう交流の居場所づくりとしての、水引を用いた講座型交流プログラム	水引Lab 水引クラフト凾	15名	0名	糸井和佳 吉岡幸子 小宮山恵美	看護学科
12月8日	足立区教育連携事業「動物ふれあい教室」	生活科の授業支援。動物とのふれあい体験を通じて生き物について学習させる活動。	足立区 教育委員会	122名	51名	花園誠 青木直樹	アニマル サイエンス学科 こども学科
12月9日	ふれあいの日	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	37名	20名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
12月11日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	15名	4名	井岡由美子	医療福祉学科
12月11日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
12月11日	子育て支援活動(第26/231回)	「コミュニティーワーク演習Ⅱ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所 福祉課	26名	2名	木村龍平	こども学科
12月11日	学習支援活動(第99回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	16名	4名	木村龍平	こども学科
12月11日	地域連携活動	戸別訪問		2名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科
12月11日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科
12月11日	池田動物園のあり方に関する検討	池田動物園のあり方に関する検討	池田動物園を おうえんする会	4名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
12月12日	動物介在更生保護プログラム	更生保護施設関係者を対象とした動物介在活動	更生保護法人 静修会	6名	2名	山本真理子	アニマル サイエンス学科
12月12日	八王子市由井第3小学校 海洋教育実践	小学校の正課での海洋教育のプログラム実践	一般社団法人 葛西臨海環境教育 フォーラム 由井第3小学校	60名	8名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
12月14日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」		25名	5名	川口典男 藤江慎二	医療福祉学科
12月14日	地域連携活動	千住カレッジ	地域包括 支援センター	18名	8名	宮本佳子	医療福祉学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
12月14日	地域連携活動	戸別訪問		5名	10名	山田健司	医療福祉学科
12月14日	リハビリテーション相談	在宅で暮らす重症心身障害児者の保護者対象に、心身活動に関する相談とアドバイス	訪問介護事業所 カノウの森	3名	0名	安齋久美子	理学療法学科
12月15日	たまひよDX	成長・発達ที่ยつくりな子どもたちを育てる保護者の会に託児ボランティアとして参加	たまひよDX		4名	吉川和幸	こども学科
12月15日	【企画運営】リハビリテーション専門職合同フォーラム in あだち	地域住民向け介護予防啓蒙イベントにおける健康チェック、体力測定、リハビリ相談会	東京都 理学療法士協会 東京都 作業療法士会 東京都 言語聴覚士会	80名		金子千香	東京理学療法学科
12月15日 ～16日	乗馬療法 NPO法人EPO	障害児	NPO法人EPO	10名	0名	石井孝弘	作業療法学科
12月16日	甲府市との連携協定に基づく普及活動	クリスマスイベント打ち合わせと準備	甲府市	2名	6名	並木美砂子	アニマル サイエンス学科
12月16日	地域医療職対象講習会	海老名地区の医療・介護に勤める医療職を対象とした講習会	海老名地域包括 ケアセンター	15名	0名	平賀篤	理学療法学科
12月17日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区地域 包括支援センター 千住本町	32名	18名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
12月17日	甲府市との連携協定に基づく普及活動	クリスマスイベント打ち合わせと準備	甲府市	1名	1名	並木美砂子	アニマル サイエンス学科
12月18日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
12月18日	子育て支援活動(第27/232回)	「コミュニティーワーク演習Ⅱ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実践を学ぶ	上野原市役所 福祉課	15名	2名	木村龍平	こども学科
12月18日	学習支援活動(第100回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭 寡婦連合会	15名	9名	木村龍平	こども学科
12月18日	地域連携活動	戸別訪問		2名	3名	楠永敏恵	医療福祉学科
12月18日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科
12月18日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」		19名	4名	三木良子	医療福祉学科
12月18日	特別支援ケース会議	幼稚園に在籍する特別な支援を要する幼児について、幼稚園と教員がネットを介してケース会議を行う	学校法人リズム学園 恵庭幼稚園			吉川和幸	こども学科
12月18日	地域の教育支援事業「ふれあい動物教室」	生活科授業支援のための「動物のお世話の学習会」	大月市立 初狩小学校	15名	3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
12月19日	小諸市動物園再整備検討会議	小諸市動物園の再整備に関する検討	小諸市	12名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
12月20日	甲府支援勉強会	教員、保護者対象勉強会		50名	0名	石井孝弘	作業療法学科
12月20日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	自然環境学科 (橋本研究室)
12月20日	【参加】足立区他職種連携研修会	地域在勤在住医療介護福祉関連職種研修会	足立区福祉部 地域包括ケア 推進課 医療・介護 連携推進担当	70名		金子千香	東京理学療法学科
12月21日	地域連携活動	戸別訪問		4名	10名	山田健司	医療福祉学科
12月21日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	吉賀成子	医療福祉学科
12月21日	障害者支援施設イベントボランティア	障害者支援施設での行事の運営サポート、利用者支援	社会福祉法人 かながわ黎明会 くりのみ学園		3名	吉川和幸	こども学科
12月21日 ～23日	国立公園満喫プロジェクト人材育成支援アドバイザー派遣(京都美山)	環境省事業「国立公園満喫プロジェクト人材育成支援業務」における計画立案・施設運営にかかるアドバイザー	環境省 公益社団法人 日本環境教育 フォーラム	6名	0名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
12月22日	上野原活性化事業「秋山!AKIYAMA!みらい創りプロジェクト」	上野原活性化のための討論会と人脈形成。	富士ゼロックス	50名	3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
12月23日	授業/体験活動(第122回 高齢者ロボット介在活動)	「動物ロボット介在教育演習Ⅱ」の高齢者ロボット介在活動	社会福祉法人 恒陽会	30名	19名	木村龍平	こども学科
12月23日	足立フレンドリーマラソン	ボランティアコンディショニング	足立区 陸上競技協会	412名	30名	二神弘子 陸上 佐藤勉	東京柔道整復学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
12月23日	甲府市との連携協定に基づく普及活動	クリスマスイベント打ち合わせと準備	甲府市	45名	7名	並木美砂子	アニマル サイエンス学科
12月25日	ペット手帳再販ミーティング	ペット手帳再販のためのミーティング	あだち動物共生 ネットワーク	2名		山本和弘	アニマル サイエンス学科
1月4日	乗馬療法 NPO法人EPO	障害児	NPO法人EPO	10名	0名	石井孝弘	作業療法学科
1月8日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	13名	4名	井岡由美子	医療福祉学科
1月8日	地域連携活動	(高齢者)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	23名	4名	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
1月8日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	坂野憲司	医療福祉学科
1月8日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」		30名	4名	三木良子	医療福祉学科
1月11日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」		20名	5名	川口典男 藤江慎二	医療福祉学科
1月11日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流、レクリエーション活動	千住元町 アパート自治会	16名	7名	柘崎京子 浅沼太郎	医療福祉学科
1月11日	地域連携活動	千住カレッジ	地域包括 支援センター	25名	8名	宮本佳子	医療福祉学科
1月11日	地域連携活動	戸別訪問		5名	10名	山田健司	医療福祉学科
1月12日	教育講座講師		南アルプス 子どもの村 小中学校 生活と風土の会	40名		大須賀隆子	こども学科
1月12日	オオルリジミ講演会	安曇野市民役60名に対してオオルリジミの講演を行った。		60名		江田慧子	学校教育学科
1月12日	山梨県私立幼稚園教職員研究会 (東部地区)	山梨県東部地区の私立幼稚園教諭の研究会にこども学科教員が助言者として参加する	山梨県 私学教育振興会 幼稚園部会	80名		大槻千秋 吉川和幸 望月崇博	こども学科
1月13日	遊亀公園附属動物園でのイベント企画会議	遊亀公園附属動物園でのイベント企画会議	甲府市 遊亀公園附属 動物園応援団	8名	1名	佐渡友陽一	主に アニマル サイエンス学科 こども学科
1月15日	地域の教育支援事業「帝京めぐみ幼稚園」	帝京めぐみ幼稚園の全園児に対する動物介在教育	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第5回桂川フェスティバルに向けた会議	一般社団法人 部の会	30名	2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
1月15日	地域公開講座	地域住民を対象とした活動	川崎市宮前区	30名	0名	平賀篤	理学療法学科
1月16日	タイ自治体幹部日本式高齢者研修 講師	タイの自治体幹部に向けた福祉用具使用法の講義担当	タマサート大学 野毛坂ローカル	80名	0名	渡辺長	理学療法学科
1月17日	甲府支援勉強会	教員、保護者対象勉強会		50名	0名	石井孝弘	作業療法学科
1月18日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親の孤立に対するサポートとして、地域で支えあう交流の居場所づくりとしての、水引を用いた講座型交流プログラム	水引Lab 水引クラブ凜	14名	0名	糸井和佳 吉岡幸子 小宮山恵美	看護学科
1月18日	地域連携活動	戸別訪問		3名	10名	山田健司	医療福祉学科
1月18日	地域連携活動	(精神科)グループホーム訪問、入居者との交流	運営社会 福祉法人	12名	3名	吉賀成子	医療福祉学科
1月19日	上野原活性化事業 「秋山IAKIYAMA!みらい創りプロジェクト」	上野原活性化のための討論会と人脈形成。	富士ゼロックス	50名	1名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
1月19、20日	乗馬療法 NPO法人EPO	障害児	NPO法人EPO	10名	0名	石井孝弘	作業療法学科
1月20日	ふれあいの日	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	46名	22名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
1月20日	甲府市との連携協定に基づく普及活動	ゾウ観察会(市民参加)	甲府市	30名	9名	並木美砂子	アニマル サイエンス学科
1月21日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区地域 包括支援センター 千住本町	27名	0名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
1月21日	【参加】発達障害に関するネットワーク推進 会議	全国特別支援学校と普通学校の特別支援教育 コーディネータおよび保護者を対象に実施した調査結果の報告	本理学療法士協会 学校保健・特別支援 教育部門	100名		眞鍋克博	東京理学療法学科
1月23日	災害時ペット用アプリ開発ミーティング	アプリの開発のためのミーティング	アプリ開発企業 PISTIS	2名		山本和弘	アニマル サイエンス学科

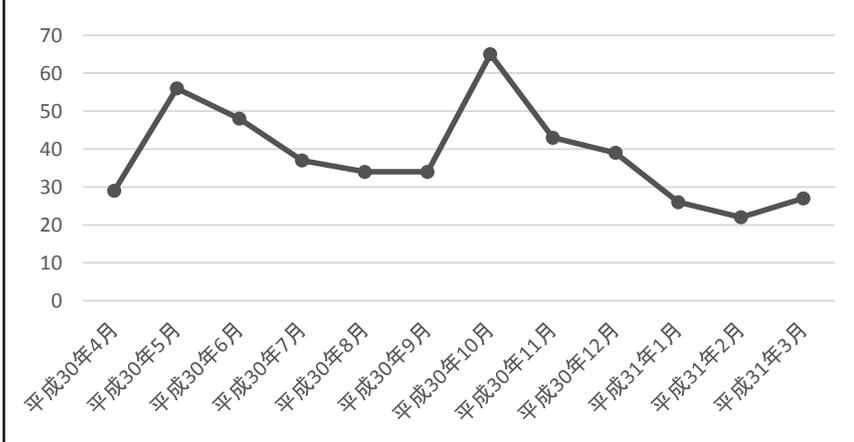
月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)	
1月26日	たまひよDX	成長・発達がゆっくりな子どもたちを育てる保護者の会に託児ボランティアとして参加	たまひよDX		1名	吉川和幸	こども学科	
1月29日	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第5回桂川フェスティバルに向けた会議	一般社団法人 鄙の会	30名	5名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科	
1月30日	横浜市動物園等指定管理者 選定評価委員会	横浜市の動物園の実態調査とあり方の検討	横浜市		10名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
1月30日	動物介在更生保護プログラム	更生保護施設関係者を対象とした動物介在活動	更生保護法人 静修会		4名	1名	山本真理子	アニマル サイエンス学科
2月1日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都		3名	0名	石井孝弘	作業療法学科
2月4日	災害時ペット用アプリ開発ミーティング	災害時ペット用アプリの最終調整	アプリ開発企業 PISTIS		3名		山本和弘	アニマル サイエンス学科
2月5日	地域公開講座	地域住民を対象とした活動	川崎市宮前区		30名	0名	平賀篤	理学療法学科
2月5日	タイ自治体幹部日本式高齢者研修 講師	タイの自治体幹部に向けた福祉用具使用法の講義担当	タマサート大学 野毛坂ローカル		80名	0名	渡辺長	理学療法学科
2月8日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親の孤立に対するサポートとして、地域で支えあう交流の居場所づくりとしての、水引を用いた講座型交流プログラム	水引Lab 水引クラフト凵		17名	0名	糸井和佳 吉岡幸子 小宮山恵美	看護学科
2月9日	乗馬療法 NPO法人EPO	障害児	NPO法人EPO		10名	0名	石井孝弘	作業療法学科
2月9日	きずなフォーラムでの司会	信州生物多様性ネットワークの第5回きずなフォーラムでの司会を行った。			100名		江田慧子	学校教育学科
2月9日	遊亀公園附属動物園の整備に関する検討	動物園整備に関する検討	甲府市		5名	0名	佐渡友陽一 並木美砂子	アニマル サイエンス学科
2月10日	ふれあいの日	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市		24名	13名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
2月12日	足立区生涯学習センター教養講座	足立区生涯学習センター教養講座において、ロボットセラピーの現状や将来の展望、幼児から高齢者までを対象としたペット型ロボットを使った介在活動、療法について講演	足立区 生涯学習センター				木村龍平	こども学科
2月12日	地域の教育支援事業「帝京めぐみ幼稚園」	帝京めぐみ幼稚園の全園児に対する動物介在教育	帝京めぐみ幼稚園		150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
2月13日	地域の教育支援事業 「みんなの町たんけん」	旧桜井小学校と周囲の自然を探検	上野原市立 秋山小学校		15名	3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
2月13日	タイ自治体幹部日本式高齢者研修 講師	タイの自治体幹部に向けた福祉用具使用法の講義担当	タマサート大学 野毛坂ローカル		80名	0名	渡辺長	理学療法学科
2月13日	帝京科学大学卒論発表会	アニマルサイエンス学科の卒論にてアプリ開発の発表	帝京科学大学 アニマルサイエンス 学科		100名		山本和弘	アニマル サイエンス学科
2月13、14日	上野原市のチョウの標本整理	上野原市に寄贈されたチョウの標本を展示会に向けて整理した。	上野原市				江田慧子	学校教育学科
2月16日	たまひよDX	成長・発達がゆっくりな子どもたちを育てる保護者の会に託児ボランティアとして参加	たまひよDX		2名		吉川和幸	こども学科
2月18日	特別支援ケース会議	幼稚園に在籍する特別な支援を要する幼児について、幼稚園と教員がネットを介してケース会議を行う	学校法人リズム学園 恵庭幼稚園				吉川和幸	こども学科
2月19日	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第5回桂川フェスティバルに向けた会議	一般社団法人 鄙の会		30名	8名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
2月19日	特別支援教育ワークショップ	幼稚園教諭を対象に特別支援教育に関するワークショップを行う	学校法人リズム学園 恵庭幼稚園		7名		吉川和幸	こども学科
2月21日	甲府支援勉強会	教員、保護者対象勉強会			50名	0名	石井孝弘	作業療法学科
2月21日	春日部市立庄和第2保育所講演	「きんにくのふしぎ」と題し、5～6歳児を対象として、筋肉の仕組みとトレーニング、ケガの防止などをクイズや体験を交えて講演	春日部市立 庄和第2保育所		40名	0名	小黒正幸	東京柔道整復学科
2月21、22日	上野原市のチョウの標本整理	上野原市に寄贈されたチョウの標本を展示会に向けて整理した。	上野原市				江田慧子	学校教育学科
2月21日 ～23日	国立公園満喫プロジェクト人材育成支援 アドバイザー派遣（沖縄やんばる）	環境省事業「国立公園満喫プロジェクト人材育成支援業務」における計画立案・施設運営にかかるアドバイザー	環境省 公益社団法人 日本環境教育 フォーラム		20名	0名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
2月24日	生物園でのプログラム実施	足立区生物園で親子対象にプログラムを実施した。	足立区		30名		江田慧子 木場有紀	学校教育学科 幼児保育学科
2月24日	【企画運営】区東北部区東部ブロック理学療法学会	一般市民向け講座ならびに地域在勤在住理学療法士を対象とした学会	東京都 理学療法士協会		40名		金子千香	東京理学療法学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
2月25日	せんじゆカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区地域 包括支援センター 千住本町	35名	0名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
2月25日	乗馬療法 NPO法人EPO	障害児	NPO法人EPO	10名	0名	石井孝弘	作業療法学科
2月26日	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第5回桂川フェスティバルに向けた会議	一般社団法人 部の会	30名	8名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
2月26日	山梨県障害児(者)地域療育支援事業 施設一般指導事業 研修会	主に福祉施設職員を対象とした研修会に講師として参加	どりーむ宝	80名		吉川和幸	こども学科
2月28日	カシオ展示会への参加	監修した腕時計プロトレックの完成披露会に参加した。				江田慧子	学校教育学科
2月28日	動物介在更生保護プログラム	更生保護施設関係者を対象とした動物介在活動	更生保護法人 静修会	2名	1名	山本真理子	アニマル サイエンス学科
3月1日	高知県四万十市地域福祉活動視察	学生による高齢者転倒予防教室 体操指導	えっころネット	30名	3名	渡辺長	理学療法学科
3月 1日 ~12日	国立公園満喫プロジェクト人材育成支援 アドバイザー派遣(沖縄慶良間)	環境省事業「国立公園満喫プロジェクト人材育成支援業務」における計画立案・施設運営にかかるアドバイザー	環境省 公益社団法人 日本環境教育 フォーラム	5名	0名	古瀬浩史	アニマル サイエンス学科
3月2日	乗馬療法 NPO法人EPO	障害児	NPO法人EPO	10名	0名	石井孝弘	作業療法学科
3月2日	自然保護セミナーでの講演	日本鱗翅学会自然保護委員会主催のチョウ類の永続的保護に向けてで講演した。		120名		江田慧子	学校教育学科
3月2日	障害者支援施設イベントボランティア	障害者支援施設での行事の運営サポート、利用者支援	社会福祉法人 かながわ黎明会 くりのみ学園		3名	吉川和幸	こども学科
3月2日	「あたちの大学リレーイベント企画第15弾 帝京科学大学 子どもための哲学ワークショップ 『なぜ・なに？どうして？』」	足立区の小学3・4年生及びその保護者を対象に、「対話」する哲学を通じて、「コミュニケーション能力」のその先の、さまざまな知性・感性のあり方を想像する機会を提供すること等を意図して、「子どものための哲学ワークショップ」を実施。	足立区	115名	4名	榊原健太郎	総合教育センター
3月4日	藤野幼稚園遠足	馬とのふれあい、世話体験、餌あげ。	藤野幼稚園	19名	15名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
3月4日	遊亀公園附属動物園の整備に関する検討	動物園整備に関する検討	甲府市	5名	0名	佐渡友陽一 並木美砂子	アニマル サイエンス学科
3月4日	地域の教育支援事業「うまセンター遠足」	馬とのふれあい・馬房掃除体験、小動物とのふれあい体験を通じて動物について学習させる。	相模原市立 藤野幼稚園	21名	12名	花園誠 喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月5日	市民ZOOネットワーク クロストーク	動物園のあり方に関する講演と大阪市天王寺動物園園長との対談	市民ZOO ネットワーク ギャラリーカフェKirin	40名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
3月5日	地域の教育支援事業「帝京めぐみ幼稚園」	帝京めぐみ幼稚園の全園児に対する動物介在教育	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月8日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親の孤立に対するサポートとして、地域で支えあう交流の居場所づくりとしての、水引を用いた講座型交流プログラム	水引Lab 水引クラフト凧	24名	3名	糸井和佳 吉岡幸子 小宮山恵美	看護学科
3月9日	オオルリジミの講演	日本自然保護協会とNTTレゾナント共催のイベントでオオルリジミに関する講演を行った。	日本自然 保護協会	13名		江田慧子	学校教育学科
3月10日	ふれあいの日	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	45名	16名	喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
3月10日	動物園研究部の活動に関する打合せ	動物園研究部の活動に関する打合せ	多摩動物公園	3名	9名	佐渡友陽一	主に アニマル サイエンス学科
3月10日	だれでも環境実験室	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査の成果発表と顕微鏡観察	桑袋ビオトープ公園		0名	橋本慎治	自然環境学科 (橋本研究室)
3月11日	地域連携報告会での発表	地域連携報告会にて教員活動助成の発表を行った。	足立区			江田慧子	学校教育学科
3月11、12日	上野原市のチョウの標本整理	上野原市に寄贈されたチョウの標本を展示会に向けて整理した。	上野原市			江田慧子	学校教育学科
3月12日	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第5回桂川フェスティバルに向けた会議	一般社団法人 部の会	30名	10名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月14日	遊亀公園附属動物園整備計画に関する地域住民との検討会	動物園整備に関する検討	甲府市 遊亀公園の 地域住民	10名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
3月16日	上野原市のチョウの講演会	上野原市で行った標本の展示会の中でチョウに関する講演会を行った。	上野原市	30名		江田慧子	学校教育学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
3月16日	TEIKA English Day in Senju	3歳から小学校2年生までを対象に英語のゲームや歌などを実施	足立区教育委員会	80名	23名	馬場千秋	学校教育学科 幼児保育学科 児童教育学科
3月19日	遊亀公園附属動物園でのイベント企画会議	遊亀公園附属動物園でのイベント企画会議	甲府市 遊亀公園附属 動物園応援団	9名	2名	佐渡友陽一	主に アニマル サイエンス学科 こども学科
3月19日	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第5回桂川フェスティバルに向けた会議	一般社団法人 部の会	30名	10名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月21日	ミニ乗馬会	近隣の障がい児を招待しての活動。 本会内では乗馬以外の行事あり。	本学主催	3名	14名	小川家資 喜久村徳淑	アニマル サイエンス学科
3月21日	【企画運営】足立区理学療法士研修会	地域在勤在任理学療法士向け研修会	東京都 理学療法士協会 足立区支部	40名	3名	金子千香	東京理学療法学科
3月22日	上野原市文化保護財審議会	上野原市の文化財保護に関する審議	上野原市	5名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
3月23日	リハビリテーション相談	在宅で暮らす重症心身障害児者の保護者対象 に、心身活動に関する相談とアドバイス	訪問介護事業所 カナワの森	8名	0名	安齋久美子	理学療法学科
3月23日	安曇野オオルリシジミ保護対策会議に参加	国営アルプスあづみの公園内で行われた安曇野 オオルリシジミ保護対策会議に参加し、今年度の 発生状況と、来年度の調査計画について発表し た。		15名		江田慧子	学校教育学科
3月23日	ちば ZOO カフェ	動物園のあり方に関する講演	千葉市 動物公園	20名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
3月25日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職 などが自由に交流できる場の提供	足立区地域 包括支援センター 千住本町	30名	0名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
3月25日	遊亀公園附属動物園整備計画に関する地 域住民との検討会	動物園整備に関する検討	甲府市 遊亀公園の 地域住民	7名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
3月26日	上野原活性化事業 「第4回桂川フェスティバル実行委員会」	第5回桂川フェスティバルに向けた会議	一般社団法人 部の会	30名	10名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月27日	小諸市動物園再整備検討会議	小諸市動物園の再整備に関する検討	小諸市	12名	0名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
3月28日	動物介在更生保護プログラム	更生保護施設関係者を対象とした動物介在活動	更生保護法人 静修会	3名	0名	山本真理子	アニマル サイエンス学科
3月30日	乗馬療法 NPO法人EPO	障害児	NPO法人EPO	10名	0名	石井孝弘	作業療法学科

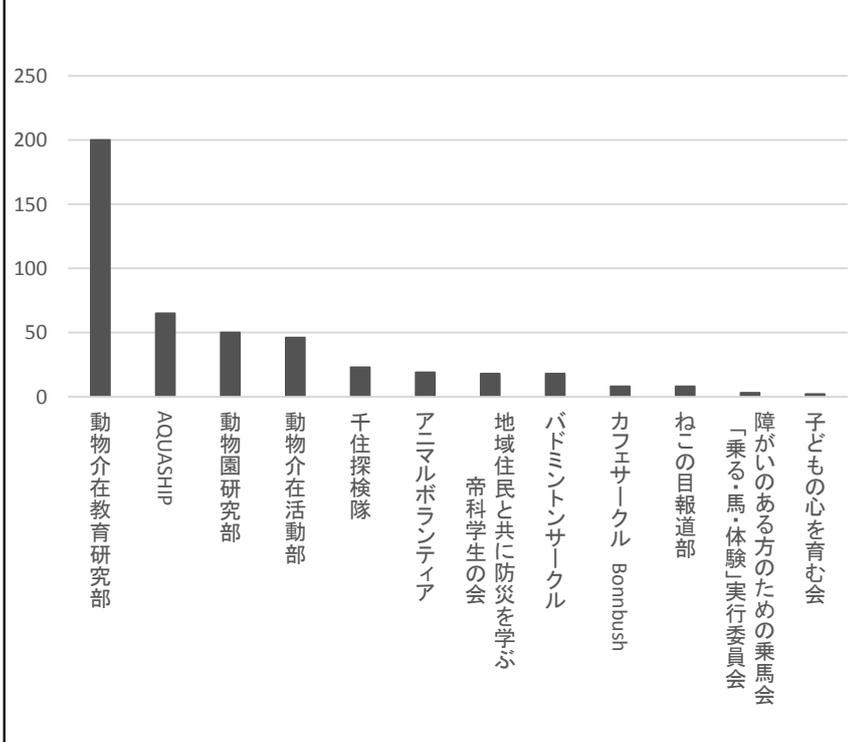
平成30年度地域連携推進センター活動統計(学生団体)

月別活動件数



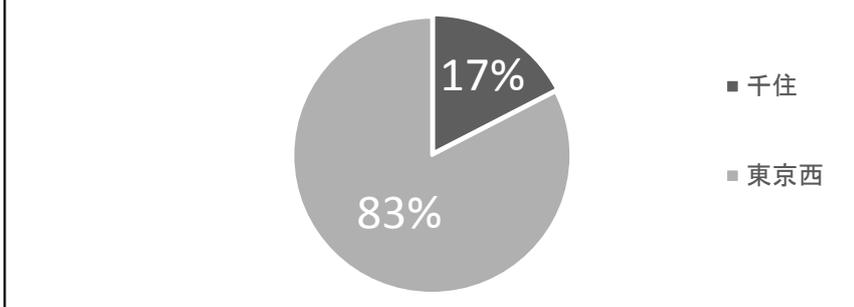
活動月	件数
平成30年4月	29
平成30年5月	56
平成30年6月	48
平成30年7月	37
平成30年8月	34
平成30年9月	34
平成30年10月	65
平成30年11月	43
平成30年12月	39
平成31年1月	26
平成31年2月	22
平成31年3月	27
総計	460

団体別活動実績



活動団体名	件数
動物介在教育研究部	200
AQUASHIP	65
動物園研究部	50
動物介在活動部	46
千住探検隊	23
アニマルボランティア	19
地域住民と共に防災を学ぶ帝科学生の会	18
バドミントンサークル	18
カフェサークル Bonnush	8
ねこの目報道部	8
「乗る・馬・体験」実行委員会	3
子どもの心を育む会	2
総計	460

活動キャンパス別活動実績



場所	件数
千住キャンパス	80
東京西キャンパス	380
総計	460

平成30年度地域連携活動記録表(学生団体)

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
4月8日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	2名	加賀谷玲夢	
4月15日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	3名	加賀谷玲夢	
4月22日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	6名	加賀谷玲夢	
4月29日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	3名	加賀谷玲夢	
5月6日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	1名	加賀谷玲夢	
5月13日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	6名	加賀谷玲夢	
5月13日	AQUASHIP	桂川フェス	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等			4名	加賀谷玲夢	
5月20日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	2名	加賀谷玲夢	
5月27日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	2名	加賀谷玲夢	
6月3日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	4名	加賀谷玲夢	
6月10日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	3名	加賀谷玲夢	
6月17日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	3名	加賀谷玲夢	
6月24日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	3名	加賀谷玲夢	
6月24日	AQUASHIP	障がい者乗馬会	展示・環境教育等			4名	加賀谷玲夢	
7月1日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	7名	加賀谷玲夢	
7月8日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	5名	加賀谷玲夢	
7月15日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	6名	加賀谷玲夢	
7月16日	AQUASHIP	アイメッセ移動水族館	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来場者数	3名	加賀谷玲夢	
7月19日	AQUASHIP	足立区遠足	展示・環境教育等			1名	加賀谷玲夢	

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
7月22日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	3名	加賀谷玲夢	
7月29日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	3名	加賀谷玲夢	
8月4日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	1名	加賀谷玲夢	
8月5日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	2名	加賀谷玲夢	
8月12日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	3名	加賀谷玲夢	
8月15日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	1名	加賀谷玲夢	
8月16日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	1名	加賀谷玲夢	
8月19日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	2名	加賀谷玲夢	
8月22日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	1名	加賀谷玲夢	
8月23日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	1名	加賀谷玲夢	
8月24日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	2名	加賀谷玲夢	
8月25日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	1名	加賀谷玲夢	
8月26日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	1名	加賀谷玲夢	
9月2日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	2名	加賀谷玲夢	
9月21日	AQUASHIP	足立区遠足	展示・環境教育等			6名	加賀谷玲夢	
9月23日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	3名	加賀谷玲夢	
9月30日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	3名	加賀谷玲夢	
10月6日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	4名	加賀谷玲夢	
10月7日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	1名	加賀谷玲夢	

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
10月14日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	4名	加賀谷玲夢	
10月21日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	6名	加賀谷玲夢	
10月6日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	4名	加賀谷玲夢	
10月7日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	1名	加賀谷玲夢	
10月14日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	4名	加賀谷玲夢	
10月21日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	5名	加賀谷玲夢	
10月28日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	4名	加賀谷玲夢	
11月4日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	3名	加賀谷玲夢	
11月18日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	6名	加賀谷玲夢	
11月25日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	6名	加賀谷玲夢	
12月2日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	6名	加賀谷玲夢	
12月9日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	4名	加賀谷玲夢	
12月16日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	3名	加賀谷玲夢	
12月23日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	5名	加賀谷玲夢	
12月30日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	3名	加賀谷玲夢	
1月2日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	1名	加賀谷玲夢	
1月6日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	1名	加賀谷玲夢	
1月13日	AQUASHIP	山梨県立 富士湧水の 里水族館における ボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者数	2名	加賀谷玲夢	

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
1月20日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	4名	加賀谷玲夢	
2月3日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	4名	加賀谷玲夢	
2月10日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	4名	加賀谷玲夢	
2月17日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	1名	加賀谷玲夢	
3月3日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	3名	加賀谷玲夢	
3月10日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	3名	加賀谷玲夢	
3月17日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	4名	加賀谷玲夢	
3月24日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	4名	加賀谷玲夢	
3月31日	AQUASHIP	山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動	飼育管理・展示・イベント運営・環境教育等	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者数	5名	加賀谷玲夢	
4月1日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
4月15日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	10名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
4月22日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
5月6日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
5月13日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
5月20日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
6月3日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	10名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
6月10日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
6月17日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	11名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
6月24日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
7月1日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	9名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
7月8日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	9名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
7月15日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
7月22日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	9名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
7月29日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
8月5日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
8月19日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
9月2日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	5名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
9月16日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	6名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
9月23日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
9月30日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
10月6日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	200名	9名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
10月7日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	200名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
10月8日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	200名	10名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
10月14日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
10月21日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	9名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
10月28日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
11月4日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	9名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
11月11日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
11月18日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
11月25日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
12月2日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	4名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
12月9日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	6名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
12月16日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	10名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
12月23日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
1月6日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
1月13日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
1月20日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
1月27日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
2月3日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	6名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
2月9日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	200名	9名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
2月10日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	200名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
2月10日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
2月11日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	200名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
2月17日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
2月24日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	9名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
3月3日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
3月10日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	9名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
3月17日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
3月31日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科等
4月13日	動物介在活動部	訪問活動	高齢者を対象とした活動	社会福祉法人緑水会	16名	5名	小川家資	アニマルサイエンス学科
4月18日	動物介在活動部	訪問活動	高齢者を対象とした活動	社会福祉法人緑水会	11名	5名	小川家資	アニマルサイエンス学科
4月25日	動物介在活動部	訪問活動	高齢者を対象とした活動	社会福祉法人緑水会	11名	3名	小川家資	アニマルサイエンス学科
4月27日	動物介在活動部	訪問活動	高齢者を対象とした活動	社会福祉法人緑水会	12名	8名	小川家資	アニマルサイエンス学科
5月10日	動物介在活動部	訪問活動	高齢者を対象とした活動	社会福祉法人緑水会	11名	4名	小川家資	アニマルサイエンス学科
5月13日	動物介在活動部	桂川フェスティバル	来場者を対象とした活動	鄙の会		9名	小川家資	アニマルサイエンス学科

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
11月23日	動物介在活動部	訪問活動	高齢者を対象とした活動	社会福祉法人 緑水会	13名	7名	小川家資	アニマル サイエンス学科 作業療法学科
11月29日	動物介在活動部	訪問活動	高齢者を対象とした活動	社会福祉法人 緑水会	4名	3名	小川家資	アニマル サイエンス学科 作業療法学科
12月12日	動物介在活動部	訪問活動	高齢者を対象とした活動	社会福祉法人 緑水会	5名	4名	小川家資	アニマル サイエンス学科
12月14日	動物介在活動部	訪問活動	高齢者を対象とした活動	社会福祉法人 緑水会	5名	2名	小川家資	アニマル サイエンス学科
12月15日	動物介在活動部	動物介在活動	高齢者を対象とした活動	社会福祉法人 緑水会	14名	14名	小川家資	アニマル サイエンス学科 作業療法学科
12月22日	動物介在活動部	訪問活動	高齢者を対象とした活動	社会福祉法人 緑水会	7名	5名	小川家資	アニマル サイエンス学科 作業療法学科
12月27日	動物介在活動部	訪問活動	高齢者を対象とした活動	社会福祉法人 緑水会	11名	5名	小川家資	アニマル サイエンス学科 作業療法学科
4月13日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動準備の話し合い	千住元町アパート 自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
4月20日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動環境の体験、見学	千住元町アパート 自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
4月27日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動準備の話し合い	千住元町アパート 自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
5月18日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	戸別訪問、交流	千住元町アパート 自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
5月25日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動記録のまとめ	千住元町アパート 自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
6月1日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動準備の話し合い	千住元町アパート 自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
6月15日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	戸別訪問、交流	千住元町アパート 自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
6月29日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動記録のまとめ	千住元町アパート 自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
7月13日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動準備の話し合い	千住元町アパート 自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
7月27日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動状況の振り返り	千住元町アパート 自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
9月28日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動準備の話し合い	千住元町アパート 自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
10月5日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動準備の話し合い	千住元町 アパート自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
10月12日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	戸別訪問、交流	千住元町 アパート自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
10月26日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動準備の話し合い	千住元町 アパート自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
11月2日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	戸別訪問、交流	千住元町 アパート自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
11月9日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動記録のまとめ	千住元町 アパート自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
11月23日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動準備の話し合い	千住元町 アパート自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
11月30日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	戸別訪問、交流	千住元町 アパート自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
12月14日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動準備の話し合い	千住元町 アパート自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
12月21日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	戸別訪問、交流	千住元町 アパート自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
1月4日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動準備の話し合い	千住元町 アパート自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
1月18日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	活動記録のまとめ	千住元町 アパート自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
3月11日	千住探検隊	地域住民との 連携活動	成果報告会	千住元町 アパート自治会	20名	7名	浅沼太郎	医療福祉学科
5月3日	アニマルボランティア	スマイルフェス	来場者を対象とした活動	神奈川県 動物愛護協会	60000名	2名	山本和弘	制限なし
5月5日	アニマルボランティア	神奈川県 動物愛護協会 ボランティア	ボランティア活動	神奈川県 動物愛護協会	220名	2名	山本和弘	
5月12日	アニマルボランティア	神奈川県 動物愛護協会 ボランティア	ボランティア活動	神奈川県 動物愛護協会	220名	2名	山本和弘	制限なし
5月27日	アニマルボランティア	あだち保護 猫たちの譲渡会	ボランティア活動	あだち共生 ネットワーク	300名	6名	山本和弘	

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
7月21日	アニマルボランティア	アニマルラブフェスタ	来場者を対象とした活動	帝京科学大学		7名	山本和弘	制限なし
8月17日	アニマルボランティア	尾久の原公園 会場視察	ボランティア活動	社会教育関係団体 With		1名	山本和弘	制限なし
8月20日	アニマルボランティア	あだち 自然体験デー準備	ボランティア活動	荒川ビジター センター		3名	山本和弘	制限なし
9月1日	アニマルボランティア	あだち 自然体験デー準備	ボランティア活動	荒川ビジター センター		3名	山本和弘	制限なし
9月2日	アニマルボランティア	あだち自然体験デー	ボランティア活動	荒川ビジター センター		4名	山本和弘	制限なし
9月9日	アニマルボランティア	千住緑町 お祭りボランティア	ボランティア活動	帝京科学大学		1名	山本和弘	制限なし
9月13日	アニマルボランティア	神奈川県 動物愛護協会 ボランティア	ボランティア活動	神奈川県 動物愛護協会		1名	山本和弘	制限なし
9月15日	アニマルボランティア	千住河原町 お祭りボランティア	ボランティア活動	帝京科学大学		1名	山本和弘	制限なし
10月5日	アニマルボランティア	神奈川県 動物愛護協会 ボランティア(写真展)	ボランティア活動	神奈川県 動物愛護協会	557名 ※四日間 合計	2名	山本和弘	制限なし
10月6日	アニマルボランティア	神奈川県 動物愛護協会 ボランティア(写真展)	ボランティア活動	神奈川県 動物愛護協会	557名 ※四日間 合計	2名	山本和弘	制限なし
10月7日	アニマルボランティア	神奈川県 動物愛護協会 ボランティア(写真展)	ボランティア活動	神奈川県 動物愛護協会	557名 ※四日間 合計	2名	山本和弘	制限なし
10月8日	アニマルボランティア	神奈川県 動物愛護協会 ボランティア(写真展)	ボランティア活動	神奈川県 動物愛護協会	557名 ※四日間 合計	2名	山本和弘	制限なし
10月27日	アニマルボランティア	桜科祭	ボランティア活動	帝京科学大学	200名	18名	山本和弘	制限なし
10月28日	アニマルボランティア	尾久の原フェス	ボランティア活動	帝京科学大学 社会教育関係団体 With	2180名	18名	山本和弘	制限なし
10月28日	アニマルボランティア	桜科祭	ボランティア活動	帝京科学大学	200名	18名	山本和弘	制限なし
6月6日	地域住民と共に防災を 学ぶ帝科学生の会	「帝科学生と地域の防 災について一緒に学ぼう」 の事前打ち合わせ	防災ボランティアの方々からサバイバルクッキング について学ぶ。 防災について話を伺った。	足立区における 災害ボランティアに 関する市民運動 (チームあだち)		4名	宮本佳子	医療福祉学科
7月4日	地域住民と共に防災を 学ぶ帝科学生の会	サバイバルクッキング の予行	学生のみでサバイバルクッキングを実施した。			5名	宮本佳子	医療福祉学科
8月29日	地域住民と共に防災を 学ぶ帝科学生の会	帝科学生と地域の防 災について一緒に学ぼう のチラシ作成と配布 依頼	チラシを作成し、850枚のチラシ配布を依頼する ため、地域包括センター千住西へ伺った。	地域包括支援 センター千住西		4名	宮本佳子	医療福祉学科
10月2日	地域住民と共に防災を 学ぶ帝科学生の会	「帝科学生と地域の防 災について一緒に学ぼう」 に向けた作業	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」 で使用する〇×クイズの作成			3名	宮本佳子	医療福祉学科
10月9日	地域住民と共に防災を 学ぶ帝科学生の会	「帝科学生と地域の防 災について一緒に学ぼう」 に向けた作業	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」 で使用する〇×クイズの作成			3名	宮本佳子	医療福祉学科
10月16日	地域住民と共に防災を 学ぶ帝科学生の会	「帝科学生と地域の防 災について一緒に学ぼう」 に向けた作業	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」 で使用する〇×クイズの作成			3名	宮本佳子	医療福祉学科
10月23日	地域住民と共に防災を 学ぶ帝科学生の会	「帝科学生と地域の防 災について一緒に学ぼう」 合同最終打ち合わせ	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」 開催するにあたり、当日の流れや、全内容の確認 を行った	チームあだち		3名	宮本佳子	医療福祉学科
11月6日	地域住民と共に防災を 学ぶ帝科学生の会	「帝科学生と地域の防 災について一緒に学ぼう」 最終確認	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」 の事前確認事項の調整			3名	宮本佳子	医療福祉学科
11月10日	地域住民と共に防災を 学ぶ帝科学生の会	「帝科学生と地域の防 災について一緒に学ぼう」 実施	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」 開催	チームあだち チーム鹿沼 足立区 社会福祉協議会		4名	宮本佳子	医療福祉学科
11月20日	地域住民と共に防災を 学ぶ帝科学生の会	「帝科学生と地域の防 災について一緒に学ぼう」 反省会	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」 の振り返り			3名	宮本佳子	医療福祉学科

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
11月27日	地域住民と共に防災を学ぶ帝科学生の会	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」のまとめ	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」の振り返り。各自レポート作成			3名	宮本佳子	医療福祉学科
12月1日	地域住民と共に防災を学ぶ帝科学生の会	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」のまとめ	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」の振り返り。各自レポート作成			3名	宮本佳子	医療福祉学科
12月11日	地域住民と共に防災を学ぶ帝科学生の会	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」のまとめ	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」の振り返り。各自レポート作成			5名	宮本佳子	医療福祉学科
12月18日	地域住民と共に防災を学ぶ帝科学生の会	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」のまとめ	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」の振り返り。各自レポート作成			3名	宮本佳子	医療福祉学科
1月8日	地域住民と共に防災を学ぶ帝科学生の会	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」の実践報告会準備	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」の実践発表会パワポおよび発表原稿の作成			3名	宮本佳子	医療福祉学科
1月15日	地域住民と共に防災を学ぶ帝科学生の会	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」の実践報告会準備	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」の実践発表会パワポおよび発表原稿の作成			3名	宮本佳子	医療福祉学科
3月6日	地域住民と共に防災を学ぶ帝科学生の会	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」の実践報告会準備	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」の実践発表会パワポおよび発表原稿の最終確認			1名	宮本佳子	医療福祉学科
3月11日	地域住民と共に防災を学ぶ帝科学生の会	地域連携学生発表参加	「帝科学生と地域の防災について一緒に学ぼう」の実践報告			1名	宮本佳子	医療福祉学科
9月10日	バドミントンサークル	地域貢献活動	事前打ち合わせ	学校法人総持学園 鶴見大学附属 中学校・高等学校		5名	松井高光	
10月1日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミントンを取り入れた運動遊びの実施 (プレ実施・事前調査)	学校法人総持学園 鶴見大学附属 中学校・高等学校	35名	5名	松井高光	
10月11日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミントンを取り入れた運動遊びの実施 (プレ実施・事前調査)	学校法人総持学園 鶴見大学附属 中学校・高等学校	35名	5名	松井高光	
10月12日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミントンを取り入れた運動遊びの実施 (プレ実施・事前調査)	学校法人総持学園 鶴見大学附属 中学校・高等学校	35名	5名	松井高光	
10月18日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミンの指導	荒川区立 原中学校	24名	3名	松井高光	
10月25日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミンの指導	荒川区立 原中学校	24名	3名	松井高光	
11月1日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミンの指導	荒川区立 原中学校	24名	3名	松井高光	
11月8日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミンの指導	荒川区立 原中学校	24名	3名	松井高光	
11月15日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミンの指導	荒川区立 原中学校	24名	3名	松井高光	
11月22日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミンの指導	荒川区立 原中学校	24名	3名	松井高光	
11月29日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミンの指導	荒川区立 原中学校	24名	3名	松井高光	
12月6日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミンの指導	荒川区立 原中学校	24名	3名	松井高光	
12月13日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミンの指導	荒川区立 原中学校	24名	3名	松井高光	
12月20日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミンの指導	荒川区立 原中学校	24名	3名	松井高光	
1月10日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミンの指導	荒川区立 原中学校	24名	3名	松井高光	
1月17日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミンの指導	荒川区立 原中学校	24名	3名	松井高光	
1月24日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミンの指導	荒川区立 原中学校	24名	3名	松井高光	
1月31日	バドミントンサークル	地域貢献活動	バドミンの指導	荒川区立 原中学校	24名	3名	松井高光	

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
5月12日	カフェサークルBonnbush	桂川フェスティバル	周辺地域の方を対象とした、上野原市の地域活性化活動	まちづくりプラットフォーム部の会	99名	10名	藪田慎司	カフェサークル
6月2日	カフェサークルBonnbush	田植え活動	地域の方が所有している田んぼでの田植えでのボランティア活動	川島美生	4名	5名	藪田慎司	カフェサークル
6月17日	カフェサークルBonnbush	馬センター 触れ合いの日	周辺地域の方を対象とした、自然触れ合い体験でのボランティア活動	馬センター	30名	9名	藪田慎司	カフェサークル
6月23日	カフェサークルBonnbush	上野原幼稚園 でのバザー	上野原幼稚園の園児と周辺地域の方を対象とした、バザー、食品販売のボランティア活動	上野原幼稚園	40名	4名	藪田慎司	カフェサークル
8月4日	カフェサークルBonnbush	上野原幼稚園 での納涼祭	上野原幼稚園の園児と周辺地域の方を対象とした夏祭りでのボランティア活動	上野原幼稚園	40名	5名	藪田慎司	カフェサークル
8月14日	カフェサークルBonnbush	桂川ウェルネスパーク での竹の伐採作業	桂川ウェルネスパークの利用者および周辺地域の方を対象とした里山整備のボランティア活動	桂川ウェルネスパーク	10名	6名	藪田慎司	カフェサークル
10月20日	カフェサークルBonnbush	稲刈り	地域の方が所有している田んぼでの稲刈りのボランティア活動	川島美生	4名	5名	藪田慎司	
1月20日	カフェサークルBonnbush	ソライチ	甲府市を利用する一般の方を対象とし、コミュニティ作り及び宣伝活動を目的としたカフェ活動	甲府駅北口 まちづくり委員会	999名	6名	藪田慎司	
4月1日	ねこの目報道部	広報うえのはら版 ネコメ作成	「上野原駅南口広場」	上野原市役所			加賀谷玲夢	
6月1日	ねこの目報道部	広報うえのはら版 ネコメ作成	「可視化実験プロジェクト」	上野原市役所			加賀谷玲夢	
8月1日	ねこの目報道部	広報うえのはら版 ネコメ作成	「ふらっと上野原の職員さんに聞きました」	上野原市役所			加賀谷玲夢	
10月1日	ねこの目報道部	広報うえのはら版 ネコメ作成	「科大祭 The Show Must Go On」	上野原市役所			加賀谷玲夢	
12月1日	ねこの目報道部	広報うえのはら版 ネコメ作成	「『好きなこと』で町おこし」	上野原市役所			加賀谷玲夢	
2月1日	ねこの目報道部	広報うえのはら版 ネコメ作成	「上野原の生きものミニトークに行ってきました！」	上野原市役所			加賀谷玲夢	
2月7日	ねこの目報道部	フリーマガジン 「ネコメVol.25」発行	地域情報「Re:animation12」			15名	加賀谷玲夢	
2月16日	ねこの目報道部	フリーマガジン 「ネコメVol.26」発行	地域情報「コマアしおつを巡る」			15名	加賀谷玲夢	
6月24日	障がいのある方のための乗馬会「乗る・馬・体験」実行委員会	大乗馬会【七夕祭り】	障がいのある方を対象とした乗馬活動	本学主催	12名	73名	小川家資	アニマル サイエンス学科 こども学科 作業療法学科
12月2日	障がいのある方のための乗馬会「乗る・馬・体験」実行委員会	大乗馬会【～四季～季節のメリーゴーラウンド】	障がいのある方を対象とした乗馬活動	本学主催	7名	75名	小川家資	アニマル サイエンス学科 こども学科 作業療法学科
3月21日	障がいのある方のための乗馬会「乗る・馬・体験」実行委員会	ミニ乗馬会【Spring of house】	障がいのある方を対象とした乗馬活動	本学主催	3名	32名	小川家資	アニマル サイエンス学科 こども学科 作業療法学科
7月15日	子どもの心を育む会	知的・発達障害者児を対象とした社会技能訓練のボランティア活動	知的・発達障害者児を対象としたパネルやバベットの用いたロールプレイ、寸劇を行い、対象者の感情表出を促し心の発育を支援する活動	NPO法人 日本こどものための委員会	5名	2名	吉賀成子	医療福祉学科
9月16日	子どもの心を育む会	知的・発達障害者児を対象とした社会技能訓練のボランティア活動	知的・発達障害者児を対象としたパネルやバベットの用いたロールプレイ、寸劇を行い、対象者の感情表出を促し心の発育を支援する活動	NPO法人 日本こどものための委員会	6名	2名	吉賀成子	医療福祉学科
4月1日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
4月7日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
4月8日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
4月14日	動物介在教育研究部	桜祭り	工作	都市農業公園 アニマルシップ		6名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
4月14日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
4月15日	動物介在教育研究部	桜祭り	工作	都市農業公園 アニマルシップ		7名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
4月15日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
4月17日	動物介在教育研究部	帝京めぐみ幼稚園 動物ふれあい教室	3.4.5歳の園児を対象とした活動	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
4月21日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
4月21日	動物介在教育研究部	足立区 動物ふれあい教室	足立区の小学校を対象とした活動	足立区教育委員会	53名	31名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
4月22日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
4月28日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
4月29日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
4月30日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月2日	動物介在教育研究部	鳥沢小学校 大学遠足	馬とのふれあい、お世話体験、餌あげ 動物ふれあい	大月市立 鳥沢小学校	11名	7名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月2日	動物介在教育研究部	足立区 動物ふれあい教室	足立区の小学校を対象とした活動	足立区教育委員会	106名	39名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月3日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月4日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月5日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月6日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月7日	動物介在教育研究部	多摩動物公園遠足	上野原小2年生と多摩動物公園内を、学生が用意したクイズ等を楽しみながら回る	上野原市立	72名	57名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月8日	動物介在教育研究部	帝京めぐみ幼稚園 動物ふれあい教室	3.4.5歳の園児を対象とした活動	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月12日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月13日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月13日	動物介在教育研究部	桂川フェスティバル	上野原の町づくり発展に貢献、運営の手伝い AAE:動物ふれあい	上野原市役所	10000名	93名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月16日	動物介在教育研究部	猿橋小学校 大学遠足	馬とのふれあい、お世話体験、餌あげ 動物ふれあい	大月市立 猿橋小学校	57名	13名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月18日	動物介在教育研究部	上野原小学校 飼育体験	2年生を対象にハムスター・モルモットのふれあいの指導	上野原市立	72名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月19日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月20日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月21日	動物介在教育研究部	上野原小学校 飼育体験	2年生を対象にハムスター・モルモットのお世話方法を指導	上野原市立	72名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月22日	動物介在教育研究部	上野原小学校 飼育体験	ハムスター・モルモットのお世話・観察	上野原市立	72名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月23日	動物介在教育研究部	上野原小学校 飼育体験	ハムスター・モルモットのお世話・観察	上野原市立	72名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
5月24日	動物介在教育研究部	上野原小学校 飼育体験	ハムスター・モルモットのお世話・観察	上野原市立	72名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月24日	動物介在教育研究部	ふれあい動物教室 及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	上野原こども園	105名	18名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月25日	動物介在教育研究部	上野原小学校 飼育体験	ハムスター・モルモットのお世話・観察	上野原市立	72名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月26日	動物介在教育研究部	上野原小学校 飼育体験	ハムスター・モルモットのお世話・観察	上野原市立	72名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月26日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのふれあい	動物のふれあい・工作	都市農業公園 アニマルシップ	49名	6名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月26日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月27日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月28日	動物介在教育研究部	上野原小学校 飼育体験	ハムスター・モルモットのお世話・観察	上野原市立	72名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月29日	動物介在教育研究部	上野原小学校 飼育体験	ハムスター・モルモットのお世話・観察	上野原市立	72名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月30日	動物介在教育研究部	上野原小学校 飼育体験	ハムスター・モルモットのお世話・観察	上野原市立	72名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月30日	動物介在教育研究部	足立区 動物ふれあい教室	足立区の小学校を対象とした活動	足立区教育委員会	64名	36名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月31日	動物介在教育研究部	上野原小学校 飼育体験	ハムスター・モルモットのお世話・観察	上野原市立	72名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
5月31日	動物介在教育研究部	ふれあい動物教室 及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	上野原市役所 福祉課	185名	23名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月1日	動物介在教育研究部	上野原小学校 飼育体験	飼育体験についてグループワークでまとめ	上野原市立	72名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月2日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月3日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月4日	動物介在教育研究部	ふれあい動物教室 及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	上野原市立 秋山小学校	21名	12名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月5日	動物介在教育研究部	帝京めぐみ幼稚園 動物ふれあい教室	3.4.5歳の園児を対象とした活動	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月6日	動物介在教育研究部	足立区 動物ふれあい教室	足立区の小学校を対象とした活動	足立区教育委員会	167名	43名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月8日	動物介在教育研究部	島田小学校 大学遠足	馬とのふれあい、お世話体験、餌あげ 動物ふれあい	上野原市立 島田小学校	16名	6名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月8日	動物介在教育研究部	上野原西小学校 飼育体験	2年生を対象にハムスター・モルモットについて学 んでもらう	上野原市立 上野原西小学校	50名	14名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月9日	動物介在教育研究部	足立区 動物ふれあい教室	足立区の小学校を対象とした活動	足立区教育委員会	85名	60名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月9日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月10日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		4名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
6月11日	動物介在教育研究部	上野原西小学校 飼育体験	2年生を対象にハムスター・モルモットのふれあい 方の指導	上野原市立 上野原西小学校	50名	15名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月15日	動物介在教育研究部	上野原西小学校 飼育体験	2年生を対象にハムスター・モルモットの飼育を振 り返り、反省	上野原市立 上野原西小学校	50名	12名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月16日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月17日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月21日	動物介在教育研究部	ふれあい動物教室 及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	上野原幼稚園	83名	14名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月23日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月24日	動物介在教育研究部	乗馬会	ぬりえ、動物ふれあい	馬センター	11名	6名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月24日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月24日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのふれあい	動物のふれあい・工作	都市農業公園 アニマルシップ	60名	5名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月26日	動物介在教育研究部	ふれあい動物教室 及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	大月市立 大月東小学校	43名	11名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月28日	動物介在教育研究部	ふれあい動物教室 及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	上野原こども園	105名	19名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
6月30日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月1日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月3日	動物介在教育研究部	帝京めぐみ幼稚園 動物ふれあい教室	3.4.5歳の園児を対象とした活動	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月4日	動物介在教育研究部	足立区 動物ふれあい教室	足立区の小学校を対象とした活動	足立区教育委員会	98名	42名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月7日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月8日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月14日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月14日	動物介在教育研究部	Re:animation	アニソンフェスの運営支援	株式会社 Re:animation	7000名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月15日	動物介在教育研究部	リ・アニメーション	アニソンフェスの運営支援	株式会社 Re:animation	7000名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月15日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月19日	動物介在教育研究部	足立区遠足	足立区の小学生に自然学習体験をおこなって もらう	足立区立 平野小学校	65名	35名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月21日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月22日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
7月29日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
8月4日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
8月5日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
8月11日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
8月11日	動物介在教育研究部	秋山祭り	事前準備	秋山青年会	30名	8名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
8月12日	動物介在教育研究部	秋山祭り	動物ふれあい	秋山青年会	600名	12名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
8月12日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
8月13日	動物介在教育研究部	秋山祭り	片付け	秋山青年会	30名	12名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
8月18日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
8月19日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
8月25日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
8月26日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのふれあい	動物のふれあい・工作	都市農業公園 アニマルシップ	9名	5名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
8月26日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月1日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月2日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月8日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月9日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月15日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月16日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月16日	動物介在教育研究部	羽村市動物公園 ふれあい動物縁日	事前準備	羽村市動物公園	1名	17名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月17日	動物介在教育研究部	羽村市動物公園 ふれあい動物縁日	蕎麦クラフト、めりえ	羽村市動物公園	500名	12名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月17日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月18日	動物介在教育研究部	ことぶき勸学院 「若者との交流」	動物とのふれあいを通して、動物の知識や学生 との交流を深めてもらう	ことぶき勸学院	14名	6名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月21日	動物介在教育研究部	足立区遠足	足立区の小学生に自然学習体験をおこなって もらう	足立区立 中島根小学校	92名	70名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月22日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月23日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
9月24日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月29日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
9月30日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月2日	動物介在教育研究部	上野原小学校 大学遠足	馬とのふれあい、お世話体験、餌あげ 動物ふれあい	上野原市立 上野原小学校	72名	18名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月3日	動物介在教育研究部	足立区 動物ふれあい教室	足立区の小学校を対象とした活動	足立区教育委員会	95名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月6日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月7日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月10日	動物介在教育研究部	大月東小学校 大学遠足	馬とのふれあい、お世話体験、餌あげ 動物ふれあい	大月東小学校	43名	11名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月13日	動物介在教育研究部	足立区 動物ふれあい教室	足立区の小学校を対象とした活動	足立区教育委員会	87名	64名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月13日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月14日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月15日	動物介在教育研究部	鳥沢小学校 飼育体験	小動物を用いた動物ふれあい、動物介在教育を 実施	大月市立 鳥沢小学校	14名	8名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月19日	動物介在教育研究部	ふれあい動物教室 及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育の実施	立川市立 第八小学校	79名	18名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月20日	動物介在教育研究部	談合坂SA ふれあい活動	帝京科学大学、AAEについての紹介、ふれあい 活動	談合坂SA	600名	11名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月20日	動物介在教育研究部	富士湧水の里 水族館	小動物を用いた動物介在教育を実施	富士湧水の里 水族館	700名	10名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月20日	動物介在教育研究部	収穫祭	動物クイズ、動物なりきり体験、	都市農業公園 アニマルシップ	200名 ※2日間合計	6名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月20日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月21日	動物介在教育研究部	富士湧水の里 水族館	小動物を用いた動物介在教育の実地	富士湧水の里 水族館	700名	13名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月21日	動物介在教育研究部	収穫祭	動物クイズ、動物なりきり体験、	都市農業公園 アニマルシップ	200名 ※2日間合計	6名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月21日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月22日	動物介在教育研究部	鳥沢小学校 飼育体験	小動物を用いた動物介在教育を実施	大月市立 鳥沢小学校	14名	9名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月23日	動物介在教育研究部	自然体験教室	足立区の小学校を対象とした活動	足立区教育委員会	90名	9名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月24日	動物介在教育研究部	足立区 動物ふれあい教室	足立区の小学校を対象とした活動	足立区教育委員会	95名	27名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月27日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月27日	動物介在教育研究部	クリスマスビレッジ	動物ふれあい、自然体験	都市農業公園 子ども動物教室	29名	14名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
10月28日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月30日	動物介在教育研究部	帝京めぐみ幼稚園 動物ふれあい教室	3.4.5歳の園児を対象とした活動	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月31日	動物介在教育研究部	鳥沢小学校 飼育体験	小動物を飼育した振り返り、反省	大月市立 鳥沢小学校	14名	8名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
10月31日	動物介在教育研究部	足立区 動物ふれあい教室	足立区の小学校を対象とした活動	足立区教育委員会	90名	19名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月1日	動物介在教育研究部	禾生第一小学校	小動物を用いた動物介在教育を実施	都留市立 禾生第一小学校	44名	17名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月3日	動物介在教育研究部	アクアリウム さがみはら	蘭クラフト、ぬりえ	相模川 ふれあい科学館	500名	11名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月4日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月6日	動物介在教育研究部	帝京めぐみ幼稚園 動物ふれあい教室	3.4.5歳の園児を対象とした活動	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月7日	動物介在教育研究部	動物ふれあい教室	足立区の小学校を対象とした活動	足立区教育委員会	170名	30名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月7日	動物介在教育研究部	秋山小学校 大学遠足	馬とのふれあい、お世話体験、餌あげ	秋山小学校	21名	4名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月10日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月11日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月17日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		3名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月17日	動物介在教育研究部	科学の祭典	来場者に科学とふれあってもらう	山梨県立科学館	710名	52名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月18日	動物介在教育研究部	科学の祭典	来場者に科学とふれあってもらう	山梨県立科学館	800名	52名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月18日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月22日	動物介在教育研究部	動物ふれあい教室	小動物を用いた動物介在教育を実施	谷村第一小学校	42名	14名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月24日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのふれあい	動物のふれあい・工作	都市農業公園 アニマルシップ	32名	5名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月24日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月25日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月26日	動物介在教育研究部	動物ふれあい教室	小動物を用いた動物介在教育を実施	大袋東小学校	109名	19名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
11月27日	動物介在教育研究部	足立区 動物ふれあい教室	足立区の小学校を対象とした活動	足立区教育委員会	80名	15名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
12月1日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
12月1日	動物介在教育研究部	足立区 動物ふれあい教室	足立区の小学校を対象とした活動	足立区教育委員会	82名	36名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
12月2日	動物介在教育研究部	乗馬会	ぬりえ、動物ふれあい	馬センター	8名	4名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加 学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
2月12日	動物介在教育研究部	帝京めぐみ幼稚園 動物ふれあい教室	3.4.5歳の園児を対象とした活動	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
2月16日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
2月17日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
2月23日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
2月24日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月2日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月3日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月4日	動物介在教育研究部	ふじの幼稚園 大学遠足	馬とのふれあい、お世話体験、餌あげ 動物ふれあい	ふじの幼稚園	20名	10名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月5日	動物介在教育研究部	帝京めぐみ幼稚園 動物ふれあい教室	3.4.5歳の園児を対象とした活動	帝京めぐみ幼稚園	150名	20名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月9日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月10日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月16日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月17日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月21日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月23日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月24日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月30日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月31日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのふれあい	動物ふれあい・工作	都市農業公園 アニマルシップ	160名	4名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科
3月31日	動物介在教育研究部	都市農業公園 でのお世話	サークルで飼育している動物達のお世話	都市農業公園 アニマルシップ		2名	花園誠	アニマル サイエンス学科 こども学科

地域連携研究投稿規程

本報告書は本学の地域連携活動に関する報告書として、帝京科学大学地域連携推進センターが発行する。本学の常勤及び非常勤の教職員（退職者を含む）および学生が投稿できる。投稿内容は、地域連携活動に関連する研究・教育・実践活動の報告、論文等とする。

1. 発行

本誌は年1回発行する。

2. 投稿要領

・研究報告については、別ファイルで用意する Word の「研究報告テンプレート」を使用すること。

・研究報告本文の構成は、以下の構成を基本とする

タイトル

著者・所属

キーワード

はじめに

活動（研究）報告

結果と考察、まとめ

・実践報告については、別ファイルで用意する「実践報告テンプレート」と使用する。テンプレートを利用して各自レイアウトし、過度に余白がでないように工夫すること。

実践報告の構成は、以下の構成を基本とする

見出し：活動の主題や訴求ポイントを短く表した見出し文（キャッチコピー）

タイトル：活動のタイトル

著者・所属

目的

内容

成果

課題

今後の予定

写真大：冒頭に用いる写真1点

写真小：本文中に挿入する写真及びキャプション1点。写真小の代わりに、「代表者（もしくはスタッフ）の感想・コメント」を挿入する場合は、顔写真を添付すること。

- ・写真や図表を Word に貼り付けた場合は、オリジナルのファイルも添付すること（例えば画像ファイルや Excel のファイル）。写真、図、表のファイルは、本文のどこに配置されるのか分かるようにファイル名を付け、フォルダに整理すること。
- ・使用するフォントは、MS 明朝と MS ゴシックを基本とする。
- ・その他、参考文献の記述の仕方などについては、本学紀要の投稿規程に準ずる。

3. その他

- ・地域連携推進センターの助成を受けた団体や個人は原則、本報告書（研究報告もしくは実践報告）に報告をすることとする。
- ・学生の投稿は、顧問の教員や指導教員等の閲読を受けてから投稿すること。
- ・地域連携推進センターの助成活動の研究報告については、ページ数を 2～6 ページの範囲、実践報告については、教職員は 2 ページ以内、学生は 1 ページとする。

以上

編集後記

多くの皆様の努力により地域連携推進センター年報「地域連携研究」の第3巻をお届けできることになりました。帝京科学大学の地域連携活動に関する報告や研究が掲載されています。千住・東京西の両キャンパスでは、毎日のように地域住民の方からのクレームに対応する放送が流されていて、聞くたびに残念な気持ちになります。しかし一方で、本誌にみられるように多種多様な地域連携活動があり、地域社会への貢献や、協働による新しい価値の創造を目指した取り組みが日々なされていることも事実です。本誌が、そのよう本学学生や教員の活動を知ってもらいきっかけの一つになることを願ってやみません。

編集委員長 古瀬 浩史

編集委員

古瀬 浩史、花園 誠、山本 和弘、榊原 健太郎、浅沼 太郎、佐藤 仁紀

表紙デザイン

久保田 彩心

地域連携研究 帝京科学大学地域連携推進センター年報 第3巻

発行日 令和元年7月31日

発行 帝京科学大学

〒120-0045 東京都足立区千住桜木二丁目2番1号

TEL 03-6910-1010 (代) URL <https://www.ntu.ac.jp>

編集 帝京科学大学 地域連携推進センター 年報「地域連携研究」編集委員会

印刷 株式会社たけまる
